

## **Oracle® Application Server**

Standard Edition One インストールおよび  
スタート・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Linux x86

**部品番号 : B19169-01**

2005 年 8 月

Oracle Application Server Standard Edition One インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.1.2) for Linux x86

部品番号 : B19169-01

原本名 : Oracle Application Server Installing and Getting Started with Standard Edition One, 10g Release 2 (10.1.2) for Linux x86

原本部品番号 : B16043-02

原本著者 : Preeti Shukla

原本協力者 : Kevin Hwang, Hiroaki Hiratsuka, Nirguna Kota, Punit Nagar, Seema Pai, Saurabh Pandey, Sudhir Sharma, Janelle Simmons, Lyju Vadassery

Copyright © 2004, 2005, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性あります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

はじめに .....	xi
対象読者 .....	xi
ドキュメントのアクセシビリティについて .....	xi
このマニュアルの構成 .....	xii
関連ドキュメント .....	xiv
表記規則 .....	xiv
サポートおよびサービス .....	xiv
<b>1 製品およびインストールの概要</b>	
1.1 製品の概要 .....	1-1
1.2 新機能 .....	1-1
1.3 インストールの概要 .....	1-2
1.3.1 Oracle J2EE and Web Services .....	1-3
1.3.2 OracleAS Portal .....	1-3
1.3.2.1 新しいメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal .....	1-3
1.3.2.2 既存のメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal .....	1-4
1.3.3 基本インストールと拡張インストール .....	1-4
1.3.4 一般的なインストール手順 .....	1-5
1.4 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要の あること .....	1-6
1.4.1 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所 .....	1-6
1.4.2 Oracle ホーム・ディレクトリ .....	1-6
1.4.2.1 Oracle ホームの名前の指定 .....	1-7
1.4.2.2 空ではない Oracle ホームへのインストール .....	1-7
1.4.3 Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名 .....	1-7
1.4.4 ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限 .....	1-8
1.4.5 グローバル・データベース名とそのパスワードの制限 .....	1-9
1.4.6 言語およびロケールの設定 .....	1-10
1.4.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の追加の言語の インストール .....	1-10
1.4.6.2 Portal ユーザー・インタフェース・メッセージのインストール .....	1-10
1.4.6.3 Oracle Unicode フォントのインストール要件 .....	1-11
1.4.7 ポート .....	1-12
1.4.7.1 ポートが使用中かどうかの確認 .....	1-12
1.4.7.2 ポート番号のリストの取得 .....	1-12
1.4.7.3 デフォルトのポート番号の使用 .....	1-12
1.4.7.4 カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能） .....	1-13

1.4.8	ポート 1521 がすでに使用されている場合 .....	1-16
1.4.8.1	ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合 .....	1-17
1.4.8.2	ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合 .....	1-18
1.4.9	インストーラがファイルを書き込む場所 .....	1-19

## 2 システムおよびインストール要件

2.1	Linux システムのハードウェア要件 .....	2-1
2.2	Linux のソフトウェア要件 .....	2-3
2.2.1	Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件 .....	2-3
2.2.2	Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件 .....	2-5
2.2.3	SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件 .....	2-7
2.2.4	SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件 .....	2-10
2.3	カーネル・パラメータとシェル制限の確認 .....	2-13
2.3.1	Linux でのカーネル・パラメータの構成 .....	2-13
2.3.1.1	OracleAS Web Cache 用のカーネル・パラメータ設定 .....	2-14
2.3.1.2	OracleAS Metadata Repository 用のカーネル・パラメータ設定 .....	2-14
2.3.2	oracle ユーザーに対するシェル制限 .....	2-16
2.4	オペレーティング・システム・グループ .....	2-17
2.4.1	インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成 .....	2-17
2.4.2	データベース管理者用のグループの作成 .....	2-17
2.5	オペレーティング・システム・ユーザー .....	2-18
2.6	環境変数 .....	2-19
2.6.1	環境変数に関するヒント .....	2-21
2.7	/etc/hosts ファイル .....	2-21
2.7.1	デフォルトの Identity Management レルムの場所 .....	2-21
2.7.2	Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名 .....	2-22
2.8	ネットワーク関連項目 .....	2-22
2.8.1	マルチホーム (マルチ IP) コンピュータへのインストール .....	2-22
2.8.2	CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからの インストール .....	2-23
2.8.3	リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからのインストール .....	2-24
2.8.4	リモート・コンピュータへのインストール .....	2-24
2.8.5	NFS マウントの記憶域へのインストール .....	2-25
2.8.6	単一のインストールからの複数インスタンスの実行 .....	2-25
2.8.7	NIS および NIS+ のサポート .....	2-25
2.8.8	DHCP ホストへのインストール (Linux のみ) .....	2-25
2.9	インストーラにより実行される前提条件チェック .....	2-26

## 3 J2EE and Web Services のインストール

3.1	J2EE and Web Services コンポーネント .....	3-1
3.2	J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加 .....	3-1
3.3	J2EE and Web Services のインストール .....	3-1
3.3.1	インストール前の作業 .....	3-2
3.3.2	基本インストールの概要 .....	3-2
3.3.3	拡張インストールの概要 .....	3-2
3.4	次の作業 .....	3-3

## 4 OracleAS Portal のインストール

4.1	OracleAS Portal コンポーネント .....	4-1
4.2	Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用 .....	4-1
4.3	OracleAS Portal のインストール .....	4-2
4.3.1	インストール前の作業 .....	4-2
4.3.2	基本インストールの概要 .....	4-2
4.3.3	新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要 .....	4-3
4.3.4	既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要 .....	4-4
4.4	次の作業 .....	4-5

## 5 インストール画面

5.1	CD-ROM または DVD のマウント・ポイントの設定 .....	5-1
5.2	Oracle Universal Installer の起動 .....	5-2
5.2.1	oratab ファイルが存在しない場合 .....	5-3
5.2.2	oratab ファイルに書き込み権限がない場合 .....	5-3
5.3	「ようこそ」画面 .....	5-4
5.3.1	J2EE and Web Services の基本インストールの実行 .....	5-4
5.3.2	Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の 基本インストールの実行 .....	5-5
5.4	インストールする製品の選択 .....	5-5
5.5	言語の選択 .....	5-6
5.6	ポート構成オプションの指定 .....	5-7
5.7	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 .....	5-8
5.8	Internet Directory のネームスペースの指定 .....	5-9
5.9	データベース構成オプションの指定 .....	5-10
5.10	データベース・スキーマのパスワードの指定 .....	5-12
5.11	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 .....	5-13
5.12	リポジトリの指定 .....	5-14
5.13	サマリー .....	5-15
5.14	インストール（進捗状況） .....	5-15
5.15	Configuration Assistant .....	5-16
5.16	インストールの終了 .....	5-17

## 6 インストール後の作業

6.1	インストール後の Oracle Application Server インスタンスの起動 .....	6-1
6.2	Oracle Application Server コンポーネントのパスワードの設定 .....	6-1
6.3	インストール後に行うその他の作業 .....	6-2
6.3.1	NFS インストール .....	6-2
6.3.2	バックアップおよびリカバリ .....	6-2
6.3.3	SSL の有効化 .....	6-2
6.3.4	オペレーティング・システムのロケールと環境変数 NLS_LANG .....	6-2
6.3.4.1	オペレーティング・システムのロケールの確認 .....	6-2
6.3.4.2	NLS_LANG の設定の確認 .....	6-3
6.4	インストール後の作業を必要とするコンポーネント .....	6-3
6.5	次の作業 .....	6-3

## 7 始めに行うこと

7.1	環境変数の設定 .....	7-1
7.2	Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用法 .....	7-1
7.2.1	「ようこそ」ページへのアクセス .....	7-2
7.2.2	「ようこそ」ページの内容 .....	7-2
7.3	ポート番号の確認 .....	7-3
7.4	コンポーネントの管理 .....	7-4
7.4.1	Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) .....	7-4
7.4.2	Distributed Configuration Management (DCM) .....	7-4
7.4.3	Oracle HTTP Server .....	7-5
7.4.4	Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) .....	7-5
7.5	ias_admin パスワードの変更 .....	7-5
7.5.1	Application Server Control コンソールの使用 .....	7-5
7.5.2	emctl コマンドライン・ツールの使用 .....	7-5

## 8 管理ツールの使用

8.1	Application Server Control コンソールの理解 .....	8-1
8.1.1	Application Server Control ホーム・ページの概要 .....	8-1
8.1.2	Application Server Control コンソールの表示 .....	8-2
8.1.3	Application Server ホーム・ページの使用 .....	8-3
8.1.4	Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用 .....	8-4
8.1.5	Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用 .....	8-5
8.1.6	Application Server Control コンソールを使用した診断タスクの実行 .....	8-5
8.1.6.1	アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認 .....	8-5
8.1.6.2	一般情報およびリソース使用状況の確認 .....	8-6
8.1.6.3	アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認 .....	8-7
8.1.6.4	アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視 .....	8-7
8.1.6.5	J2EE アプリケーションの監視 .....	8-7
8.2	Application Server Control で使用可能なソフトウェア・テクノロジー .....	8-8
8.2.1	使用可能なテクノロジー .....	8-8
8.2.2	コマンドライン・ツール .....	8-8
8.3	Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理 .....	8-9

## 9 起動と停止

9.1	すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止 .....	9-1
9.2	OracleAS Infrastructure の起動と停止 .....	9-2
9.2.1	OracleAS Infrastructure の手動での起動 .....	9-3
9.2.1.1	OracleAS Metadata Repository の起動 .....	9-3
9.2.1.2	Oracle Identity Management の起動 .....	9-3
9.2.2	OracleAS Infrastructure の手動での停止 .....	9-3
9.2.2.1	OracleAS Metadata Repository の停止 .....	9-3
9.2.2.2	Oracle Identity Management の停止 .....	9-4
9.3	中間層インスタンスの起動と停止 .....	9-4
9.3.1	中間層の手動での起動 .....	9-4
9.3.2	中間層の手動での停止 .....	9-4
9.4	コンポーネントの起動と停止 .....	9-5
9.4.1	opmnctl による起動と停止 .....	9-5

9.4.2	Application Server Control コンソールによる起動と停止 .....	9-5
9.5	コンポーネントの有効化と無効化 .....	9-6
9.6	Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止 .....	9-6
9.6.1	Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動 .....	9-6
9.6.2	Oracle Application Server 環境の停止 .....	9-6

## 10 HTTP ポートおよびリスナー設定の変更

10.1	中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更 .....	10-1
10.1.1	UNIX システムにおいて 1024 未満に設定したポートで root として Oracle HTTP Server を 実行できるようにする .....	10-1
10.1.2	portconfig コマンドを使用した Oracle HTTP Server リスニング・ポートの変更 .....	10-2
10.2	Identity Management での HTTP ポートの変更 .....	10-4

## 11 ログ・ファイルの表示

11.1	Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要 .....	11-1
11.1.1	ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解 .....	11-1
11.1.1.1	コンポーネント別のログ・ファイル・メッセージ .....	11-1
11.1.2	ログ・リポジトリの使用 .....	11-2
11.1.3	コンポーネント・ロギング・オプションの構成 .....	11-2
11.2	Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示 .....	11-3
11.2.1	ログ・ファイルのリスト .....	11-3
11.2.2	選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト .....	11-4
11.2.3	Oracle Application Server Standard Edition One のコンポーネント・ページからの ログ・ファイルのリスト .....	11-5
11.2.4	ログ・ファイルの拡張検索の使用 .....	11-5
11.2.5	ログ・ファイルの詳細および内容の表示 .....	11-5
11.3	Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用 .....	11-6
11.3.1	Log Loader の起動と停止 .....	11-6
11.3.2	Log Loader の有効化と無効化 .....	11-6
11.3.3	ログ構成の更新 .....	11-6
11.3.4	Log Loader プロパティの設定 .....	11-7
11.3.5	Log Loader 診断メッセージの理解 .....	11-7

## 12 ネットワーク構成の変更

12.1	ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更 .....	12-1
12.1.1	J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更 .....	12-2
12.1.2	メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更 .....	12-6
12.1.3	ホスト名またはドメイン名の変更に関するその他の設定 .....	12-8
12.1.3.1	chgiphost のログ・レベルの設定 .....	12-8
12.1.3.2	chgiphost スクリプトのカスタマイズ .....	12-8
12.1.3.3	ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ .....	12-9
12.2	ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行 .....	12-9
12.2.1	ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (静的 IP アドレス) .....	12-10
12.2.2	ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (DHCP) .....	12-10
12.2.3	ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (静的 IP アドレス) .....	12-10

12.2.4	ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (DHCP) .....	12-10
12.3	静的 IP アドレスと DHCP 間の変更 .....	12-11
12.3.1	静的 IP アドレスから DHCP への変更 .....	12-11
12.3.2	DHCP から静的 IP アドレスへの変更 .....	12-11

## 13 SSL の有効化

13.1	インフラストラクチャにおける SSL の通信経路 .....	13-1
13.2	インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク .....	13-3
13.2.1	OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services の SSL の構成 .....	13-3
13.2.2	Oracle Internet Directory の SSL の構成 .....	13-3
13.2.3	Identity Management データベースの SSL の構成 .....	13-3
13.3	中間層の SSL 通信経路 .....	13-3
13.4	中間層の一般的な SSL 構成タスク .....	13-5
13.4.1	OracleAS Web Cache における SSL の有効化 .....	13-5
13.4.2	Oracle HTTP Server における SSL の有効化 .....	13-5
13.4.3	OracleAS Portal における SSL の有効化 .....	13-5
13.4.4	Application Server Control の SSL の構成 .....	13-6

## 14 バックアップおよびリカバリ

14.1	バックアップおよびリカバリ・サービスの比較 .....	14-1
14.2	Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ .....	14-2
14.2.1	バックアップ / リカバリ設定の構成 .....	14-2
14.2.2	バックアップの実行 .....	14-3
14.2.3	リカバリの実行 .....	14-4
14.3	OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ .....	14-4
14.3.1	OracleAS Backup and Recovery Tool の取得 .....	14-4
14.3.2	OracleAS Backup and Recovery Tool の構成 .....	14-6
14.3.3	構成ファイル用のツールのカスタマイズ .....	14-8
14.3.4	OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要 .....	14-9
14.3.4.1	ツールを実行するための前提条件 .....	14-9
14.3.4.2	OracleAS Backup and Recovery Tool の構文 .....	14-9
14.3.4.3	使用例 .....	14-15
14.4	バックアップの手順 .....	14-17
14.4.1	ブロック変更トラッキングの有効化 .....	14-17
14.4.2	ARCHIVELOG モードの有効化 .....	14-17
14.4.3	現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成 .....	14-19
14.4.4	インスタンスのバックアップの実行 .....	14-20
14.4.5	環境全体のバックアップの実行 .....	14-21
14.4.6	構成およびメタデータのバックアップ .....	14-24

## 15 OracleAS Metadata Repository の概要および要件

15.1	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant 概要 .....	15-1
15.1.1	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の入手先 .....	15-2
15.1.2	各種データベース記憶域のサポート .....	15-2
15.1.3	ローカルおよびリモート・データベースのサポート .....	15-2
15.2	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行手順 .....	15-2



15.3	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件 .....	15-3
15.4	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール .....	15-3
15.5	データベースの要件 .....	15-4
15.5.1	前提条件チェック・ツールの実行 .....	15-5
15.5.2	サポートされるデータベースのバージョン .....	15-5
15.5.3	Standard Edition のデータベースに関する注意 .....	15-6
15.5.4	スワップ領域の要件 .....	15-6
15.5.5	SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域 .....	15-6
15.5.6	OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域 .....	15-6
15.5.7	初期化パラメータ .....	15-6
15.5.8	データベース・オプション .....	15-9
15.5.9	PL/SQL パッケージ .....	15-10
15.5.10	DBMS_LDAP パッケージ .....	15-10
15.5.11	必須のナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ) .....	15-12
15.5.12	パスワード・ファイル認証 .....	15-13
15.5.13	スキーマおよび表領域 .....	15-14
15.5.13.1	スキーマおよび表領域のリスト .....	15-14
15.5.13.2	すでに使用されているスキーマ名 .....	15-16
15.5.13.3	すでに使用されている表領域名 .....	15-16
15.5.13.4	表領域のサイズ .....	15-17
15.5.14	Oracle Internet Directory への登録 .....	15-18
15.6	Oracle Internet Directory の要件 .....	15-19
15.7	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動 .....	15-19
15.8	次に読む必要のある項 .....	15-20

## 16 OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード

16.1	ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール .....	16-1
16.2	RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール .....	16-3
16.3	Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール .....	16-6
16.4	ログ・ファイル内の無視できるエラー .....	16-8
16.4.1	SP2-0332 エラー .....	16-8
16.4.2	SP2-0606 エラー .....	16-8
16.5	インストール後の手順 .....	16-9
16.5.1	sqlnet.ora ファイルの更新 .....	16-9
16.5.2	データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー .....	16-9
16.5.3	DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定 .....	16-9
16.5.4	Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成 .....	16-10
16.6	ロードに失敗した場合の対処方法 .....	16-10
16.7	同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール .....	16-10

## 17 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

17.1	Oracle Internet Directory への登録 .....	17-1
17.2	登録後の手順 .....	17-3
17.3	登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法 .....	17-3

## A 削除と再インストール

A.1	Oracle Application Server Standard Edition One の削除 .....	A-1
-----	--	-----

A.2	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の削除 .....	A-4
A.3	構成解除ツール .....	A-5
A.3.1	構成解除ツールの実行 .....	A-5
A.3.2	構成解除ツールによる中間層の削除 .....	A-6
A.3.3	構成解除ツールによる OracleAS Infrastructure の削除 .....	A-6
A.4	ログ・ファイル内の無視できるエラー .....	A-8
A.5	Oracle Application Server プロセスのクリーン・アップ .....	A-8
A.6	再インストール .....	A-8
A.7	トラブルシューティング .....	A-8

## B OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除

B.1	Oracle Internet Directory データベースの登録取消し .....	B-1
B.2	中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認 .....	B-2
B.3	ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除 .....	B-2
B.4	OracleAS Metadata Repository の削除 .....	B-4
B.5	OracleAS Metadata Repository の登録取消し .....	B-6
B.6	cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除 .....	B-10
B.7	Oracle Internet Directory オブジェクトの削除 .....	B-11
B.8	登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ .....	B-12

## C デフォルトのポート番号

C.1	デフォルトのポート番号の割当て方 .....	C-1
C.2	デフォルトのポート番号 .....	C-1

## D 開放が必要なファイアウォールのポート

## E OracleAS Metadata Repository スキーマ

E.1	OracleAS Metadata Repository スキーマの説明 .....	E-1
E.1.1	Oracle Identity Management スキーマ .....	E-1
E.1.2	製品メタデータ・スキーマ .....	E-2
E.1.3	管理スキーマ .....	E-3
E.2	スキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル .....	E-4

## F Configuration Assistant

F.1	Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant .....	F-1
F.2	Configuration Assistant に関するトラブルシューティング .....	F-8

## G トラブルシューティング

G.1	ログ・ファイル .....	G-1
G.2	トラブルシューティング全般についてのヒント .....	G-1
G.3	インストールに関する問題とその解決策 .....	G-2
G.3.1	ログ・ファイルの場所 .....	G-2
G.3.2	リンクの失敗と ORA エラー .....	G-3
G.3.3	インストール開始時の前提条件チェックの失敗 .....	G-3
G.3.4	「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される .....	G-3
G.3.5	SHMMAX および SEMMSL に関するメッセージ .....	G-4

G.3.6	インストール前チェック実行後にインストーラが表示されなくなる .....	G-4
G.3.7	失敗したインストールをクリーン・アップできない .....	G-5
G.3.8	cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した .....	G-5
G.3.9	cn=orcladmin アカウントがロックされた .....	G-5
G.3.10	ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない ....	G-5
G.3.11	ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない .....	G-6
G.3.12	Configuration Assistant の失敗（全般） .....	G-6
G.3.13	OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗した .....	G-6
G.3.14	Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した .....	G-7
G.3.15	Database Configuration Assistant (DBCA) の無視できるエラー・メッセージ .....	G-7
G.3.16	OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server が失敗した .....	G-8
G.3.17	OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance が失敗した .....	G-8
G.4	削除に関する問題とその解決策 .....	G-8
G.4.1	現在使用されていないパートナ・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている .....	G-8
G.4.2	削除したインスタンスの名前を再使用できない .....	G-9
G.4.3	データベース名を再使用できない .....	G-10
G.4.4	削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス .....	G-11
G.5	バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策 .....	G-11
G.5.1	リストアに一度失敗した後のリストア .....	G-11
G.6	Configuration Assistant に関する問題とその解決策 .....	G-11
G.6.1	全般についてのヒント .....	G-11
G.6.2	Configuration Assistant の結果コード .....	G-12
G.7	OracleAS Portal に関する問題とその解決策 .....	G-13
G.7.1	OracleAS Portal のパスワードの取得 .....	G-13
G.7.2	SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない .....	G-13
G.8	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に関する問題と その解決策 .....	G-14
G.8.1	データベースに接続できない .....	G-14
G.8.2	SYS ユーザーとして接続できない .....	G-15
G.8.3	手動による手順 : 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し .....	G-15
G.8.4	ORA-01403: データが見つかりません .....	G-17
G.9	データベースに関する問題とその解決策 .....	G-17
G.10	その他の情報が必要な場合 .....	G-18

## 索引



---

# はじめに

このマニュアルでは、様々な要件、Oracle Universal Installer の新機能、インストールに関連する Oracle Application Server の概念、インストール手順およびトラブルシューティングのヒントについて説明します。

## 対象読者

このマニュアルは、ユーザーやグループの作成、ユーザーのグループへの追加、Oracle Application Server をインストールするコンピュータへのオペレーティング・システム・パッチのインストールなど、ある一定レベルのシステム管理作業を問題なく行えるユーザーを対象としています。Oracle Application Server のインストール時に使用するスクリプトには一部、実行する際にルート・アクセス権限が必要になるものがあります。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

# このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章と付録で構成されています。

## 第 I 部「Oracle Application Server のインストール」

第 I 部では、Oracle Application Server の概要と、インストール手順およびインストール後の手順について説明します。

### 第 1 章「製品およびインストールの概要」

この章では、インストール手順の概要と、Oracle Application Server およびそのコンポーネントの概要を示します。

### 第 2 章「システムおよびインストール要件」

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールおよび実行に関する要件を示します。

### 第 3 章「J2EE and Web Services のインストール」

この章では、J2EE and Web Services によって提供されるサービスをインストールする方法について説明します。

### 第 4 章「OracleAS Portal のインストール」

この章では、OracleAS Portal によって提供されるサービスをインストールする方法について説明します。

### 第 5 章「インストール画面」

この章では、Oracle Universal Installer の各画面例を示し、それらについて説明します。

### 第 6 章「インストール後の作業」

この章では、インストール後に実行する必要がある設定作業について説明します。

## 第 II 部「Oracle Application Server Standard Edition One で始めに行うこと」

第 II 部では、正常にインストールされた Oracle Application Server の使用および構成を開始する方法について説明します。

### 第 7 章「始めに行うこと」

この章では、インストールした Oracle Application Server Standard Edition One の使用を開始するための作業を示します。

### 第 8 章「管理ツールの使用」

この章では、Oracle Application Server を管理するための Web ベースおよびコマンドラインの管理ツールについて説明します。

### 第 9 章「起動と停止」

この章では、環境、インスタンス、コンポーネントおよびクラスタを起動および停止する方法について説明します。

### 第 10 章「HTTP ポートおよびリスナー設定の変更」

この章では、ポート番号を表示および変更する方法について説明します。

### 第 11 章「ログ・ファイルの表示」

この章では、ログ・ファイルを表示および管理する方法について説明します。

### 第 12 章「ネットワーク構成の変更」

この章では、ホストのホスト名および IP アドレスを変更する方法について説明します。

### 第 13 章「SSL の有効化」

この章では、Oracle Application Server で Secure Sockets Layer (SSL) を有効にする方法について説明します。

### 第 14 章「バックアップおよびリカバリ」

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の構成ファイルおよび OracleAS Metadata Repository をバックアップおよびリカバリする方法について説明します。

## 第 III 部「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール」

第 III 部では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant) のインストールについて説明します。

### 第 15 章「OracleAS Metadata Repository の概要および要件」

この章では、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の概要を示し、このツールを使用するためのシステム要件について概説します。

### 第 16 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード」

この章では、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストール (ロード) する方法について説明します。

### 第 17 章「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録」

この章では、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する方法について説明します。

## 第 IV 部「付録」

第 IV 部は付録です。

### 付録 A「削除と再インストール」

この付録では、Oracle Application Server のインストールおよび削除の方法について説明します。

### 付録 B「OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除」

この付録では、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除する方法について説明します。

### 付録 C「デフォルトのポート番号」

この付録では、インストーラによって各コンポーネントに割り当てられるポート番号を示します。

### 付録 D「開放が必要なファイアウォールのポート」

この付録では、ファイアウォールが存在する環境に Oracle Application Server をインストールして実行する場合に、ファイアウォールで開く必要のあるポートを示します。

### 付録 E「OracleAS Metadata Repository スキーマ」

この付録では、OracleAS Metadata Repository のスキーマについて説明し、その表領域およびデータファイルを示します。

### 付録 F「Configuration Assistant」

この付録では、インストーラによって実行される Configuration Assistant について説明します。

### 付録 G「トラブルシューティング」

この付録では、インストール中および削除中に発生する可能性のある問題の解決方法について説明します。

## 関連ドキュメント

追加情報は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 概要』

## 表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	本文中の太字は、画面上のオブジェクト（ボタンやフィールドなど）を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントのテキストは、ファイル名、コマンドまたは構成ファイルの内容を示します。
<i>固定幅フォントのイタリック</i>	固定幅フォントのイタリックは、適切な値で置き換える必要があるプレースホルダ・テキストを示します。
[ ]	大カッコは、カッコ内の項目が任意選択であることを示します。
...	省略記号は、直接関係しない情報が省略されていることを示します。

## サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

### オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

### 製品マニュアル

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

### 研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

### その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。



# 第Ⅰ部

---

## Oracle Application Server のインストール

第Ⅰ部では、Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) のインストールについて説明します。内容は次のとおりです。

- 第1章「製品およびインストールの概要」
- 第2章「システムおよびインストール要件」
- 第3章「J2EE and Web Services のインストール」
- 第4章「OracleAS Portal のインストール」
- 第5章「インストール画面」
- 第6章「インストール後の作業」



---

# 製品およびインストールの概要

Oracle Application Server Standard Edition One は、強力な統合製品です。この製品が持つ様々な機能を最適化するためには、このマニュアルを通して、まずは製品に関する基本的な事柄を習得する必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- 1.1 項「製品の概要」
- 1.2 項「新機能」
- 1.3 項「インストールの概要」
- 1.4 項「Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあること」

## 1.1 製品の概要

Oracle Application Server Standard Edition One は、中小企業や大規模な組織内の部門別ユーザーのニーズに対応する、完全な Web インフラストラクチャを提供します。

Oracle Application Server Standard Edition One には、次のものが含まれています。

- Web サイトの構築に必要な PHP および PERL を備えた Web サーバー
- Java/J2EE で Web サイトおよびインターネット・アプリケーションを構築するための J2EE 準拠のアプリケーション・サーバーおよび開発ツール
- グループ内で情報を迅速かつ安全に共有するために簡単に使用できる Enterprise Portal

## 1.2 新機能

Oracle Application Server Standard Edition One には、次の新機能があります。

- Oracle Instant Portal (Q42)

このコンポーネントでは、WYSIWYG (What You See Is What You Get) コンテンツ編集ができる他、事前構築済のホーム・ページや部門別ページが用意されており、公開やコンテンツ共有をセキュアに行うためのコンテンツ・ポートレット (カスタマイズ可能) が使用できます。操作を選択してクリックすると、ページの内容およびスタイルの管理や、ページ管理を実行できます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Instant Portal スタート・ガイド』を参照してください。

- 基本（ワンクリック）インストール

新しい基本インストールでは、単一のインストール画面でいくつかの質問に回答することによって、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできます。このインストールでは、すべてのコンポーネントに対してデフォルトの値が使用されます。

**関連項目：** 詳細は、[1.3.3 項「基本インストールと拡張インストール」](#) を参照してください。

- ワンクリック起動および停止機能

追加された新しい機能によって、「スタート」メニューから、Oracle Enterprise Manager Application Server Control、中間層、インフラストラクチャ・インスタンス、およびすべての Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントの起動と停止を実行できます。

**関連項目：** 詳細は、[第 9 章「起動と停止」](#) を参照してください。

また、管理者は、Application Server Control コンソールからコンポーネントの起動、停止、有効化または無効化を行うこともできます。

---

---

**注意：** ワンクリック起動および停止機能では、次のプロセスを起動または停止できません。

- DB 制御
- Cluster Ready Services (CRS)
- Cluster Synchronization Services (CSS)

これらのプロセスは、ワンクリック起動および停止機能の実行後、手動で停止または起動する必要があります。

---

---

- Application Server Control コンソールの「バックアップ / リカバリ」タブ

「バックアップ / リカバリ」タブをクリックすることによって、Application Server Control コンソールから構成情報およびデータを直接バックアップできます。

**関連項目：** 詳細は、[第 14 章「バックアップおよびリカバリ」](#) を参照してください。

- Oracle Directory Integration and Provisioning アシスタント (loaddata コマンド) を介した Oracle Internet Directory ユーザーのバルク・ロード
- ユーザーに対してパスワードの再設定を可能にする OracleAS Single Sign-On ログイン

## 1.3 インストールの概要

Oracle Application Server Standard Edition One で使用できるサービスは、主に次の 2 つのグループに分かれます。

- [1.3.1 項「Oracle J2EE and Web Services」](#)
- [1.3.2 項「OracleAS Portal」](#)

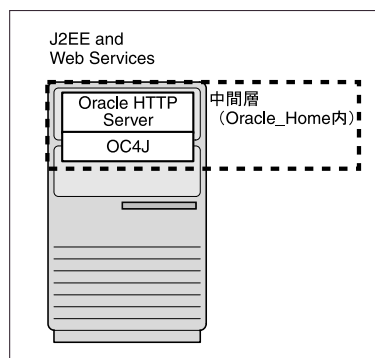
これらのサービスのグループはいずれも、Oracle Application Server 中間層と呼ばれます。OracleAS Portal をインストールすると、Oracle Application Server Infrastructure もインストールされます。OracleAS Portal 中間層では、OracleAS Infrastructure が機能している必要があります。J2EE and Web Services 中間層では必要ありません。

以降の項では、これらのサービスの詳細を説明します。

### 1.3.1 Oracle J2EE and Web Services

Oracle J2EE and Web Services には、Oracle HTTP Server や Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) などのアプリケーションの配置に使用するコンポーネントが含まれています。図 1-1 に、インストール構成を示します。

図 1-1 J2EE and Web Services 用の構成



### 1.3.2 OracleAS Portal

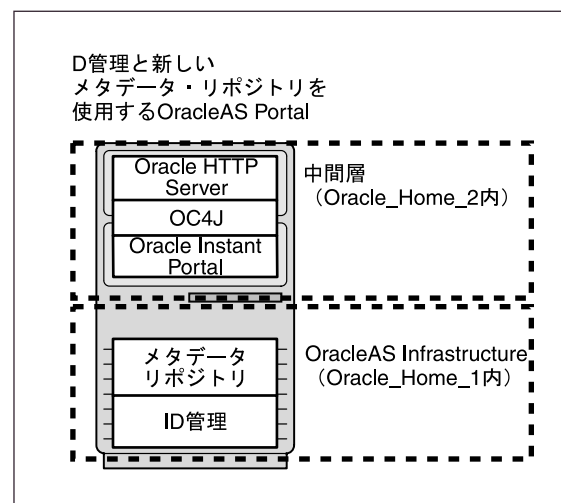
OracleAS Portal サービスには、J2EE and Web Services のすべてのコンポーネントに加えて、Identity Management と Metadata Repository を使用する Oracle Instant Portal が含まれています。製品に含まれる Metadata Repository を使用するかわりに、既存のデータベースを Metadata Repository として使用することもできます。

使用可能ないずれかの OracleAS Portal サービスをインストールするように選択すると、Oracle Universal Installer は連鎖インストールを実行します。この場合、まず該当するすべてのインフラストラクチャ・コンポーネントがインストールおよび構成され、次に中間層コンポーネントがインストールおよび構成されます。

#### 1.3.2.1 新しいメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal

新しいメタデータ・リポジトリを使用する場合、図 1-2 に示すように、Oracle Application Server Standard Edition One Infrastructure (Identity Management および Metadata Repository) がインストールされます。

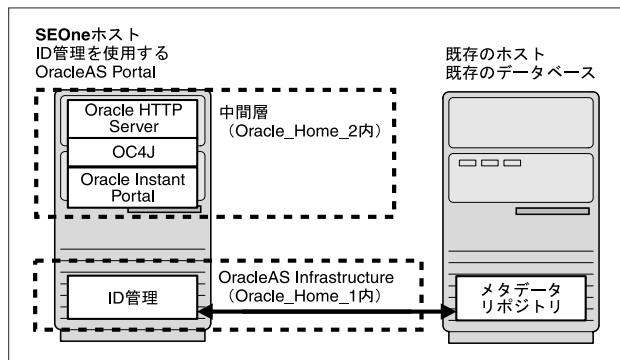
図 1-2 新しいメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal の構成



### 1.3.2.2 既存のメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal

既存のメタデータ・リポジトリを使用する場合は、[図 1-3](#) に示すように、Oracle Application Server Standard Edition One Infrastructure（Identity Management のみ）がインストールされます。

図 1-3 既存のメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal の構成



この構成では、OracleAS Portal および Identity Management をインストールする前に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant（OracleAS Metadata Repository Creation Assistant）を使用して、既存のデータベースに Metadata Repository を作成する必要があります。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は別の CD に収録されています。

**注意：** OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の詳細は、[第 III 部](#) を参照してください。

## 1.3.3 基本インストールと拡張インストール

[表 1-1](#) に、各インストール・タイプで使用可能なサービスのグループの概要を示します。

表 1-1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール・タイプ

インストール・タイプ	使用可能なサービス
基本	<ul style="list-style-type: none"> <li>J2EE and Web Services</li> <li>Identity Management と新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal</li> </ul>
拡張	<ul style="list-style-type: none"> <li>J2EE and Web Services</li> <li>Identity Management と新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal</li> <li>Identity Management と既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal</li> </ul>

基本（ワンクリック）インストールでは、ユーザーは最初のインストール画面で質問に回答するように求められます。その後は、ユーザーとの対話なしに製品のインストールに進みます。すべてのコンポーネントに対してデフォルト値が使用されます。

拡張インストールでは、高度なカスタマイズと柔軟性によって、追加の言語のインストール、ポート構成オプションの指定、Metadata Repository としての既存のデータベースの使用（OracleAS Portal のインストールの場合のみ）、およびデータベース構成（OracleAS Portal のインストールの場合のみ）が可能になります。

[表 1-2](#) に、基本インストールと拡張インストールのカスタマイズ・オプションの相違の概要を示します。

表 1-2 基本インストールと拡張インストールの機能

操作またはオプション	基本	拡張
Oracle ホームの指定	可	可
インスタンス名と <code>ias_admin</code> パスワードの指定	可	可
データベース名とパスワードの指定 (OracleAS Portal のみ)	可	可
追加の言語の選択	不可	可
ポート構成の指定 (自動または手動)	不可	可
Oracle Internet Directory のネームスペースの指定 (OracleAS Portal のみ)	不可	可
データベース構成オプションの指定 (OracleAS Portal のみ)	不可	可
スキーマ・パスワードの指定 (OracleAS Portal のみ)	不可	可
データベースとして使用する既存のリポジトリの指定 (OracleAS Portal のみ)	不可	可
Configuration Assistant	可	可

**注意：**

- OracleAS Portal のインストールでは、インストール・ディレクトリを指定するように求められます。このディレクトリが Oracle ホーム・ディレクトリの一部になります。詳細は、[1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」](#)を参照してください。
- 基本インストール画面では、データベース・アカウントと、SYS、SYSTEM、DBSNMP および SYSMAN アカウントで使用するパスワードを 1 つのみ指定できます。拡張インストールでは、各アカウントに対して同じパスワードを指定することも、異なるパスワードを指定することもできます。

### 1.3.4 一般的なインストール手順

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするための手順は次のとおりです。

1. 最新情報については、次のドキュメントを参照してください。
  - Oracle Application Server リリース・ノート  
最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。
2. [第 2 章](#)を読んで、Oracle Application Server Standard Edition One を実行するコンピュータが要件を満たしていることを確認します。この章では、インストーラで自動的に実行されるチェックの概要についても説明します。
3. [第 3 章「J2EE and Web Services のインストール」](#) または [第 4 章「OracleAS Portal のインストール」](#) を読んで、インストール手順の詳細を理解します。
4. [第 6 章「インストール後の作業」](#) を読んで、インストールが正常に完了した直後に実行する必要がある作業について確認します。
5. Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたら、「ようこそ」ページにアクセスしてデモをいくつか実行し、インストールが成功したことを確認します。

## 1.4 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあること

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあることについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 1.4.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所」
- 1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」
- 1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」
- 1.4.4 項「ias\_admin ユーザーとそのパスワードの制限」
- 1.4.5 項「グローバル・データベース名とそのパスワードの制限」
- 1.4.6 項「言語およびロケールの設定」
- 1.4.7 項「ポート」
- 1.4.8 項「ポート 1521 がすでに使用されている場合」
- 1.4.9 項「インストーラがファイルを書き込む場所」

### 1.4.1 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所

Oracle Application Server Standard Edition One は、単一のコンピュータにインストールする必要があります。

### 1.4.2 Oracle ホーム・ディレクトリ

インストール中、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするディレクトリのフルパスを入力するように求められます。このディレクトリを Oracle ホームと言います。

たとえば、Oracle Application Server Standard Edition One を /oracle/OraHome\_SEOne にインストールした場合、Oracle ホームは OraHome\_SEOne になります。

---

**注意：** Oracle ホーム・ディレクトリへのパスには空白を使用できません。たとえば、「/opt/oracle/app server/infra10\_1\_2」では「app server」の部分に空白が含まれているため、このディレクトリにはインストールできません。インストーラでは、このパスの入力後にいくつかの画面が進むまで、これがチェックされません。

---

**関連項目：** 名前の使用方法については、1.4.2.1 項「Oracle ホームの名前の指定」を参照してください。

J2EE and Web Services のみをインストールするよう選択した場合、インストール中に指定したディレクトリのみが作成され、Oracle ホーム・ディレクトリになります。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、Oracle ホーム・ディレクトリは 2 つ作成されます。1 つは OracleAS Infrastructure 用、もう 1 つは OracleAS Portal 用です。

- `user-specified-dir/infra`
- `user-specified-dir/portal`

`user-specified-dir` 変数は、インストール中に指定するディレクトリです。



---

**注意：** 使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかを同じコンピュータ上にインストールする場合、各インスタンス（OracleAS Infrastructure および OracleAS Portal）の環境を設定するスクリプトを作成する必要があります。これによって、バイナリが適切な Oracle ホームから実行されるようにします。設定する必要がある環境変数には、ORACLE\_HOME や PATH が含まれます。

---

### 1.4.2.1 Oracle ホームの名前の指定

各 Oracle ホーム・ディレクトリには、自動的に名前が付けられます。

J2EE and Web Services のみをインストールする場合、Oracle ホームの名前は `oraclean1` になります。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、Oracle ホームの名前は次のようになります。

- `user-specified-dir/infra` ディレクトリ名は `oraclean1` になります。
- `user-specified-dir/portal` ディレクトリ名は `oraclean2` になります。

Oracle ホームの名前に使用できるのは英数字およびアンダースコア（`_`）で、文字数は最大で 128 文字です。

中間層（OracleAS Portal など）は OracleAS Infrastructure（OracleAS Metadata Repository など）のサービスに依存しているため、OracleAS Infrastructure のサービスを開始した後に中間層のサービスが開始されます。

### 1.4.2.2 空ではない Oracle ホームへのインストール

Oracle Application Server Standard Edition One は、いくつかのファイルがすでに含まれているディレクトリにはインストールできません。たとえば、インストールを取り消した場合やインストールに失敗した場合は、ディレクトリをクリーンアップしてから、そのディレクトリに Oracle Application Server Standard Edition One を再インストールする必要があります。また、インストーラはインストールを修復することもできません。空ではないディレクトリのクリーンアップ方法の手順は、[G.3.4 項「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される](#)を参照してください。

## 1.4.3 Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名

J2EE and Web Services のみをインストールする場合、コンピュータ上に 1 つの中間層インスタンスが作成されます。インストール中、このインスタンスの名前を指定するように求められます。このインスタンスには、Oracle ホームとは異なる名前を指定できます（たとえば、`seone` というインスタンス名を指定できます）。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、コンピュータ上には 2 つのインスタンスが作成されます。1 つは OracleAS Infrastructure 用、もう 1 つは中間層用です。基本インストールを実行する場合は、中間層のインスタンス名のみを指定します。OracleAS Infrastructure のインスタンス名は自動的に生成されます。詳細は、[5.3 項「ようこそ」画面](#)を参照してください。

拡張インストールを実行する場合は、OracleAS Infrastructure と中間層（OracleAS Portal）のインスタンス名を個別に指定するように求められます。詳細は、[5.11 項「インスタンス名と `ias\_admin` パスワードの指定](#)」を参照してください。

インストール後にインスタンス名を変更することはできません。

Oracle Application Server では、指定されたインスタンス名にホスト名とドメイン名を追加し、完全なインスタンス名にします。たとえば、`c1` という名前のコンピュータにインスタンスをインストールする場合、インスタンスの名前を `seone1` にすると、ドメイン名が `mydomain.com` であれば、インスタンスのフルネームは `seone1.c1.mydomain.com` になります。

### インスタンス名に使用できる文字

インスタンス名に使用できるのは、英数字（A-Z、a-z、0-9）およびアンダースコア（\_）文字のみです。

インスタンス名には、使用できる文字数の制限はありません。

### Oracle Application Server インスタンス名での制限

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの名前には、コンピュータのホスト名を使用しないでください。

### Oracle Application Server でのインスタンス名の使用

インスタンス名が重要なのは、Oracle Application Server Standard Edition One でインスタンスを一意に識別するのに使用されるためです。そのため、使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかを拡張インストールする場合、OracleAS Infrastructure と OracleAS Portal に異なる名前を指定する必要があります。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control（Application Server Control）を使用して Oracle Application Server Standard Edition One を管理する場合、画面にインスタンス名が表示されます。インスタンス名をクリックして、そのインスタンスにインストールされているコンポーネント、コンポーネントの稼働 / 停止状態、コンポーネントのログ・ファイルなど、インスタンスの詳細を表示できます。Application Server Control は、Oracle Application Server Standard Edition One のためのブラウザベースの管理ツールです。

**関連項目：** この管理ツールに関する詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

また、一部の `dcmctl` コマンドには、パラメータとしてインスタンス名が必要なものもあります。`dcmctl` は、Oracle Application Server インスタンスを管理するためのコマンドライン・ツールです。

**関連項目：** `dcmctl` の詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

## 1.4.4 ias\_admin ユーザーとそのパスワードの制限

インストーラにより、`ias_admin` ユーザーのパスワードを指定するように求められます。`ias_admin` ユーザーは、Oracle Application Server Standard Edition One の管理ユーザーです。

Oracle Application Server Standard Edition One では、最初のインストール画面で指定した `ias_admin` パスワードが、次の場合にも使用されます。

- Oracle Application Server Standard Edition One を管理する際、`ias_admin` ユーザーとして Application Server Control コンソールにログインする場合。
- Oracle Instant Portal を監視および管理するために、`portal` ユーザーとして Oracle Instant Portal にログインする場合。
- アプリケーションへのユーザー・アクセスを管理するために、`orcladmin` ユーザーとして OracleAS Single Sign-On にログインする場合。

### ias\_admin パスワードの制限

`ias_admin` ユーザーのパスワードは、Oracle Internet Directory のパスワード・ポリシーに準拠している必要があります。

- 5 文字以上の英数字を指定します。
- 1 文字以上は数字にします。

Oracle Internet Directory に定義されたパスワード・ポリシーに加え、`ias_admin` ユーザーのパスワードには次の制限もあります。

- パスワードは 30 文字より短くします。

- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア ( \_ )、ドル記号 ( \$ ) およびシャープ記号 ( # ) のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア ( \_ )、ドル記号 ( \$ ) またはシャープ記号 ( # ) から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、OTN (Oracle Technology Network) のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。または、単に予約語のような形式の語の使用を避ける方法もあります。

---

**注意：** パスワードを入力する際には、[Caps Lock] キーが適切な状態になっていることを確認します。パスワードでは、大 / 小文字が区別されます。

---

Oracle Application Server を管理するために Application Server Control にログインするときは、ias\_admin ユーザーとしてログインするため、パスワードを覚えておく必要があります。パスワードを忘れた場合は、リセットできます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

## 1.4.5 グローバル・データベース名とそのパスワードの制限

データベースは、そのグローバル・データベース名によって識別されます。グローバル・データベース名は、次の 2 つの部分で構成されます。

database\_name.database\_domain

例: sales.us.yourcompany.com

この例では、sales がデータベース名、us.yourcompany.com がデータベース・ドメインです。

グローバル・データベース名を指定する際には、次のガイドラインに従ってください。

- データベースの使用目的を反映したデータベース名を選択します (sales など)。データベース名にソフトウェア・バージョンへの参照を含めないでください。
- 分散環境で、このデータベースを他のデータベースと区別できるデータベース・ドメインを選択します。たとえば、us.yourcompany.com および jp.yourcompany.com という 2 つの異なるドメインを選択すると、日本と米国の両方の営業部門が sales というデータベースを持つことができます。
- 指定するデータベース・ドメインは、システムのネットワーク・ドメインと同じである必要はありませんが、必要に応じて同じドメインを指定できます。
- データベース名とデータベース・ドメインの両方に、英数字、アンダースコア ( \_ )、ハイフン ( - ) およびシャープ記号 ( # ) を使用できます。
- ピリオドはデータベース・ドメインでのみ使用できます。
- データベース名は最大 8 文字です。
- データベース名は、英数字 (A-Z、0-9) で始める必要があります。
- データベース・ドメインは、ピリオドを含めて最大 128 文字です。

指定した値は、最初のピリオドまでが DB\_NAME 初期化パラメータの値になります。最初のピリオドの後ろに指定した値は、DB\_DOMAIN 初期化パラメータの値になります。

DB\_NAME パラメータの値は、自動的に環境変数 ORACLE\_SID にも割り当てられます。この環境変数によって、Oracle データベース・インスタンスの名前が定義されます。

### データベース・パスワードの制限

通常、Oracle データベースには、SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP データベース管理アカウント（スキーマ）のパスワードが必要です。Oracle Application Server Standard Edition One の基本インストールの場合、最初のインストール画面で指定したグローバル・データベース・パスワードが、これらのすべてのアカウントで使用されます。

データベース・パスワードの制限は、次のとおりです。

- パスワードは 4 ～ 30 文字で指定します。
- ユーザー名と同じパスワードを指定することはできません。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットを使用します。アンダースコア（\_）、ドル記号（\$）およびシャープ記号（#）も使用できます。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。

### データベース・パスワードの推奨事項

データベース・パスワードを選択する際のいくつかの推奨事項を次に示します。

- パスワードには、英字、数字および記号をそれぞれ 1 つ以上含めます。
- パスワードには、単純な語やわかりやすい語（welcome、account、database、user など）を使用しないようにします。

## 1.4.6 言語およびロケールの設定

基本インストールを実行すると、AL32UTF8 キャラクタ・セットでリポジトリ・データベースが作成され、英語および Oracle Universal Installer を実行しているロケールのメッセージで Oracle Application Server Standard Edition One がインストールされます。追加の言語が必要な場合、拡張インストールを実行して、「言語の選択」画面で必要な言語を選択する必要があります。この画面の詳細は、5.5 項を参照してください。

インストールする追加の言語を選択すると、それらの言語の表示に必要なフォントとともに、選択した言語でメッセージがインストールされます。

### 1.4.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の追加の言語のインストール

インストール後により多くの言語をサポートする必要性が生じた場合は、Portal Language Assistant ツールを実行して、それらの言語用の翻訳をロードする必要があります。また、OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM から中間層ディレクトリに必要なフォント・ファイルをコピーする必要があります。

### 1.4.6.2 Portal ユーザー・インタフェース・メッセージのインストール

Portal の翻訳済リソース・ファイルは、次のディレクトリにあります。

```
$ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/nlsres/ctl
```

追加の言語をサポートするには、これらのファイルをリポジトリ・データベースにロードする必要があります。

翻訳をロードするには、次のコマンドを使用します。

```
ptllang -lang lang_code [-i install_type]
                        [-s portal_schema]
                        [-sp portal_schema_password]
                        [-c portal_db_connect_string]
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

表 1-3 に、このコマンドのオプションの構成パラメータを示します。

**表 1-3 ptllang コマンドの構成パラメータ**

パラメータ	説明
-lang	インストールする言語の略称。  <b>関連項目：</b> サポートされているすべての略称のリストについては、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』にある OracleAS Portal の言語および言語の略称に関する表を参照してください。
-i	インストール・タイプ。  このパラメータには <code>typical</code> または <code>custom</code> を設定できます。 <code>typical</code> モードでは、スクリプトは自動的に登録済の OracleAS Metadata Repository に接続します。カスタム・データベースの OracleAS Portal スキーマの場合は、 <code>custom</code> モードを使用します。  デフォルト: <code>typical</code>
-s	OracleAS Portal スキーマ名。  デフォルト: <code>portal</code>
-sp	OracleAS Portal スキーマ・パスワード。パスワードは Oracle Internet Directory から取得するか、または SQLPlus を使用して変更できます。  <b>関連項目：</b> 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
-c	OracleAS Metadata Repository がインストールされているデータベースへの接続文字列。書式は次のとおりです。  <code>DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName</code>

ptllang コマンドの例を次に示します。

```
ptllang -lang ja -i custom -s portal -sp welcome1 -c host:1521:orasid
```

### 1.4.6.3 Oracle Unicode フォントのインストール要件

インストールされるフォントは、インストール中に選択した言語の Application Server Control コンソールおよびヘルプに必要なフォント（Albany フォントの ALBANWTJ.TTF、ALBANWTK.TTF など）のみです。そのため、一部のテキストが、インストール中に選択していない言語の制御文字として表示される場合があります。

追加に必要なフォントは、Oracle Application Server Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM の `/utilities/fonts` フォルダに収録されています。

サポートが必要になる可能性のある言語のフォントのリストを次に示します。

- ALBANWTJ - 英語以外および日本語
- ALBANWTK - 韓国語
- ALBANWTS - 簡体字中国語
- ALBANWTT - 繁体字中国語

これらのフォントをインストールするには、中間層のインストール後に次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM の `/utilities/fonts` フォルダに移動します。
2. `/utilities/fonts` ディレクトリの内容を、中間層マシンの次のフォルダにコピーします。

```
$ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/fonts
```

## 1.4.7 ポート

Oracle HTTP Server、Oracle Enterprise Manager Application Server Control など、多くの Oracle Application Server コンポーネントでポートを使用します。インストーラにデフォルトのポート番号を割り当ててもらふことも、ユーザーが指定したポート番号を使用することもできます。

この項では、ポートに関する次の項目について説明します。

- [1.4.7.1 項「ポートが使用中かどうかの確認」](#)
- [1.4.7.2 項「ポート番号のリストの取得」](#)
- [1.4.7.3 項「デフォルトのポート番号の使用」](#)
- [1.4.7.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#)

### 1.4.7.1 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用されているかどうかを確認するには、`netstat` コマンドを次のように実行します。

```
/> netstat -an | grep portnum
```

### 1.4.7.2 ポート番号のリストの取得

ポート番号のリストは、次の方法で取得できます。

- Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用します。  
Oracle Enterprise Manager Application Server Control ホーム・ページ上の「ポート」リンクをクリックします。これにより、使用されているすべてのポートと様々なコンポーネントの推奨されるポート範囲を示すページが表示されます。
- `$ORACLE_HOME/install` にある `portlist.ini` ファイルを確認します。`ORACLE_HOME` は、Oracle Application Server インストールが格納されているディレクトリです。  
インストールにコンポーネントのポート番号を変更しても、`portlist.ini` ファイルは更新されません。

### 1.4.7.3 デフォルトのポート番号の使用

こうしたコンポーネントでデフォルトのポート番号を使用する場合は、特に何もする必要はありません。すべてのデフォルト・ポートの番号およびその範囲のリストは、[付録 C「デフォルトのポート番号」](#)を参照してください。各コンポーネントに対し、ポート範囲内で 1 つ以上のポートが使用できることを確認します。インストーラが空きポートを範囲内で検出できない場合、そのインストールは失敗します。

**注意：**

- インストーラでは、`/etc/services` ファイルで指定されたポート番号の割当ては行われません。インストーラにより特定のポート番号の割当てが行われないようにするには、そのポート番号を `/etc/services` ファイルに指定してください。たとえば、ポート 7777 をあるアプリケーションのために予約しておきたい場合は、次に示す行を `/etc/services` ファイルに追加します。

```
myApplication      7777/tcp
```

この行が `/etc/services` ファイル内にある場合は、いずれのコンポーネントに対してもポート 7777 の割当てが行われることはありません。

- デフォルトの構成では、`/etc/services` ファイルには、ポート 389 (LDAP 用) およびポート 636 (LDAP/SSL 用) が指定されています。これらのポートは時に、Oracle Internet Directory のデフォルト・ポートになる場合があります。そのため、これらのポート番号を Oracle Internet Directory に使用する場合は、`/etc/services` ファイルに指定されているこれらの行を削除するかまたはコメント・アウトする必要があります。ある行をコメント・アウトするには、次のようにして行の先頭に `#` を追加します。

```
# ldap  389/tcp  # Lightweight Directory Access Protocol
# ldap  389/udp  # Lightweight Directory Access Protocol
# ldaps 636/tcp  # LDAP protocol over TLS/SSL (was sldap)
# ldaps 636/udp  # LDAP protocol over TLS/SSL (was sldap)
```

`/etc/services` ファイルでこの行をコメント・アウトも削除しなければ、ポート 389 およびポート 636 のインストーラによる割当ては行われません。この場合、範囲内に属するいずれかのポート番号が Oracle Internet Directory に割り当てられます。デフォルト・ポートの番号およびその範囲のリストは、[付録 C「デフォルトのポート番号」](#) を参照してください。

#### 1.4.7.4 カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）

インストーラがコンポーネントにカスタムのポート番号を割り当てるようにするには、次の手順を実行します。

1. コンポーネント名とポート番号の入ったファイルを作成します。このファイルは通常 `staticports.ini` ファイルという名前ですが、任意の名前を付けることができます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「手動」を選択し、`staticports.ini` ファイルにフルパスを入力します。

ファイルへのフルパスを指定しないと、インストーラはファイルを見つけることができません。この場合、インストーラはすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てますが、警告は一切表示されません。

##### **staticports.ini ファイルの書式**

`staticports.ini` ファイルの書式は次のとおりです。`port_num` は、コンポーネントに使用するポート番号に置き換えます。

```
# staticports.ini Template File

# This file is a template for specifying port numbers at installation time.
# To specify a port number, uncomment the appropriate line (remove #) and
# replace "port_num" with the desired port number.
#
# Please refer to Oracle Application Server 10g Standard Edition one
# Installation Guide for instructions on how to use this file.
# This file cannot be specified on the command line when launching OUI
```

```
[Infrastructure]
#Oracle Internet Directory port = port_num
#Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
#Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
#Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = 80
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
#Oracle Management Agent port = port_num
#Log Loader port = port_num

[Portal]
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
#Oracle Management Agent port = port_num
#Web Cache HTTP Listen port = port_num
#Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
#Web Cache Administration port = port_num
#Web Cache Invalidation port = port_num
#Web Cache Statistics port = port_num
#Log Loader port = port_num
#Discoverer OSAgent port = port_num

[j2ee]
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
```



```
#Oracle Management Agent port = port_num
#Web Cache HTTP Listen port = port_num
#Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
#Web Cache Administration port = port_num
#Web Cache Invalidation port = port_num
#Web Cache Statistics port = port_num
#Log Loader port = port_num
```

このファイルを作成する最も簡単な方法は、CD-ROM (Disk 1) または DVD にある `staticports.ini` ファイルをテンプレートとして使用することです。

1. `staticports.ini` ファイルを CD-ROM または DVD からハード・ディスクにコピーします。表 1-4 には、CD-ROM および DVD 内でこのファイルが格納されている場所が示されています。

**表 1-4 CD-ROM および DVD の `staticports.ini` ファイルの場所**

メディア	<code>staticports.ini</code> ファイルの場所
CD-ROM	<code>Disk1/stage/Response/staticports.ini</code>
DVD	CD-ROM

2. ローカル・コピー (ハード・ディスク上にあるファイル) を編集して必要なポート番号を含めます。

`staticports.ini` ファイルですべてのコンポーネントのポート番号を指定する必要はありません。ファイルにないコンポーネントでは、インストーラによりデフォルトのポート番号が使用されます。

インストール中に OracleAS Metadata Repository で使用されるポート (ポート 1521) の変更はできませんが、インストール後に変更できます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

次の例では、Application Server Control のポートといくつかの OracleAS Web Cache のポートを設定します。指定されていないコンポーネントには、インストーラによってデフォルトのポート番号が割り当てられます。

```
Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003
```

インストールが完了したら、`$ORACLE_HOME/install` にある `portlist.ini` ファイルで、割り当てられたポートを確認できます。

---

**注意：** ポート番号は 65535 を超えることはできません。

---

インストーラでは、メモリーをチェックすることにより、ファイルに指定されたポートが使用可能であることが確認されます。つまり、インストーラが検出できるのは、実行中のプロセスで使用されているポートのみです。アプリケーションで使用されているポートを調べるために構成ファイルが確認されることはありません。

指定されたポートが使用できないことが検出されると、インストーラにより警告が表示されます。インストーラでは、使用できないポートの割当ては行われません。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. `staticports.ini` ファイルを編集して別のポートを指定するか、そのポートを使用しているアプリケーションをシャットダウンします。

2. 「再試行」をクリックします。インストーラは `staticports.ini` ファイルの再読取りを行い、ファイル内のエントリを再確認します。

#### portlist.ini ファイルの staticports.ini ファイルとしての使用

`staticports.ini` ファイルには、インストール後に作成される `$ORACLE_HOME/install` の `portlist.ini` ファイルと同じ書式が使用されます。Oracle Application Server Standard Edition One をすでにインストールしている場合で、同じポート番号を別のインストールでも使用するには、最初のインストールの `portlist.ini` ファイルを、それ以降のインストールの `staticports.ini` ファイルとして使用できます。

ただし、`staticports.ini` では「Oracle Management Agent port」の行は、`portlist.ini` の「Enterprise Manager Agent port」に相当するという違いに注意してください。

#### インストーラがカスタム・ポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラー条件

`staticports.ini` ファイルは念入りに確認してください。間違いがあると、インストーラでは警告を表示せずにデフォルトのポートを使用します。

次のような点を確認します。

- 複数のコンポーネントに対して同じポートを指定すると、インストーラでは最初のコンポーネントに指定されたポートを使用し、それ以外のコンポーネントにはそれぞれのデフォルトのポートを使用します。複数のコンポーネントに同じポートが指定されている場合でも、インストーラは警告を發しません。
- `staticports.ini` ファイルに構文エラーがある場合 (= が抜けている行があるなど)、インストーラはその行を無視します。インストーラは、このような行で指定されているコンポーネントにはデフォルトのポートを割り当てます。インストーラは構文エラーのある行に対する警告を發しません。
- コンポーネント名のスペルを間違えると、インストーラはそのコンポーネントに対してデフォルトのポートを割り当てます。ファイル内のコンポーネント名では大文字と小文字が区別されます。インストーラは認識できない名前が指定された行に対する警告を發しません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、インストーラはその行を無視し、そのコンポーネントにはデフォルトのポート番号を割り当てます。これも警告を表示せずに行われます。
- `staticports.ini` ファイルへの相対パス (`./staticports.ini` または単に `staticports.ini` など) を指定すると、インストーラではファイルを見つけることができません。インストーラは警告を表示せずに続行し、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。`staticports.ini` ファイルはフルパスで指定する必要があります。

## 1.4.8 ポート 1521 がすでに使用されている場合

インストーラはポート 1521 を OracleAS Metadata Repository のリスナー (リリース 10.1.0.3) に構成します。このポートは、`staticports.ini` ファイルでは変更できません。

---

**注意：** コンピュータに、EXTPROC キーで IPC プロトコルを使用するリスナーがある場合、そのキーが別の値を持つように変更する必要があります。これは、OracleAS Metadata Repository のリスナーが EXTPROC キーを使用する必要があるためです。

---

Oracle データベース・リスナーなどの既存のアプリケーションがポート 1521 をすでに使用している場合、インストーラを実行する前になんらかの措置が必要になることがあります。詳細は次の項を参照してください。

- 1.4.8.1 項「ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合」
- 1.4.8.2 項「ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合」

### 1.4.8.1 ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合

Oracle データベースをすでに実行しているコンピュータに OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースをインストールする場合は、両方のデータベースのリスナーが競合しないことを確認してください。

既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository のデータベースの両方で同じリスナーが使用できる場合があります。これには、既存のリスナーとポート番号を考慮する必要があります。表 1-5 に、各種シナリオとその結果を示します。

インストール後、OracleAS Metadata Repository のリスナーが別のポートを使用するように変更できます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

**表 1-5 OracleAS Metadata Repository をインストールするコンピュータに既存のデータベースがある場合のシナリオとその結果**

既存のリスナーのリリース	既存のリスナーがポート 1521 を使用	既存のリスナーがポート 1521 以外を使用
10.1.0.2 より前	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。  シナリオ 1: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 より前であることを参照してください。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。  シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用を参照してください。
10.1.0.2 以上	既存のリスナーは、既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository の両方をサポートします。  シナリオ 2: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 以上であることを参照してください。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。  シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用を参照してください。

リスナーのリリースを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
> cd $ORACLE_HOME/bin
> lsnrctl version
```

ここで ORACLE\_HOME は、データベースのホーム・ディレクトリです。

同じコマンドを使用して、リスナーのポートを確認することもできます。

コマンドの出力例を次に示します。

```
> ./lsnrctl VERSION LSNCTL for Linux: Version 10.1.0.3.0 - Production on 19-MAR-2005 19:46:54
Copyright (c) 1991, 2004, Oracle. All rights reserved.
Connecting to (ADDRESS=(PROTOCOL=tcp)(PORT=1521))TNSLSNR for Linux: Version 10.1.0.2.0 - Production
      TNS for Linux: Version 10.1.0.2.0 - Production
      Unix Domain Socket IPC NT Protocol Adaptor for Linux: Version 10.1.0.2.0 - Production
      Oracle Bequeath NT Protocol Adapter for Linux: Version 10.1.0.2.0 - Production
      TCP/IP NT Protocol Adapter for Linux: Version 10.1.0.2.0 - Production,,
The command completed successfully
```

#### シナリオ 1: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 より前である

リリース 10.1.0.2 より前のリスナーには、この Oracle Application Server リリース 2 (10.1.2) の OracleAS Metadata Repository と互換性がありません。リリース 10.1.0.3 のリスナーがインストールされる OracleAS Metadata Repository をインストールする必要があります。この後で、

この新しいリスナーを使用して、既存のデータベースおよび OracleAS Metadata Repository データベースに対しサービスを提供することができます。

1. OracleAS Metadata Repository をインストールする前に、次のコマンドを使用して既存のリスナーを停止します。

```
/> cd $ORACLE_HOME/bin  
> lsnrctl stop
```

ORACLE\_HOME は、既存のデータベースのホーム・ディレクトリです。

既存のリスナーを停止しない場合、インストールに失敗します。

2. OracleAS Metadata Repository をインストールします。

[第4章「OracleAS Portal のインストール」](#)にある OracleAS Metadata Repository のいずれかのインストール手順を参照してください。

3. 必要に応じて、新しいリスナーの構成ファイルを更新します。リスナーの構成ファイルの名前は listener.ora で、\$ORACLE\_HOME/network/admin ディレクトリにあります。

- a. 既存のリスナーの構成ファイルのネットワーク・アドレスのエントリを確認します。

既存のリスナーの構成ファイルに次のネットワーク・アドレスしかない場合、次のネットワーク・アドレスに対しては、OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルを編集する必要はありません。

- \* TCP Port 1521

- \* IPC key EXTPROC

構成ファイルに他のネットワーク・アドレスがある場合は、それらを OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルに追加する必要があります。

- b. 既存のリスナーの構成ファイルの SID\_DESC エントリを確認します。

既存のリスナーの構成ファイルに、既存のデータベースの SID\_DESC エントリがある場合は、それらのエントリを OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルに追加する必要があります。

- c. 既存のリスナー（リリース 10.1.0.2 より前のもの）は起動しないでください。新しいリスナーが両方のデータベースをサポートできるようになったため、既存のリスナーを実行する必要はなくなりました。

---

**注意：** 前述の手順 c は非常に重要です。1 つのリスナー（新しいリスナー）を実行するだけで、両方のデータベースをサポートできます。

---

## シナリオ 2: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 以上である

既存のリスナーは、既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository の両方をサポートします。インストーラでは、この構成を自動的に行います。

インストール中、リスナーを実行しておくことができます。

## シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用

リスナーを 2 つ実行します。既存のリスナーのリリースには関係なく、1 つは既存のデータベース用で、もう 1 つは OracleAS Metadata Repository 用になります。

既存のリスナーはポート 1521 を使用しないため、インストール中に実行していてもかまいません。

### 1.4.8.2 ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合

ポート 1521 でリスニングしているアプリケーションが他にある場合、それらが別のポートでリスニングするように再構成する必要があります。それが可能ではない場合は、OracleAS Metadata Repository のインストール中はそのアプリケーションをシャットダウンしてください

い。インストール後、OracleAS Metadata Repository がポート 1521 以外のポートを使用するように再構成できます。

**関連項目：** ポート 1521 以外のポートを使用するように OracleAS Metadata Repository を再構成する手順は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

## 1.4.9 インストーラがファイルを書き込む場所

インストーラによりファイルの書き込みが行われるディレクトリを、表 1-6 に示します。

**表 1-6 インストーラがファイルを書き込むディレクトリ**

ディレクトリ	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	このディレクトリには Oracle Application Server Standard Edition One のファイルが入っています。このディレクトリは、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール時に指定します。
インベントリ・ディレクトリ (/etc/oraInst.loc で指定)	インストーラは、インベントリ・ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされた Oracle 製品の履歴を取ります。インベントリ・ディレクトリは、コンピュータに Oracle 製品を初めてインストールするときに作成されます。それ以降のインストールでも、インストーラは同じインベントリ・ディレクトリを使用します。
/tmp ディレクトリ	インストーラは、インストール時のみに必要なファイルを一時ディレクトリに書き込みます。一時ディレクトリは、環境変数 TEMP によって指定されます。詳細は、 <a href="#">TMP および TMPDIR</a> ページ 2-20 を参照してください。



---

## システムおよびインストール要件

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールおよび実行に関する要件を示します。この章の内容は次のとおりです。

- 2.1 項「Linux システムのハードウェア要件」
- 2.2 項「Linux のソフトウェア要件」
- 2.3 項「カーネル・パラメータとシェル制限の確認」
- 2.4 項「オペレーティング・システム・グループ」
- 2.5 項「オペレーティング・システム・ユーザー」
- 2.6 項「環境変数」
- 2.7 項「/etc/hosts ファイル」
- 2.8 項「ネットワーク関連項目」
- 2.9 項「インストーラにより実行される前提条件チェック」

### 2.1 Linux システムのハードウェア要件

表 2-1 に、Oracle Application Server Standard Edition One を実行するためのハードウェア要件を示します。インストーラにより、この要件の多くがインストール・プロセス開始時にチェックされ、満たされていない要件がある場合には警告されます。ユーザーはインストーラによってチェックされない要件のみを確認して時間を節約できます。インストーラによりチェックされない要件については、該当する列を参照してください。

また、次のように `runInstaller` コマンドを実行すると、実際にインストールを行わずに、インストーラによるシステム・チェックのみを実行できます。`runInstaller` コマンドは、Oracle Application Server CD-ROM (Disk 1) または DVD (`application_server` ディレクトリ) にあります。

CD-ROM:

```
prompt> mount_point/1012disk1/runInstaller -executeSysPrereqs
```

DVD:

```
prompt> mount_point/application_server/runInstaller -executeSysPrereqs
```

表 2-1 Linux システムのハードウェア要件

項目	最小要件	インストーラによるチェック
プロセッサの種類	Pentium (32 ビット)	なし
プロセッサ速度	450 MHz 以上	あり
ネットワーク	Oracle Application Server は、ネットワークに接続されていないスタンドアロン・コンピュータにインストールできます。後からネットワーク構成を変更する場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照して Oracle Application Server の再構成に関する情報を確認してください。	なし
IP	コンピュータの IP アドレスには、静的アドレスと DHCP を使用して割り当てたアドレスのどちらでも使用できます。後から IP 構成を変更する場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照して Oracle Application Server の再構成に関する情報を確認してください。	なし
メモリー	<p>各インストール・タイプに指定されているメモリー要件は、Oracle Application Server をインストールおよび実行するのに十分な物理メモリーです。ただし、ほとんどの本番サイトでは 1 GB 以上の物理メモリー構成が必要です。通信量の多いサイトでは、メモリーをさらに増やすことによってパフォーマンスを向上させることができます。Java アプリケーションで増量したメモリーを活用するには、OC4J プロセスに割り当てられた最大ヒープを増やすか、OC4J プロセスを追加構成する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。</p> <p>実際のインストールに最適なメモリーの容量を決定するには、サイトの負荷テストを行うのが最善です。アプリケーションや利用パターンによって、リソースの要件は大幅に異なることがあります。また、メモリーを監視するオペレーティング・システムのユーティリティでは、共有メモリーを示すなどの理由で、メモリー使用を実際より多く報告するものもあります。メモリー要件を決定するには、負荷テストの際に、物理メモリーの追加によるパフォーマンスの向上を監視することをお勧めします。メモリーおよびプロセッサ・リソースをテスト用に構成する方法は、各プラットフォーム・ベンダーのドキュメントを参照してください。</p> <p>Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2.0.1) : 1 GB</p> <p>メモリーの容量を調べるには、次のコマンドを実行します。</p> <pre># grep MemTotal /proc/meminfo</pre>	あり
ディスク領域	<p>OracleAS Infrastructure, J2EE and Web Cache with Portal: 4 GB</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>J2EE and Web Services: 450 MB</li> <li>メタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal: 3.4 GB</li> <li>既存のメタデータ・リポジトリを使用する OracleAS Portal: 約 2 GB</li> </ul> <p>インストーラに表示されるディスク領域要件の数値は正しくない場合があります。ディスク領域要件は、ここに示したものが正しい数値です。</p> <p>空きディスク領域の容量を調べるには、次のように df コマンドを実行します。</p> <pre>prompt&gt; df -k dir</pre> <p>dir には、Oracle ホーム・ディレクトリを指定します。Oracle ホーム・ディレクトリがまだない場合は、その親ディレクトリを指定します。たとえば、Oracle Application Server を /opt/oracle/infra ディレクトリにインストールする場合、dir には、/opt/oracle または /opt/oracle/infra ディレクトリ・パスを指定します。</p>	なし



表 2-1 Linux システムのハードウェア要件（続き）

項目	最小要件	インストーラによるチェック
/tmp ディレクトリ の空き領域	400 MB  /tmp ディレクトリ内の空き領域の容量を調べるには、次のように df コマンドを実行します。  prompt> df -k /tmp  /tmp ディレクトリに十分な空き領域がない場合は、環境変数 TMP を設定することにより、別のディレクトリを指定できます。詳細は、2-20 ページの「 <a href="#">TMP および TMPDIR</a> 」を参照してください。	あり
スワップ領域	1.5 GB の使用可能なスワップ領域  使用可能なスワップ領域の容量を調べるには、次のコマンドを実行します。  # grep SwapTotal /proc/meminfo  スワップ領域を追加構成する方法は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	あり
モニター	256 色表示機能  モニターの表示機能を調べるには、次のコマンドを実行します。  prompt> /usr/X11R6/bin/xdpyinfo  depths 行を確認します。この行が 8 以上になっている必要があります。この値はピクセル当たりのビット数です。	あり

## 2.2 Linux のソフトウェア要件

使用している Linux のディストリビューションに応じて次のいずれかの項を参照し、ソフトウェア要件のチェックに関する情報を確認してください。

- [2.2.1 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件」](#)
- [2.2.2 項「Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件」](#)
- [2.2.3 項「SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件」](#)
- [2.2.4 項「SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件」](#)

Oracle では、Linux ベンダーによってサポートされないカスタマイズ・カーネルまたはカスタマイズ・モジュールはサポートされません。

Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、ネットワークに接続されていない Linux システムにインストールできます。また、Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、DHCP を使用するように構成されている Linux コンピュータにもインストールできます。ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスを使用するようにそのコンピュータを構成する必要があります。そして、自分自身のホスト名を静的 IP アドレスまたはループバック IP アドレスに解決するようにそのコンピュータを構成します。

### 2.2.1 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件

[表 2-2](#) に、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件を示します。その後、これらの要件、および Oracle Application Server をインストールするための追加要件をコンピュータが満たしているかどうかを確認する手順を示します。

**注意：** Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のオペレーティング・システム固有ソフトウェアでの動作が保証されています。サポートされているオペレーティング・システム固有ソフトウェア (JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど) の最新のリストは、次の *OracleMetaLink* を参照してください。

<http://metalink.oracle.com>

**表 2-2 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 システムのソフトウェア要件**

項目	説明
オペレーティング・システム	Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 Red Hat の詳細は、次の URL を参照してください。 <a href="http://www.redhat.com">http://www.redhat.com</a>
Red Hat Update	Update 5
Red Hat のパッチ	Red Hat によって承認されている Errata 49 カーネルまたはそれ以降の Errata パッチ たとえば、使用している Red Hat Linux のタイプに応じて、次のいずれかが適用されている必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-2.4.9-e.49</li> <li>■ kernel-smp-2.4.9-e.49</li> <li>■ kernel-enterprise-2.4.9-e.49</li> </ul>
ソフトウェア・パッケージ (これらのバージョン以降がインストールされていることを確認してください)	glibc-2.2.4-32.17 glibc-common-2.2.4-32.17 gcc-2.96-128.7.2 gcc-c++-2.96-128.7.2 pdksh-5.2.14-22 openmotif-2.1.30-12 sysstat-4.0.1-15.2.1as compat-glibc-6.2-2.1.3.2 compat-libstdc++-6.2-2.9.0.16 libstdc++-2.96-128.7.2 gnome-libs-1.2.13-16 binutils-2.11.90.0.8-12.4 make-3.79.1-8 db1-1.85-7 db3-3.3.11-5

システムがすべての要件を満たしているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/issue
Red Hat Linux Advanced Server release 2.1AS/¥m (Pensacola)
```

**注意：** 動作保証およびサポートされているのは、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 および 3.0 と、SUSE Linux Enterprise Server 8 および 9 です。サポートされている Linux オペレーティング・システムの最新のリストは、*OracleMetaLink* (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

3. Update 5 がインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/redhat-release
Red Hat Linux Advanced Server release 2.1AS/¥m (Pensacola Update 5)
```

Update 5 がインストールされている場合は、Errata 49 およびすべての必須ソフトウェア・パッケージもインストールされています。

4. インストールされている Linux カーネルのバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# uname -r
kernel-smp-2.4.9-e.49
```

この例では、バージョンは 2.4.9、Errata は 49 であることが示されています。必要に応じてカーネルをアップグレードする方法については、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。

**関連項目：** Red Hat のパッチの詳細は、<http://www.redhat.com> を参照してください。

5. その他のパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが見つからない場合は、次のコマンドでパッケージをダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする際は、適切なアーキテクチャ向けに最適化された rpm ファイルであることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}¥n"
```

次の例では、rpm ファイルの glibc は Intel アーキテクチャ向けに最適化されたものであることが示されています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}¥n"
i686
```

## 2.2.2 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

表 2-3 に、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件を示します。その後、これらの要件、および Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするための追加要件をコンピュータが満たしているかどうかを確認する手順を示します。

---

---

**注意：** Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のオペレーティング・システム固有ソフトウェアでの動作が保証されています。サポートされているオペレーティング・システム固有ソフトウェア (JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど) の最新のリストは、次の *OracleMetaLink* を参照してください。

<http://metalink.oracle.com>.

---

---

表 2-3 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

項目	説明
オペレーティング・システム	Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 Red Hat の詳細は、 <a href="http://www.redhat.com">http://www.redhat.com</a> を参照してください。
Red Hat Update	Update 3
Red Hat のパッチ	使用している Red Hat Linux のタイプに応じて、次のいずれかが適用されている必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-2.4.21-20.EL</li> <li>■ kernel-smp-2.4.21-20.EL</li> <li>■ kernel-hugemem-2.4.21-20.EL</li> </ul>
ソフトウェア・パッケージ (これらのバージョン以降がインストールされていることを確認してください)	glibc-2.3.2-95.27 glibc-common-2.3.2-95.27 binutils-2.14.90.0.4-35 compat-glibc-7.x-2.2.4.32.6 compat-libstdc++-7.3-2.96.128 compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128 gcc-3.2.3-42 gcc-c++-3.2.3-42 libstdc++-3.2.3-42 libstdc++-devel-3.2.3-42 openmotif21-2.1.30-8 pdksh-5.2.14-21 setarch-1.3-1 make-3.79.1-17 gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1 sysstat-4.0.7-4.EL3.3 compat-db-4.0.14-5 control-center-2.2.0.1-13.i386.rpm xscreensaver-4.10-8.i386.rpm <b>注意：</b> Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 では、openmotif 21-2.1.30-8 が openmotif 2.1.30-8 に相当するバージョンとなります。openmotif 21-2.1.30-8 パッケージは、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 のディストリビューションのディスク番号 3 から、次のようにしてインストールできます。 <pre>\$ rpm -ivh openmotif21-2.1.30-8</pre>

システムがすべての要件を満たしているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/issue
Red Hat Linux Advanced Server release 3 (Taroon)
```

---

**注意：** 動作保証およびサポートされているのは、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 および 3.0 と、SUSE Linux Enterprise Server 8 および 9 です。サポートされている Linux オペレーティング・システムの最新のリストは、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

---

3. Update 3 がインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/redhat-release
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 3)
```

4. その他のパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが見つからない場合は、次のコマンドでパッケージをダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする際は、適切なアーキテクチャ向けに最適化された rpm ファイルであることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例では、rpm ファイルの glibc は Intel アーキテクチャ向けに最適化されたものであることが示されています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"
i686
```

5. hugemem カーネルを使用している場合は、次のコマンドを実行してアーキテクチャを設定します。

```
prompt> setarch i386
```

## 2.2.3 SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件

表 2-4 に、SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件を示します。その後に、これらの要件、および Oracle Application Server をインストールするための追加要件をシステムが満たしているかどうかを確認する手順を示します。

---

**注意：** Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のオペレーティング・システム固有ソフトウェアでの動作が保証されています。サポートされているオペレーティング・システム固有ソフトウェア (JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど) の最新のリストは、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

---

表 2-4 SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件

項目	要件
オペレーティング・システム	<p>SUSE Linux Enterprise Server 8</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server の詳細は、次の URL を参照してください。  <a href="http://www.suse.com">http://www.suse.com</a></p> <p>SP3 は Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) が動作することが保証されています。</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server 8 SP3 では、次に示すバージョン以降のカーネルがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ k_smp-2.4.21-138</li> <li>■ k_deflt-2.4.21-138</li> <li>■ k_psmtp-2.4.21-138</li> </ul>
ソフトウェア・パッケージ (これらのバージョン以降がインストールされていることを確認してください)	<p>glibc-2.2.2-124</p> <p>gcc-3.2.2-38</p> <p>gcc-c++-3.2.2-38</p> <p>pdksh-5.2.14</p> <p>openmotif-2.1.30MLI4</p> <p>sysstat-4.0.3</p> <p>libstdc++-3.2.2</p> <p>make-3.79.1-407</p> <p>binutils-2.12.90.0.15-50</p> <p>compat-2003.1.10-0</p>

システムがすべての要件を満たしているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to SUSE Linux Enterprise Server 8 (i586) - Kernel ¥r (¥l)
```

---

**注意：** 動作保証およびサポートされているのは、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 および 3.0 と、SUSE Linux Enterprise Server 8 および 9 です。サポートされている Linux オペレーティング・システムの最新のリストは、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

---

3. サービス・パックのバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# uname -r
k_smp-2.4.21-138
```

4. その他のパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが見つからない場合は、次のコマンドでパッケージをダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする際は、適切なアーキテクチャ向けに最適化された rpm ファイルであることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例では、rpm ファイルの glibc は Intel アーキテクチャ向けに最適化されたものであることが示されています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"
i686
```

5. 次のようにして、Perl の実行可能ファイルへのシンボリック・リンクを作成します（まだ作成していない場合）。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. 次のようにして、fuser の実行可能ファイルへのシンボリック・リンクを作成します（まだ作成していない場合）。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. SUSE Linux Enterprise Server システムに orarun パッケージがインストールされている場合は、oracle ユーザーとして次の手順を実行し、環境を設定しなおします。

- a. 次のコマンドを実行します。

```
prompt> cd /etc/profile.d
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. \$HOME/.profile ファイルをテキスト・エディタで開き、次の行をコメント・アウトします。

```
. ./oracle
```

- c. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。

- d. oracle ユーザー・アカウントにログインし、変更内容を有効にします。

8. なんらかの Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、Java 環境変数 (JAVA\_HOME など) の設定を解除します。

---

**注意：** SUSE Linux Enterprise Server のディストリビューションに付属する Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

---

9. /etc/services ファイルを開き、次のポート範囲がコンピュータ上で使用可能であることを確認します。

- ポート 3060 ～ 3129: Oracle Internet Directory で必要
- ポート 3130 ～ 3199: Oracle Internet Directory (SSL) で必要
- ポート 1812 ～ 1829: Oracle Enterprise Manager (コンソール) で必要
- ポート 1830 ～ 1849: Oracle Enterprise Manager (エージェント) で必要
- ポート 1850 ～ 1869: Oracle Enterprise Manager (RMI) で必要

必要に応じて、/etc/services ファイルからエントリを削除し、コンピュータを再起動します。エントリの削除には、CD-ROM Disk 1 の utils/3167528/ ディレクトリまたは DVD の application\_server/utils/3167528/ ディレクトリにある Perl スクリプトを使用できます。このスクリプトは root ユーザーとして実行します。このスクリプトはパッチ 3167528 としても入手できます。このパッチは次の URL から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

これらのポートが使用できない場合は、インストールの際、そのポートに関連付けられる Configuration Assistant が起動に失敗します。

10. Network Information Service (NIS) を使用する場合は、次の手順を実行します。

- a. /etc/yp.conf ファイルに次の行が記述されていることを確認します。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b. /etc/nsswitch.conf ファイルに次の行が記述されていることを確認します。

```
hosts: files nis dns
```

11. /etc/hosts ファイルの localhost エントリが IPv4 エントリであることを確認します。localhost の IP エントリが IPv6 形式である場合、インストールは失敗します。次の例は IPv6 エントリです。

```
# special IPv6 addresses
::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

この例の /etc/hosts ファイルを修正するには、localhost エントリを次のようにコメント・アウトします。

```
# special IPv6 addresses
# ::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

エントリのコメント・アウトには、CD-ROM Disk 1 の utils/4015045/ ディレクトリまたは DVD の application\_server/utils/4015045/ ディレクトリにある Perl スクリプトを使用できます。このスクリプトは root ユーザーとして実行します。このスクリプトはパッチ 4015045 としても入手できます。このパッチは次の URL から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

## 2.2.4 SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件

表 2-5 に、SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件を示します。その後に、これらの要件、および Oracle Application Server をインストールするための追加要件をシステムが満たしているかどうかを確認する手順を示します。

---

---

**注意：** Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) は、次のオペレーティング・システム固有ソフトウェアでの動作が保証されています。サポートされているオペレーティング・システム固有ソフトウェア (JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど) の最新のリストは、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

---

---



表 2-5 SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件

項目	説明
オペレーティング・システム	<p>SUSE Linux Enterprise Server 9</p> <p>SUSE Linux Enterprise Server の詳細は、次の URL を参照してください。  <a href="http://www.suse.com">http://www.suse.com</a></p> <p>SUSE Linux Enterprise Server 9 では、次に示すバージョン以降のカーネルがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ kernel-bigsmpt-2.6.5-7.97</li> <li>■ kernel-default-2.6.5-7.97</li> <li>■ kernel-smp-2.6.5-7.97</li> </ul>
ソフトウェア・パッケージ (これらのバージョン以降がインストールされていることを確認してください)	<p>glibc-2.3.3-98.28  gcc-3.3.3-43.24  gcc-c++-3.3.3-43.24  libstdc++-3.3.3-43.24  libstdc++-devel-3.3.3-43.24  openmotif21-libs-2.1.30MLI4-119.1  pdksh-5.2.14-780.1  make-3.80-184.1  gnome-libs-1.4.1.7-671.1  gnome-libs-devel-1.4.1.7-671.1  sysstat-5.0.1-35.1  binutils-2.15.90.0.1-32.5  db1-1.85-85.1  compat-2004.7.1-1.2</p>

システムがすべての要件を満たしているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールされている Linux のディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to SUSE Linux Enterprise Server 9 (i686) - Kernel 2.6.5-7.97
```

---

**注意：** 動作保証およびサポートされているのは、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 および 3.0 と、SUSE Linux Enterprise Server 8 および 9 です。サポートされている Linux オペレーティング・システムの最新のリストは、OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

---

3. カーネルのバージョンを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
# uname -r
kernel-bigsmpt-2.6.5-7.97
```

4. その他のパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のようなコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが見つからない場合は、次のコマンドでパッケージをダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする際は、適切なアーキテクチャ向けに最適化された rpm ファイルであることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}%n"
```

次の例では、rpm ファイルの glibc は Intel アーキテクチャ向けに最適化されたものであることが示されています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}%n"
i686
```

5. 次のようにして、Perl の実行可能ファイルへのシンボリック・リンクを作成します（まだ作成していない場合）。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. 次のようにして、fuser の実行可能ファイルへのシンボリック・リンクを作成します（まだ作成していない場合）。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. SUSE Linux Enterprise Server システムに orarun パッケージがインストールされている場合は、oracle ユーザーとして次の手順を実行し、環境を設定しなします。

- a. 次のコマンドを実行します。

```
prompt> cd /etc/profile.d
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. \$HOME/.profile ファイルをテキスト・エディタで開き、次の行をコメント・アウトします。

```
. ~/.oracle
```

- c. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。

- d. oracle ユーザー・アカウントにログインし、変更内容を有効にします。

8. なんらかの Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、Java 環境変数 (JAVA\_HOME など) の設定を解除します。

---

---

**注意：** SUSE Linux Enterprise Server のディストリビューションに付属する Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

---

---

9. /etc/services ファイルを開き、次のポート範囲がシステム上で使用可能であることを確認します。

- ポート 3060 ～ 3129: Oracle Internet Directory で必要
- ポート 3130 ～ 3199: Oracle Internet Directory (SSL) で必要
- ポート 1812 ～ 1829: Oracle Enterprise Manager (コンソール) で必要
- ポート 1830 ～ 1849: Oracle Enterprise Manager (エージェント) で必要
- ポート 1850 ～ 1869: Oracle Enterprise Manager (RMI) で必要

必要に応じて、/etc/services ファイルからエントリを削除し、コンピュータを再起動します。エントリの削除には、CD-ROM Disk 1 の utils/3167528/ ディレクトリまたは DVD の application\_server/utils/3167528/ ディレクトリにある Perl スクリプトを使用できます。このスクリプトは root ユーザーとして実行します。このスクリプトはパッチ 3167528 としても入手できます。このパッチは次の URL から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

これらのポートが使用できない場合は、インストールの際、そのポートに関連付けられる Configuration Assistant が起動に失敗します。

10. Network Information Service (NIS) を使用する場合は、次の手順を実行します。

- a. /etc/yp.conf ファイルに次の行が記述されていることを確認します。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b. /etc/nsswitch.conf ファイルに次の行が記述されていることを確認します。

```
hosts: files nis dns
```

11. /etc/hosts ファイルの localhost エントリが IPv4 エントリであることを確認します。localhost の IP エントリが IPv6 形式である場合、インストールは失敗します。次の例は IPv6 エントリです。

```
# special IPv6 addresses
::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

この例の /etc/hosts ファイルを修正するには、localhost エントリを次のようにコメント・アウトします。

```
# special IPv6 addresses
# ::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

エントリのコメント・アウトには、CD-ROM Disk 1 の utils/4015045/ ディレクトリまたは DVD の application\_server/utils/4015045/ ディレクトリにある Perl スクリプトを使用できます。このスクリプトは root ユーザーとして実行します。このスクリプトはパッチ 4015045 としても入手できます。このパッチは次の URL から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

## 2.3 カーネル・パラメータとシェル制限の確認

次の項では、カーネル・パラメータの値とシェル制限の確認について説明します。

- 2.3.1 項「Linux でのカーネル・パラメータの構成」
- 2.3.2 項「oracle ユーザーに対するシェル制限」

---

### 注意：

- カーネル・パラメータの値を構成する必要があるのは、OracleAS Metadata Repository または OracleAS Web Cache を実行するコンピュータのみです。これらのコンポーネントをインストールする場合のみ、インストーラによってカーネル・パラメータの値がチェックされます。
  - 要件を満たさないカーネル・パラメータの値がある場合、インストーラによってエラー・メッセージが表示されます。インストールを続行するには、カーネル・パラメータを必須の値に変更する必要があります。
- 

### 2.3.1 Linux でのカーネル・パラメータの構成

OracleAS Metadata Repository または OracleAS Web Cache をインストールするコンピュータでは、カーネル・パラメータを最小値に設定する必要があります。また、ソフトウェアのパフォーマンスを向上させるために、シェル制限を設定する必要があります。

この項では、OracleAS Metadata Repository および OracleAS Web Cache 用のカーネル・パラメータ設定について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 2.3.1.1 項「OracleAS Web Cache 用のカーネル・パラメータ設定」
- 2.3.1.2 項「OracleAS Metadata Repository 用のカーネル・パラメータ設定」

### 2.3.1.1 OracleAS Web Cache 用のカーネル・パラメータ設定

この項は、OracleAS Web Cache をインストールする場合にのみ参照してください。

---

#### 注意：

- J2EE and Web Services 中間層をインストールする場合、OracleAS Web Cache コンポーネントはオプションです。
  - Portal and Wireless 中間層をインストールする場合、OracleAS Web Cache コンポーネントは必ずインストールされます。
- 

OracleAS Web Cache 用のカーネル・パラメータを確認または再設定するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行し、nofile カーネル・パラメータが 65536 以上の値に設定されているかどうかを確認します。

```
prompt> ulimit -Hn
```

2. 65536 未満の値が戻された場合は、テキスト・エディタで /etc/security/limits.conf ファイルを開き、次の行を追加します。

```
*          hard    nofile   65536
```

/etc/security/limits.conf ファイルは、root ユーザーでなければ編集できません。

3. コンピュータを再起動して、新しい値を有効にします。

### 2.3.1.2 OracleAS Metadata Repository 用のカーネル・パラメータ設定

次の表に示したカーネル・パラメータが、表中の推奨値以上の値に設定されているかどうかを確認します。その後の手順で、値を確認および設定する方法を示します。

---

**注意：** Linux のスレッド・モデルでは、スレッドごとにプロセスが 1 つ作成されます。Oracle Application Server は、高度にマルチスレッド化することでパフォーマンスを向上させています。このため、Linux カーネルで数百個のプロセスを処理することが必要となります。

---

パラメータ	値	ファイル
semmsl	256	/proc/sys/kernel/sem
semmns	32000	
semopm	100	
semmni	142	
shmall	2097152	/proc/sys/kernel/shmall
shmmax	2147483648	/proc/sys/kernel/shmmax
shmmni	4096	/proc/sys/kernel/shmmni
msgmax	8192	/proc/sys/kernel/msgmax
msgmnb	65535	/proc/sys/kernel/msgmnb
msgmni	2878	/proc/sys/kernel/msgmni

パラメータ	値	ファイル
file-max	131072	/proc/sys/fs/file-max
ip_local_port_range	10000 65000	/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range

**注意：**

- `semmsl` パラメータには、各 Oracle データベースの `PROCESSES` 初期化パラメータの合計値に、最大の値をもう 1 度加算し、さらにデータベース 1 つにつき 10 を加算した値を設定する必要があります。
- パラメータの現在の値が、この表に示した値よりも大きい場合、そのパラメータの値を変更する必要はありません。

これらのカーネル・パラメータに現在指定されている値を確認し、必要に応じて変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のようなコマンドを実行して、カーネル・パラメータの現在の値を表示します。

**注意：** 現在の値を書き留めて、変更する必要がある値を確認するようにしてください。

パラメータ	コマンド
<code>semmsl</code> 、 <code>semms</code> 、 <code>semopm</code> 、 <code>semnmi</code>	# /sbin/sysctl -a   grep sem セマフォ・パラメータの値がこの順序で表示されます。
<code>shmall</code> 、 <code>shmmax</code> 、 <code>shmmni</code>	# /sbin/sysctl -a   grep shm
<code>msgmax</code> 、 <code>msgmnb</code> 、 <code>msgmni</code>	# /sbin/sysctl -a   grep msg
<code>file-max</code>	# /sbin/sysctl -a   grep file-max
<code>ip_local_port_range</code>	# /sbin/sysctl -a   grep ip_local_port_range ポート番号の範囲が表示されます。

2. カーネル・パラメータの値が推奨値と異なっている場合は、次の手順を実行します。

- a. テキスト・エディタで `/etc/sysctl.conf` ファイルを作成するか既存のものを開き、次のような行を追加または編集します。

**注意：** 変更する必要があるカーネル・パラメータの行のみを含めるようにしてください。セマフォ・パラメータ (`kernel.sem`) については、4 つの値すべてを指定する必要があります。そのうち、現在の値が推奨値よりも大きいものについては、現在の値を指定してください。

```
kernel.shmall = 2097152
kernel.shmmax = 2147483648
kernel.shmmni = 4096
# semaphores: semmsl, semms, semopm, semnmi
kernel.sem = 256 32000 100 142
fs.file-max = 131072
net.ipv4.ip_local_port_range = 10000 65000
kernel.msgmni = 2878
kernel.msgmax = 8192
```

```
kernel.msgmnb = 65535
```

/etc/sysctl.conf ファイルで値を指定すると、コンピュータを再起動したときにそれらの行が永続化されます。

- b. 次のコマンドを実行して、カーネル・パラメータの現在の値を変更します。

```
# /sbin/sysctl -p
```

コマンドの出力に目を通し、値が正しいことを確認します。値が正しくない場合は、/etc/sysctl.conf ファイルを編集してから再度このコマンドを実行します。

- c. (SUSE Linux Enterprise Server のみ) 次のコマンドを実行して、再起動時に /etc/sysctl.conf ファイルが読み込まれるようにします。

```
# chkconfig boot.sysctl on
```

## 2.3.2 oracle ユーザーに対するシェル制限

Linux システム上で動作するソフトウェアのパフォーマンスを向上させるため、デフォルト・シェルに応じて、oracle ユーザーに対する次のシェル制限を強化する必要があります。次の表に各種シェルでの制限を示します。

Bourne または Bash シェルでの制限	Korn シェルでの制限	C または tcsh シェルでの制限	強い制限
nofile	nofile	descriptors	65536
noproc	processes	maxproc	16384

シェル制限を強化するには、次の手順を実行します。

1. /etc/security/limits.conf ファイルに次の行を追加します。

```
*      soft  nproc      2047
*      hard  nproc      16384
*      soft  nofile     2048
*      hard  nofile     65536
```

2. /etc/pam.d/login ファイルに次の行を追加します（この行がまだない場合）。

```
session    required    /lib/security/pam_limits.so
```

3. oracle ユーザーのデフォルト・シェルの起動ファイルに次の変更を加えます。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合は、/etc/profile ファイルに次の行を追加します。

```
if [ $USER = "oracle" ]; then
    if [ $SHELL = "/bin/ksh" ]; then
        ulimit -p 16384
        ulimit -n 65536
    else
        ulimit -u 16384 -n 65536
    fi
fi
```

- C または tcsh シェルの場合は、/etc/csh.login ファイルに次の行を追加します。

```
if ( $USER == "oracle" ) then
    limit maxproc 16384
    limit descriptors 65536
endif
```

## 2.4 オペレーティング・システム・グループ

次に該当する場合は、オペレーティング・システム・グループを作成する必要があります。

- Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを所有するためのグループを作成します。詳細は、[2.4.1 項「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」](#)を参照してください。
- OracleAS Metadata Repository を新しいデータベース（つまり、同じインストーラで作成されるデータベース）にインストールする場合は、データベース管理者のグループを作成します。詳細は、[2.4.2 項「データベース管理者用のグループの作成」](#)を参照してください。

---

**注意：** オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、またはシステム管理者に問い合せてください。

---

### 2.4.1 インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成

Oracle 製品がインストールされていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリを所有するためのグループを作成します。インストーラは、コンピュータにインストールされた Oracle 製品の履歴を取るためのファイルをインベントリ・ディレクトリに書き込みます。

このマニュアルでは、このオペレーティング・システム・グループを oinstall と呼びます。

インベントリ・ディレクトリ用に専用のグループを作成することで、様々なユーザーが Oracle 製品をそのコンピュータにインストールできるようになります。ユーザーは、インベントリ・ディレクトリに対する書き込み権限を保持する必要があります。この権限は、oinstall グループに属することで付与されます。

当該コンピュータへの Oracle 製品のインストールが初めてである場合は、インストーラによって、インベントリ・ディレクトリ用のグループ名を入力する画面と、インベントリ・ディレクトリの場所を入力する画面が表示されます。

インベントリ・ディレクトリのデフォルトの名前は、oraInventory です。

コンピュータ上にすでにインベントリ・ディレクトリがあるかどうかわからない場合は、`/etc/oraInst.loc` ファイルを確認します。このファイルには、インベントリ・ディレクトリの場所と、このディレクトリを所有しているグループが記述されます。このファイルが存在しない場合、そのコンピュータに Oracle 製品はインストールされていません。

### 2.4.2 データベース管理者用のグループの作成

この項は、インストーラによって作成される新しいデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合にのみ参照してください。

データベースがマウントされておらず、データベース認証が使用できない場合、データベースはオペレーティング・システム・グループを使用してユーザー権限を判断します。データベースは、これらのグループおよび権限を次のように認識します。

**表 2-6 OSDBA および OSOPER グループの権限**

グループ	説明
OSDBA	データベース管理者グループです。このグループに属するユーザーには、SYSDBA 権限が付与されます。
OSOPER	このグループに属するユーザーには、SYSOPER 権限が付与されます。これには、基本的なメンテナンスに必要な権限が含まれます。たとえば、データベースの起動および停止などのデータベース操作に必要な権限が含まれます。SYSOPER 権限は、SYSDBA 権限のサブセットです。

これらのグループ用のオペレーティング・システム・グループを作成する必要があります。

たとえば、dba というオペレーティング・システム・グループに SYSDBA 権限を保持させる場合は、次のようにします。

1. dba グループを作成します。
2. dba グループのメンバーとして、インストーラを実行します。

別のオペレーティング・システム・グループに SYSDBA 権限を保持させる場合、または SYSDBA 権限および SYSOPER 権限を別のグループに関連付ける場合は、dba グループに属していないユーザーとしてインストーラを実行します。

インストーラを実行しているユーザーが dba グループに属していない場合は、インストーラによって、データベース管理者権限を保持させるグループの名前を入力する画面が表示されます。この画面には、OSDBA グループ用と OSOPER グループ用（表 2-6 を参照）の 2 つのフィールドが表示されます。2 つのフィールドに、同じオペレーティング・システム・グループを入力することもできます。

## 2.5 オペレーティング・システム・ユーザー

Oracle 製品をインストールおよびアップグレードするためのオペレーティング・システム・ユーザーを作成します。このマニュアルでは、このユーザーを oracle ユーザーと呼びます。インストーラを実行する oracle ユーザーは、次のディレクトリに対する書込み権限を保持している必要があります。

- Oracle ホーム・ディレクトリ。インストールした製品のファイルが格納されます。
- インベントリ・ディレクトリ。インストーラが、すべての Oracle 製品用として使用します。

コンピュータに他の Oracle 製品がインストールされている場合は、このためのユーザーがすでに作成されている可能性があります。この場合は、Linux システム上の /etc/oraInst.loc ファイルを確認します。このファイルには、インベントリ・ディレクトリの場所と、このディレクトリを所有しているグループが記述されます。このファイルが存在しない場合、そのコンピュータに Oracle 製品はインストールされていません。

Oracle 製品をインストールするためのユーザーがまだ作成されていない場合は、次のプロパティを持つユーザーを作成します。

**表 2-7 インストーラを実行するオペレーティング・システム・ユーザーのプロパティ**

項目	説明
ログイン名	ユーザー名には任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、このユーザーを oracle ユーザーと呼びます。
グループ識別子	oracle ユーザーのプライマリ・グループは、oraInventory ディレクトリに対する書込み権限を保持している必要があります。このグループの詳細は、2.4.1 項「インベントリ・ディレクトリ用のグループの作成」を参照してください。  グループ名には任意の名前を使用できます。このマニュアルでは、oinstall という名前を使用します。
ホーム・ディレクトリ	oracle ユーザーのホーム・ディレクトリは、他のユーザーのホーム・ディレクトリと同じでもかまいません。
ログイン・シェル	デフォルトのログイン・シェルには、C、Bourne または Korn シェルを使用できます。

**注意：** oracle ユーザーは、Oracle 製品のインストールと実行以外には使用しないでください。oracle ユーザーで root を使用しないでください。



ローカルのオペレーティング・システム・ユーザーを作成するには、次の手順を実行します。

1. oracle ユーザーを作成するには、次のようなコマンドを実行します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba[,oper] oracle
```

コマンドの各要素の意味は次のとおりです。

- -g オプションではプライマリ・グループを指定します。プライマリ・グループは、Oracle インベントリ・グループ (oinstall など) でなければなりません。
- -G オプションではセカンダリ・グループを指定します。セカンダリ・グループには、必ず OSDBA グループを含める必要があり、必要に応じて OSOPER グループも含めます。dba または dba,oper のように指定します。

2. 次のようにして oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーが属しているグループを確認するには、そのユーザーの名前を指定して groups コマンドを実行します。次に例を示します。

```
prompt> groups oracle
```

オペレーティング・システム・ユーザーおよびグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、またはシステム管理者に問い合せてください。

## 2.6 環境変数

Oracle Application Server をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

**関連項目：** 環境変数の使用方法に関するヒントは、[2.6.1 項「環境変数に関するヒント」](#)を参照してください。

### ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID

これらの環境変数は設定しないでください。

### PATH、CLASSPATH および LD\_LIBRARY\_PATH

環境変数 PATH、CLASSPATH および LD\_LIBRARY\_PATH は、Oracle ホーム・ディレクトリを参照しないように編集します。

### DISPLAY

環境変数 DISPLAY は、インストーラを表示する X サーバーを指すように設定します。環境変数 DISPLAY の書式は次のとおりです。

```
hostname:display_number.screen_number
```

例 (C シェル) :

```
% setenv DISPLAY test.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ DISPLAY=test.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

次のように xclock プログラムを実行すると、表示をテストできます。

```
$ /usr/openwin/bin/xclock &
```

Oracle Application Server が X サーバーの実行を必要とするのは、インストール中のみです。オペレーティング・システムとともにインストールされるフレーム・バッファの X サーバーでは、インストールの間、ユーザーがログイン状態を維持し、フレーム・バッファを動作させておく

ことが必要となります。これを行いたくない場合は、X Virtual Frame Buffer (Xvfb) や Virtual Network Computing (VNC) などの仮想フレーム・バッファを使用する必要があります。

Xvfb などの仮想フレーム・バッファ・ソリューションの入手およびインストール方法は、次の URL の Oracle Technology Network で確認してください。OTN で「フレーム・バッファ (frame buffer)」を検索してください。

<http://www.oracle.com/technology>

## TNS\_ADMIN

この項では、次の 2 つの要件について説明します。

- 環境変数 TNS\_ADMIN は設定しないでください。設定されている場合、インストール中にエラーが発生する可能性があります。このようなエラーについては、[G.3.14 項「Database Configuration Assistant \(DBCA\) が失敗した」](#)を参照してください。
- /etc ディレクトリに tnsnames.ora ファイルを格納しないでください。

これらの要件は、複数の Oracle 製品の Net 構成ファイルの間で競合が発生しないようにするためのものです。

TNS\_ADMIN を設定する必要がある場合、または tnsnames.ora ファイルが /etc ディレクトリに格納されている場合は、Oracle Application Server をインストールする前に次の手順を実行します。

1. tnsnames.ora ファイルが /etc に格納されている場合は、このファイルを別のディレクトリに移動します。または、このファイルの名前を変更します。
2. 環境変数 TNS\_ADMIN の設定を解除します。

例 (C シェル) :

```
% unsetenv TNS_ADMIN
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ unset TNS_ADMIN
```

インストール終了後、新たに作成された tnsnames.ora ファイルと既存の tnsnames.ora ファイルの内容をマージします。

## TMP および TMPDIR

インストーラは、一時ディレクトリをスワップ領域として使用します。インストーラは、一時ディレクトリの場所を確認するために、環境変数 TMP および TMPDIR をチェックします。この環境変数が存在しない場合、インストーラは /tmp ディレクトリを使用します。

インストーラで /tmp 以外の一時ディレクトリを使用するには、環境変数 TMP および TMPDIR にかわりのディレクトリのフルパスを設定します。oracle ユーザーは、そのディレクトリに対する適切な権限を保持している必要があります。また、そのディレクトリは、[2.1 項「Linux システムのハードウェア要件」](#)に示した要件を満たしている必要があります。

例 (C シェル) :

```
% setenv TMP /tmp2
% setenv TMPDIR /tmp2
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
$ TMP=/tmp2; export TMP
$ TMPDIR=/tmp2; export TMPDIR
```

この環境変数を設定していないと、デフォルトのディレクトリの領域が十分でない場合に、環境変数が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。いずれの場合でも、インストールをやり直す必要があります。

**ORA\_NLS**

Oracle Application Server のインストールを正常に完了させるため、この環境変数の設定は解除してください。

例：

```
$ unset ORA_NLS
```

**LD\_BIND\_NOW**

Linux システムへの Oracle Application Server のインストールを正常に完了させるため、この環境変数の設定は解除してください。

例：

```
$ unset LD_BIND_NOW
```

## 2.6.1 環境変数に関するヒント

ここでは、環境変数の使用に関するヒントを示します。

- .profile ファイルで環境変数を設定しても、それらが読み込まれない場合があります。環境変数が正しい値に設定されているかどうかの確認は、インストーラを実行するシェルで行うようにしてください。
- 環境変数の値を確認するには、env コマンドを使用します。このコマンドを実行すると、現在定義されているすべての環境変数とその値が表示されます。

```
% env
```

- su コマンドを使用してユーザーを切り替えたら（root ユーザーから oracle ユーザーへの切替えなど）、新しいユーザーで環境変数を確認してください。これは、環境変数が新しいユーザーに渡されない場合があるためです。この現象は、- パラメータを付けて su を実行した場合（su - user）でも発生することがあります。

```
# /* root user */
# su - oracle
% env
```

## 2.7 /etc/hosts ファイル

/etc/hosts ファイルに記述された内容は以降の項で説明する項目に影響しますが、インストーラには、hosts ファイルを編集することなく必要な値を入力するための別の方法も用意されています。

- [2.7.1 項「デフォルトの Identity Management レルムの場所」](#)
- [2.7.2 項「Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名」](#)

### 2.7.1 デフォルトの Identity Management レルムの場所

インストーラによって hosts ファイルが読み取られ、デフォルトの Identity Management レルムの場所が作成されます。「Internet Directory のネームスペースの指定」画面にこの場所が表示されます。

hosts ファイルは次のような書式になっている必要があります。

```
ip_address    fully_qualified_hostname    short_hostname
```

例：

```
123.45.67.89    primaryHost.mydomain.com    primaryHost
```

この例では、デフォルトの Identity Management レルムの場所は、`dc=mydomain,dc=com` のようになります。

このファイルが別の書式を使用している場合は、インストーラは正しくない値を画面に表示します。たとえば、`hosts` ファイルに次の行が含まれていると想定します。

```
123.45.67.89 primaryHost primaryHost.mydomain.com <--- incorrect format
```

この場合、インストーラは、デフォルトの Identity Management レルムとして `dc=primaryHost,dc=com` を表示します。通常、これは、デフォルトの Identity Management レルムとして指定する値ではありません。

**ヒント：** `hosts` ファイルに別の書式を使用する必要がある場合は、必要な書式が使用できるようにファイルを編集し、インストールを実行してから、インストール後にファイルを元の書式に戻すことができます。

`hosts` ファイルを編集できない、または編集しない場合は、デフォルトの Identity Management レルムに設定する値を「Internet Directory のネームスペースの指定」画面の「カスタム・ネームスペース」フィールドに入力できます。

## 2.7.2 Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名

Oracle Application Server Single Sign-On をインストールする場合で、`hosts` ファイルにコンピュータのホスト名しか記述されておらず、ドメイン名が含まれていない場合は、ホスト名（ドメイン名なし）を使用した Single Sign-On Server へのサインオンのみが可能になります。

Single Sign-On Server への接続にドメイン名が必要になるようにするには、`hosts` ファイルを編集し、ドメイン名を入れます。このファイルを編集したくない場合は、インストーラのコマンドライン・パラメータ `OUI_HOSTNAME` を使用することで、`hosts` ファイルの値を上書きできます。次に例を示します。

```
prompt> mount_point/1012disk1/runInstaller OUI_HOSTNAME=myserver.mydomain.com
```

## 2.8 ネットワーク関連項目

通常、Oracle Application Server をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Application Server インストールが入るだけのローカル記憶域があり、表示モニターと CD-ROM ドライブまたは DVD ドライブがあります。

この項では、このような典型的なシナリオとは異なるコンピュータに Oracle Application Server をインストールする方法について説明します。次のような場合を扱います。

- 2.8.1 項「マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール」
- 2.8.2 項「CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール」
- 2.8.3 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」
- 2.8.4 項「リモート・コンピュータへのインストール」

### 2.8.1 マルチホーム（マルチ IP）コンピュータへのインストール

複数のネットワーク・カードを搭載したコンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合、インストーラは、`/etc/hosts` ファイルの先頭の名前を使用します。先頭の名前が使用したい名前でない場合は、次のいずれかを行います。

- 目的のホスト名が先頭にくるように `/etc/hosts` ファイルの行を並べ替えてからインストーラを実行し、インストール終了後にファイルを元の状態に戻します。
- `/etc/hosts` ファイルを編集したくない場合は、インストーラを起動する際に `OUI_HOSTNAME` パラメータを付けます。このパラメータに目的のホスト名を指定します。次に例を示します。

```
prompt> mount_point/1012disk1/runInstaller OUI_HOSTNAME=myserver.mydomain.com
```

## 2.8.2 CD-ROM または DVD からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server の CD-ROM または DVD からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールを行うこともできます。これは、ネットワーク上に Oracle Application Server インスタンスを多数インストールする場合、または Oracle Application Server をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合に便利です。

(リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからもインストールできます。

[2.8.3 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからのインストール」](#)を参照してください。)

ハード・ドライブからインストールする場合、インストーラにより、CD-ROM を交換するように要求されません。ファイルが正しい場所にあれば、検出されます ([図 2-1](#) を参照)。

### 領域の要件

ハード・ドライブに、CD-ROM の内容または DVD の application\_server ディレクトリの内容が入るだけの十分な空き領域があることを確認してください。各 CD-ROM は、約 650 MB です。つまり、3 枚の CD-ROM をコピーする場合、約 1.9 GB のディスク領域を必要とします。

DVD の application\_server ディレクトリは約 1.6 GB です。

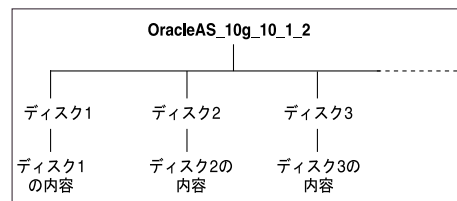
この領域を、Oracle Application Server のインストールに必要な領域 ([表 2-1](#) を参照) に加えます。

### CD-ROM の内容をコピーする方法

1. [図 2-1](#) に示すようなディレクトリ構造をハード・ドライブ上に作成します。

親ディレクトリ (この例では OracleAS\_10g\_10\_1\_2 になっていますが、任意の名前を付けることができます) を作成し、親ディレクトリの下に Disk1、Disk2 などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は DiskN にします。ここで N は CD-ROM の番号です。

図 2-1 CD-ROM をハード・ディスクにコピーするためのディレクトリ構造



2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

```
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk1/* /path/to/hard/drive/Disk1/
prompt> cp -pr /cdrom_mount_point/10.1.2disk2/* /path/to/hard/drive/Disk2/
... Repeat for each CD-ROM.
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Disk1 ディレクトリから runInstaller スクリプトを実行します。Oracle Application Server を実行するコンピュータから実行します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/Disk1/runInstaller
```

**DVD の application\_server ディレクトリの内容をコピーする方法**

コマンドラインを使用して application\_server ディレクトリの内容をコピーするには、次の手順を実行します。

1. (オプション) application\_server ディレクトリをコピーするディレクトリを作成します。

2. application\_server ディレクトリを DVD からハード・ディスクにコピーします。

```
prompt> cp -pr /dvd_mount_point/application_server /path/to/hard/drive
```

次の例では、/dvdrom が DVD ドライブ、/> application\_server がコピー先のディレクトリであると想定しています。

```
/> cp -rp /dvdrom/application_server /application_server
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Application Server を実行するコンピュータから runInstaller スクリプトを実行します。

```
prompt> /path/to/hard/drive/application_server/runInstaller
```

```
/> cd /application_server
```

```
/> ./runInstaller
```

## 2.8.3 リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD ドライブからのインストール

Oracle Application Server をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD ドライブがない場合は、対応ディスク・ドライブを搭載するコンピュータのハード・ドライブにこれらのディスクの内容をコピーし (項 2.8.2 を参照)、そのコンピュータからリモート・インストールを実行します (2.8.4 項「リモート・コンピュータへのインストール」を参照)。

## 2.8.4 リモート・コンピュータへのインストール

リモート・コンピュータ (remote\_computer) 上のインストーラを実行して、インストーラの画面をローカル・コンピュータ (local\_computer) のモニターに表示させることができます。Oracle Application Server はリモート・コンピュータにインストールされます。

リモート・インストールを行うには、次の手順を実行します。

1. local\_computer で remote\_computer を表示できるようにします。local\_computer のコンソールで次のコマンドを実行します。

```
local_computer> xhost +remote_computer
```

xhost が動作していない場合は、インストーラの起動時に「Failed to connect to server」、「Connection refused by server」または「Can't open display」のような Xlib エラーが表示されることがあります。

2. local\_computer から remote\_computer にリモート・ログインします (telnet または rlogin を使用)。oracle ユーザーとしてログインします (2.5 項「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照)。このユーザーで環境変数を正しく設定済であることを確認してください (2.6 項「環境変数」を参照)。

```
local_computer> rlogin -l oracle remote_computer.mydomain.com
```

```
- OR -
```

```
local_computer> telnet remote_computer.mydomain.com
```

3. remote\_computer の環境変数 DISPLAY を設定して、local\_computer を指すようにします。

例 (C シェル) :

```
remote_computer> setenv DISPLAY local_computer.mydomain.com:0.0
```

例 (Bourne または Korn シェル) :

```
remote_computer> DISPLAY=local_computer.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

4. インストーラを実行します。5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」を参照してください。

---

**注意：** PseudoColor カラー・モデルまたは PseudoColor ビジュアルをサポートする PC X エミュレータを使用してインストーラを実行することもできます。この場合は、PseudoColor ビジュアルを使用するように PC X エミュレータを設定してからインストーラを実行します。カラー・モデル または ビジュアル設定を変更する方法は、X エミュレータのドキュメントを参照してください。

---

## 2.8.5 NFS マウントの記憶域へのインストール

Oracle Application Server を NFS システムで実行するには、動作保証された NFS マウントの記憶域システムを使用する必要があります。

現在、Oracle Application Server は次の NFS システムでの動作が保証されています。

- Network Appliance (NetApp) ファイラー

NetApp システムは、少なくともリモート・インストール・ユーザーおよびリモート root ユーザーにエクスポートする必要があります。これには、次のように `exportfs` コマンドを実行します。

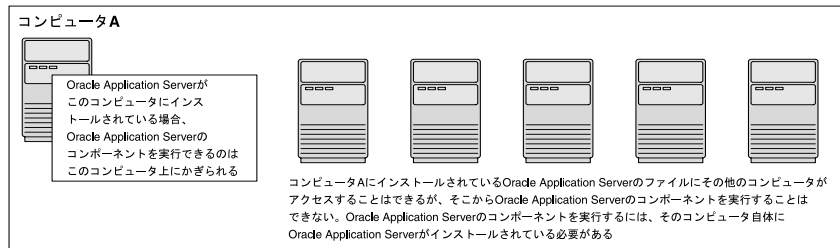
```
prompt> exportfs -i /vol/vol1
```

最新の動作保証リストは、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology>) を参照してください。

## 2.8.6 単一のインストールからの複数インスタンスの実行

Oracle Application Server のコンポーネントを実行できるのは、インストール先のコンピュータ上にかぎられます。NFS を介してファイルにアクセスできる場合でも、リモート・コンピュータ上のコンポーネントを実行することはできません。

図 2-2 Oracle Application Server を実行できるのはインストール先のコンピュータ上のみ



## 2.8.7 NIS および NIS+ のサポート

Oracle Application Server は、Network Information Service (NIS) および NIS+ 環境にインストールして実行できます。

## 2.8.8 DHCP ホストへのインストール (Linux のみ)

Oracle Application Server Standard Edition One を DHCP ネットワークにインストールする場合は、ループバック構成を使用する必要があります。Oracle Application Server Standard Edition One へのアクセスには、ローカルのブラウザを使用する必要があります。Oracle Application Server を DHCP ネットワークにインストールするには、次の手順を実行します。



1. 次のコマンドを実行して、DHCP サーバーから割り当てられている IP アドレスを確認します。

```
$ /sbin/ifconfig -a
```

この IP アドレスは、DHCP を使用するように構成されたインタフェースに関連付けられています。

2. 次のようにして、ホスト名をループバック IP アドレスに解決するようにホストを構成します。

- a. /etc/hosts ファイルに次のエントリを記述して、ホスト名をループバック IP アドレスに解決するようにホストを構成します。

```
127.0.0.1 hostname.domainname hostname
127.0.0.1 localhost.localdomain localhost
```

- b. 次のコマンドを実行して、ホスト名がループバック IP アドレスに解決されるかどうかを確認します。

```
$ /bin/ping hostname.domainname
```

3. 手順 2 で使用したホスト名を使用して、このマニュアルで説明されているとおりに Oracle Application Server をインストールします。

## 2.9 インストーラにより実行される前提条件チェック

表 2-8 に、インストーラにより実行される前提条件チェックを示します。

表 2-8 インストーラにより実行される前提条件チェック

項目	説明
プロセッサ	プロセッサ速度の要件については、2.1 項「Linux システムのハードウェア要件」を参照してください。
オペレーティング・システムのバージョン	サポートされているバージョンについては、2.2 項「Linux のソフトウェア要件」を参照してください。
オペレーティング・システムのパッチ	必須のパッチのリストは、2.2 項「Linux のソフトウェア要件」を参照してください。
オペレーティング・システムのカーネル・パラメータ	必須のカーネル・パラメータのリストは、2.3 項「カーネル・パラメータとシェル制限の確認」を参照してください。
メモリー	推奨値については、2.1 項を参照してください。
スワップ領域	推奨値については、2.1 項を参照してください。
TMP 領域	推奨値については、2.1 項を参照してください。
インスタンス名	インストーラにより、Oracle Application Server のインストール先のコンピュータに同じ名前のインスタンスがすでに存在しないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリ名	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリ名に空白が含まれていないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリへのパス	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリへのパスが 127 文字を超えていないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリにインストールの妨げとなるファイルがないことがチェックされます。



表 2-8 インストーラにより実行される前提条件チェック（続き）

項目	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	<p>中間層を拡張する場合（3.2 項「J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加」を参照）、または Oracle Developer Suite 10g リリース 2（10.1.2）が含まれる Oracle ホームに中間層をインストールする場合（1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照）を除き、Oracle Application Server は新しいディレクトリにインストールする必要があります。インストールが許可されないシナリオの一例を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 8.0、8i、9.0.1 または 9.2 データベースの Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle Management Service の Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle Collaboration Suite の Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle HTTP Server のスタンドアロン Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ OracleAS Web Cache のスタンドアロン Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle9i Developer Suite 9.0.2 の Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle Application Server Containers for J2EE のスタンドアロン Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle9iAS 1.0.2.2 の Oracle ホームへの Oracle Application Server（すべてのタイプ）のインストール</li> <li>■ Oracle Application Server Infrastructure リリース 2（9.0.2）または 10g リリース 2（10.1.2）の Oracle ホームへの Oracle Application Server Middle Tier のインストール</li> <li>■ Oracle9iAS リリース 2（9.0.2 または 9.0.3）Middle Tier の Oracle ホームへの Oracle Application Server Middle Tier のインストール</li> <li>■ OracleAS Infrastructure リリース 2（9.0.2）または 10g リリース 2（10.1.2）の Oracle ホームへの OracleAS Developer Kits のインストール</li> <li>■ Oracle9iAS Middle Tier リリース 2（9.0.2 または 9.0.3）の Oracle ホームへの OracleAS Developer Kits のインストール</li> <li>■ Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g リリース 2（10.1.2）の Oracle ホームへの OracleAS Developer Kits のインストール</li> <li>■ Oracle9iAS リリース 2（9.0.2）（すべてのタイプ）の Oracle ホームへの OracleAS Infrastructure のインストール</li> <li>■ Oracle Application Server 10g リリース 2（10.1.2）Middle Tier または OracleAS Developer Kits の Oracle ホームへの OracleAS Infrastructure のインストール</li> <li>■ Oracle Developer Suite 9.0.2 または 10g リリース 2（10.1.2）の Oracle ホームへの OracleAS Infrastructure のインストール</li> </ul>
ポート 1521	<p>ポート 1521 が、すべてのリリースのデータベース・リスナーを含む他のアプリケーションによって使用されている場合、インストーラにより警告が表示されます。ポート 1521 を使用しているアプリケーションを停止してから、警告ダイアログ・ボックスの「再試行」をクリックします。</p> <p>データベース・リスナーがポート 1521 を使用している場合は、それをメタデータ・リポジトリ・データベースに使用できる可能性があります。詳細は、1.4.8 項「ポート 1521 がすでに使用されている場合」を参照してください。</p> <p>他のアプリケーションがポート 1521 を使用している場合、そのアプリケーションを停止するか、別のポートを使用するように構成する必要があります。または、データベース・リスナーが 1521 以外のポートを使用するように変更することもできますが、これはインストール終了後に行います。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>

表 2-8 インストーラにより実行される前提条件チェック（続き）

項目	説明
静的ポートの競合	指定されている場合、インストーラにより、staticports.ini ファイルに一覧表示されているポートがチェックされます。 <a href="#">1.4.7.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」</a> を参照してください。
モニター	インストーラにより、モニターが 256 色以上を表示できるように構成されていることがチェックされます。
表示の権限	環境変数 DISPLAY で指定されたモニターへの表示権限をユーザーが保持していることがインストーラによりチェックされます。
環境変数 DISPLAY	インストーラにより、環境変数 DISPLAY が設定されていることがチェックされます。
環境変数 TNS_ADMIN	環境変数 TNS_ADMIN は設定しないでください。 tnsnames.ora ファイルを /etc ディレクトリに格納することもできません。
環境変数 DBCA_RAW_CONFIG	OracleAS Infrastructure をデータベースまたは Oracle Application Server Active Failover Cluster 環境にインストールする場合は、RAW パーティションの位置を記述したファイルを指すようにこの環境変数を設定する必要があります。
クラスタ・ファイル・システム	インストーラにより、Oracle Application Server のインストール先がクラスタ・ファイル・システム（CFS）でないことがチェックされます。
Oracle Enterprise Manager 関連のディレクトリが書込み可能かどうか	このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Application Server を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ行われます。インストーラを実行しているオペレーティング・システム・ユーザーが次のディレクトリに対する書込み権限を保持していることがインストーラによりチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ \$ORACLE_HOME/sysman/emd</li> <li>■ \$ORACLE_HOME/sysman/config</li> <li>■ \$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config</li> </ul>
Oracle Enterprise Manager 関連のファイルが存在しているかどうか	このチェックは、中間層を拡張する場合、または Oracle Application Server を同じ Oracle ホームに再インストールする場合にのみ行われます。インストーラにより、次のファイルが存在していることがチェックされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ \$ORACLE_HOME/sysman/config/iasadmin.properties</li> <li>■ \$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config/consoleConfig.xml</li> </ul>
Linux システムのカーネルのチェック	このチェックは、インストール先が Linux である場合にのみ行われます。カーネルのバージョンに、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 の場合は 2.4.9-e.49 以降、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 の場合は 2.4.21-20.EL、SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合は 2.4.21、SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合は 2.6.5-7.97 という文字列が含まれていることがインストーラにより確認されます。
Linux の glibc バージョンのチェック	このチェックは、インストール先が Linux である場合にのみ行われます。glibc のバージョンが、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 の場合は glibc-2.2.4-32.17 以降、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 の場合は glibc-2.3.2-95.27 以降、SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合は glibc-2.2.2-124 以降、SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合は glibc-2.3.3-98.28 以降であることがインストーラにより確認されます。
Linux のパッケージのチェック	このチェックは、インストール先が Linux である場合にのみ行われます。インストーラにより、必須のパッケージがインストールされていることが確認されます。たとえば、gcc、sysstat および openmotif の各パッケージについて、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 の場合は表 2-2、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 の場合は表 2-3、SUSE Linux Enterprise Server 8 の場合は表 2-4、SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合は表 2-5 で指定されていると通りのものがインストールされているかどうかチェックされます。

---

## J2EE and Web Services のインストール

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle J2EE and Web Services をインストールする方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 3.1 項「J2EE and Web Services コンポーネント」
- 3.2 項「J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加」
- 3.3 項「J2EE and Web Services のインストール」
- 3.4 項「次の作業」

### 3.1 J2EE and Web Services コンポーネント

インストール・タイプが Oracle J2EE and Web Services の場合、次のコンポーネントがインストールされます。

- Oracle HTTP Server: Oracle Application Server の Web サーバー・コンポーネントです。
- Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) : Java アプリケーション開発用の完全な Java 2 Enterprise Edition (J2EE) 環境を提供するコンポーネントです。
- Oracle Enterprise Manager Application Server Control: Oracle Application Server の Web ベースの管理に使用するコンポーネントです。

### 3.2 J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加

Oracle Application Server Standard Edition One のインストールでは、J2EE and Web Services のインストール後に OracleAS Portal およびメタデータ・リポジトリを追加することはできません。インストールの実行前に、適切なインストール・タイプを判断する必要があります。

このような場合は、まず既存の J2EE and Web Services インストールを完全に削除してから、OracleAS Portal のいずれかのインストール・タイプを選択して新しいインストールを実行する必要があります。

### 3.3 J2EE and Web Services のインストール

この項では、J2EE and Web Services のインストール手順について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 3.3.1 項「インストール前の作業」
- 3.3.2 項「基本インストールの概要」
- 3.3.3 項「拡張インストールの概要」

### 3.3.1 インストール前の作業

Oracle Application Server Standard Edition One の J2EE and Web Services のインストールを開始する前に、[第 1 章「製品およびインストールの概要」](#)と[第 2 章「システムおよびインストール要件」](#)の両方を読んでおく必要があります。これらの章には、インストールの開始前に理解しておく必要のある重要な情報が記載されています。これによって、インストール中に発生する可能性のある問題を回避することができます。

### 3.3.2 基本インストールの概要

[表 3-1](#) に、J2EE and Web Services の基本インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、[表 1-2](#) を参照）。

**表 3-1 J2EE and Web Services の基本インストール**

	画面	操作
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、 <a href="#">5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」</a> を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	Oracle ホームを指定して、「 <b>基本インストール</b> 」をクリックし、ドロップダウン・リストから「 <b>Oracle J2EE と Web サービス</b> 」を選択します。 インスタンス名と ias_admin パスワードを入力します。 詳細は次の各項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <a href="#">5.3 項「「ようこそ」画面」</a></li> <li>■ <a href="#">1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」</a></li> <li>■ <a href="#">1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」</a></li> <li>■ <a href="#">1.4.4 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」</a></li> </ul>
3	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、 <a href="#">5.14 項「インストール（進捗状況）」</a> を参照してください。
4	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。 詳細は、 <a href="#">5.15 項「Configuration Assistant」</a> を参照してください。
5	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 詳細は、 <a href="#">5.16 項「インストールの終了」</a> を参照してください。

### 3.3.3 拡張インストールの概要

[表 3-2](#) に、J2EE and Web Services の拡張インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、[表 1-2](#) を参照）。

**表 3-2 J2EE and Web Services の拡張インストール**

	画面	操作
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、 <a href="#">5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」</a> を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	「 <b>拡張インストール</b> 」をクリックし、続けて「 <b>次へ</b> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.3 項「「ようこそ」画面」</a> を参照してください。
3	インストールする製品の選択	「 <b>Oracle J2EE と Web サービス</b> 」を選択して、「 <b>次へ</b> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.4 項「インストールする製品の選択」</a> を参照してください。

表 3-2 J2EE and Web Services の拡張インストール（続き）

	画面	操作
4	言語の選択	インストールする追加の言語を選択して、「次へ」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.5 項「言語の選択」</a> を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定	ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 詳細は、 <a href="#">5.6 項「ポート構成オプションの指定」</a> を参照してください。
6	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	Oracle Application Server インスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。 詳細は、 <a href="#">5.7 項「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」</a> を参照してください。
7	サマリー	画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。 詳細は、 <a href="#">5.13 項「サマリー」</a> を参照してください。
8	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、 <a href="#">5.14 項「インストール（進捗状況）」</a> を参照してください。
9	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。 詳細は、 <a href="#">5.15 項「Configuration Assistant」</a> を参照してください。
10	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 詳細は、 <a href="#">5.16 項「インストールの終了」</a> を参照してください。

## 3.4 次の作業

インストール完了後に行うべき各作業についての参照先は次のとおりです。

- 実行する必要があるインストール後の作業とその手順については、[第 6 章](#)を参照してください。
- インストールが正常に完了した後、Oracle Application Server Standard Edition One を構成および管理する方法については、[第 II 部](#)を参照してください。

[第 II 部](#)に記載された内容の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。



---

## OracleAS Portal のインストール

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の OracleAS Portal サービスをインストールする方法について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 4.1 項「OracleAS Portal コンポーネント」
- 4.2 項「Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用」
- 4.3 項「OracleAS Portal のインストール」
- 4.4 項「次の作業」

### 4.1 OracleAS Portal コンポーネント

OracleAS Portal をインストールすると、J2EE and Web Services のすべてのコンポーネントに加えて、次のコンポーネントがインストールされます。

- Oracle Instant Portal (Q42)  
セキュアな公開およびコンテンツ共有のポータルサイトの公開とカスタマイズに使用するコンポーネントです。
- Identity Management  
ユーザーの作成、定義および管理に使用するコンポーネントです。
- Metadata Repository  
Oracle Application Server Standard Edition One のデータベースとして機能するコンポーネントです。製品に含まれる Metadata Repository をインストールすることも、既存のデータベースを Metadata Repository として使用することもできます。
- OracleAS Web Cache  
Oracle Application Server Standard Edition One で実行する Web サイトのパフォーマンスおよび可用性を向上させるために、リバース・プロキシ・サーバーとして使用するコンポーネントです。

---

**注意：** J2EE and Web Services のコンポーネントの詳細は、[3.1 項「J2EE and Web Services コンポーネント」](#)を参照してください。

---

### 4.2 Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用

OracleAS Metadata Repository を新規データベースまたは既存のデータベースにインストールできます。

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、[第 III 部「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール」](#)を参照してください。

### 4.3 OracleAS Portal のインストール

この項では、OracleAS Portal のインストール手順について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 4.3.1 項「インストール前の作業」
- 4.3.2 項「基本インストールの概要」
- 4.3.3 項「新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要」
- 4.3.4 項「既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要」

#### 4.3.1 インストール前の作業

Oracle Application Server Standard Edition One の Oracle Instant Portal のインストールを開始する前に、第 1 章「製品およびインストールの概要」と第 2 章「システムおよびインストール要件」の両方を読んでおく必要があります。これらの章には、インストールの開始前に理解しておく必要のある重要な情報が記載されています。これによって、インストール中に発生する可能性のある問題を回避することができます。

#### 4.3.2 基本インストールの概要

表 4-1 に、Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールに必要な手順の概要を示します。OracleAS Portal の 2 つのインストール・タイプのうち、基本インストールでは新しい Metadata Repository のみをインストールできます。Metadata Repository として既存のデータベースを使用する場合は、拡張インストールを実行する必要があります。拡張インストールの手順については、4.3.4 項「既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要」を参照してください。基本インストールの手順については、表 1-2 を参照してください。

表 4-1 OracleAS Portal の基本インストール

手順	画面名	説明
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。  詳細は、5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	Oracle ホームを指定して、「基本インストール」をクリックし、ドロップダウン・リストから「ID 管理とリポジトリを使用する Oracle Portal」を選択します。  インスタンス名と ias_admin パスワード、およびグローバル・データベース名とデータベース・パスワードを入力します。  詳細は次の各項を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>■ 5.3 項「「ようこそ」画面」</li><li>■ 1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」</li><li>■ 1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」</li><li>■ 1.4.4 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」</li><li>■ 1.4.5 項「グローバル・データベース名とそのパスワードの制限」</li></ul>



表 4-1 OracleAS Portal の基本インストール（続き）

手順	画面名	説明
3	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、 <a href="#">5.14 項「インストール（進捗状況）」</a> を参照してください。
4	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。 詳細は、 <a href="#">5.15 項「Configuration Assistant」</a> を参照してください。
5	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 詳細は、 <a href="#">5.16 項「インストールの終了」</a> を参照してください。

### 4.3.3 新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要

[表 4-2](#) に、新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールに必要な手順の概要を示します。

表 4-2 OracleAS Portal の拡張インストール

画面	操作
1	なし。 Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、 <a href="#">5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」</a> を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ 「 <a href="#">拡張インストール</a> 」をクリックし、続けて「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.3 項「「ようこそ」画面</a> 」を参照してください。
3	インストールする製品の選択 インストールする OracleAS Portal 製品を選択して、「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.4 項「インストールする製品の選択」</a> を参照してください。
4	言語の選択 インストールする追加の言語を選択して、「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.5 項「言語の選択」</a> を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定 ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 詳細は、 <a href="#">5.6 項「ポート構成オプションの指定」</a> を参照してください。
6	Internet Directory のネームスペースの指定 ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定する識別名（DN）を指定します。 詳細は、 <a href="#">5.8 項「Internet Directory のネームスペースの指定」</a> を参照してください。
7	データベースの識別の指定 データベース名、キャラクタ・セットおよびファイルの場所を指定します。 詳細は、 <a href="#">5.9 項「データベース構成オプションの指定」</a> を参照してください。
8	データベース・スキーマのパスワードの指定 権限付きデータベース・スキーマ（SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP）のパスワードを設定します。各スキーマに対して異なるパスワードを設定することも、すべてのスキーマに同じパスワードを設定することもできます。 詳細は、 <a href="#">5.10 項「データベース・スキーマのパスワードの指定」</a> を参照してください。

表 4-2 OracleAS Portal の拡張インストール (続き)

画面	操作
9	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 Oracle Application Server および OracleAS Portal のインスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。 詳細は、 <a href="#">5.11 項「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」</a> を参照してください。
10	サマリー 画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。 詳細は、 <a href="#">5.13 項「サマリー」</a> を参照してください。
11	インストール なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、 <a href="#">5.14 項「インストール (進捗状況)」</a> を参照してください。
12	Configuration Assistant なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。 詳細は、 <a href="#">5.15 項「Configuration Assistant」</a> を参照してください。
13	インストールの終了 なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 詳細は、 <a href="#">5.16 項「インストールの終了」</a> を参照してください。

#### 4.3.4 既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要

[表 4-3](#) に、既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールに必要な手順の概要を示します。

表 4-3 OracleAS Portal の拡張インストール

画面	操作
1	なし。 Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、 <a href="#">5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」</a> を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ 「 <a href="#">拡張インストール</a> 」をクリックし、続けて「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.3 項「「ようこそ」画面」</a> を参照してください。
3	インストールする製品の選択 インストールする OracleAS Portal 製品を選択して、「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.4 項「インストールする製品の選択」</a> を参照してください。
4	言語の選択 インストールする追加の言語を選択して、「 <a href="#">次へ</a> 」をクリックします。 詳細は、 <a href="#">5.5 項「言語の選択」</a> を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定 ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 詳細は、 <a href="#">5.6 項「ポート構成オプションの指定」</a> を参照してください。
6	リポジトリの指定 既存の Metadata Repository が含まれているデータベースの情報を指定します。 詳細は、 <a href="#">5.12 項「リポジトリの指定」</a> を参照してください。
7	Internet Directory のネームスペースの指定 ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定する識別名 (DN) を指定します。 詳細は、 <a href="#">5.8 項「Internet Directory のネームスペースの指定」</a> を参照してください。

表 4-3 OracleAS Portal の拡張インストール（続き）

画面	操作
8	<p>インスタンス名と ias_admin パスワードの指定</p> <p>Oracle Application Server および OracleAS Portal のインスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。</p> <p>詳細は、<a href="#">5.11 項「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」</a>を参照してください。</p>
9	<p>サマリー</p> <p>画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。</p> <p>詳細は、<a href="#">5.13 項「サマリー」</a>を参照してください。</p>
10	<p>インストール</p> <p>なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。</p> <p>詳細は、<a href="#">5.14 項「インストール（進捗状況）」</a>を参照してください。</p>
11	<p>Configuration Assistant</p> <p>なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。</p> <p>詳細は、<a href="#">5.15 項「Configuration Assistant」</a>を参照してください。</p>
12	<p>インストールの終了</p> <p>なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。</p> <p>詳細は、<a href="#">5.16 項「インストールの終了」</a>を参照してください。</p>

## 4.4 次の作業

インストールの完了後、Oracle Universal Installer を終了すると、ブラウザが起動して「ようこそ」ページが表示されます。「ようこそ」ページの詳細は、[7.2 項「Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用法」](#)を参照してください。

これ以降の作業は次のとおりです。

- Oracle Instant Portal を使用する方法とその手順については、『Oracle Instant Portal スタート・ガイド』を参照してください。  
実行する必要があるインストール後の作業とその手順については、[第 6 章](#)を参照してください。
- インストールが正常に完了した後、Oracle Application Server Standard Edition One を構成および管理する方法については、[第 II 部](#)を参照してください。  
[第 II 部](#)に記載された内容の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。



---

## インストール画面

この章では、Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) の Oracle Universal Installer (OUI) の様々なインストール画面について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- 5.1 項「CD-ROM または DVD のマウント・ポイントの設定」
- 5.2 項「Oracle Universal Installer の起動」
- 5.3 項「「ようこそ」画面」
- 5.4 項「インストールする製品の選択」
- 5.5 項「言語の選択」
- 5.6 項「ポート構成オプションの指定」
- 5.7 項「インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定」
- 5.8 項「Internet Directory のネームスペースの指定」
- 5.9 項「データベース構成オプションの指定」
- 5.10 項「データベース・スキーマのパスワードの指定」
- 5.11 項「インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定」
- 5.12 項「リポジトリの指定」
- 5.13 項「サマリー」
- 5.14 項「インストール (進捗状況)」
- 5.15 項「Configuration Assistant」
- 5.16 項「インストールの終了」

### 5.1 CD-ROM または DVD のマウント・ポイントの設定

Oracle Application Server の CD-ROM には、RockRidge フォーマットが使用されます。また DVD には、DVD フォーマットが使用されます。ディスクのマウントやアンマウントを手動で行うには、root 権限が必要です。ディスクのアンマウントは、ドライブからディスクを取り出す前に行ってください。

インストール・ディスクをマウントする場合は、root ユーザーとしてログインした後、次の項で説明する手順に従ってください。

#### Linux におけるインストール・ディスクのマウント

ほとんどの Linux システムでは、ディスク・ドライブに挿入されたディスクは自動的にマウントされます。インストール・ディスクをマウントする手順は次のとおりです。

1. Oracle Application Server Disk 1 をディスク・ドライブに挿入します。
2. ディスクが自動的にマウントされたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

- Red Hat の場合：  

```
# ls /mnt/cdrom
```
  - SUSE Linux Enterprise Server の場合：  

```
# ls /media/cdrom
```
3. 手順 2 のコマンドを実行してもディスクの内容が表示されない場合は、次のコマンドを入力します。
- Red Hat の場合：  

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```
  - SUSE Linux Enterprise Server の場合：  

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

## 5.2 Oracle Universal Installer の起動

Oracle Universal Installer を起動する前に、インストールを実行するコンピュータ上に `/etc/oratab` ファイルが存在することを確認します。`oratab` ファイルが存在しない場合は、[5.2.1 項「oratab ファイルが存在しない場合」](#)を参照してください。

時として、`/etc/oratab` ファイルに書き込み権限がない場合があります。この場合は、[5.2.2 項「oratab ファイルに書き込み権限がない場合」](#)を参照してください。

Oracle Universal Installer を起動するには、次の手順を実行します。

1. CD-ROM または DVD が自動的にマウントされていない場合は、マウント・ポイントを手動で設定する必要があります。詳細は、[5.1 項「CD-ROM または DVD のマウント・ポイントの設定」](#)を参照してください。
2. `oracle` ユーザーとしてログインします。
3. CD-ROM ユーザーの場合：Oracle Application Server Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。  
DVD ユーザーの場合：Oracle Application Server DVD を DVD ドライブに挿入します。
4. 次のコマンドを使用して Oracle Universal Installer を実行します。

---

---

### 注意：

- Oracle Universal Installer を起動する際は、`root` ユーザーとしてログインしていないことを確認してください。`root` ユーザーは、Oracle Application Server の管理権限を持つ唯一のユーザーです。
  - `mount_point` ディレクトリ内部ではインストールを開始しないでください。このディレクトリ内部でインストールを開始すると、インストール・ディスクが取り出せなくなることがあります。`cd` コマンドを実行すると、現在のディレクトリからホーム・ディレクトリへ移動できます。
  - Oracle Universal Installer は、Linux システム上で使用する場合、韓国語フォントおよび中国語フォントを表示することができません。これは、これらのフォントが JDK 1.4.2\_02 でサポートされていないためです。
- 
- 

CD-ROM ユーザーの場合：

```
prompt> cd  
prompt> mount_point/runInstaller
```

DVD ユーザーの場合：

```
prompt> cd
prompt> mount_point/application_server/runInstaller
```

### 5.2.1 oratab ファイルが存在しない場合

コンピュータ上に oratab ファイルが存在しない場合、runInstaller スクリプトを実行すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
Could not find file /etc/oratab, User would need to run "$TMP/rootpreoratab_mm-dd-yyyy_hh:mm:ss.sh" as root.....
```

このファイルを root ユーザーとして実行する手順は次のとおりです。

1. root ユーザーに変更します。
2. \$TMP/rootpreoratab\_mm-dd-yyyy\_hh:mm:ss.sh を実行します。
3. セッションを終了します。
4. インストールを実行するためのユーザーに再度変更します。
5. 前項の手順 4 の方法でインストーラを実行します。

### 5.2.2 oratab ファイルに書き込み権限がない場合

oratab ファイルに書き込み権限がない場合は、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
/etc/oratab does not have write permissions for current user.Please run chmod 777 /etc/oratab as root. After giving permissions, re-run runInstaller
```

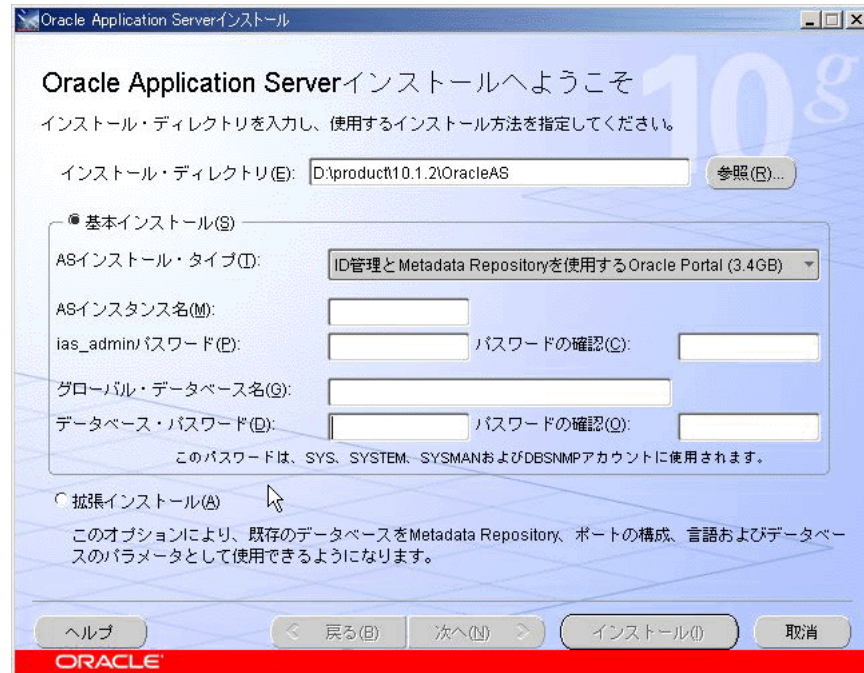
/etc/oratab ファイルの権限を変更する手順は次のとおりです。

1. root ユーザーに変更します。
2. 次のコマンドを実行します。  

```
chmod 777 /etc/oratab
```
3. インストールを実行するためのユーザーに再度変更します。
4. 前々項の手順 4 の方法でインストーラを実行します。

## 5.3 「ようこそ」画面

この画面は、インストール・プロセスの最初の画面です。ここでは、インストール・ディレクトリ（または Oracle ホーム・ディレクトリ）を指定する他、基本インストールまたは拡張インストールのどちらを実行するかを指定する必要があります。



### インストール・ディレクトリの指定

インストール・ディレクトリまたは Oracle ホームのフルパスを指定します。ここで指定したディレクトリに、ソフトウェアがインストールされます。Oracle ホームの詳細は、[1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」](#) および [1.4.2.1 項「Oracle ホームの名前の指定」](#) を参照してください。

### 基本インストールまたは拡張インストールの選択

基本インストールと拡張インストールのどちらを実行するかを選択します。

基本インストールを選択する場合、この画面で情報を入力するように求められます。すべてのコンポーネントに対してデフォルト値を使用します。基本インストールを実行する場合は、「**基本インストール**」をクリックします。インストールするサービスに応じて、[5.3.1 項「J2EE and Web Services の基本インストールの実行」](#) または [5.3.2 項「Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールの実行」](#) に進んでください。

拡張インストールでは、高度なカスタマイズと柔軟性によって、追加の言語のインストール、ポート構成オプションの指定、Metadata Repository としての既存のデータベースの使用（Portal のインストールの場合のみ）、およびデータベース構成（Portal のインストールの場合のみ）が可能になります。デフォルト値を受け入れずにインストールをカスタマイズする場合は、「**拡張インストール**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。[5.4 項「インストールする製品の選択」](#) に進んでください。

### 5.3.1 J2EE and Web Services の基本インストールの実行

J2EE and Web Services の基本インストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ドロップダウン・リストから「Oracle J2EE と Web サービス」を選択します。



2. J2EE and Web Services インスタンス名と `ias_admin` パスワードを入力します。インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項](#)を参照してください。`ias_admin` ユーザーとパスワードの詳細は、[1.4.4 項](#)を参照してください。

インスタンス名と `ias_admin` パスワードを入力したら、ウィンドウ下部の「インストール」をクリックします。インストールが開始されます。

インストール完了後の作業については、[第 6 章](#)を参照してください。

### 5.3.2 Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールの実行

Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールを実行するには、次の手順を実行します。

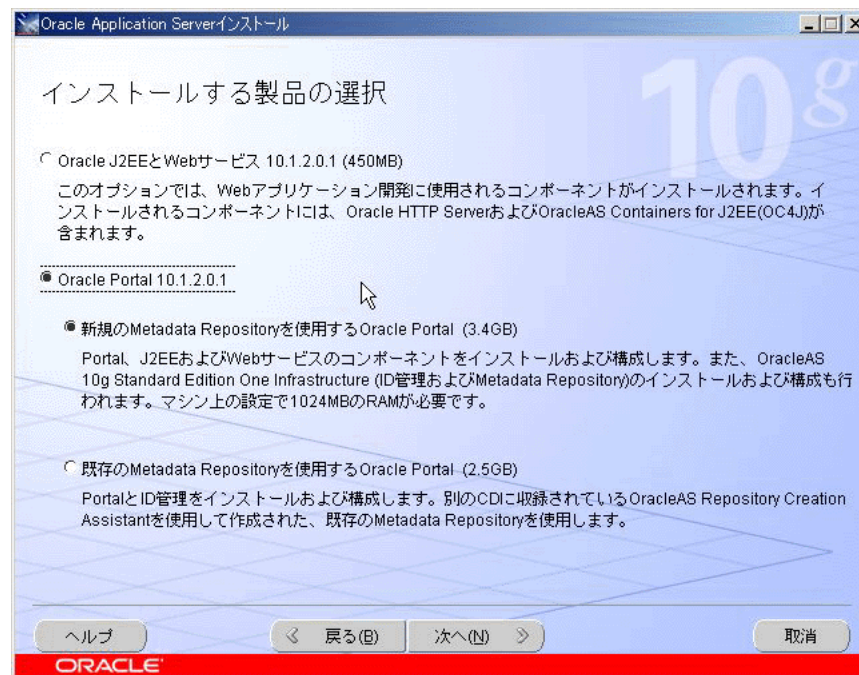
1. ドロップダウン・リストから「ID 管理とメタデータ・リポジトリを使用する Oracle Portal」を選択します。
2. OracleAS Portal インスタンス名と `ias_admin` パスワードを入力します。インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項](#)を参照してください。`ias_admin` ユーザーとパスワードの詳細は、[1.4.4 項](#)を参照してください。
3. グローバル・データベース名とパスワードを入力します。グローバル・データベース名とパスワードの詳細は、[1.4.5 項](#)を参照してください。

必要な情報を入力したら、ウィンドウ下部の「インストール」をクリックします。インストールが開始されます。

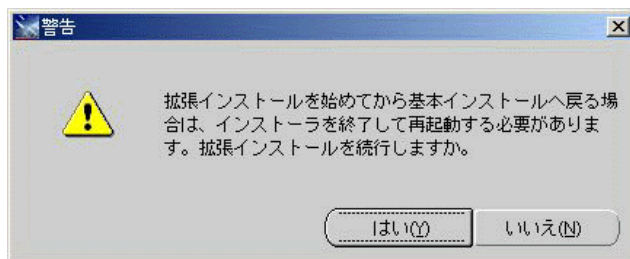
インストール完了後の作業については、[第 6 章](#)を参照してください。

## 5.4 インストールする製品の選択

インストールする製品を選択して、「次へ」をクリックします。



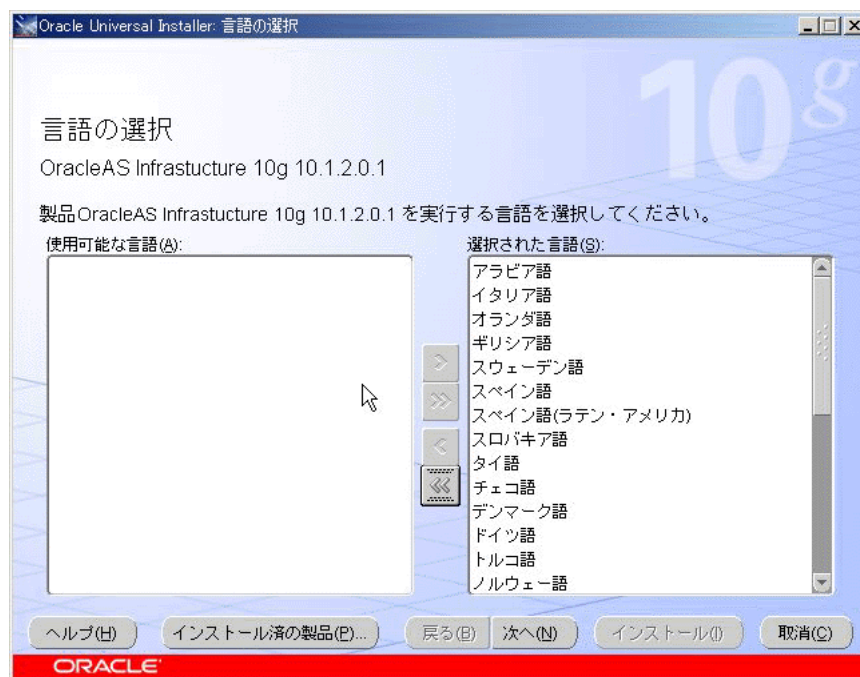
「次へ」をクリックすると、次の警告が表示されます。



「はい」をクリックして、拡張インストールを続行します。

## 5.5 言語の選択

インストールする追加の言語を選択します。

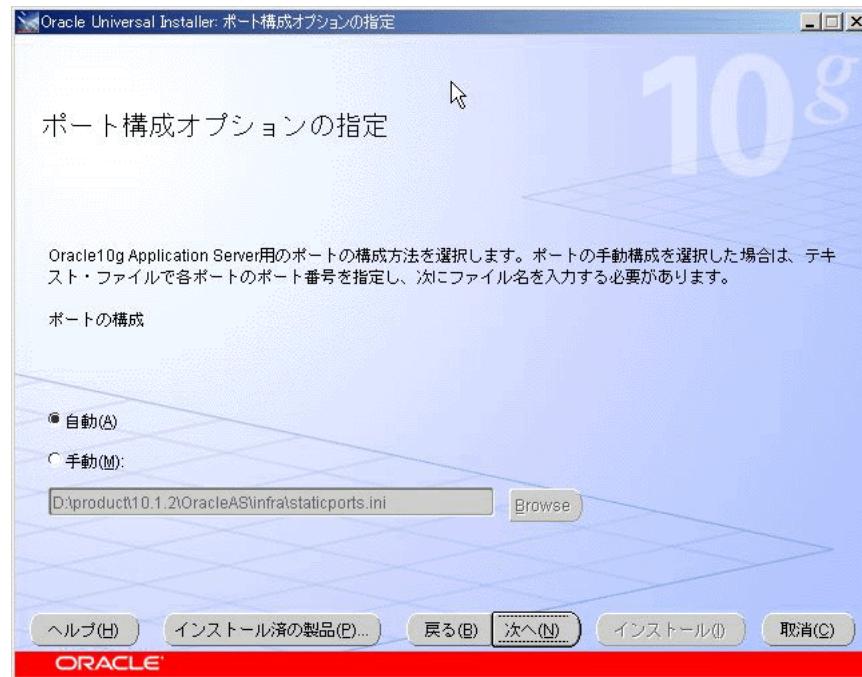


インストールの言語ではなく、インストールする製品の言語を選択することに注意してください。

目的の言語を選択したら、「次へ」をクリックします。

## 5.6 ポート構成オプションの指定

ポートの構成方法を選択します。

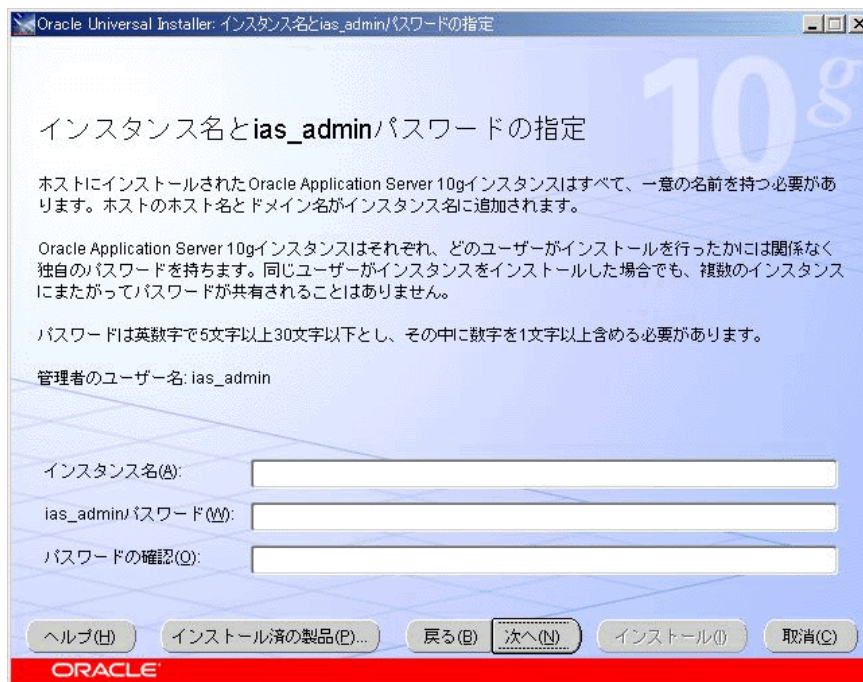


デフォルトのポート番号を使用する場合は、「**自動**」をクリックします。デフォルト・ポートの番号およびその範囲のリストは、[付録 C](#) を参照してください。

ポート番号をカスタマイズする場合は、「**手動**」をクリックします。各コンポーネントに使用するポート番号が含まれている既存のポート構成ファイルのフルパスおよびファイル名を指定する必要があります。通常、このポート構成ファイルは `staticports.ini` という名前ですが、ファイルの書式が正しければ任意の名前を使用できます。製品に付属している `staticports.ini` ファイルの詳細は、[1.4.7.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#) を参照してください。

## 5.7 インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定

Oracle Application Server インスタンス名と ias\_admin パスワードを指定します。



### インスタンス名

インスタンス名によって、この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスが一意に識別されます。

インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」](#)を参照してください。

### ias\_admin パスワード

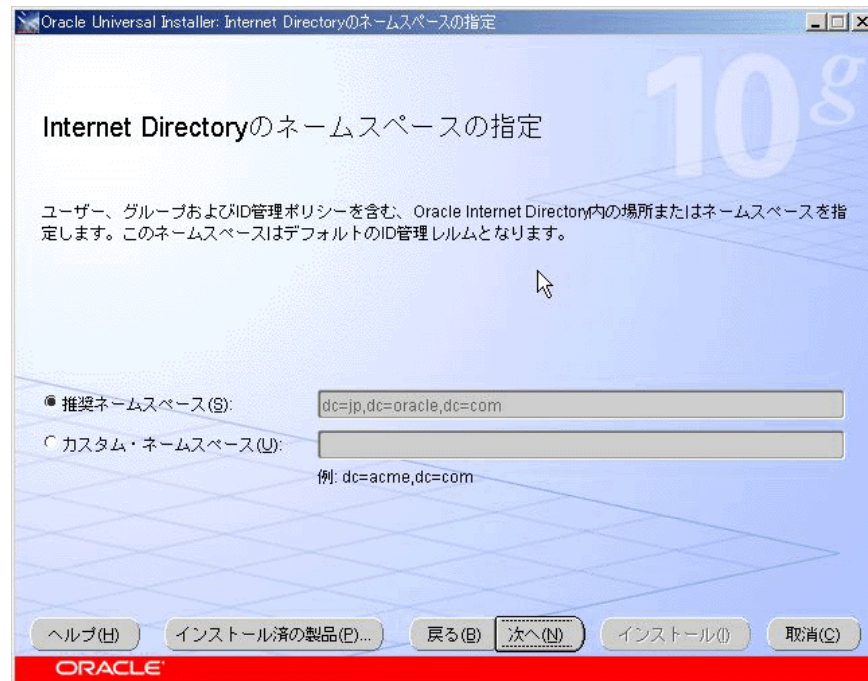
ias\_admin ユーザーは、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの管理ユーザーです。Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用して Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを管理するには、ias\_admin ユーザーとしてログインします。

ias\_admin パスワードの詳細は、[1.4.4 項「ias\\_admin ユーザーとそのパスワードの制限」](#)を参照してください。



## 5.8 Internet Directory のネームスペースの指定

この画面で指定する識別名 (DN) は、ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定されます。



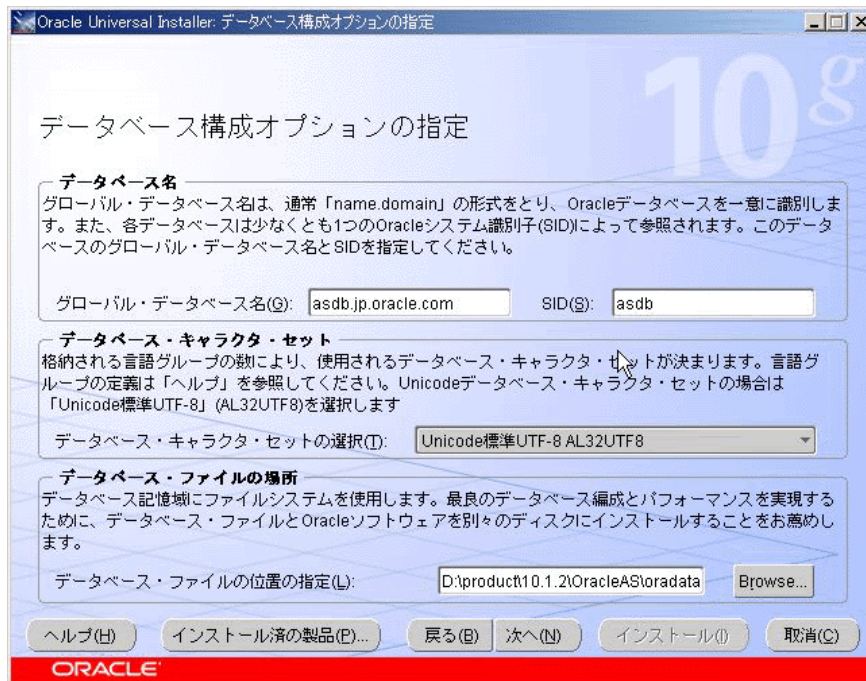
推奨されるネームスペースが配置要件を満たす場合は、そのネームスペースを選択します。そうでない場合は、「カスタム・ネームスペース:」フィールドに必要な DN を入力します。インストーラは、推奨されるネームスペースを `/etc/hosts` ファイルで確認します。[2.7 項「/etc/hosts ファイル」](#)を参照してください。

Identity Management コンポーネントをサード・パーティのディレクトリと統合する場合は、サード・パーティのディレクトリ内にあるデフォルトのネームスペースの DN に一致するネームスペースの DN を指定する必要があります。

**関連項目：** サード・パーティのディレクトリとの統合の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

## 5.9 データベース構成オプションの指定

グローバル・データベース名、キャラクタ・セットおよびデータ・ファイル・ディレクトリを指定します。



### グローバル・データベース名

OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力します。ドメイン名をデータベース名に追加します。グローバル・データベース名でのこのドメイン名は、ご使用のネットワーク・ドメイン名とは異なる名前にすることができます。

グローバル・データベース名のドメイン名の部分には、次のネーミング制限があります。

- 英数字、アンダースコア ( \_ ) およびシャープ ( # ) 文字のみを使用できます。
- 最大 128 文字です。

グローバル・データベース名のデータベース名の部分には、次のネーミング制限があります。

- 英数字のみを使用できます。
- 最大 8 文字です。
- PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。

例: asdb.mydomain.com

**注意:** 2 つ以上のピリオドを一緒に入力しないでください (例: asdb..mydomain.com)。これに関してインストーラはチェックを行わないので、後で、これがインストール・プロセス中のエラーの原因になります。

### SID

OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子 (SID) を入力します。通常、これはグローバル・データベース名と同じですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

SID には、次のネーミング制限があります。

- 英数字のみを使用できます。
- 最大 8 文字です。
- PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。

例 : asdb

### データベース・キャラクタ・セット

ドロップダウン・リストからキャラクタ・セットを選択します。

---

---

**注意：** NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットの文字を使用する場合は、データベースで Unicode キャラクタ・セット AL32UTF8 を使用する必要があります。新しいデータベースをインストールする場合は、「データベース構成オプションの指定」画面で「**AL32UTF8**」を選択します。

これは、Java では NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットがサポートされていないためです。Java でサポートされていないキャラクタ・セットを使用するようにデータベースを構成すると、OracleAS Portal に「サポートされていない IANA キャラクタ・エンコーディング」エラーが表示されます。

---

---

### データベース・ファイルの場所

データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。この親ディレクトリはすでに存在している必要があり、このディレクトリへの書込み権限を所有している必要があります。

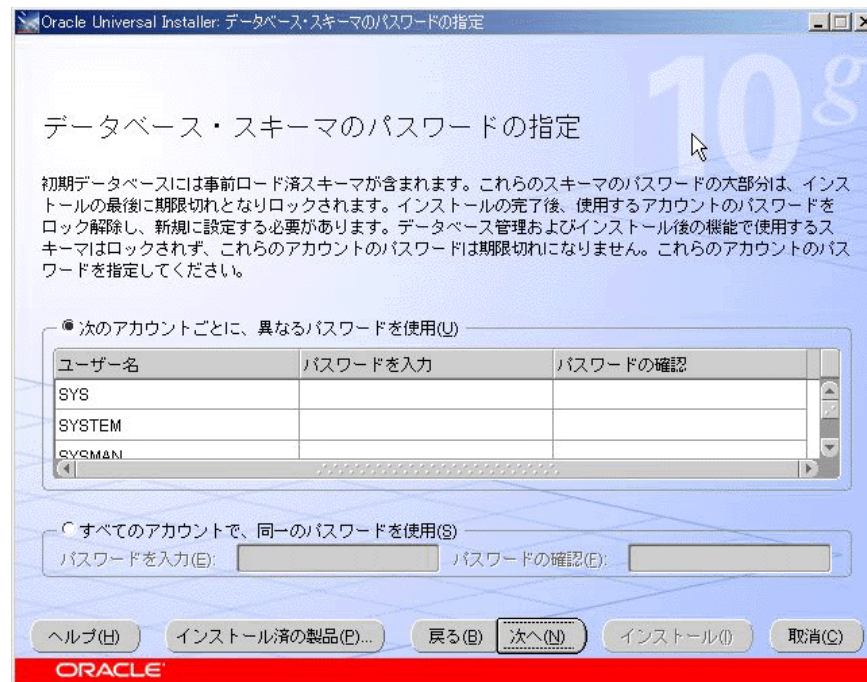
インストーラによって、この親ディレクトリにサブディレクトリが作成されます。サブディレクトリは SID と同じ名前になります。データ・ファイルは、このサブディレクトリに配置されます。

たとえば、/oracle/oradata と入力し、SID が asdb の場合、データ・ファイルは /oracle/oradata/asdb に配置されます。

## 5.10 データベース・スキーマのパスワードの指定

SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP 権限付きデータベース管理アカウント（スキーマ）のパスワードを設定します。

各アカウントに対して異なるパスワードを指定することも、すべてのアカウントに同じパスワードを使用することもできます。



### 各アカウントに対して異なるパスワードを指定する場合

「次のアカウントごとに、異なるパスワードを使用」を選択します。次に、表に一覧表示された各アカウントに対するパスワードを「パスワードを入力」列に入力し、「パスワードの確認」列に同じパスワードを再入力します。

### すべてのアカウントに同じパスワードを指定する場合

「すべてのアカウントで、同一のパスワードを使用」を選択してから、パスワードを「パスワードを入力」フィールドに入力し、「パスワードの確認」フィールドに同じパスワードを再入力します。

### パスワードの制限

データベース・スキーマのパスワードには、次の制限があります。

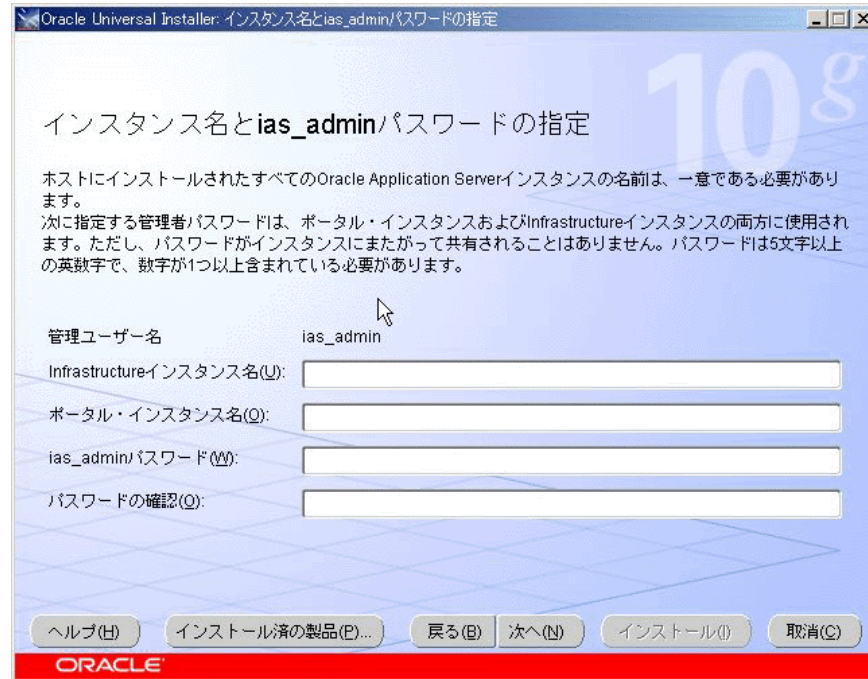
- パスワードは 30 文字より短くします。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア（\_）、ドル記号（\$）およびシャープ記号（#）のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア（\_）、ドル記号（\$）またはシャープ記号（#）から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、OTN (Oracle Technology Network) のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。その他、単に予約語のような形式の語の使用を避けるという方法もあります。
- パスワードにデフォルトのパスワード（change\_on\_install および manager）を使用することはできません。



これらのスキーマ、およびそれ以外の使用可能なスキーマの詳細は、[付録 E「OracleAS Metadata Repository スキーマ」](#)を参照してください。

## 5.11 インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定

Oracle Application Server および OracleAS Portal のインスタンス名と ias\_admin パスワードを指定します。



### Infrastructure インスタンス名

このインスタンス名によって、OracleAS Infrastructure インスタンスが一意に識別されます。インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」](#)を参照してください。

### Portal のインスタンス名

このインスタンス名によって、OracleAS Portal インスタンスが一意に識別されます。OracleAS Portal インスタンス名の制限は、インフラストラクチャ・インスタンス名の要件と同じです。ただし、インフラストラクチャ・インスタンスと同じ名前を付けることはできません。

インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項「Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名」](#)を参照してください。

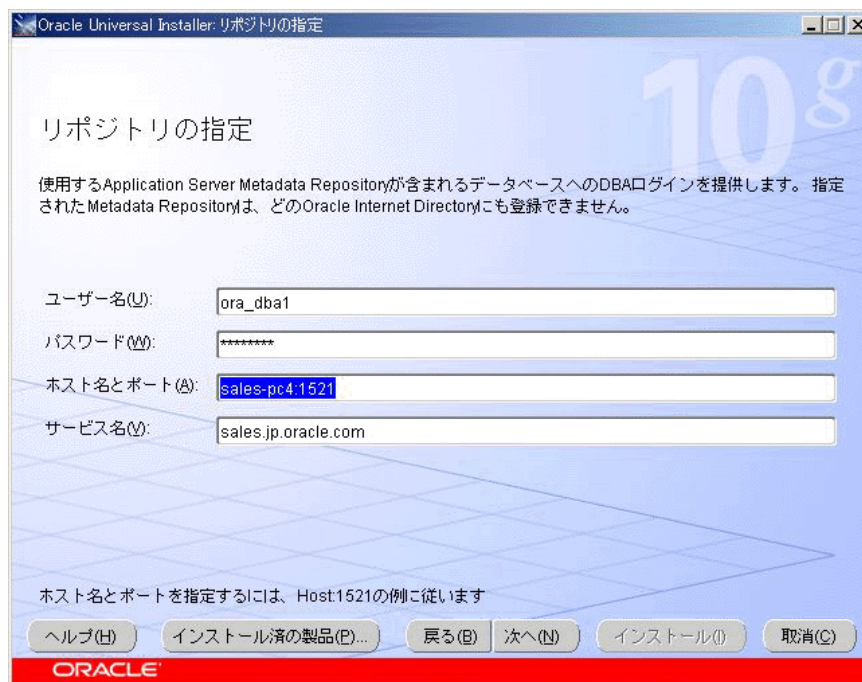
### ias\_admin パスワード

ias\_admin ユーザーは、Oracle Application Server インスタンスの管理ユーザーです。Oracle Enterprise Manager を使用して Oracle Application Server インスタンスを管理するには、ias\_admin ユーザーとしてログインします。

ias\_admin パスワードの詳細は、[1.4.4 項「ias\\_admin ユーザーとそのパスワードの制限」](#)を参照してください。

## 5.12 リポジトリの指定

既存の Metadata Repository が含まれているデータベースの情報を指定します。



---

**注意：** インストーラにより、データベースに Metadata Repository が含まれていることがチェックされます。以前にインストーラを使用して Metadata Repository をインストールしているか、または Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して既存のデータベースに Metadata Repository をインストールしている場合があります。

---

この画面のすべてのフィールドは必須のフィールドで、有効なエントリを入力する必要があります。

### ユーザー名

DBA ユーザーとしてログインします。

### パスワード

DBA ユーザーのパスワードを入力します。

### ホスト名とポート

データベースのホスト名およびポートを指定します。次の書式を使用します。

hostname:port

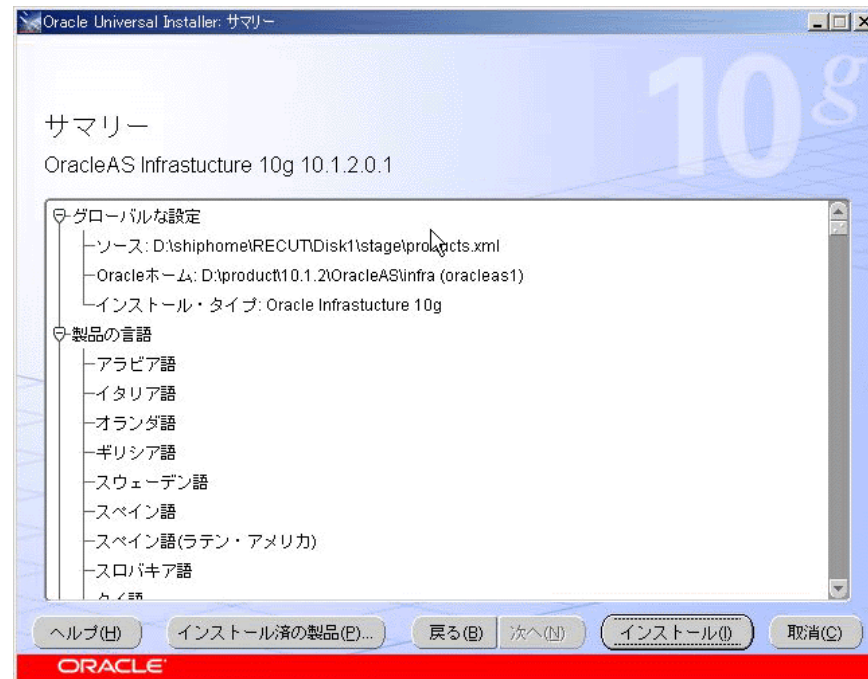
### サービス名

Metadata Repository が含まれているデータベースのサービス名を指定します。通常、サービス名はグローバル・データベース名と同じです。

データベース・インスタンスの名前が不明な場合は、データベースの初期化パラメータ・ファイルの SERVICE\_NAMES パラメータから取得できます。初期化パラメータ・ファイルに SERVICE\_NAMES パラメータがない場合、サービス名はグローバル・データベース名と同じです。グローバル・データベース名は、DB\_NAME および DB\_DOMAIN パラメータに指定されています。

## 5.13 サマリー

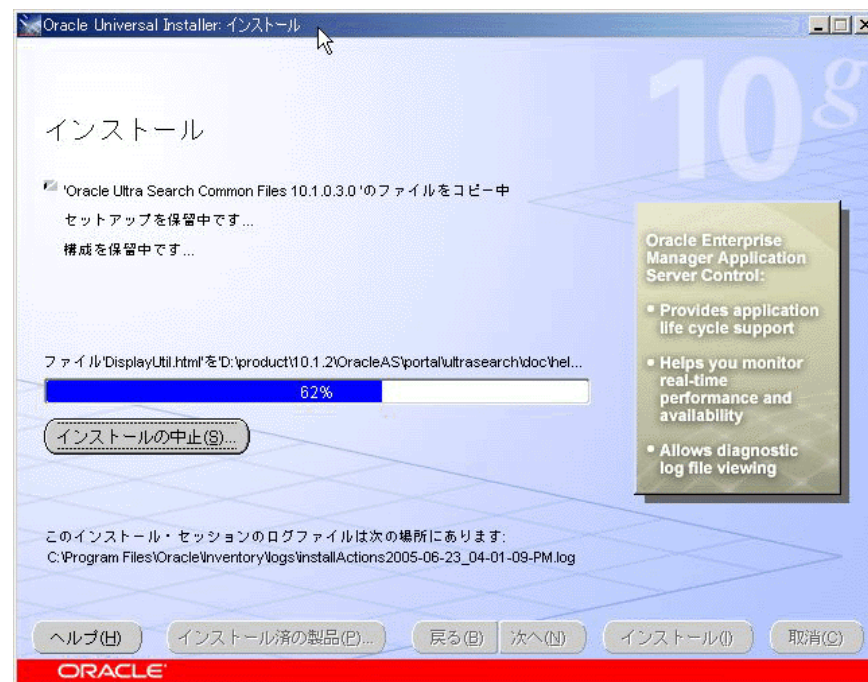
このウィンドウに表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。



「インストール」をクリックしてインストールを開始します。

## 5.14 インストール（進捗状況）

この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。



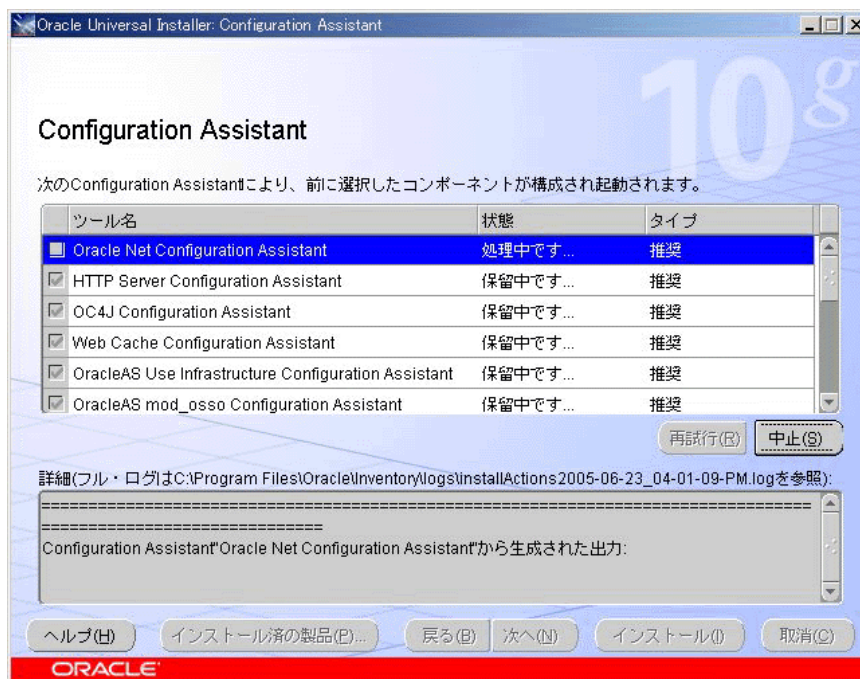
インストールを中断する場合は、「**インストールの中止**」をクリックします。インストールを中止するかどうかの確認を求められます。

この画面には、ログの内容を確認する場合に備えて、インストール・ログの場所も表示されます。

## 5.15 Configuration Assistant

この画面には、インストールの完了前に実行する推奨ツールと、任意で実行できるオプションの Configuration Assistant の名前、状態およびツール・タイプが表示されます。

**注意：** 最初に推奨ツールを実行してから、オプションのツールを実行します。推奨ツールは順番に実行する必要があります。推奨ツールを取り消した場合やその実行に失敗した場合、ユーザーは問題を修正し、そのツールを正常に実行してから、次のツールに進む必要があります。



「状態」列に示すように、ツールは次のいずれかの状態になっています。

- 成功しました：ツールは正常に実行されました。
- 失敗しました：ツールは実行されましたが、失敗しました。
- 保留中です：ツールは実行を待機しています。
- 取り消されました。：ツールはユーザーが「**停止**」をクリックしたことによって取り消されました。
- 処理中です：ツールは現在実行中です。
- スキップしました：このツールの前に実行していた Configuration Assistant が取り消されたか、または失敗しました。失敗または取り消されたツールの後のツールは、スキップされます。

ツールを選択すると、その詳細が「詳細」ボックスに表示されます。詳細はツールの実行中にも表示されます。実行中の Configuration Assistant を停止する場合は、「**停止**」をクリックしてください。



すべてのツールが最初の試行で正常に実行されると、OUI は自動的に次のページに進みます。そうでない場合は、すべてのツールが正常に実行されるまで、「Configuration Assistant」ページが表示されます。その後、「次へ」をクリックして、次のページに進むことができます。

ツールが1つでも失敗すると、OUI は次のページに進みません。その場合、失敗したツールの詳細を確認して問題を修正し、その Configuration Assistant を再度実行できます。ツールが失敗した場合の手順については、インストールする製品のインストール・ガイドも参照してください。OUI では、失敗またはスキップされたすべてのツールに対して、ツール名およびそのツールの実行に使用したコマンドのリストが生成されます。インストールの完了後、この情報をシェル・スクリプトに直接コピー / 貼付けして、これらのツールを実行することが可能です。

デフォルトでは、失敗またはスキップされたすべてのツールの「再試行」列のチェック・ボックスが選択されます。選択されたすべての Configuration Assistant を再試行するには、「再試行」をクリックします。

問題を修正せずに続行するには、「次へ」をクリックします。

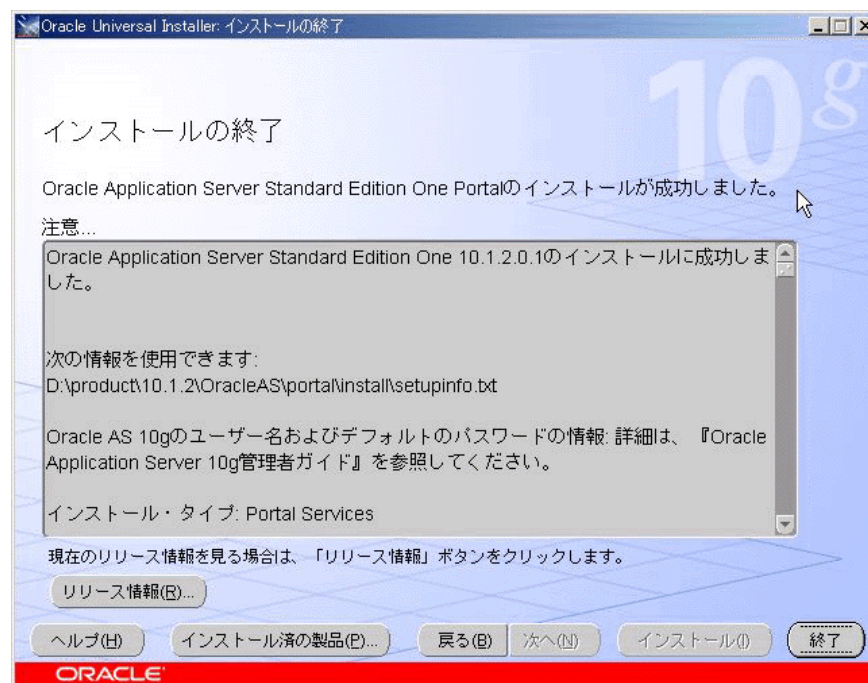
---

**注意：** タイプ（推奨またはオプション）に関係なく、Configuration Assistant がすべて失敗した場合でも、インストールは正常に完了したとみなされます。ただし、すべての推奨ツールが正常に実行されないと、製品が適切に構成されず、機能しない場合があります。

---

## 5.16 インストールの終了

この画面には、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールが正常に完了したかどうかが表示され、インストールした製品に関する重要な情報が提供されます。たとえば、特定の Web アプリケーションの URL に関する情報などです。この情報を書き留め、覚えておきます。



インストールした製品のリリース・ノートを確認するには、「リリース情報」をクリックするか、次の OTN のサイトのドキュメント・ページを参照してください。

<http://www.oracle.com/technology/documentation>

「終了」をクリックして、OUI を終了します。

一部の Oracle 製品では、ソフトウェアのインストール後に追加の構成が必要になります。これらの **Configuration Assistant** は、インストールの完了時に自動的に実行される場合もありますが、「終了」をクリックした後、すぐにダイアログ・ボックスが表示され、この時点で **Configuration Assistant** を実行するかどうかを決定できる場合もあります。

インストールしたソフトウェアで追加の **Configuration Assistant** が必要な場合は、ダイアログ・ボックスが表示されます。ダイアログ・ボックスでは、必要な追加の **Configuration Assistant** を実行するように求められます。

---

## インストール後の作業

この章の内容は次のとおりです。

- 6.1 項「インストール後の Oracle Application Server インスタンスの起動」
- 6.2 項「Oracle Application Server コンポーネントのパスワードの設定」
- 6.3 項「インストール後に行うその他の作業」
- 6.4 項「インストール後の作業を必要とするコンポーネント」
- 6.5 項「次の作業」

### 6.1 インストール後の Oracle Application Server インスタンスの起動

インストールが完了すると、ポートが 1024 未満の数値に設定されていない限り、構成済のコンポーネントは自動的に起動します。ポートが 1024 未満の数値に設定されている場合は、ポートを手動で起動する必要があります。

ブラウザを使用して「ようこそ」ページおよび「Application Server Control」ページを表示できます。これらのページの URL は、Oracle Universal Installer の最後の画面に示されます。最後の画面の内容は、`$ORACLE_HOME/install` にある `setupinfo.txt` ファイルで確認できます。

Oracle Application Server インスタンスを起動および停止するには、スクリプトまたは Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用します。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

### 6.2 Oracle Application Server コンポーネントのパスワードの設定

デフォルトでは、OracleAS Metadata Repository スキーマ・パスワードを除いて、Oracle Application Server コンポーネントのすべてのパスワードが、Oracle Application Server インスタンス・パスワードと同じに設定されます。セキュリティ上の理由から、様々なコンポーネントのパスワードを異なる値に変更する必要があります。

**関連項目：** インストールしたコンポーネントのパスワードを変更する方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』および Oracle Application Server Document Library 内にあるコンポーネントのマニュアルを参照してください。

## 6.3 インストール後に行うその他の作業

この項では、インストール後に実行する必要があるその他の作業について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [6.3.1 項「NFS インストール」](#)
- [6.3.2 項「バックアップおよびリカバリ」](#)
- [6.3.3 項「SSL の有効化」](#)
- [6.3.4 項「オペレーティング・システムのロケールと環境変数 NLS\\_LANG」](#)

### 6.3.1 NFS インストール

NFS ディスク上に Oracle Application Server をインストールする場合は、`$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf` にある `httpd.conf` ファイルの `LockFile` ディレクティブを、ローカル・ディスクを指すように修正する必要があります。このファイルは、Oracle HTTP Server コンポーネントで使用されます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

### 6.3.2 バックアップおよびリカバリ

インストール完了後、ソフトウェア・ファイル、構成ファイルおよび OracleAS Metadata Repository ファイルをバックアップした上で、バックアップおよびリカバリの計画を設定します。これにより、万一何か異常が発生した場合に作業環境をリストアできます。Oracle Application Server 環境全体をバックアップする方法の詳細は、[第 14 章「バックアップおよびリカバリ」](#) または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

また、パッチセットのアップグレードが正常に行われた後や構成変更が正常に行われた後にも、Oracle Application Server 環境全体のバックアップを実行する必要があります。

**関連項目：** 詳細は、[第 14 章「バックアップおよびリカバリ」](#) および『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

### 6.3.3 SSL の有効化

ほとんどのコンポーネントは、デフォルトでは SSL を使用するようには構成されていません。SSL を有効にする場合は、[第 13 章「SSL の有効化」](#) および『Oracle Application Server 管理者ガイド』の SSL に関する項を参照してください。

### 6.3.4 オペレーティング・システムのロケールと環境変数 NLS\_LANG

英語以外の言語環境に Oracle Application Server をインストールした場合は、次の項で説明するように、設定内容を確認する必要があります。

- [6.3.4.1 項「オペレーティング・システムのロケールの確認」](#)
- [6.3.4.2 項「NLS\\_LANG の設定の確認」](#)

#### 6.3.4.1 オペレーティング・システムのロケールの確認

デフォルト・ロケールの構成が正しいかどうかを見るには、環境変数 `LC_ALL` または環境変数 `LANG` に、必要な値が設定されているかどうかを確認します。現在の設定内容を確認する場合は、次のように `locale` コマンドを実行します。

```
prompt> locale
```



### 6.3.4.2 NLS\_LANG の設定の確認

NLS\_LANG の設定を確認する手順は次のとおりです。

1. 環境変数 NLS\_LANG の値が、オペレーティング・システムのデフォルトのロケール設定に対応していることを確認します。この値を設定するファイルなどの詳細は、『Oracle Application Server グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。これらのファイルを使用して、環境変数 NLS\_LANG の値を編集することが必要になる場合があります。
2. \$ORACLE\_HOME/opmn/conf にある opmn.xml ファイル内の NLS\_LANG 設定が、環境変数 NLS\_LANG と同じであることを確認します。

次に示すのは、opmn.xml ファイル内の NLS\_LANG 設定の一例です。

```
<environment>
  <variable id="TMP" value="/tmp"/>
  <variable id="NLS_LANG" value="JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS"/>
</environment>
```

## 6.4 インストール後の作業を必要とするコンポーネント

Oracle Application Server Standard Edition One で Oracle Ultra Search を使用する予定の場合は、インストール後（Oracle Ultra Search を使用する前）、このコンポーネントに固有の手順をいくつか実行する必要があります。詳細は、『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』を参照してください。

## 6.5 次の作業

Oracle Application Server Standard Edition One のインストールが完了した後の作業については、第 II 部の各章（特に第 7 章「始めに行うこと」）および『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。



# 第II部

---

## Oracle Application Server Standard Edition One で始めに行うこと

第II部では、Oracle Application Server Standard Edition One の管理および構成について説明します。内容は次のとおりです。

- [第7章「始めに行うこと」](#)
- [第8章「管理ツールの使用」](#)
- [第9章「起動と停止」](#)
- [第10章「HTTP ポートおよびリスナー設定の変更」](#)
- [第11章「ログ・ファイルの表示」](#)
- [第12章「ネットワーク構成の変更」](#)
- [第13章「SSLの有効化」](#)
- [第14章「バックアップおよびリカバリ」](#)



## 始めに行うこと

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後に実行する必要がある作業について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 7.1 項「環境変数の設定」
- 7.2 項「Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用法」
- 7.3 項「ポート番号の確認」
- 7.4 項「コンポーネントの管理」
- 7.5 項「ias\_admin パスワードの変更」

### 7.1 環境変数の設定

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。Oracle Application Server Standard Edition One を使用するには、表 7-1 に示す環境変数を設定する必要があります。

**表 7-1 Oracle Application Server 環境変数**

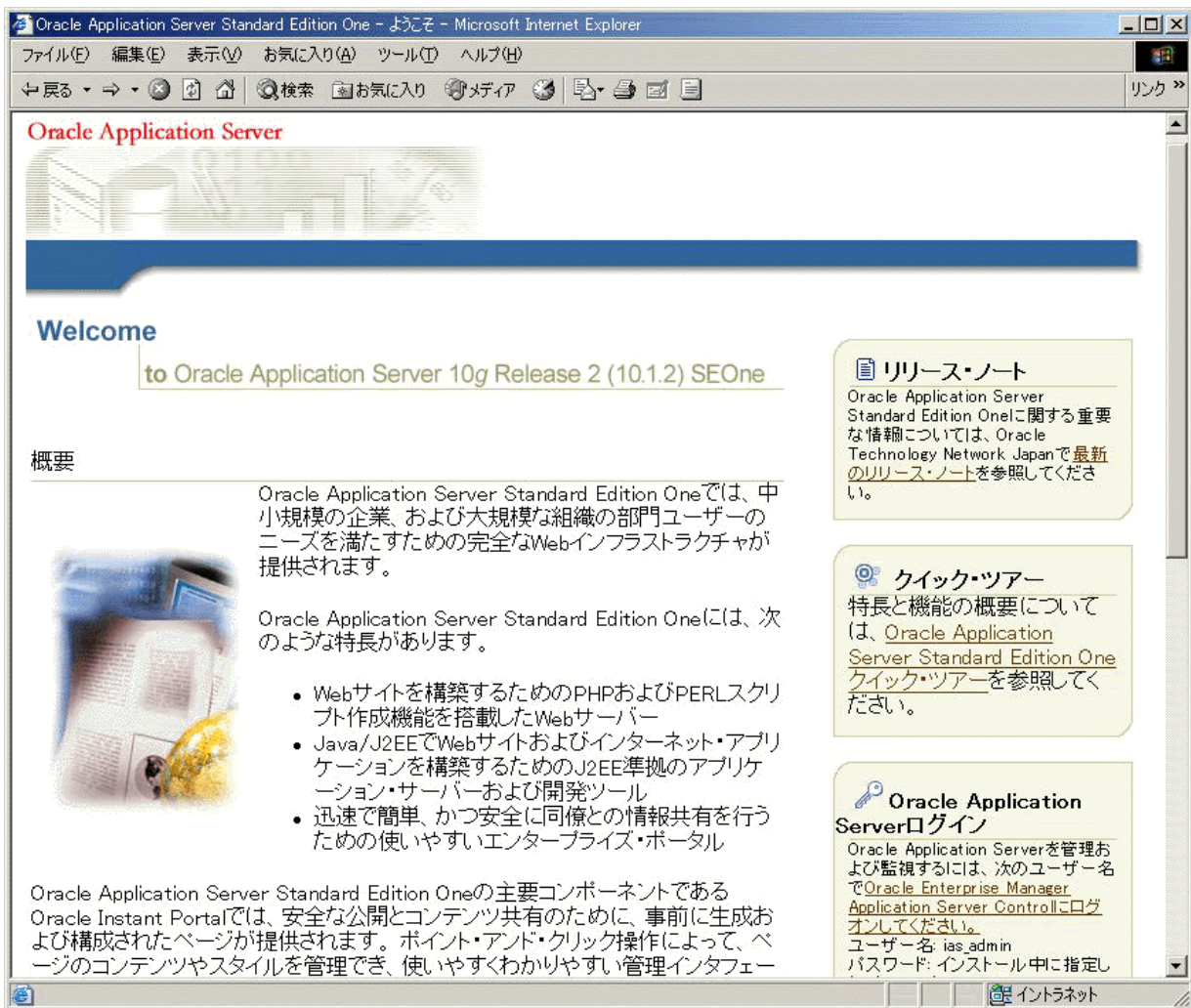
環境変数	値
ORACLE_HOME	インストールの Oracle ホームのフルパスを設定します。 この環境変数は Oracle Universal Installer によって自動的に設定されます。
ORACLE_SID (OracleAS Portal のインストールの場合のみ)	OracleAS Metadata Repository SID を設定します。デフォルトは orcl です。 この環境変数は Oracle Universal Installer によって自動的に設定されます。
TEMP	一時ディレクトリ (/tmp など) を設定します。
TMP	一時ディレクトリ (/tmp など) を設定します。

### 7.2 Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用法

Oracle Application Server の「ようこそ」ページからは、図 7-1 に示すようなアプリケーション・サーバーの管理を簡単に行うことができます。この項では、「ようこそ」ページの次の情報について説明します。

- 7.2.1 項「「ようこそ」ページへのアクセス」
- 7.2.2 項「「ようこそ」ページの内容」

図 7-1 Oracle Application Server の「ようこそ」ページ



## 7.2.1 「ようこそ」ページへのアクセス

「インストールの終了」画面に、「ようこそ」ページにアクセスする URL が表示されます。この URL は、\$ORACLE\_HOME/install/setupinfo.txt ファイルでも確認できます。

「ようこそ」ページにアクセスできない場合は、次の手順を実行します。

1. setupinfo.txt で、正しい URL を使用していることを確認します。
2. 次のコマンドを実行して、Oracle HTTP Server を再起動します。

```
opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```

## 7.2.2 「ようこそ」ページの内容

「ようこそ」ページには、Oracle Application Server Standard Edition One の製品、ドキュメントおよび次に示す内容の概要が含まれます。

- Oracle Technology Network のサイト  
(<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にある製品の最新のリリース・ノートへのリンク
- Oracle Application Server Standard Edition One クイック・ツアーへのリンク

- Application Server Control コンソールのリンクおよびログイン情報
- Oracle Instant Portal のリンクおよびログイン情報
- Oracle Application Server Single Sign-On のリンクおよびログイン情報

## 7.3 ポート番号の確認

インストール中、Oracle Application Server では、様々なコンポーネントおよびサービスにポート番号が割り当てられます。これらのポート番号を確認して、ポート番号の割当てが Oracle Application Server 以外のプロセスと競合しないようにします。ポート番号の変更については、[第 10 章](#)を参照してください。

各コンポーネントおよびサービスには、ポートの範囲が割り当てられています。Oracle Application Server は、最初にコンポーネントのポートの範囲内の最小のポート番号をチェックします。ポート番号がすでに使用されている、すなわち、現在実行中のプロセスで使用されていたり、`/etc/services` ファイルにリストされている場合、Oracle Application Server Standard Edition One は、割り当てられたポートの範囲内で次に大きいポートに移動し、空きポートが検出されるまでチェックを続行します。

ポート番号の完全なリストは、`$ORACLE_HOME/install/portlist.ini` ファイルで確認できます。[例 7-1](#) に、`portlist.ini` ファイルを示します。また、`$ORACLE_HOME/Apache/Apache/setinfo.txt` ファイルにも、2 つの重要なポート (Application Server Control コンソール・ポートおよび HTTP Server ポート) に関する情報が含まれています。

### 例 7-1 portlist.ini ファイルの例

```
;OracleAS Components reserve the following ports at install time.
;As a post-installation step, you can reconfigure a component to
;use a different port.
;Those changes will not be visible in this file.

[System]
Host Name = seone-pc.us.oracle.com

[Ports]
Oracle HTTP Server port = 7777
Oracle HTTP Server Listen port = 7777
Oracle HTTP Server SSL port = 4443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 4443
Oracle Notification Server Request port = 6003
Oracle Notification Server Local port = 6100
Oracle Notification Server Remote port = 6200
Oracle HTTP Server Diagnostic port = 7200
Log Loader port = 44000
Java Object Cache port = 7000
DCM Discovery port = 7100
Enterprise Manager Agent Port = 1830
Application Server Control RMI port = 1850
Application Server Control port = 1810
Oracle Internet Directory port = 3060
Oracle Internet Directory (SSL) port = 3130
Enterprise Manager Console HTTP Port (seondb) = 5500
Enterprise Manager Agent Port (seondb) = 1831
```

`portlist.ini` ファイルには、インストールされていないコンポーネントのポート番号も含まれています。これは、構成されていないコンポーネントも含めて、インストール中に Oracle Application Server によってすべてのコンポーネントのポートが予約されるためです。これらのポート番号は、インストール後にコンポーネントを構成すると、使用されます。

---

**注意：** portlist.ini ファイルは、インストール後にポート番号を変更しても、更新されません。アプリケーション・サーバーの管理を開始する際、Application Server Control コンソールの「ポート」ページを使用してポート番号を確認してください。このページには、現行のポート番号が表示されます。「ポート」ページを表示するには、Application Server ホーム・ページ上のポートのリンクをクリックします。「ポート」ページには、ポート番号を変更できるページへのリンクも表示されます。

---

## 7.4 コンポーネントの管理

この項では、コンポーネントの管理について説明します。ここでは、コンポーネント管理ツールにアクセスする手順と、コンポーネントに関するインストール後の注意事項について説明します。コンポーネントは、選択したサービスに応じてインストールされます。

**関連項目：** Oracle Application Server Standard Edition One で使用可能な様々なサービスに関する情報は [1.3 項「インストールの概要」](#) を参照してください。

どのインストールでもデフォルトでインストールされるコンポーネントがあります。たとえば、次のコンポーネントです。

- [7.4.1 項「Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\)」](#)
- [7.4.2 項「Distributed Configuration Management \(DCM\)」](#)
- [7.4.3 項「Oracle HTTP Server」](#)
- [7.4.4 項「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\)」](#)

### 7.4.1 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)

OPMN では、ほとんどの Oracle Application Server コンポーネントを管理および監視できます。これは、Oracle Application Server の実行に不可欠なコンポーネントであるため、中間層およびインフラストラクチャのインストール時には常にインストールおよび構成されます。OPMN を使用して、アプリケーション・サーバーの起動と停止、コンポーネントの監視およびイベント・スクリプトの構成を行うことができます。

**関連項目：** OPMN の詳細は、『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』および[付録 F](#) を参照してください。

### 7.4.2 Distributed Configuration Management (DCM)

DCM では、アプリケーション・サーバー・インスタンス、OracleAS クラスタ、Oracle HTTP Server、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)、Oracle Application Server Java Authentication and Authorization Service (JAAS) Provider (JAZN) および OPMN の構成情報を管理できます。DCM を使用して、構成情報の保存とリストア、アプリケーションの配置およびクラスタの管理を行うことができます。

DCM は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールとともに常にインストールおよび構成されます。DCM のすべてのインストールで、DCM リポジトリが使用されます。DCM リポジトリには、次の 2 つのタイプがあります。

- データベース：このリポジトリは、DCM スキーマの OracleAS Metadata Repository に位置します。このリポジトリは OracleAS Portal インストールで使用されます。
- ファイルベース：このリポジトリは、Oracle ホームのファイル・システムに位置します。

インストール中、dcmctl saveInstance コマンドを実行すると、DCM によって初期構成のコピーが作成されます。初期構成に戻す必要がある場合は、dcmctl restoreInstance コマンドを実行します。



**関連項目：** DCM コマンドの詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』および[付録 E](#) を参照してください。

### 7.4.3 Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、中間層およびインフラストラクチャのインストール時に常にインストールおよび構成されます。Oracle HTTP Server には、`http://hostname.domain:port` からアクセスできます。ここで、`port` は、`portlist.ini` ファイル内の Oracle HTTP Server リスナーのポート番号です。

### 7.4.4 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

OC4J は、完全な J2EE 環境です。選択するインストール・タイプに応じて、異なる OC4J インスタンスがインストールされます。

- J2EE and Web Services のみをインストールする場合、OC4J ホーム・インスタンスが中間層インスタンスにインストールされます。
- OracleAS Infrastructure とともに OracleAS Portal をインストールする場合、ホーム・インスタンスおよび OC4J\_Portal インスタンスが中間層インスタンスに、OC4J\_SECURITY インスタンスが OracleAS Infrastructure インスタンスにインストールされます。

**関連項目：** OC4J の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

## 7.5 ias\_admin パスワードの変更

ias\_admin パスワードは、Oracle Application Server Control コンソールへのログイン時に使用します。ias\_admin ユーザー・パスワードは、次のいずれかの方法で変更できます。

- [7.5.1 項「Application Server Control コンソールの使用」](#)
- [7.5.2 項「emctl コマンドライン・ツールの使用」](#)

---

**注意：** OracleAS Infrastructure を使用する場合は、ias\_admin パスワードの設定時に、Oracle Internet Directory パスワード・ポリシーに従う必要があります。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

---

### 7.5.1 Application Server Control コンソールの使用

ias\_admin ユーザー・パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. Application Server ホーム・ページに移動して、「**プリファレンス**」を選択します。
2. 「**パスワードの変更**」をクリックします。「パスワードの変更」ページが表示されます。
3. パスワードを変更して「**OK**」をクリックし、現行のインスタンスのパスワードを再設定します。

### 7.5.2 emctl コマンドライン・ツールの使用

ias\_admin ユーザー・パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Standard Edition One インストールの Oracle ホーム・ディレクトリで、次のコマンドを入力します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl set password old_password new_password
```

2. 次のコマンドを実行して、Application Server Control コンソールを再起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```



---

## 管理ツールの使用

Oracle Application Server Standard Edition One および Oracle 環境全体を管理する主要なツールが Oracle Enterprise Manager Application Server Control です。

この章では、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用した Oracle Application Server Standard Edition One の管理について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 8.1 項「Application Server Control コンソールの理解」
- 8.2 項「Application Server Control で使用可能なソフトウェア・テクノロジー」
- 8.3 項「Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理」

### 8.1 Application Server Control コンソールの理解

Oracle Enterprise Manager Application Server Control の主要なコンポーネントは、Application Server Control コンソールです。このコンソールを使用すると、個々の Oracle Application Server インスタンスを管理できます。

Application Server Control コンソールは、様々なパフォーマンス・データおよび管理機能を編成して、各アプリケーション・サーバー・コンポーネントに対し、Web ベースのホーム・ページを個別に構成します。単一の Oracle Application Server インスタンス、アプリケーション・サーバー・インスタンスのファーム、または OracleAS クラスタを監視および管理できます。

Web ベースのホーム・ページは Application Server Control ホーム・ページと呼ばれています。これらのページでは、Web ブラウザを使用して一般的に使用される管理機能にアクセスでき、Oracle Application Server Standard Edition One 環境の上位レベル・ビューが提供されます。

この項の内容は次のとおりです。

- 8.1.1 項「Application Server Control ホーム・ページの概要」
- 8.1.2 項「Application Server Control コンソールの表示」
- 8.1.3 項「Application Server ホーム・ページの使用」
- 8.1.4 項「Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用」
- 8.1.5 項「Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用」
- 8.1.6 項「Application Server Control コンソールを使用した診断タスクの実行」

#### 8.1.1 Application Server Control ホーム・ページの概要

Oracle Application Server Standard Edition One は、ビジネスのあらゆる側面の運営に役立つように設計された、様々なソフトウェア・ソリューションを提供します。そのため、異なる詳細レベルで Oracle Application Server Standard Edition One を管理できます。たとえば、単一のアプリケーション・サーバー・インスタンスも管理できますが、複数のインスタンスを 1 つの OracleAS クラスタに結合することが効率的な場合もあります。または、特定のアプリケーション・サーバー・コンポーネントを管理することもできます。

Application Server Control ホーム・ページでは、こうした複数のレベルでの管理がサポートされています。各ホーム・ページでは、特定の管理のレベルから Oracle Application Server Standard Edition One のパフォーマンスおよび可用性を監視するために必要な情報が提供されます。また、Application Server Control ホーム・ページでは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントの構成用のツールも提供されます。

Application Server Control コンソールで利用できるホーム・ページは、次のとおりです。

- **Application Server ホーム・ページ**: Application Server ホーム・ページを使用すると、個々のアプリケーション・サーバー・インスタンスのあらゆる側面を管理できます。

詳細は、[8.1.3 項](#)を参照してください。

- **OracleAS Farm ページ**: OracleAS Farm ページを使用すると、ネットワーク上の関連する一連のアプリケーション・サーバー・インスタンスを表示したり、Web アプリケーションの構成およびデプロイを高速化するクラスタを作成できます。

詳細は、[8.1.4 項](#)を参照してください。

- **コンポーネント・ホーム・ページ**: コンポーネント・ホーム・ページを使用すると、アプリケーション・サーバーの個々のコンポーネントを監視または構成できます。たとえば、Oracle HTTP Server ホーム・ページを使用すると、Web サーバーのパフォーマンスを監視できます。同様に、Oracle Containers for J2EE (OC4J) ホーム・ページを使用すると、Web ベースのカスタム・アプリケーションをデプロイできます。

詳細は、[8.1.5 項](#)を参照してください。

## 8.1.2 Application Server Control コンソールの表示

Application Server Control コンソールの URL は、Oracle Application Server のインストール手順の最後に表示されるテキスト・ファイルに含まれています。このテキスト・ファイルは、インストール後に次の場所に保存されます。

```
$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt
```

Application Server Control コンソールの URL には、通常、ホスト・コンピュータ名と、インストール中に Application Server Control コンソールに割り当てられたポート番号が含まれます。次に、その例を示します。

```
http://mgmthost1.acme.com:1810
```

---

**注意:** Application Server Control コンソールのデフォルトのポートは、通常、1810 です。ただし、このポートがすでに使用されている場合、インストール手順では別のポートが割り当てられます。正確なポート番号は、`setupinfo.txt` ファイルを参照してください。

---

Application Server Control コンソールを初めて表示する場合、このページに表示される情報は、実行したインストール・タイプによって異なります。[表 8-1](#) に、Application Server Control コンソールへの初回アクセス時に開始点として使用されるホーム・ページを示します。

**表 8-1 Oracle Application Server の管理用の Application Server Control ホーム・ページ**

Application Server Control ホーム・ページ	説明
Application Server ホーム・ページ	<p>単一のアプリケーション・サーバー・インスタンスを監視および構成できます。</p> <p>詳細は、<a href="#">8.3.2 項</a>を参照してください。</p> <p>Application Server ホーム・ページは、OracleAS Metadata Repository を使用しない単一のアプリケーション・サーバー・インスタンスをインストールした場合に表示される最初のページです。</p>

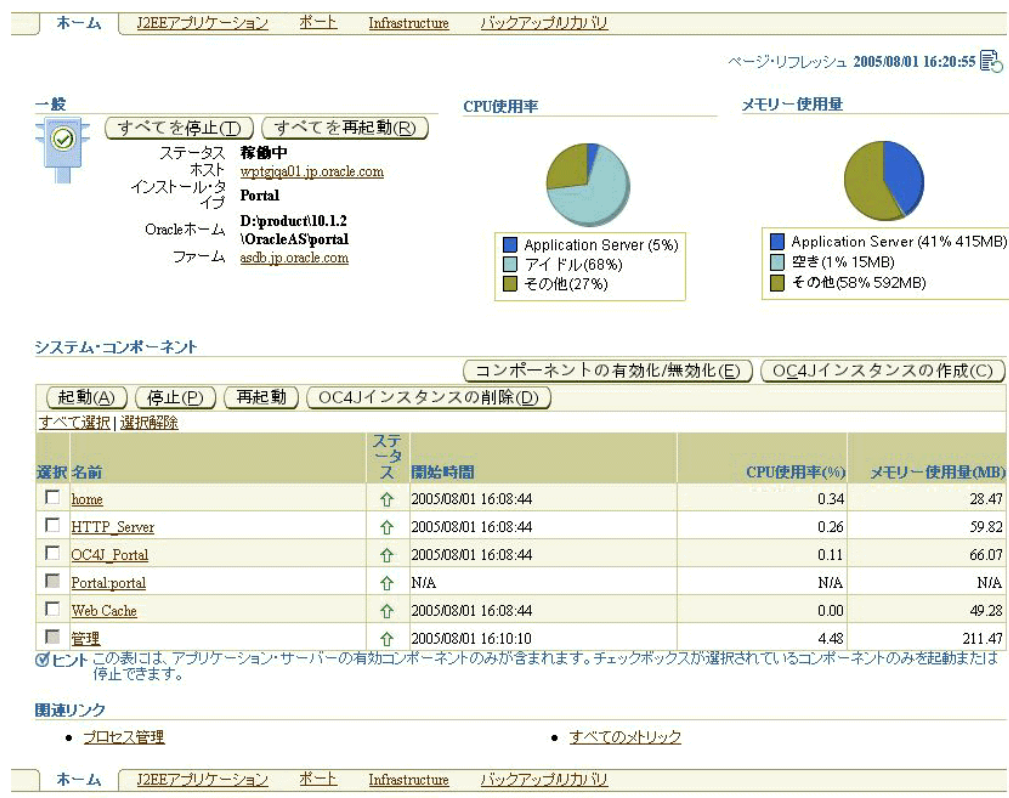
表 8-1 Oracle Application Server の管理用の Application Server Control ホーム・ページ (続き)

Application Server Control ホーム・ページ	説明
OracleAS Farm ページ	<p>共通の OracleAS Metadata Repository を使用するすべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスのリストを表示できます。</p> <p>詳細は、8.3.3 を参照してください。</p> <p>Farm ホーム・ページは、共通の OracleAS Infrastructure のセット (すなわち、共通の OracleAS Metadata Repository) を使用する 1 つ以上のアプリケーション・サーバー・インスタンスをインストールした場合に表示される最初のページです。</p>

### 8.1.3 Application Server ホーム・ページの使用

図 8-1 は、Application Server ホーム・ページを示しています。このページを使用すると、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの起動と停止、サーバー全体のパフォーマンスの監視およびサーバー・コンポーネントの確認を行うことができます。また、個々のコンポーネントの構成や、それらのパフォーマンスの確認も行うことができます。

図 8-1 Application Server ホーム・ページ



Application Server ホーム・ページには、アプリケーション・サーバーとともにインストールされたコンポーネントがリストされた「システム・コンポーネント」表があります。この表から、各コンポーネントの実行状況のスナップショットを取得できます。また、アプリケーション・サーバーの各コンポーネントのホーム・ページを表示することもできます。

この Application Server ホーム・ページでは、次のタスクを実行できます。

- ページ上部の「ログ」をクリックすると、様々な Oracle Application Server ログ・ファイルおよび Oracle Application Server ログ・リポジトリを検索できます。詳細は、第 11 章「ログ・ファイルの表示」を参照してください。

- 「トポロジ」をクリックすると、トポロジ・ビューアを表示できます。このビューアでは、OPMN によって管理されるアプリケーション・サーバー・プロセスがグラフィカルに表示されます。

詳細は、[8.1.6.1 項「アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認」](#)を参照してください。

- 「プリファレンス」をクリックすると、パスワードを変更したり、トポロジ・ビューア (HTML または Java) の表示プリファレンスを設定できます。
- 「J2EE アプリケーション」をクリックすると、Oracle Application Server Standard Edition One のこのインスタンスでデプロイしたアプリケーションのリストを表示できます。
- 「ポート」をクリックすると、様々な Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントで現在使用されているすべてのポートのリストを表示できます。必要に応じて、ポートの割当ての多くを変更することもできます。
- 「インフラストラクチャ」をクリックすると、Identity Management、Central Management または Oracle Application Server Standard Edition One のクラスタ機能を使用できます。
- 「コンポーネントの有効化 / 無効化」をクリックすると、選択したコンポーネントが自動的に起動されるか、「すべてを起動」や「すべてを再起動」などのサーバー全体の操作に影響されるかを制御できます。
- 「バックアップ / リカバリ」をクリックすると、Oracle Application Server のデータおよび構成ファイルのバックアップまたはリカバリを実行できます。詳細は、[第 14 章「バックアップおよびリカバリ」](#)を参照してください。

詳細は、Application Server ホーム・ページでオプションを選択した後、「ヘルプ」をクリックしてください。

## 8.1.4 Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用

[図 8-2](#) は、OracleAS Farm ページを示しています。現在のアプリケーション・サーバー・インスタンスで OracleAS Metadata Repository が使用されている場合、Application Server Control コンソールで最初に表示されるページが OracleAS Farm ページです。

**関連項目：** OracleAS Metadata Repository のインストールに関するプラットフォーム情報は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

**図 8-2 OracleAS Farm ページ**

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ホーム | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

ファーム: [asdb.jp.oracle.com](#)

スタンドアロン・インスタンスを共通のリポジトリで構成することにより、インスタンスをグループ化して一緒に管理できます。このインスタンスの集合は、Oracle Application Server ファームと呼ばれます。

リポジトリタイプ データベース

クラスタ

選択	名前	ホスト	Oracleホーム	ステータス	インスタンス	
	このファームにはクラスタがありません。					

スタンドアロン・インスタンス  
これらのインスタンスはファームに属しますが、クラスタの一部ではありません。

クラスタへの結合(J)

選択	名前	ホスト	Oracleホーム
<input checked="" type="radio"/>	WPTGJOA01_infra_asdb_wptgja01.jp.oracle.com	wptgja01.jp.oracle.com	D:\product\10.1.2\OracleAS\infra
<input type="radio"/>	WPTGJOA01_wptgja01.jp.oracle.com	wptgja01.jp.oracle.com	D:\product\10.1.2\OracleAS\portal

トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.  
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control / バージョン情報

Oracle Application Server Farm ホーム・ページには、OracleAS Infrastructure に関連付けられたスタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスおよび OracleAS クラスタの

リストが表示されます。スタンドアロンのインスタンスとは、OracleAS クラスタに属さないアプリケーション・サーバー・インスタンスです。

Application Server ホーム・ページで「インフラストラクチャ」をクリックすることによって、OracleAS Infrastructure を使用できるようにアプリケーション・サーバー・インスタンスを構成できます。詳細は、Application Server Control のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Application Server Farm ホーム・ページを使用して、各インスタンスの Application Server ホーム・ページにドリルダウンできます。

### 8.1.5 Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用

コンポーネント・ホーム・ページは、各コンポーネントが様々な監視要件および構成要件を持つため、コンポーネントによって異なります。ただし、ほとんどのコンポーネント・ホーム・ページには、次の共通の要素があります。

- 一般情報セクション。コンポーネントの現在の状態を示すアイコンと、コンポーネントの起動および停止を行うボタンが含まれます（該当する場合）。
- ステータス情報。CPU 使用率およびメモリー使用量の情報が含まれます。コンポーネントの実行状況のスナップショットが提供されます。
- コンポーネント固有の情報。HTTP Server ホーム・ページでは「仮想ホスト」タブ、OC4J ホーム・ページではデプロイ済アプリケーションのリストなどが表示されます。
- 管理機能へのリンク。ここから選択したコンポーネントの構成を変更できます。ほとんどの場合、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して、複雑な構成ファイルを変更できます。

### 8.1.6 Application Server Control コンソールを使用した診断タスクの実行

Application Server Control コンソールは、監視および診断アクティビティへのトップダウン・アプローチが行えるように設計されています。たとえば、Application Server ホーム・ページでアプリケーション・サーバーの基本特性を確認してからドリルダウンし、そのサーバーの個々のコンポーネントのパフォーマンスを調べることができます。

以降の項では、この監視方法の概要を説明します。

- [8.1.6.1 項「アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認」](#)
- [8.1.6.2 項「一般情報およびリソース使用状況の確認」](#)
- [8.1.6.3 項「アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認」](#)
- [8.1.6.4 項「アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視」](#)
- [8.1.6.5 項「J2EE アプリケーションの監視」](#)

#### 8.1.6.1 アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認

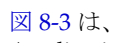
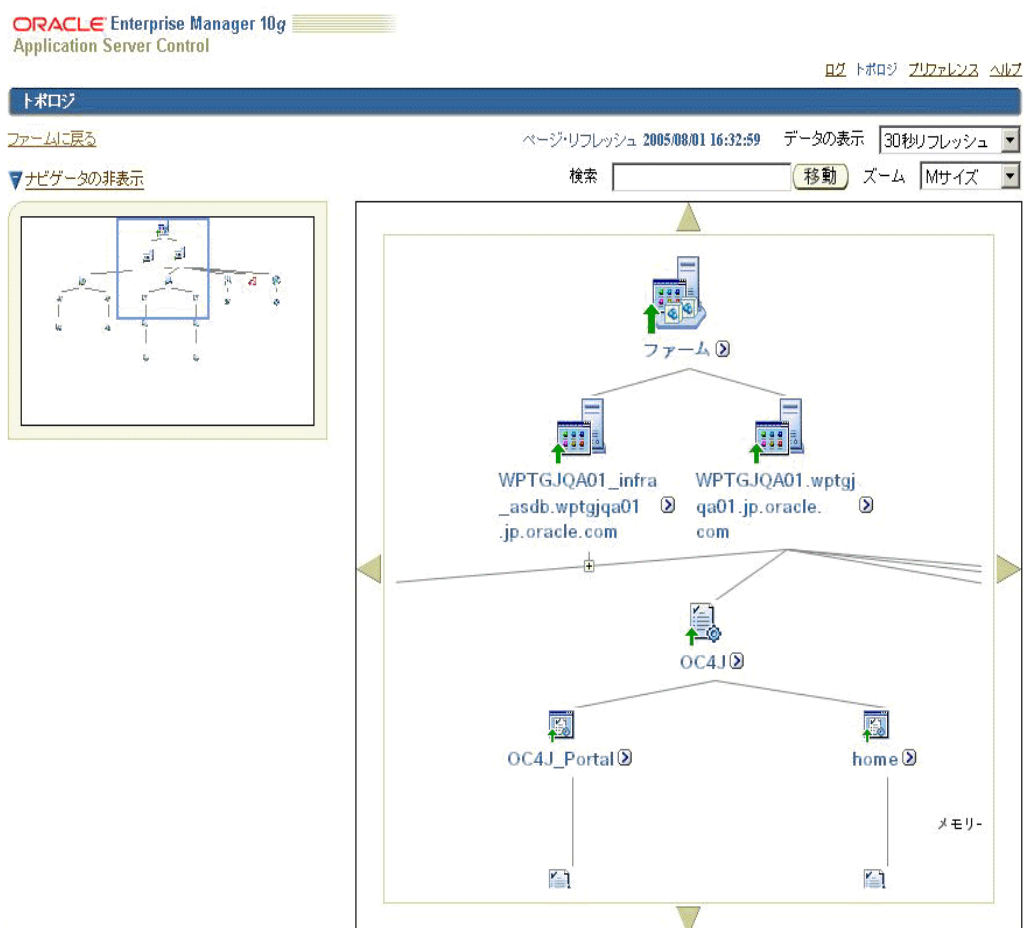
 [図 8-3](#) は、トポロジ・ビューアを示しています。トポロジ・ビューアにアクセスするには、Application Server Control コンソールの任意のページ上部にある「トポロジ」をクリックします。トポロジ・ビューアでは、OPMN によって管理されるアプリケーション・サーバー・プロセスがリアルタイムでグラフィカルに表示されます。このビューアでは、Oracle Application Server のコンポーネントの関係がグラフィカルに表示されます。



図 8-3 トポロジ・ビューア



トポロジ・ビューアでは、アプリケーション・サーバーの各コンポーネントがアイコンで示されます。ページ上の各アイコンの位置およびアイコン間の連結が、各コンポーネント間の関係を表しています。トポロジ・ビューアの視覚的な表現によって、停止しているコンポーネントやパフォーマンスが低下しているコンポーネントを簡単に識別できます。

OracleAS Farm に属する複数のアプリケーション・サーバーを管理する場合でも、このビューアには、作成した OracleAS クラスタを含むアプリケーション・サーバー・インスタンス間の関係が表示されます。

トポロジ・ビューアを使用すると、次のタスクを実行できます。

- コンポーネントのステータスの表示
- プロセスの起動、停止または再起動
- アプリケーション・サーバー環境全体のパフォーマンスの監視
- コンポーネント・ホーム・ページへのドリルダウンによる詳細の確認

**関連項目：** Application Server Control のオンライン・ヘルプのトポロジ・ビューアに関する項を参照してください。

### 8.1.6.2 一般情報およびリソース使用状況の確認

Application Server ホーム・ページには、サーバーのステータスに関する一般情報（名前、場所、アプリケーション・サーバー可用性など）が表示されます。また、CPU 使用率およびメモリ使用量に関する概要も表示されます。ホーム・ページを表示したら、「CPU 使用率」および「メモリ使用量」グラフで、アプリケーション・サーバーが過剰に CPU またはメモリを使用していないかどうかを確認してください。



アプリケーション・サーバーがリソースを過剰に使用していると考えられる場合は、コンポーネントのリストを参照して、各コンポーネントが起動され実行されていること、およびそれらのコンポーネントのリソース使用状況を確認します。

このアプリケーション・サーバー・インスタンスの一部として現在使用していないコンポーネントを無効化することを考慮します。無効化したコンポーネントは、アプリケーション・サーバーの起動時に起動されないため、システム・リソースを消費しません。無効化したアプリケーション・サーバー・コンポーネントは、後でいつでも有効化できます。

**関連項目：** Application Server Control のオンライン・ヘルプのコンポーネントの無効化および有効化に関する項を参照してください。

### 8.1.6.3 アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認

パフォーマンスおよび構成に関する問題の多くは、ホスト上のリソース不足に直接関連しています。ドリルダウンして個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネントのパフォーマンスおよびリソース使用状況を分析する前に、アプリケーション・サーバー・ホストのリソースおよび特性を確認してください。

Application Server ホーム・ページの「一般」セクションでホスト名をクリックすると、そのホストのホーム・ページが表示されます。ホストのホーム・ページには、オペレーティング・システム、メモリーおよびディスク容量の概要が表示されます。ページの「負荷」セクションでは、CPU の使用状況が様々なカテゴリに分類された CPU チャートが提供されます。このチャート下の負荷メトリックでは、システム・メモリー使用量の詳細を確認できます。

**関連項目：** Enterprise Manager によるアプリケーション・サーバーのメモリー使用量の計算方法については、Application Server Control のオンライン・ヘルプのメモリー使用量に関する項を参照してください。

このページの下部には、リアルタイムのパフォーマンス・メトリックへのリンクがあります。システムにおける CPU の使用状況およびメモリーの使用量の詳細を確認するには、「すべてのメトリック」をクリックして、ホスト上で最も多くのリソースを使用しているプロセスがリストされた表を表示します。

### 8.1.6.4 アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視

アプリケーション・サーバー・ホスト・コンピュータのパフォーマンス・メトリックの概要および使用可能なリソースを確認したら、個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネント内で問題が発生していないかどうかを確認します。

個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネントの問題を診断するには、Application Server ホーム・ページの「システム・コンポーネント」表でコンポーネント名をクリックします。これは、アプリケーション・サーバーの特定のコンポーネントまたは領域の問題を検出できるドリルダウン手法です。

### 8.1.6.5 J2EE アプリケーションの監視

Oracle Application Server Standard Edition One による J2EE アプリケーションのデプロイおよびメンテナンスは、アプリケーション・サーバーのデプロイで最も重要な側面です。

Application Server ホーム・ページでは、J2EE アプリケーションのパフォーマンスの確認に使用できるショートカットが提供されます。Application Server ホーム・ページで「**J2EE アプリケーション**」をクリックすると、アプリケーション・サーバー・インスタンスからデプロイしたアプリケーションのリストが表示されます。

この J2EE アプリケーションのリストから、OC4J インスタンスまたはアプリケーション・ページに素早く移動して、デプロイ済の各アプリケーションのパフォーマンスおよび可用性に関する情報を確認できます。

**関連項目：** 詳細は、Application Server Control コンソールのオンライン・ヘルプおよび『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。

## 8.2 Application Server Control で使用可能なソフトウェア・テクノロジー

Application Server Control コンソールは、様々なテクノロジーに依存して Oracle Application Server Standard Edition One 環境を検出、監視および管理しています。

この項の内容は次のとおりです。

- 8.2.1 項「使用可能なテクノロジー」
- 8.2.2 項「コマンドライン・ツール」

### 8.2.1 使用可能なテクノロジー

表 8-2 に、Application Server Control コンソールで利用されているテクノロジーの概要を示します。

**表 8-2 Application Server Control で使用可能なテクノロジー**

テクノロジー	説明
Dynamic Monitoring Service (DMS)	Application Server Control コンソールは、DMS を使用して Oracle Application Server コンポーネントに関するパフォーマンス・データを収集します。 『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)	OPMN は、Oracle HTTP Server、OC4J およびその他の Oracle Application Server プロセスを管理します。また、様々なコンポーネント・インスタンスのすべてのイベントを、関連するすべてのコンポーネントに送信します。 詳細は、7.4.1.1 を参照してください。
Distributed Configuration Management (DCM)	Application Server Control コンソールは、DCM を使用して構成変更を行い、クラスタ全体にそれらの変更およびデプロイ済アプリケーションを伝播します。 詳細は、7.4.1.2 を参照してください。
Oracle 管理エージェント	アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視および管理用に特別に設計されたローカルの Oracle 管理エージェントです。
Oracle Management Watchdog Process	管理エージェントおよび Application Server Control コンソールを監視して、両方のプロセスが実行され常に使用可能であるようにします。

### 8.2.2 コマンドライン・ツール

Oracle Application Server では、いくつかの主要な管理テクノロジーにアクセスするためのコマンドライン・インタフェースが提供されています。また、コマンドライン・ツールでは、スクリプトおよびカスタム・ユーティリティを使用して管理手順を自動化できます。

最も重要な管理コマンドライン・ツールは、次の 2 つです。

- `opmnctl`  
このツールは、Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) にコマンドライン・インタフェースを提供します。`opmnctl` を使用して、次の作業を実行できます。
  - コンポーネント、インスタンスおよび OracleAS クラスタの起動と停止
  - プロセスの監視

**関連項目：**『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』を参照してください。
- `dcmctl`  
このツールは、Distributed Configuration Management (DCM) にコマンドライン・インタフェースを提供します。`dcmctl` を使用して、次の作業を実行できます。
  - OC4J インスタンスおよび OracleAS クラスタの作成と削除

- OC4J アプリケーションのデプロイおよびアンデプロイ
- 構成情報のアーカイブおよびリストア
- 構成情報の取得

**関連項目：**『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

opmnctl および dcmtcl 以外にも、Oracle Application Server Standard Edition One では、特定のタスクを実行するための多くのコマンドライン・ツールが提供されます。

---

**注意：** Oracle Application Server Standard Edition One では、Application Server Control コンソールを使用せずに、Oracle Application Server 組込みパフォーマンス・メトリックを直接表示できる一連のコマンドライン・ツールおよびサーブレットベースのツールも提供されます。これらの組込みパフォーマンス・メトリックは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントの実装に挿入されたパフォーマンス・インスツルメンテーションによって、継続的に測定されます。

---

## 8.3 Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理

Oracle Application Server の機能の多くは、Oracle データベース・インスタンスを使用して OracleAS Metadata Repository を格納する OracleAS Metadata Repository に依存しています。OracleAS Metadata Repository をインストールする際、OracleAS Metadata Repository 用に事前構成された Oracle Database 10g のインスタンスをインストールできます。

**関連項目：** 使用しているプラットフォームについては、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

OracleAS Metadata Repository データベースは Oracle Enterprise Manager 10g Database Control に付属しています。これは Oracle Database 10g で利用できます。

Database Control を表示するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザを使用して、次の例に示すように Database Control の URL にアクセスします。

```
http://hostname.domain:port/em
```

この URL の各部の意味は次のとおりです。

- `hostname` は、Oracle データベースをインストールしたコンピュータの名前です。
- `port` は、インストール中に Database Control 用に予約したポート番号です。

使用する正しいポート番号がわからない場合は、OracleAS Metadata Repository の Oracle ホームのインストール・ディレクトリに格納されている `portlist.ini` ファイルで次の行を確認します。

```
Enterprise Manager Console HTTP Port (db_name) = 5500
```

インストールでは、5500 ～ 5519 の範囲内で使用可能な最初のポートが予約されます。たとえば、ホスト `mgmt42` に Oracle データベースをインストールしており、Database Control でポート 5500 を使用している場合は、次の URL を入力します。

```
http://mgmt42.acme.com:5500/em
```

Application Server Control によって、Database Control のログイン・ページが表示されます。

2. ユーザー名 `SYS` を使用してデータベースにログインし、`SYSDBA` として接続します。

インストール中に SYS アカウントに対して指定したパスワードを使用します。

3. Application Server Control によって、データベース・ホーム・ページが表示されます。

データベース・ホーム・ページから、データベースの現在の状態を確認したり、様々な監視機能および管理機能にアクセスできます。

**関連項目：** Database Control コンソールによるデータベース管理の概要は、Oracle Database 10g ドキュメント・ライブラリの『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

---

## 起動と停止

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One およびそのコンポーネントの起動と停止の様々な手順について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 9.1 項「すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止」
- 9.2 項「OracleAS Infrastructure の起動と停止」
- 9.3 項「中間層インスタンスの起動と停止」
- 9.4 項「コンポーネントの起動と停止」
- 9.5 項「コンポーネントの有効化と無効化」
- 9.6 項「Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止」

### 9.1 すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止

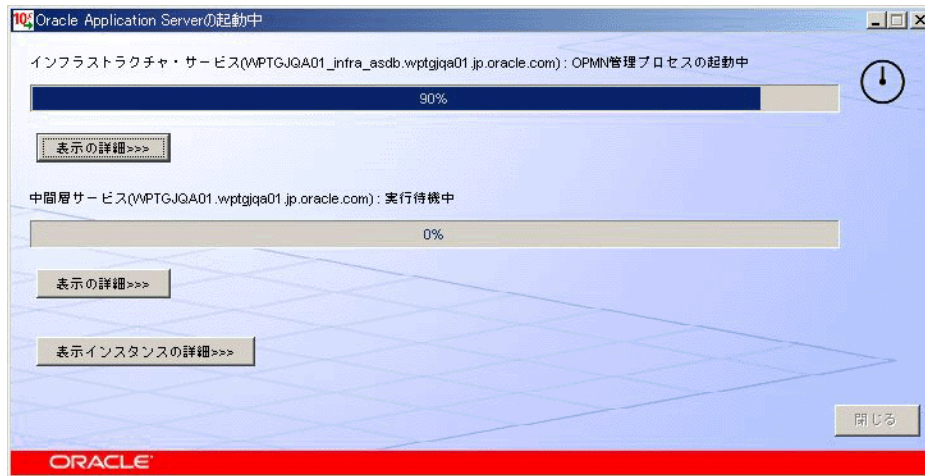
Oracle Application Server Standard Edition One をインストールすると、中間層インスタンスとインフラストラクチャ・インスタンスに 1 つずつ、2 つのデスクトップ・ディレクトリが作成されます。これらのディレクトリの名前は、次の形式となります。

ASSEOne\_install\_type\_instancename

- **すべてを起動** : Oracle Application Server のすべてのインスタンスを起動するには、このアイコンをクリックします。Application Server Control コンソールは起動しません。
- **すべてを停止** : Oracle Application Server のすべてのインスタンスを停止するには、このアイコンをクリックします。Application Server Control コンソールは停止しません。
- **すべての EM を起動** : Oracle Application Server Control コンソールを起動するには、このアイコンをクリックします。
- **すべての EM を停止** : Oracle Application Server Control コンソールを停止するには、このアイコンをクリックします。

「すべてを起動」アイコンをクリックすると、startupconsole が開始され、[図 9-1](#) に示す画面が表示されます。

図 9-1 Oracle Application Server の起動



「Oracle Application Server の起動」画面には 2 つのプログレス・バーが表示されます。1 つは OracleAS Infrastructure 用、もう 1 つは中間層用です。Oracle Application Server Standard Edition One のすべてのインスタンスを起動すると、中間層が起動する前に OracleAS Infrastructure が自動的に起動します。

「詳細を表示」をクリックすると、起動されている各コンポーネントのステータス情報が表示されます。「インスタンスの詳細の表示」をクリックすると、起動されているインスタンスの Oracle ホーム、インスタンス名およびバージョン番号が表示されます。

---

**注意：**「Oracle Application Server 10g - すべての AS を起動」アイコンを使用して Oracle Application Server のすべてのインスタンスを起動しても、Application Server Control コンソールは起動されません。Application Server Control コンソールを起動するには、デスクトップ・ディレクトリから「Oracle Application Server 10g - すべての EM を起動」アイコンを選択します。

---

Oracle Application Server Standard Edition One のすべてのインスタンスを停止するには、各自の Oracle ホーム・ディレクトリのデスクトップ・ディレクトリに移動して、「すべてを停止」アイコンをクリックします。これによって、すべての Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスが停止します。

## 9.2 OracleAS Infrastructure の起動と停止

この項では、OracleAS Infrastructure のすべてのプロセスを起動する方法について説明します。OracleAS Infrastructure には、次のコンポーネントがあります。

- OracleAS Metadata Repository
- Oracle Identity Management

OracleAS Infrastructure には、これらのコンポーネントの両方またはいずれかを含めることができます。インフラストラクチャ・インスタンスに両方のコンポーネントを含める場合、OracleAS Metadata Repository を最初に起動する必要があります。

この項では、次の項目について説明します。

- [9.2.1 項「OracleAS Infrastructure の手動での起動」](#)
- [9.2.2 項「OracleAS Infrastructure の手動での停止」](#)

## 9.2.1 OracleAS Infrastructure の手動での起動

OracleAS Infrastructure を起動するには、最初に OracleAS Metadata Repository を起動してから、Oracle Identity Management を起動する必要があります。

### 9.2.1.1 OracleAS Metadata Repository の起動

OracleAS Metadata Repository を起動するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE\_HOME に OracleAS Infrastructure の Oracle ホームを設定します。
2. 環境変数 ORACLE\_SID に OracleAS Metadata Repository の SID（デフォルトは asdb）を設定します。
3. 次のようにして、Net リスナーを起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/lsnrctl start
```

4. 次のようにして、OracleAS Metadata Repository インスタンスを起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> startup
SQL> quit
```

### 9.2.1.2 Oracle Identity Management の起動

Oracle Identity Management を起動するには、次の手順を実行します。

1. コンポーネントを起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス（DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、Oracle Internet Directory など）が起動されます。

2. 次のようにして、Application Server Control コンソールを起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

## 9.2.2 OracleAS Infrastructure の手動での停止

OracleAS Infrastructure を停止するには、最初に Oracle Identity Management を停止してから、OracleAS Infrastructure を停止する必要があります。

### 9.2.2.1 OracleAS Metadata Repository の停止

OracleAS Metadata Repository を停止するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE\_HOME に OracleAS Infrastructure の Oracle ホームを設定します。
2. 環境変数 ORACLE\_SID に OracleAS Metadata Repository の SID（デフォルトは asdb）を設定します。
3. 次のようにして、OracleAS Metadata Repository インスタンスを停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> shutdown
SQL> quit
```

4. Net リスナーを停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/lsnrctl stop
```

### 9.2.2.2 Oracle Identity Management の停止

次のようにして Oracle Identity Management を停止できます。

1. 次のようにして、Application Server Control コンソールを停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

2. 次のようにしてコンポーネントを停止します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス（DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、Oracle Internet Directory など）が停止します。

## 9.3 中間層インスタンスの起動と停止

この項では、中間層インスタンスのすべてのプロセスを起動する方法について説明します。Oracle Application Server Standard Edition One では、中間層に次のインスタンス・タイプがあります。

- J2EE and Web Services
- OracleAS Portal

この項では、次の項目について説明します。

- [9.3.1 項「中間層の手動での起動」](#)
- [9.3.2 項「中間層の手動での停止」](#)

### 9.3.1 中間層の手動での起動

中間層インスタンスを起動するには、次の手順を実行します。

1. 中間層インスタンスで OracleAS Infrastructure サービス（Oracle Identity Management、OracleAS Metadata Repository など）を使用している場合、これらのサービスが起動されていることを確認します。
2. コンポーネントを起動します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス（DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンスなど）が起動されます。

3. Application Server Control コンソールを起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

### 9.3.2 中間層の手動での停止

中間層インスタンスを停止するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールを停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

2. コンポーネントを停止します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス（DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンスなど）が停止します。



## 9.4 コンポーネントの起動と停止

次のツールを使用して、コンポーネントを起動、停止および再起動したり、そのステータスを表示できます。

- opmnctl
- Application Server Control コンソール

これらのツールは、いずれもプロセス管理のテクノロジーとして OPMN を使用しているため、完全な互換性があります。たとえば、`opmnctl` コマンドを使用して起動したコンポーネントを、Application Server Control コンソールを使用して停止できます。

これらの 2 つのツールは同じように使用できますが、提供される機能は異なります。`opmnctl` コマンドでは、コンポーネント全体と、コンポーネント内のサブプロセスの起動と停止を行うことができます。たとえば、Web Cache を起動および停止することも、Web Cache の管理サブプロセスのみを起動および停止することもできます。Application Server Control コンソールでは、起動または停止できないが、ステータスが他のコンポーネントに依存しているコンポーネントを表示できます。たとえば、HTTP Server に依存している Single Sign-On コンポーネントのステータスを表示できます。

### 9.4.1 opmnctl による起動と停止

コンポーネントを起動、停止または再起動するには、次の `opmnctl` コマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=component
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc ias-component=component
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc ias-component=component
```

コンポーネントのサブプロセスを起動、停止または再起動するには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc process-type=process
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc process-type=process
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl restartproc process-type=process
```

コンポーネントおよびプロセスのステータスを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl status
```

**関連項目：** `opmnctl` コマンド・オプションの詳細は、『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』を参照してください。

### 9.4.2 Application Server Control コンソールによる起動と停止

Application Server ホーム・ページでコンポーネントを起動、停止および再起動したり、そのステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールから、Application Server ホーム・ページを開きます。「システム・コンポーネント」セクションまでスクロールします。
2. 起動、停止または再起動するコンポーネントの「選択」列でチェック・ボックスを選択します。
3. 「システム・コンポーネント」セクションの「**起動**」、「**停止**」または「**再起動**」をクリックします。

## 9.5 コンポーネントの有効化と無効化

アプリケーション・サーバー・インスタンスの起動時、常にコンポーネントが起動されるようにする場合、そのコンポーネントを有効にしておく必要があります。コンポーネントを無効にしておくと、アプリケーション・サーバー・インスタンスの起動時に、そのコンポーネントは起動されなくなります。

コンポーネントは、Application Server Control コンソールを使用して有効化および無効化できます。Application Server ホーム・ページで、「コンポーネントの有効化/無効化」をクリックします。互いに依存しているコンポーネントはグループ化され、同時に有効化または無効化されます。

---

**注意：** このマニュアルに記載しているバックアップおよびリカバリ手順を使用する場合は、コンポーネントを有効化または無効化した後、`bkp_restore.pl -m config` を実行して、コンポーネントを OracleAS Backup and Recovery Tool に登録する必要があります。

---

## 9.6 Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止の手順について説明します。Oracle Application Server Standard Edition One 環境を完全に停止する必要がある場合（環境の完全なバックアップの実行やパッチの適用を準備する場合など）は、これらの手順に従う必要があります。

### 9.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動

Oracle Application Server Standard Edition One 環境を起動するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Infrastructure を起動します。  
詳細は、[9.2.1 項](#)を参照してください。
2. 中間層インスタンスを起動します。  
詳細は、[9.2.2 項](#)を参照してください。

### 9.6.2 Oracle Application Server 環境の停止

Oracle Application Server Standard Edition One 環境のすべてのプロセスを停止するには、次の手順を実行します。

1. 中間層インスタンスを停止します。
2. OracleAS Infrastructure を停止します。

中間層インスタンスまたは OracleAS Infrastructure インスタンスの停止の詳細は、[9.2.2 項「OracleAS Infrastructure の手動での停止」](#) および [9.3.2 項「中間層の手動での停止」](#) をそれぞれ参照してください。

## HTTP ポートおよびリスナー設定の変更

この章では、Oracle HTTP Server のポート番号を変更する方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 10.1 項「中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更」
- 10.2 項「Identity Management での HTTP ポートの変更」

ポート番号を確認する方法の詳細は、7.3 項を参照してください。

他の Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントのポート番号も変更できます。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 4 章「ポートの管理」を参照してください。

### 10.1 中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更

この項では、中間層インスタンスでポート番号を変更し、影響を受けるその他のコンポーネントを更新する方法について説明します。ここでは、Oracle HTTP Server のリスニング・ポート (SSL または非 SSL) を変更する手順について説明します。

Oracle HTTP Server の Listen ディレクティブの変更では、依存関係も設定する必要があります。たとえば、OracleAS Web Cache を使用して Oracle Application Server インスタンスのパフォーマンスを向上させている場合に、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更した場合は、必ず OracleAS Web Cache のオリジナル・サーバー設定を変更する必要があります。

ポートの依存関係が正しく変更されるようにするには、単一の Java コマンドを使用して、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更します。この Java コマンドを実行すると、Oracle ホーム内の必要な構成ファイルが自動的に変更されます。Oracle ホーム内の必要なコンポーネントをオプションで再起動することもできます。

以降の項では、portconfig コマンドを定義し、このコマンドを使用して Oracle HTTP Server のリスニング・ポート (SSL または非 SSL) を変更する方法について説明します。

- 10.1.1 項「UNIX システムにおいて 1024 未満に設定したポートで root として Oracle HTTP Server を実行できるようにする」
- 10.1.2 項「portconfig コマンドを使用した Oracle HTTP Server リスニング・ポートの変更」

#### 10.1.1 UNIX システムにおいて 1024 未満に設定したポートで root として Oracle HTTP Server を実行できるようにする

現在、UNIX システムを使用しており、リスニング・ポートを 1024 未満の番号に変更している場合、Oracle HTTP Server リスニング・ポートを変更する前にこの手順を実行します。

デフォルトでは、Oracle HTTP Server は非 root ユーザーとして実行されます。非 root ユーザーは Oracle Application Server をインストールしたユーザーです。UNIX システムでは、Oracle Application Server SSL リスニング・ポート番号を 1024 未満の値に変更する場合は、次のようにして Oracle Application Server を root として実行できるようにする必要があります。

1. root としてログインします。
2. 中間層の Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin
chown root .apachectl
chmod 6750 .apachectl
```

## 10.1.2 portconfig コマンドを使用した Oracle HTTP Server リスニング・ポートの変更

Oracle HTTP Server の SSL または非 SSL ポートを変更するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE\_HOME に、Oracle HTTP Server が存在する Oracle Application Server インスタンスのホーム・ディレクトリを設定します。

次に、この設定を行うコマンドの例を示します。

```
setenv $ORACLE_HOME /dev0/private/oracle/appserv1/
```

2. 環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH を \$ORACLE\_HOME/lib32 に、環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH\_64 を \$ORACLE\_HOME/lib に設定します。
3. portconfig コマンドを表すエイリアス (alias) を作成します。次に例を示します。

```
alias portconfig '$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -cp
$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/lib/emd.jar:
$ORACLE_HOME/dcm/lib/dcm.jar:
$ORACLE_HOME/sso/bin/ssoreg.sh
oracle.sysman.ias.sta.tools.PortConfigCmdLine ¥!*'
```

4. 新しく作成した portconfig コマンドを実行します。

```
portconfig -oracleHome $ORACLE_HOME
-oldPort old_port
-newPort new_port
[-sso -url http://sso_host:port -user http_server_admin_user
[-site name_of_sso_partner_application]
[-admin mod_osso_admin_user]
[-vHost path_to_mod_osso_configuration_file]]
[-webCache]
{-start | -restart}
```

たとえば、次のように使用します。

```
portconfig -oracleHome $ORACLE_HOME -oldPort 7777 -newPort 7778 -webCache
```

表 10-1 では、Oracle HTTP Server リスニング・ポートを自動的に変更するために portconfig コマンドとともに使用可能な引数について説明します。

**表 10-1 portconfig コマンドの引数**

引数	説明
-oracleHome	Oracle Application Server インスタンスの Oracle ホームを指定します。portconfig コマンドでは、選択した Oracle ホーム内のコンポーネントのみが変更されます。環境変数を使用して Oracle ホームを表すことができます。
-oldPort	Oracle HTTP Server のリスニング・ポートの古い（現行の）値を指定します。
-newPort	Oracle HTTP Server のリスニング・ポートの新しい値を指定します。

表 10-1 portconfig コマンドの引数（続き）

引数	説明
-webCache	<p>オプションの引数です。OracleAS Web Cache を使用して、Web サーバーのパフォーマンスおよび信頼性を向上させる場合に使用します。この引数がコマンドラインに含まれている場合、依存している OracleAS Web Cache のポート割当てが自動的に変更されます。</p> <p>具体的には、オリジナル・サーバーのポート番号が自動的に更新され、Oracle HTTP Server の新しいリスニング・ポートを指すようになります。</p> <p><b>注意：</b>portconfig コマンドで OracleAS Web Cache インスタンスが更新されるのは、このインスタンスが現行の Oracle ホーム内に存在する場合にのみです。</p>
-start	<p>オプションの引数です。この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、構成変更の後、アプリケーション・サーバー・インスタンスが停止して起動されます。ポートの変更を有効にするには、Oracle Application Server インスタンスを停止して起動、すなわち再起動する必要があります。</p> <p><b>注意：</b>起動中、アプリケーション・サーバーの有効なコンポーネントはすべて起動されます。portconfig コマンドを実行して Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する前に停止していたコンポーネントも起動されます。</p> <p>コマンドの実行時には、-restart または -start オプションを使用できますが、両方を使用することはできません。</p>
-restart	<p>オプションの引数です。この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、構成変更の後、アプリケーション・サーバー・インスタンスが再起動されます。ポートの変更を有効にするには、Oracle Application Server インスタンスを停止して起動、すなわち再起動する必要があります。</p> <p>このオプションでは、構成変更の完了後、実行中のコンポーネントのみが再起動されます。portconfig コマンドを実行して Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する前に停止していたコンポーネントは、停止したままです。</p> <p>コマンドの実行時には、-restart または -start オプションを使用できますが、両方を使用することはできません。</p>
-debug	<p>オプションの引数です。コマンドの実行時にデバッグ情報を表示する場合に使用します。この引数は、問題をトラブルシューティングしたり、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡する場合に役立ちます。</p>
-sso	<p>オプションの引数です。変更するリスニング・ポートが OracleAS Single Sign-On によって保護されている場合に使用します。</p> <p>この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、mod_osso が Oracle HTTP Server の新しいリスニング・ポート値で再登録されます。</p> <p>-sso 引数を使用する場合は、-url および -user 引数を含める必要があります。オプションで、-site、-admin および -vHost 引数を指定することもできます。</p> <p>mod_osso の登録については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「パートナ・アプリケーションの構成および管理」を参照してください。</p>
-url	<p>-sso 引数を使用する場合に必須の引数です。</p> <p>この引数を使用して、Oracle HTTP Server の新しい URL を指定します。この引数では、新しいリスニング・ポートが使用されます。</p> <p>たとえば、次のように使用します。</p> <pre>http://sso42.acme.com:7778</pre> <p>この URL は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -mod_osso_url パラメータとして渡されます。</p>

表 10-1 portconfig コマンドの引数（続き）

引数	説明
-user	<p>-sso 引数を使用する場合に必須の引数です。</p> <p>この引数を使用して、Oracle HTTP Server の起動に使用するアカウント名を入力します。UNIX システムでは、これは通常、root です。</p> <p>この引数で指定する値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -u パラメータとして渡されます。</p>
-site	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、OracleAS Single Sign-On パートナ・アプリケーションのサイト名を入力します。サイト名は、OracleAS Single Sign-On の管理ページに表示されます。</p> <p>この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -site_name パラメータとして渡されます。-site 引数を指定しない場合は、アプリケーション・サーバー・インスタンス名が、-site_name パラメータの値として ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトに渡されます。</p>
-admin	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、mod_osso 管理者のアカウント名を入力します。この値は、OracleAS Single Sign-On の管理ページに表示されます。この値は、Oracle Application Server をインストールしたユーザーの識別名 (DN) と同じです。この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -admin_info パラメータとして渡されます。</p>
-vHost	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、構成する仮想ホストの osso.conf ファイルへのパスを入力します。たとえば、次のように使用します。</p> <p><code>\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/vh_name/osso.conf</code></p> <p>この引数は、HTTP 仮想ホストを OracleAS Single Sign-On サーバーに登録する場合にのみ使用します。この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -config_file パラメータとして、-virtualhost パラメータとともに渡されます。</p>

5. 次のようにして、アプリケーション・サーバー・インスタンスを再起動します。

```

$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole

```

## 10.2 Identity Management での HTTP ポートの変更

Oracle Identity Management のインストールでは、インフラストラクチャのポートを変更する必要があります。

この項では、Oracle Identity Management インストールの Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する方法について説明します。このポート番号を変更する場合は、Single Sign-On (SSO) ポート番号も事実上変更します。このため、Single Sign-On ポートを使用するすべての中間層インスタンスを更新する必要があります。

### 手順 1: 中間層インスタンスの準備

Oracle Identity Management を使用する各中間層インスタンスで、中間層インスタンスを停止します。

1. Application Server Control コンソールの Application Server ホーム・ページで、「すべてを停止」をクリックします。

## 2. Application Server Control コンソールは実行したままにします。

この手順の実行中は、各中間層インスタンスで Application Server Control コンソールを実行したままにしてください。

### 手順 2: Infrastructure インスタンスの準備

Infrastructure インスタンスを準備するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Management およびそれに関連付けられた OracleAS Metadata Repository が、ポート番号を変更するインフラストラクチャで実行されていることを確認します。
2. 中間層インスタンスで、製品メタデータと DCM リポジトリに対して異なるメタデータ・リポジトリを使用している場合は、それらが起動されていることを確認します。

### 手順 3: Oracle HTTP Server の Listen および Port ディレクティブの変更

非 SSL の Listen ディレクティブと Port ディレクティブの両方を新しいポート番号に変更するには、次の手順を実行します。

1. Application Server ホーム・ページに移動して、「ポート」をクリックします。
2. 「ポート」ページで Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを検索し、「構成」列のアイコンをクリックします。
3. 「サーバー・プロパティ」ページで、次のように入力します。
  - 「デフォルト・ポート」フィールドに、新しいポート番号を入力します。これは、Port ディレクティブ用です。
  - 「リスニング・ポート」列に、新しいポート番号を入力します。これは、Listen ディレクティブ用です。複数のリスニング・ポートがリストされている場合もあります。非 SSL リスニング・ポートは、非 SSL リスニング・ポートの古い値を持つポートです。
4. 「適用」をクリックします。
5. 「確認」ページで、「いいえ」をクリックして後で再起動します。

---

**注意：** httpd.conf ファイルのポート番号は、手動で更新できます。SSL 仮想ホスト・コンテナ外の非 SSL の Listen および Port ディレクティブを、同じ新しいポート番号で更新します。その後、ファイルを保存し、次のコマンドを実行します。

---

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

---

SSL の Listen ディレクティブと Port ディレクティブの両方を新しいポート番号に変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のファイルを編集します。  
(UNIX) \$ORACLE\_HOME/Apache/Apache/conf/ssl.conf
2. SSL の Listen および Port ディレクティブを、新しいポート番号で更新します。Listen および Port の値は、同じポート番号である必要があります。
3. ファイルを保存して閉じます。
4. 次のコマンドを実行します。

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

### 手順 4: UNIX において 1024 未満に設定したポートで root として Oracle HTTP Server を実行できるようにする

デフォルトでは、Oracle HTTP Server は非 root ユーザーとして実行されます。非 root ユーザーは Oracle Application Server をインストールしたユーザーです。UNIX システムでは、Oracle Application Server の非 SSL リスニング・ポート番号を 1024 未満の値に変更する場合

は、次のようにして Oracle HTTP Server を root として実行できるようにする必要があります。

1. root としてログインします。
2. 中間層の Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/Apache/Apache/bin
chown root .apachectl
chmod 6750 .apachectl
```

### 手順 5: Application Server Control コンソールの更新

Application Server Control コンソールを、次の手順で新しいポート番号で更新します。

1. 次のファイルを編集します。  
(UNIX) `$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml`
2. Oracle HTTP Server の古いリスニング・ポート番号を、それぞれ新しいポート番号で更新します。
3. ファイルを保存して閉じます。
4. 次のようにして、Application Server Control コンソールを再ロードします。

```
emctl reload
```

### 手順 6: SSO の更新

SSO が、ポートを変更しているインストールの Oracle HTTP Server の非 SSL リスニング・ポートを使用するように構成されている場合、環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` および `LD_LIBRARY_PATH_64` に `$ORACLE_HOME/lib` が含まれていることを確認してください。

ポートを変更するインストールで、SSO が Oracle HTTP Server の SSL リスニング・ポートを使用するように構成されている場合、SSO の Oracle ホームで次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/sso/bin/ssocfg.sh https hostname new_port_number
```

`hostname` は SSO を実行しているホスト、`new_port_number` は Oracle HTTP Server の新しい SSL リスニング・ポート番号です。

### 手順 7: mod\_osso の再登録

`mod-osso` を再登録するには、次の手順を実行します。

1. `LD_LIBRARY_PATH` などの環境変数が設定されていることを確認します。
2. 非 SSL リスニング・ポートを変更する場合、Oracle Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行して、`mod_osso` を再登録し、デフォルトのパートナ・アプリケーションを処理します。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path middle_tier_oracle_home
-site_name middle_tier_hostname:new_http_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-u user
```

---

**注意：** `user` は、Oracle HTTP Server を起動するユーザーです。デフォルトでは、これは Oracle Application Server のインストールを実行したユーザーです。Oracle HTTP Server のリスニング・ポート番号を 1024 より小さい値に変更している場合、このユーザーは root になります。

---



たとえば、ホスト myhost で Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを 7779 に変更するには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path /disk1/oracleas
-site_name myhost:7779
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url http://myhost.mydomain:7779
-u oracle
```

3. SSL リスニング・ポートを変更する場合、Oracle Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行して、mod\_osso を再登録し、デフォルトのパートナ・アプリケーションを処理します。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path middle_tier_oracle_home
-site_name middle_tier_hostname:new_https_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-virtualhost -u user
```

---

**注意：** 前述のコマンドの user は、Oracle HTTP Server を起動するユーザーです。デフォルトでは、これは Oracle Application Server のインストールを実行したユーザーです。Oracle HTTP Server のリスニング・ポート番号を 1024 より小さい値に変更している場合、このユーザーは root になります。

---

たとえば、ホスト myhost で Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを 4445 に変更するには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path /disk1/oracleas
-site_name myhost:4445
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url https://myhost.mydomain:4445
-virtualhost -u oracle
```

4. 構成または変更した追加のパートナ・アプリケーションを再登録します。

**関連項目：** mod\_osso の再登録の詳細は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』を参照してください。

## 手順 8: DAS の更新

構成済の DAS で SSL および非 SSL ポート番号を使用している場合、次の手順に従って、Oracle Internet Directory の DAS URL エントリを更新します。

---

**注意：** DAS で使用しているポートは、次のコマンドで確認できます。

---

```
ldapsearch -h oid_host -p oid_port -D "cn=orcladmin"
-w "password" -b "cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext"
-s base "objectclass=*" orcldasurlbase
```

---

1. 次の内容を含むファイル mod.ldif を作成します（このファイルはどのディレクトリに作成してもかまいません）。

```
dn:cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype:modify
replace:orcldasurlbase
orcldasurlbase:http://hostname:new_http_port_number/
```

`orclbase` URL の末尾にスラッシュ (/) があることに注意してください。

2. 次のコマンドを実行します。

```
ldapmodify -D cn=orcladmin -w password -p oid_port -f mod.ldif
```

### 手順 9: Identity Management インスタンスの再起動

Identity Management インスタンスを再起動します。

```
emctl stop iasconsole  
opmnctl stopall  
opmnctl startall  
emctl start iasconsole
```

### 手順 10: 新しいポート番号を使用するための中間層インスタンスの更新

Identity Management インストールで Oracle HTTP Server の非 SSL ポートを変更したら、次の手順で、新しいポート番号が使用されるようにすべての中間層インスタンスを更新する必要があります。

1. Application Server Control コンソールの「ID 管理の変更」ウィザードを使用して、各中間層インスタンスを更新します。

Identity Management を使用する各中間層インスタンスで、次の手順を実行します。

- a. Application Server Control コンソールを使用して、中間層インスタンスの Application Server ホーム・ページに移動します。
  - b. 「インフラストラクチャ」をクリックします。
  - c. 「インフラストラクチャ」ページの「ID 管理」セクションで、「**変更**」をクリックします。
  - d. ウィザードの手順に従います。
  - e. ウィザードが終了したら、Application Server ホーム・ページに移動して「**すべてを起動**」をクリックし、中間層インスタンスを起動します。
2. アプリケーションの Oracle Internet Directory キャッシュを次の手順でリフレッシュします。
    - a. Portal にログインします。
    - b. 「**グローバル設定**」リンクをクリックします。
    - c. 「**SSO/OID**」タブをクリックします。
    - d. Oracle Internet Directory キャッシュ設定のリフレッシュを選択して、「**適用**」をクリックします。

## ログ・ファイルの表示

Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントでは、起動および停止情報、エラー、警告メッセージなどのあらゆるタイプのイベントを記録したり、HTTP リクエストに関する情報にアクセスできるメッセージが含まれたログ・ファイルが生成されます。

この章では、ログ・ファイルを表示および管理して、システム・アクティビティの監視とシステムの問題の診断を行う方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 11.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要」
- 11.2 項「Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示」
- 11.3 項「Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用」

### 11.1 Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要

Application Server Control コンソールでは、Oracle Application Server コンポーネント間でログ・ファイルをリストおよび検索できます。Application Server Control コンソールのページでログ・ファイルを表示することも、ログ・ファイルをローカル・クライアントにダウンロードして、別のツールで表示することもできます。

この項では、次の項目について説明します。

- 11.1.1 項「ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解」
- 11.1.2 項「ログ・リポジトリの使用」
- 11.1.3 項「コンポーネント・ロギング・オプションの構成」

#### 11.1.1 ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解

一部の Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントは、Oracle Diagnostic Logging (ODL) 手法を使用しています。ODL によって、ログ・ファイルのネーミングおよび内容の書式が Oracle 標準に準拠するようになります。ODL では、診断メッセージは XML で書き込まれます。ODL を使用しないコンポーネントでは、診断メッセージはコンポーネント固有のテキスト形式で書き込まれます。

Application Server Control コンソールを使用すると、どの形式のログ・ファイルでも表示できます。ログ・ファイルをローカル・クライアントにダウンロードして、テキスト・エディタなどのファイル表示ユーティリティで表示することもできます。

##### 11.1.1.1 コンポーネント別のログ・ファイル・メッセージ

表 11-1 に、Oracle Application Server Standard Edition One の各コンポーネントでサポートされているメッセージ形式を示します。

表 11-1 コンポーネント別の診断メッセージの形式

コンポーネント	デフォルト形式	ODL のサポート	場所
Oracle ADF (ADF)	ODL	あり	<code>\$ORACLE_HOME/bc4j/logs/OC4J_Name</code>
DCM	ODL	あり	<code>\$ORACLE_HOME/dcm/logs</code>
Application Server Control	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/sysman/log</code>
HTTP Server	テキスト	あり	<code>\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs/error_log.time</code>
Log Loader	ODL	あり	<code>\$ORACLE_HOME/diagnostics/logs</code>
OC4J <i>instance_name</i>	テキスト	あり	<code>\$ORACLE_HOME/j2ee/instance_name/log</code> <code>\$ORACLE_HOME/j2ee/instance_name/application-deployments/application_name/application.log</code>
Oracle Internet Directory	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log</code>
OPMN	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/opmn/logs</code> <code>\$ORACLE_HOME/opmn/logs/component_type~...</code>
ポート・トンネリング	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/iaspt/logs</code>
Single Sign-On	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/sso/log</code>
Universal Installer	テキスト	なし	<code>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/</code>

### 11.1.2 ログ・リポジトリの使用

Application Server Control コンソールでは、ログ・リポジトリから診断メッセージを表示できます。ログ・リポジトリとは、次のようなものです。

- エラー・ログを格納しますが、アクセス・ログは格納しません。
- コンポーネント間で複数のログ・ファイルから収集された診断メッセージを格納します。
- Oracle Application Server Standard Edition One のログ・ファイル・データを統合します。これによって、Application Server Control コンソールを使用して、複数のコンポーネントで生成されたログ・ファイル・データを簡単に検索および表示できます。
- 診断プロセスを高速化し、Oracle Application Server のサポートに必要なリソースを減らします。

ログ・リポジトリは、Oracle Application Server Log Loader コンポーネントによって更新されます。詳細は、[11.3 項](#)を参照してください。

### 11.1.3 コンポーネント・ロギング・オプションの構成

ロギング・オプションを構成して、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントで生成および保存されるログ情報の管理と制限を行うことができます。

---

**注意：** Application Server Control コンソールからロギング・オプションを直接構成することはできません。コンポーネントのロギング・オプションを構成するには、Application Server Control コンソールの「拡張サーバー・プロパティ」ページを使用する必要があります。このページでは、構成ファイルの値を編集できます。

---

次のようなロギング構成オプションがあります。

- ログ・ファイルの名前およびパス名の指定
- ログ・ファイル・サイズの制限

- ログ・ファイル・アーカイブの使用
- コンポーネント・ロギング・レベルの設定

ロギング構成オプションは、コンポーネント固有です。すべてのコンポーネントがロギング構成オプションをサポートしているわけではありません。ロギング構成オプションの設定の詳細は、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントのドキュメントを参照してください。

## 11.2 Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示

Application Server Control コンソールを使用して、ログ・ファイルをリストできます。Application Server Control コンソールで「[ログ](#)」リンクをクリックすると、「ログの表示」ページが表示されます。

この項では、次の項目について説明します。

- [11.2.1 項「ログ・ファイルのリスト」](#)
- [11.2.2 項「選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト」](#)
- [11.2.3 項「Oracle Application Server Standard Edition One のコンポーネント・ページからのログ・ファイルのリスト」](#)
- [11.2.4 項「ログ・ファイルの拡張検索の使用」](#)
- [11.2.5 項「ログ・ファイルの詳細および内容の表示」](#)

### 11.2.1 ログ・ファイルのリスト

ログ・ファイルをリストするには、次の手順を実行します。

1. 「[移動](#)」または「[すべて移動](#)」をクリックして、選択したコンポーネントまたは使用可能なすべてのコンポーネントを「[選択したコンポーネント](#)」ボックスに移動します。
2. 「[検索](#)」をクリックして、選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストします。
3. 検索が実行されると、「[結果](#)」セクションにログ・ファイル情報（ログ・ファイルに関連付けられたコンポーネントの名前、ログ・ファイルへのリンクなど）が表示されます。

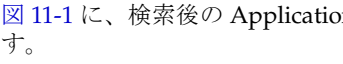
 [図 11-1](#) に、検索後の Application Server Control コンソールの「ログの表示」ページを示します。

図 11-1 Application Server Control の「ログの表示」の検索結果

ログの表示

ページ・リフレッシュ 2005/08/01 17:04:03

ログ・ファイル

ログ・リポジトリの検索

「ログ・ファイル」タブのリストは、アプリケーション・サーバーのログ・ファイルです。検索結果のログ・ファイル名をクリックすると、ログ・ファイルが表示されます。

単続検索

拡張検索

使用可能なコンポーネント

ADF Business Components

Database

Database Listener

Enterprise Manager

LogLoader

OC4J\_SECURITY

OID

Single Sign-On:orasso

Universal Installer

移動

すべて移動

削除

すべて削除

選択したコンポーネント

DCM

HTTP\_Server

OPMN

検索

結果: 4ログ・エントリが取得されました

コンポーネント・タイプ	コンポーネント名	ログ・タイプ	ログ・ファイル	更新	サイズ(バイト)
DCM	コマンドライン・ユーティリティ	エラー	log.xml	2005/08/01 15:32:01 JST	3605
DCM	デーモン・プロセス	エラー	log.xml	2005/08/01 16:35:58 JST	7080
DCM	デーモン・プロセス	サーバー	リダイレクトされた出力/エラー	2005/08/01 17:02:49 JST	259
HTTP_Server		サーバー	リダイレクトされた出力/エラー	2005/08/01 17:03:09 JST	239

「ログ」リンクをクリックすると、Application Server Control コンソールでは「ログの表示」ページが表示され、コンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。その後、「結果」セクションの「ログ・ファイル」リンクを選択して、ログ・ファイルを表示できます。

11.2.2 選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト

Application Server Control コンソールの「ログ」リンクを選択すると、「ログの表示」ページが表示されます。選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストするには、次の手順を実行します。

1. 「使用可能なコンポーネント」リストから、ログ・ファイルを表示するコンポーネントを選択し、「移動」を使用して選択したコンポーネントを「選択したコンポーネント」リストに移動します（ダブルクリックによるボックス間のコンポーネントの移動をサポートしているブラウザもあります）。

2. 「検索」をクリックして、選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストします。

3. 検索結果が戻されると、「結果」セクションにログ・ファイル情報（ログ・ファイルに関連付けられたコンポーネントの名前、ログ・ファイルへのリンクなど）が表示されます。

図 11-1 に、検索後の「ログの表示」ページの「結果」を示します。

### 11.2.3 Oracle Application Server Standard Edition One のコンポーネント・ページからのログ・ファイルのリスト

Application Server Control コンソールのメイン・ページで「システム・コンポーネント」のリンクを選択した後、「ログ」リンクを選択すると、そのコンポーネントのログ・ファイルを表示できます。このリンクをクリックすると、Application Server Control コンソールでは「ログの表示」ページが表示され、コンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。コンポーネントに関連するページの「ログ」リンクをクリックすると、そのコンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。その後、「結果」セクションの「ログ・ファイル」リンクを選択して、ログ・ファイルを表示できます。

コンポーネント・ページから「ログ」リンクをクリックすると、各ログ・ファイル・ページの下部に、戻るリンクが表示されます。戻るリンクを使用すると、「ログ」リンクを選択したコンポーネント・ページに戻ります。

### 11.2.4 ログ・ファイルの拡張検索の使用

「ログの表示」ページで「拡張検索」をクリックすると、「ログの表示」の「拡張検索」ページが表示されます。「拡張検索」ページでは、Oracle Application Server コンポーネントのログ・ファイルをリストして、特定のログ・ファイル属性でログ・ファイルの検索をフィルタ処理できます。

「ログの表示」の「拡張検索」ページで次の手順を実行すると、検索フィルタを使用して、ログ・ファイルをリストできます。

1. 「移動」または「すべて移動」をクリックして、選択したコンポーネントまたは使用可能なすべてのコンポーネントを「選択したコンポーネント」ボックスに移動します。
2. 「ログ・ファイル属性」リストからフィールドを選択します。
3. 「行の追加」をクリックして、選択したログ・ファイル属性の行を追加します。
4. 「値」フィールドに、必要な検索値を入力します。
5. 追加のフィールドを選択して値を入力する場合は、「行の追加」をクリックして追加の値を入力します。
6. 「検索」をクリックして、検索を実行します。検索が実行されると、「結果」セクションに、一致したフィールドを持つログ・ファイルが表示されます。

ログ・ファイル属性を使用したフィルタ処理の詳細は、「ログ・ファイル属性」リストの横の情報アイコンをクリックしてください。

### 11.2.5 ログ・ファイルの詳細および内容の表示

「ログの表示」の「単純検索」または「拡張検索」ページのいずれかで「検索」をクリックすると、「ログの表示」ページの下部の「結果」セクションに検索出力が表示されます。列ヘッダーを選択して、出力をソートできます。たとえば、結果をサイズでソートするには、「サイズ(バイト)」列のヘッダーを選択します(列ヘッダーを複数回クリックすると、ソートの昇順と降順が切り替わります)。

ログ・ファイルの内容を表示するには、「ログ・ファイル」列のリンクをクリックします。

ログ・ファイルのリンクを選択すると、「ログ・ファイル」ページに選択したログ・ファイルの内容が表示されます。「ログ・ファイル」ページでは、次の機能が提供されます。

- 「リフレッシュ」リストによって、ファイル・ビューの更新が手動か、自動かが決定されます。一定の間隔でページをリフレッシュする場合は、「自動」を選択します。ページがリフレッシュされると、「ログ・ファイル」ページは下までスクロールされます。
- ページの上部または下部で、「ページ・リフレッシュ」の日付の隣のリフレッシュ・アイコンを選択すると、手動リフレッシュを実行できます。リフレッシュを行うと、最後のリフレッシュ以降に追加されたログ・エントリが表示されます。
- 「ログ・ファイル」リンクを選択すると、ブラウザ機能を使用して、ログ・ファイルを表示、印刷またはダウンロードできます。

## 11.3 Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用

Oracle Application Server Standard Edition One の **Log Loader** コンポーネントによって、ログ・リポジトリ内のメッセージが初期化および更新されます。ログ・リポジトリは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネント間で複数のログ・ファイルから収集された診断メッセージを格納します。Log Loader を起動すると、一定の間隔で、ログ・ファイルの内容が追加分のみ読み込まれ、その内容がログ・リポジトリに格納されます。

この項の内容は次のとおりです。

- 11.3.1 項「Log Loader の起動と停止」
- 11.3.2 項「Log Loader の有効化と無効化」
- 11.3.3 項「ログ構成の更新」
- 11.3.4 項「Log Loader プロパティの設定」
- 11.3.5 項「Log Loader 診断メッセージの理解」

### 11.3.1 Log Loader の起動と停止

Log Loader の起動と停止は、Application Server Control コンソールの「ログ・ローダー」ページで制御します。

---

**注意：** デフォルトでは、Oracle Application Server がインストールされている場合、Log Loader は停止しています。

---

Log Loader を起動するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールページで、「**ログ**」リンクをクリックします。
2. 「ログの表示」ページで、「**ログ・リポジトリの検索**」リンクをクリックします。
3. 「**ログ・ローダー**」をクリックします。
4. 「ログ・ローダー」ページで、「**起動**」をクリックします。確認のページが表示されます。

Log Loader がすでに実行されている場合は、「**停止**」をクリックして停止します。

5. 「起動」または「**起動と既存のログのロード**」をクリックします。

「**起動と既存のログのロード**」をクリックすると、既存のログ・メッセージでログ・リポジトリを起動および初期化できます。

### 11.3.2 Log Loader の有効化と無効化

「ログ・ローダー」ページで、「**有効**」をクリックすると、Log Loader を有効化できます。最初に Oracle Application Server Standard Edition One をインストールした際、Log Loader は有効化されています。Log Loader を無効化すると、「ログの表示」ページ上のコンポーネント・リストにログ・ファイルが表示されません。

### 11.3.3 ログ構成の更新

Log Loader を起動すると、コンポーネント・ログ・ファイルに関する構成情報がロードされ、診断メッセージのソースとして使用されます。これらのメッセージはログ・リポジトリに格納されます。これには、ログ・ファイルの場所および形式に関する情報が保持されます。Log Loader の起動後は、インスタンスが再構成されます。たとえば、新しいコンポーネントを追加したら、「**ログ構成の更新**」をクリックして Log Loader 構成を更新します。ログ構成を更新すると、Log Loader によって構成ファイルが再度読み込まれ、すべてのコンポーネント・ログ・ファイルが特定され、ログ・リポジトリにロードされます。



## 11.3.4 Log Loader プロパティの設定

「ログ・ローダー」ページから Log Loader のプロパティを設定できます。「ログ・ローダー」ページに移動するには、次の手順を実行します。

1. いずれかの Application Server Control コンソールページ上の「**ログ**」リンクをクリックします。
2. 「ログの表示」ページで、「**ログ・リポジトリの検索**」リンクをクリックします。
3. 「ログの表示」ページで、「**ログ・ローダー**」をクリックします。
4. 「管理」セクションの「**ログ・ローダー・プロパティ**」リンクをクリックします。  
「ログ・ローダー・プロパティ」ページには、Log Loader プロパティの現行値を示すフィールドがあります。

Log Loader プロパティを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「ログ・ローダー・プロパティ」ページの適切なフィールドに更新した値を入力します。
2. 「適用」をクリックして、新しい値を適用します。

図 11-2 に、Application Server Control コンソールの「ログ・ローダー・プロパティ」ページを示します。

「ログ・ローダー・プロパティ」の各フィールドの詳細は、Application Server Control コンソールのオンライン・ヘルプを参照してください。

図 11-2 「ログ・ローダー・プロパティ」ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g  
Application Server Control

ログ トポロジ プリファレンス ヘルプ

ファーム > Application Server: WPTGQA01 infra asdb.wptgqa01.ip.oracle.com > ログの表示 > ログ・ローダー > ログ・ローダー・プロパティ

ページリフレッシュ 2005/08/01 17:06:55

これらのプロパティは、ログ・ローダーの動作、およびログ・ローダーが更新するログ・リポジトリのサイズの制御に使用できます。

ログ・リポジトリの場所	<input type="text" value="diagnostics/repository"/>	(このプロパティは、ログ・リポジトリが存在するディレクトリを識別します。)
ログ・リポジトリの最大サイズ(MB)	<input type="text" value="50"/>	(このプロパティは、ログ・リポジトリの合計サイズを制御します。)
各セグメントのサイズ(MB)	<input type="text" value="5"/>	(ログ・リポジトリは、セグメントと呼ばれるファイルのセットです。セグメントはリポジトリサイズの制御に再利用されます。)
ロードの間隔(分)	<input type="text" value="5"/>	(このプロパティは、ログ・ローダーが構成要素のログ・ファイルを読む頻度と、ログ・リポジトリの更新間隔を定義します。)
最大ロード・サイズ(KB)	<input type="text" value="51200"/>	(ログ・ファイルが最後のロード以降に非常に大きくなった場合、ログ・ローダーは一部のログ・エンタリのロードをスキップする場合があります。このプロパティは、ローダー実行中にファイルまたはDDLファイルのセットからロードされる最大バイト数を制御します。)
ログ・ローダー・ポート	<input type="text" value="44000"/>	(このプロパティは、ログ・ローダーで使用する通信ポートを識別します。)

元に戻す(R) 適用(A)

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.  
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control/バージョン情報

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

## 11.3.5 Log Loader 診断メッセージの理解

Log Loader は、エラーなど、診断メッセージのログをログ・ファイルに記録します。診断メッセージには、誤った構成が原因で発生したエラー、または、Log Loader がログ・ファイルからデータを読み込む際やログ・リポジトリにデータを書き込む際に発生したエラーが含まれる場合があります。

Log Loader の一般的な問題を次に示します。

- Log Loader の構成ファイル  
(`$ORACLE_HOME/diagnostics/config/logloader.xml`) 内のエラー。構成ファイル内にエラーがあると、Log Loader の実行が妨げられる場合があります。Log Loader が正常に機能するために、こうしたエラーを修正する必要があります。

- コンポーネントの登録ファイルにエラーが含まれている場合に発生する構成エラー。登録ファイルは次の場所にあります。

```
$ORACLE_HOME/diagnostics/config/registration/*.xml
```

登録ファイル内にエラーがあっても Log Loader の実行が妨げられることはありませんが、特定のログ・ファイルの内容がリポジトリにロードされなくなる可能性があります。通常、登録ファイルのエラーには、次の 2 つのタイプがあります。

- XML 構文エラー。ファイルの解析が妨げられます。Log Loader は、このエラーに遭遇すると、ファイルの内容を完全に無視します。
- 誤ったパスが構成ファイルに指定された場合。Log Loader は、指定されたパスでログ・ファイルを検出できないと、警告レベルの診断メッセージを発行します。これは常にエラーを示すものではありません。たとえば、Log Loader の起動時に、ログを生成するコンポーネントがアクティブではなく、ログ・ファイルがまだ作成されていないケースも考えられます。Log Loader はログ・ファイルの検索を継続し、ログ・ファイルが作成されると、メッセージの読み込みを開始します。
- Log Loader がログ・ファイルからメッセージを読み込む際にエラーが発生する場合があります。ログ・ファイルに、読み込みまたは解析ができない内容が含まれている場合、Log Loader は、そのファイルの内容の一部が読み込めないことを示すログ・メッセージを発行します。この場合、Log Loader は、エラーからのリカバリを試み、ログ・ファイルの読み込みを続行します。
- リポジトリにメッセージを書き込む際にエラーが発生する場合があります（ディスク・エラーなど）。この種のエラーは、システム管理者が注意する必要がある問題である場合があります。
- 現在指定されている最大ロード・サイズをログ・ファイルが超過しているために、ログ・ファイルの読み込みを Log Loader がスキップする場合に、エラー・メッセージが生成されます。最大ロード・サイズは、「ログ・ローダー・プロパティ」ページで指定できます。

この場合、Log Loader は、次の形式でエラー・メッセージのログを記録します。

```
Size of data to be read from log /logfile exceeds threshold of x bytes. Skipping y_skipped bytes and moving to end of log.
```

このメッセージは、読み込まれるデータのサイズが、指定されている最大ロード・サイズ *x* を超過しており、Log Loader がそのログ・ファイルの最後までスキップしたことを示しています。エラー・メッセージには、ログ・ファイルの名前 */logfile*、およびスキップされたバイト数 *y\_skipped* に関する情報が含まれます。

## ネットワーク構成の変更

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストのネットワーク構成を変更する手順を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 12.1 項「ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更」
- 12.2 項「ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行」
- 12.3 項「静的 IP アドレスと DHCP 間の変更」

### 12.1 ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更

この項では、ホストのホスト名、ドメイン名または IP アドレスを変更した場合の、Oracle Application Server Standard Edition One の更新に関する情報について説明します。

ネットワークの要件に応じて、ある時点で、ホストのホスト名、ドメイン名または IP アドレスを変更する必要がある場合があります。選択したインストール・タイプに応じて、これらの操作の一部またはすべてを実行できます。

表 12-1 に、ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの変更をサポートしているインストール・タイプと、適切な手順の指針を示します。

表 12-1 ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの変更のサポートされた手順

インストール・タイプ	ホスト名またはドメイン名の変更	IP アドレスの変更
中間層	サポート。 <a href="#">12.1.1 項「J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更」</a> を参照してください。	サポート。 使用しているオペレーティング・システムのアドレスを変更します。 Oracle Application Server を更新する必要はありません。
インフラストラクチャ : Identity Management および Metadata Repository	未サポート。	サポート。 <a href="#">12.1.2 項「メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更」</a> を参照してください。

表 12-1 ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの変更のサポートされた手順（続き）

インストール・タイプ	ホスト名またはドメイン名の変更	IP アドレスの変更
インフラストラクチャ : Metadata Repository のみ	未サポート。	サポート。 <a href="#">12.1.2 項「メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更」</a> を参照してください。
インフラストラクチャ : Identity Management のみ 次のコンポーネントが構成された Identity Management インストールに適用されます。	サポート。 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。	サポート。 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Internet Directory のみ</li> <li>■ OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services および Oracle Directory Integration and Provisioning（オプション）</li> <li>■ Oracle Internet Directory、OracleAS Single Sign-On、Oracle Delegated Administration Services および Oracle Directory Integration and Provisioning（オプション）</li> </ul>		
OracleAS Certificate Authority	サポート。 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。	サポート。 使用しているオペレーティング・システムのアドレスを変更するのみです。Oracle Application Server を更新する必要はありません。

## 12.1.1 J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更

この項では、J2EE and Web Services がインストールされているホストのホスト名、ドメイン名またはその両方を変更する手順を説明します。次の手順について説明します。

- [開始する前に知っておく必要のあること](#)
- [タスク 1: ホストの準備](#)
- [タスク 2: ホスト名の変更](#)
- [タスク 3: chgiphost スクリプトの実行](#)
- [タスク 4: 環境の再起動](#)
- [タスク 5: ファイルのホスト名の手動による更新](#)

### 開始する前に知っておく必要のあること

開始する前に、次の項目を確認してください。

- 中間層インスタンスが Oracle Internet Directory に登録されている場合、手順において、cn=orcladmin パスワードを指定する必要があります。
- より詳細な情報を確認できるようにするため、chgiphost スクリプトを実行する前に、ログ・レベルの変更を検討します。ログ・レベルの変更の詳細は、[12.1.3.1 項「chgiphost のログ・レベルの設定」](#)を参照してください。
- 前のホスト名が、構成ファイルに現れる可能性の高い文字列である場合、chgiphost コマンドが構成ファイルの更新を試行する際に、問題が発生する可能性があります。この問題を回避する方法については、[12.1.3.2 項「chgiphost スクリプトのカスタマイズ」](#)を参照してください。

- 開始する前に、現在のホスト名および IP アドレスをメモしておきます。これらの値は、手順において求められます。
- この手順を開始する前に、現在の環境をバックアップしておくことをお勧めします。環境のバックアップの詳細は、[第 14 章「バックアップおよびリカバリ」](#)を参照してください。

### タスク 1: ホストの準備

変更に合わせてホストを準備します。これには、インスタンスを削除して、すべてのプロセスを停止します。

1. ホストに、OracleAS ファイルベース・ファームで使用されるファイルベースのリポジトリを格納するインスタンスがある場合、そのファームからすべてのインスタンスを（他のホスト上にそのインスタンスがある場合でも）削除する必要があります。これは、ホスト名を変更すると、リポジトリ ID が変わるためです。したがって、ファームからすべてのインスタンスを削除し、ホスト名を変更して（これによってリポジトリ ID が変更される）、この手順の最後で新しいリポジトリ ID を使用してファームにインスタンスを戻す必要があります。

OracleAS ファイルベース・ファームからインスタンスを削除するには、そのインスタンスの Oracle ホームで次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl leavefarm
```

2. OracleAS データベース・ファームまたは別のホスト上のリポジトリを使用する OracleAS ファイルベース・ファームの一部である J2EE and Web Cache インスタンスがホストに含まれる場合、次のようにしてファームからそのインスタンスを削除します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl leavefarm
```

手順の最後で、ファームにインスタンスを追加して戻すことができます。

3. OracleAS Web Cache クラスタの一部である中間層インスタンスがホストに含まれる場合、キャッシュ・クラスタからそのインスタンスを削除します。手順の最後で、クラスタにインスタンスを追加して戻すことができます。

**関連項目：** キャッシュ・クラスタからキャッシュを削除する手順については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

4. ホスト上の各中間層インスタンスを停止します。これには、各 Oracle ホームで次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopall
```

5. 中間層インスタンスが OracleAS ファイルベース・ファームの一部であった場合、DCM デーモンがファイルベースのリポジトリ・インスタンスで実行されていることを確認します。これは、リポジトリ・インスタンスが同じホスト上にある場合もない場合も適用されます。

DCM デーモンが実行されているかどうかを確認するには、ファイルベースのリポジトリの Oracle ホームで次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl status
```

DCM デーモンを起動するには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startproc ias-component=dcm-daemon
```

6. ホストの再起動後に Oracle Application Server プロセスが自動的に起動されないようにします。これには、設定した自動化された起動スクリプトをすべて無効化します（/etc/init.d など）。
7. 中間層で使用されている Oracle Internet Directory が実行されていることを確認します。

### タスク 2: ホスト名の変更

新しいホスト名、ドメイン名またはその両方を使用して、オペレーティング・システムを更新するには、次の手順を実行します。

---

**注意：** 次の手順を実行する方法の詳細は、使用しているオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。必要に応じて、IP アドレスも変更できます。

---

1. オペレーティング・システムを更新して、ホスト名、ドメイン名またはその両方を適切に変更します。
2. 使用しているオペレーティング・システムで必要な場合は、ホストを再起動します。
3. ネットワーク上の別のホストから、現在のホストに対して ping できることを確認します。新しいホスト名を使用して ping を実行し、何も問題がないことを確認します。

### タスク 3: chgiphost スクリプトの実行

ホスト上の各中間層インスタンスに対して、chgiphost スクリプトを実行する必要があります。次の手順に進む前に、1 つの中間層インスタンスに対してすべての手順が完全に完了していることを確認してください。

コマンドを実行するには、次の手順を実行します。

1. 中間層インスタンスをインストールしたユーザーとして、ホストにログインします。
2. 環境変数 ORACLE\_HOME が、中間層の Oracle ホームに設定されていることを確認します。
3. 環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH を適切な値に設定します（表 7-1 を参照）。設定する必要がある実際の環境変数および値は、使用している UNIX オペレーティング・システムのタイプに依存します。
4. 中間層の Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/chgip/scripts
./chgiphost.sh -mid
```

表 12-2 では、chgiphost スクリプトの実行時に表示されるプロンプトについて説明します。

このプロンプトでは、カッコで囲まれた値が示される場合がありますが、それとは異なる値を入力したり、[Enter] キーを押して、示された値を受け入れることもできます。

表 12-2 chgiphost -mid のプロンプトと操作

プロンプト	操作
Enter fully qualified hostname (hostname.domainname) of destination	完全修飾された新しいホスト名を入力します。これは、新しいホスト名、ドメイン名またはその両方の場合があります。
Enter valid IP Address of destination	ホストの IP アドレスを変更した場合、新しい IP アドレスを入力します。 変更していない場合は、現在の IP アドレスを入力します。
Enter valid IP Address of source	ホストの IP アドレスを変更した場合、古い IP アドレスを入力します。 変更していない場合は、現在の IP アドレスを入力します。
OIDAdmin Password:	この中間層インスタンスが登録されている Oracle Internet Directory の cn=orcladmin パスワードを入力します。

5. 次のディレクトリにあるファイルでエラーを確認して、ツールが正常に実行されたことを確認します。

```
$ORACLE_HOME/chgip/log
```

#### タスク 4: 環境の再起動

中間層インスタンスを再起動し、手順を開始する前の状態に構成をリストアします。

1. ホスト上の各中間層インスタンスを起動します。これには、各 Oracle ホーム・ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl startall
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

2. この手順の最初で、OracleAS Web Cache クラスタからインスタンスを削除した場合、それらをキャッシュ・クラスタに追加して戻します。キャッシュ・クラスタにキャッシュを追加する手順については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

3. OracleAS ファイルベース・ファームで使用されるファイルベースのリポジトリを格納しているインスタンスがホストにあった場合は、次の手順を実行します。

- a. 新しいファームの新しいリポジトリ ID を取得します。これには、そのインスタンスの Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getRepositoryID
```

- b. OracleAS ファイルベース・ファームを再作成します。これには、前述の手順で取得した新しいリポジトリ ID を使用して、そのインスタンスを新しいファームに追加します。repository\_ID 変数の形式は、hostname:port です。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl joinfarm -r repository_ID
```

- c. 前述の手順のコマンドを使用して、他のホスト上のすべてのインスタンスを新しいファームに追加して戻します。

4. この手順の最初で、別のホスト上のリポジトリを使用する OracleAS ファイルベース・ファームから J2EE and Web Cache インスタンスを削除した場合、それらを次のようにして追加して戻します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl joinfarm -r repository_ID
```

このコマンドの repository\_ID は、ファイルベース・リポジトリの Oracle ホームで次のコマンドを実行することによって戻される hostname:port 値です。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl getRepositoryID
```

5. この手順の最初で、OracleAS データベース・ファームから J2EE and Web Cache インスタンスを削除した場合、それらを次のようにして追加して戻します。

```
$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl joinfarm
```

6. この手順の最初で、Oracle Application Server を自動的に起動するためのいずれかのプロセスを無効化した場合、それらを有効化します。

#### タスク 5: ファイルのホスト名の手動による更新

ファイルを編集して、Oracle ホームのパスなどのユーザー定義のパラメータの一部としてホスト名を入力した場合、chgiphost.sh スクリプトを実行しても、そのホスト名は自動的に更新されません。このようなケースでホスト名を更新するには、ファイルを手動で編集する必要があります。たとえば、plsql.conf ファイルが、/net/dsun1/private/... など、ホスト名が含まれた NFS パスを持つ場合などです。

chgiphost.sh スクリプトでは、ドキュメント・ファイル内のホスト名の参照も編集できません。ホスト名を更新するには、これらのファイルを手動で編集する必要があります。このようなファイルの例として、\$ORACLE\_HOME/Apache/Apache/htdocs ディレクトリの次のファイルがあります。

- index.html.de
- index.html.es\_ES
- index.html.fr

- index.html.it
- index.html.ja
- index.html.ko
- index.html.pt\_BR
- index.html.zh\_CN
- index.html.zh\_TW

## 12.1.2 メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更

この項では、Identity Management および新しい Metadata Repository を使用した OracleAS Portal インストールを持つホストの IP アドレスを変更する方法について説明します。次の手順について説明します。

- [開始する前に知っておく必要のあること](#)
- [タスク 1: 中間層インスタンスの停止](#)
- [タスク 2: ホストの準備](#)
- [タスク 3: IP アドレスの変更](#)
- [タスク 4: インフラストラクチャの更新](#)
- [タスク 5: 環境の再起動](#)

### 開始する前に知っておく必要のあること

この手順を開始する前に、次の項目を確認してください。

- 開始する前に、古い IP アドレスをメモしておきます。この値は、手順において求められます。
- この手順を開始する前に、現在の環境をバックアップしておくことをお勧めします。環境のバックアップの詳細は、[第 14 章](#)を参照してください。

### タスク 1: 中間層インスタンスの停止

インフラストラクチャのインストールを使用する中間層インスタンスをすべて停止します。

### タスク 2: ホストの準備

変更に合わせてホストを準備します。これには、すべてのプロセスを停止します。すべてのプロセスを停止するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID を設定します。
2. 次のようにして、インフラストラクチャを停止します。

```
emctl stop iasconsole
opmnctl stopall
lsnrctl stop

sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> shutdown
SQL> quit
```

3. すべての Oracle Application Server プロセスが停止したことを確認します。
4. ホストの再起動後に Oracle Application Server プロセスが自動的に起動されないようにします。これには、設定した自動化された起動スクリプトをすべて無効化します (/etc/init.d など)。



**タスク 3: IP アドレスの変更**

新しい IP アドレスを使用してオペレーティング・システムを更新し、ホストを再起動してから、そのホストがネットワーク上で正常に稼働していることを確認します。この方法の詳細は、使用しているオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

1. オペレーティング・システムを更新して、IP アドレスを適切に変更します。
2. 使用しているオペレーティング・システムで必要な場合は、ホストを再起動します。
3. ネットワーク上の別のホストから、現在のホストに対して ping できることを確認します。新しい IP アドレスを使用して ping を実行し、何も問題がないことを確認します。

**タスク 4: インフラストラクチャの更新**

新しい IP アドレスを使用して、ホスト上のインフラストラクチャを更新します。

1. インフラストラクチャをインストールしたユーザーとして、ホストにログインします。
2. 環境変数 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID を設定します。
3. 環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH を適切な値に設定します (表 7-1 を参照)。設定する必要がある実際の環境変数および値は、使用している UNIX オペレーティング・システムのタイプに依存します。

4. データベースを起動します。

```
sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> startup
SQL> quit
```

```
lsnrctl start
```

5. OPMN を起動します。

```
opmnctl start
```

6. Oracle Internet Directory を起動します。

```
opmnctl startproc ias-component=OID process-type=OID
```

7. インフラストラクチャの Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/chgip/scripts
./chgiphost.sh -infra
```

chgiphost スクリプトでは、古い IP アドレスと新しい IP アドレスを入力するように求められます。

8. 次のディレクトリにあるファイルでエラーを確認して、ツールが正常に実行されたことを確認します。

```
$ORACLE_HOME/chgip/log
```

**タスク 5: 環境の再起動**

インフラストラクチャの起動を完了し、インフラストラクチャを使用する中間層インスタンスをすべて起動します。

1. インフラストラクチャの起動を完了します。

```
opmnctl startall
emctl start iasconsole
```

2. 中間層インスタンスが、インフラストラクチャと同じホスト上にある場合、中間層プロセスを再起動する前に、中間層インスタンスで chgiphost スクリプトを実行する必要があります。

3. この手順の最初で、Oracle Application Server を自動的に起動するためのいずれかのプロセスを無効化した場合、それらを有効化します。

### 12.1.3 ホスト名またはドメイン名の変更に関するその他の設定

この項では、Oracle Application Server ホストのホスト名またはドメイン名の変更に適用できる、次のその他の設定について説明します。

- [12.1.3.1 項「chgiphost のログ・レベルの設定」](#)
- [12.1.3.2 項「chgiphost スクリプトのカスタマイズ」](#)
- [12.1.3.3 項「ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ」](#)

#### 12.1.3.1 chgiphost のログ・レベルの設定

デフォルトでは、chgiphost スクリプトのコンソール・ログ・レベルは、SEVERE です。このログ・レベルでは、chgiphost の実行の際に、重要な情報のみが出力されます。詳細な進捗状況を確認する場合は、次のようにコンソール・ログ・レベルを CONFIG に設定します。

1. 次のファイルを編集します。

```
$ORACLE_HOME/chgip/config/chgip.log.properties
```

2. java.util.logging.ConsoleHandler.level パラメータを CONFIG に変更します。

```
java.util.logging.ConsoleHandler.level = CONFIG
```

#### 12.1.3.2 chgiphost スクリプトのカスタマイズ

デフォルトでは、chgiphost スクリプトは、新しいホスト名を使用して Oracle ホームの主要な構成ファイルを更新します。インストールにおいて、次のいずれかのケースが適用できる場合、chgiphost スクリプトの挙動のカスタマイズを検討できます。

- ホスト名が含まれる構成ファイルを追加で作成し、chgiphost スクリプトでこれらのファイルを更新する場合

これらのファイルを更新するには、chgiphost を実行する前に、それらのファイルのフルパス名を次のファイルに追加します。

```
$ORACLE_HOME/chgip/config/hostname.lst
```

- 古いホスト名が非常に短い（1 文字または 2 文字）、または構成ファイルに現れる可能性の高い文字列である場合

chgiphost を実行する前に、hostname.lst にリストされている各ファイルを調べ、それらのファイルの設定に古いホスト名が含まれていないかどうかを確認します。一致を見つけた場合、chgiphost を実行してからそれらの設定を修正します。

- Oracle ホームのフルパスにホスト名が含まれる場合

この場合、chgiphost スクリプトは、構成ファイルを適切に更新できない場合があります。この問題を回避するには、FileFixer と呼ばれる Java ユーティリティを使用します。FileFixer は、正規表現の一致を使用してファイル内の特定のテキスト文字列を検索し、一致した文字列を新しい値に更新します。FileFixer では一度に 1 つの行でパターンを検索します。行をまたいでパターンの照合を行うことはできません。

FileFixer を使用するには、次の手順を実行します。

1. 次のファイルのコピーを作成します。

```
$ORACLE_HOME/chgip/config/hostname_short_sample.lst.xml
```

2. コピー・ファイルを編集して、古いホスト名および新しいホスト名に必要な正規表現の一致を指定します。ファイルには、この方法の例が含まれています。

3. chgiphost スクリプトの実行時にそのファイルを指定します。

```
chgiphost option -hostnameShortXml full_path_to_your_xml_file
```

たとえば、ファイルの名前が /mydir/my\_sample.lst.xml で、中間層のインストールを更新している場合、次のように chgiphost を実行します。

```
chgiphost -mid -hostnameShortXml /mydir/my_sample.lst.xml
```

### 12.1.3.3 ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ

この項では、chgiphost.sh スクリプトの使用時に遭遇する可能性がある一般的なエラーからのリカバリ方法について説明します。次のケースを考えます。

- ケース 1: 目的の名前を誤って指定した場合
- ケース 2: chgiphost.sh の実行時にエラーが発生した場合

#### ケース 1: 目的の名前を誤って指定した場合

chgiphost.sh スクリプトを実行したが、目的の名前を誤って指定した場合を考えます。このケースでは、chgiphost.sh を再度実行することによって、エラーを修正できます。次に詳細を示します。

現在のソース・ホスト名が loire985 で、誤って指定した目的のホスト名が mqa985 で、正しい目的のホスト名が sqb985 だった場合を考えます。最初は、source = loire985 および destination = mqa985 を指定して chgiphost.sh を実行したことになります。

このエラーからリカバリするには、次の手順を実行します。

1. source = mqa985 および destination = sqb985 を指定して chgiphost.sh を実行します。
2. source = loire985 および destination = sqb985 を指定して chgiphost.sh を再度実行します。

#### ケース 2: chgiphost.sh の実行時にエラーが発生した場合

たとえば、Oracle Internet Directory で誤ったパスワードを入力すると、エラー・メッセージが表示されます。この場合、前と同じソースおよび目的のホスト名を指定して chgiphost.sh を再度実行し、求められた際に確実に正しいパスワードを入力する必要があります。

chgiphost.sh の実行時にエラーが発生した場合、chgiphost.sh を再び実行する前にそのエラーを修正する必要があります。

## 12.2 ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストをネットワークに接続された状態と接続されていない状態間で移行する方法について説明します。ネットワークに接続する際は、DHCP または静的 IP アドレスを使用する場合があります。たとえば、ラップトップ・コンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしているが、別のネットワークに接続して使用する場合などに、これらの手順を使用できます。

Oracle Application Server Standard Edition One をネットワークに接続された状態と接続されていない状態間で移行する場合、次の制限が適用されます。

- ホストには、インフラストラクチャおよび中間層インスタンス、またはインフラストラクチャを使用しない J2EE and Web Cache インスタンスが含まれている必要があります。つまり、Oracle Application Server 環境全体がホスト上にある必要があります。
- DHCP は、ループバック・モードで使用されている必要があります。詳細は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。
- IP アドレスの変更のみがサポートされます。ホスト名は変更してはいけません。

- DHCP モードのホストは、デフォルトのホスト名 (`localhost.localdomain`) を使用できません。標準的なホスト名を使用するようにホストを構成する必要があります。ループバック IP はそのホスト名に変換できる必要があります。
- ネットワークに接続されていない状態のすべてのインストールでは、ループバック・アダプタが必要となります (DHCP または静的 IP)。詳細は、『Oracle Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

### 12.2.1 ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (静的 IP アドレス)

この手順では、標準的なホスト名 (`localhost` ではない) を使用してネットワークに接続されていないホストに Oracle Application Server をインストールしたが、ネットワークに接続された状態に移行して、静的 IP アドレスを使用すると仮定します。IP アドレスはデフォルトのループバック IP か、標準的な任意の IP アドレスとします。

ネットワークに接続された状態に移行するには、そのホストをネットワークに接続するのみです。Oracle Application Server を更新する必要はありません。

### 12.2.2 ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (DHCP)

この手順では、標準的なホスト名 (`localhost` ではない) を使用してネットワークに接続されていないホストにインストールしたが、ネットワークに接続された状態に移行して、DHCP を使用すると仮定します。ホストの IP アドレスは任意の静的 IP アドレスか、ループバック IP アドレスとし、そのホスト名に設定する必要があります。

ネットワークに接続された状態に移行するには、DHCP を使用してホストをネットワークに接続し、そのホスト名をループバック IP アドレスのみに設定します。

### 12.2.3 ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (静的 IP アドレス)

静的 IP を使用して、ホストがネットワークに接続されている状態から、ネットワークに接続されていない状態に移行する場合は、次の手順を実行します。

1. `/etc/hosts` ファイルを構成して、IP アドレスおよびホスト名がローカルに解決されるようにします。
2. ホストをネットワークから切断します。

ホスト名または IP アドレスを変更する必要はありません。

### 12.2.4 ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (DHCP)

ループバック・モードで DHCP を使用して、ホストがネットワークに接続されている状態から、ネットワークに接続されていない状態に移行する場合は、次の手順を実行します。

1. `/etc/hosts` ファイルを構成して、IP アドレスおよびホスト名がローカルに解決されるようにします。
2. ホストをネットワークから切断します。

ホスト名または IP アドレスを変更する必要はありません。

## 12.3 静的 IP アドレスと DHCP 間の変更

この項では、静的 IP アドレスから DHCP に、および、DHCP から静的 IP アドレスに変更するための手順を説明します。静的 IP アドレス上にインストールしているが、より移動できるようにするため DHCP を使用する場合や、DHCP を使用しているが、静的 IP アドレスを使用してネットワークに接続する必要がある場合などに、これらの手順を使用できます。

静的 IP アドレスと DHCP 間の変更では、次の仮定と制限が適用されます。

- インフラストラクチャおよび中間層を含む、Oracle Application Server 環境全体がホスト上にある必要があります。
- DHCP は、ループバック・モードで使用されている必要があります。詳細は、[第 2 章「システムおよびインストール要件」](#)を参照してください。
- IP アドレスの変更のみがサポートされます。ホスト名は変更してはいけません。
- DHCP モードのホストは、デフォルトのホスト名 (localhost.localdomain) を使用できません。標準的なホスト名を使用するようにホストを構成する必要があり、ループバック IP はそのホスト名に変換する必要があります。

この項では、次の項目について説明します。

- [12.3.1 項「静的 IP アドレスから DHCP への変更」](#)
- [12.3.2 項「DHCP から静的 IP アドレスへの変更」](#)

### 12.3.1 静的 IP アドレスから DHCP への変更

静的 IP アドレスから DHCP にホストを変更するには、次の手順を実行します。

1. ホストを DHCP に変換する前に、ループバック IP アドレスに関連付けられたホスト名を持つようにホストを構成します。
2. ホストを DHCP に変換します。Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。

### 12.3.2 DHCP から静的 IP アドレスへの変更

DHCP から静的 IP アドレスにホストを変更するには、ホストで静的 IP アドレスが使用されるように設定します。

Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。



---

## SSL の有効化

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の Secure Sockets Layer (SSL) を有効化する手順について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 13.1 項「インフラストラクチャにおける SSL の通信経路」
- 13.2 項「インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク」
- 13.3 項「中間層の SSL 通信経路」
- 13.4 項「中間層の一般的な SSL 構成タスク」

### 13.1 インフラストラクチャにおける SSL の通信経路

Identity Management をインストールする際、Oracle Internet Directory のモードを選択するように求められます。デフォルトのモードはデュアル・モードです。このモードでは、特定のコンポーネントが非 SSL 接続を使用して Oracle Internet Directory にアクセスできます。インストールにおいて SSL モードを選択すると、インストールされたすべてのコンポーネントがディレクトリに接続する際に SSL を使用する必要があります。

---

**注意：** SSL の構成を開始する前に、Oracle Internet Directory のモードを確認します。oidadmin ツールを起動し、Oracle Directory Manager の SSL モードを表示します。Directory Server に移動し、「プロパティの表示」を選択して、「SSL 設定」を選択します。

---

この項では、OracleAS Infrastructure で使用されるすべての SSL 通信経路を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

次に、OracleAS Infrastructure を介した通信経路と、関連する SSL 構成手順を示します。

- **Oracle HTTP Server から OC4J\_SECURITY インスタンス**

SSL を介した Apache Jserv Protocol (AJP) 通信を構成するには、mod\_oc4j の iaspt デーモンとの通信方法を構成する必要があります。これを行うには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の、SSL を使用するための mod\_oc4j の構成に関する項を参照してください。

- **Oracle HTTP Server から iaspt (ポート・トンネリング) を介して OC4J\_SECURITY インスタンス**

SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の、ポート・トンネリングに関する項を参照してください。

## ■ OC4J\_SECURITY インスタンスから Oracle Internet Directory

SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の手順を実行してください。このマニュアルでは、次の SSL 通信の構成方法について説明しています。

- ブラウザと OracleAS Single Sign-On サーバー間（Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照）
- OracleAS Single Sign-On サーバーと Oracle Internet Directory サーバー間（Single Sign-On Server と Oracle Internet Directory 間の SSL の構成に関する項を参照）

Oracle Delegated Administration Services では、SSL 用に Oracle HTTP Server を構成した後では、SSL が有効化されます。Oracle Internet Directory への Oracle Delegated Administration Services の通信では、常に SSL が有効化されています。SSL を有効化するために実行すべき構成作業はありません。

## ■ OC4J\_SECURITY インスタンスからメタデータ・リポジトリ・データベース、および Oracle Internet Directory からメタデータ・リポジトリ・データベース

指定した SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されている場合、次のように SSL プロトコルおよび SSL ポートを JDBC URL に指定して、アプリケーションに要求することのみが必要となります。

```
ldaps://host:sslport/...
```

---

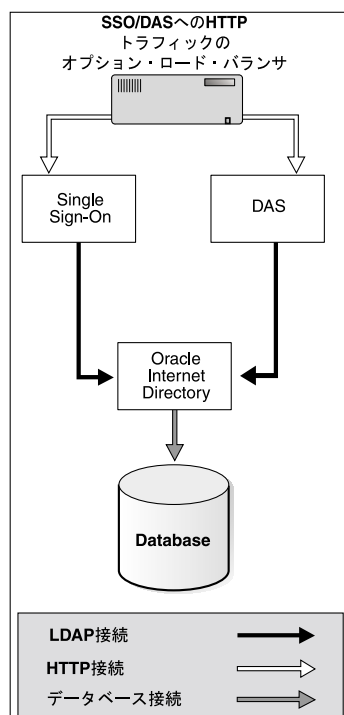
**注意：** セキュアな接続を使用する場合、プロトコルの名前に「s」を追加する必要があります。たとえば、ldap ではなく ldaps を使用します。

---

SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されていない場合、その構成を変更する必要があります。

**関連項目：**『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』（「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」）を参照してください。

図 13-1 Identity Management コンポーネントと SSL 接続経路





## 13.2 インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク

この項では、個々のコンポーネントで SSL を構成するための手順を示している Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルへの参照を提供します。この項の内容は次のとおりです。

- 13.2.1 項「OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services の SSL の構成」
- 13.2.2 項「Oracle Internet Directory の SSL の構成」
- 13.2.3 項「Identity Management データベースの SSL の構成」

### 13.2.1 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services の SSL の構成

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の手順を実行して、次の SSL 通信を構成します。

- ブラウザと OracleAS Single Sign-On サーバー間（Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照）
- OracleAS Single Sign-On サーバーと Oracle Internet Directory サーバー間（Single Sign-On Server と Oracle Internet Directory 間の SSL の構成に関する項を参照）

Oracle Delegated Administration Services では、SSL 用に Oracle HTTP Server を構成した後では、SSL が有効化されます（Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照）。Oracle Internet Directory への Oracle Delegated Administration Services の通信では、常に SSL が有効化されています。SSL を有効化するために実行すべき構成作業はありません。

### 13.2.2 Oracle Internet Directory の SSL の構成

Oracle Internet Directory での SSL 通信の構成手順は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』（「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」）
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』（「SSL パラメータの構成」）
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』（10g リリース 2 (10.1.2) における SSL の使用制限に関する項）

### 13.2.3 Identity Management データベースの SSL の構成

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「Identity Management インフラストラクチャ・データベースの再構成」の手順を実行して、Identity Management データベースの SSL を構成します。

## 13.3 中間層の SSL 通信経路

この項では、Oracle Application Server の中間層インストール・タイプで使用するすべての SSL 通信経路を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

次に、Oracle Application Server 中間層を介した通信経路をリストし、関連する SSL 構成手順について説明します。

- 外部クライアントまたはロード・バランサから Oracle HTTP Server

SSL 用に Oracle HTTP Server を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「SSL の有効化」の手順を実行してください。

- **外部クライアントまたはロード・バランサから OracleAS Web Cache**

SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。

- **OracleAS Web Cache から Oracle HTTP Server**

SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。

- **Oracle HTTP Server から OC4J アプリケーション (AJP)**

SSL を介した AJP 通信を構成するには、mod\_oc4j の iaspt デーモンとの通信方法を構成する必要があります。これを行うには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の SSL を使用するための mod\_oc4j の構成に関する項を参照してください。

- **Oracle HTTP Server から iaspt を介して OC4J**

SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』のポート・トンネリングに関する項を参照してください。

- **OC4J (JAAS Provider) から Oracle Internet Directory**

JAAS Provider を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の手順を実行します。SSL 用に JAAS Provider を構成するには、SSL\_ONLY\_FLAG を true に設定します。

- **OC4J からデータベース (ASO)**

指定した SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されている場合、次のように SSL プロトコルおよび SSL ポートを JDBC URL に指定して、アプリケーションに要求することのみが必要となります。

```
ldaps://host:sslport/...
```

セキュアな接続を使用する場合、プロトコルの名前に「s」を追加する必要があります。たとえば、ldap ではなく ldaps を使用します。

SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されていない場合、その構成を変更する必要があります。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」を参照してください。

- **HTTP を介した ORMI (Oracle Remote Method Invocation、カスタム・ワイヤ・プロトコル)、および SSL を介した HTTP**

SSL を介した ORMI はサポートされていません。同様の機能を構成するには、HTTP を介した ORMI を構成してから、SSL 用に HTTP を構成します。

ORMI または HTTP を構成する方法の手順は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「HTTP を介した ORMI トンネリングの構成」を参照してください。

- **スタンドアロン OC4J の SSL (HTTPS)**

SSL のこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の、クライアントと OC4J インスタンス間の通信をセキュアに保つための SSL の使用方法を説明している「OC4J の SSL 用構成手順」を実行してください。

- **OracleAS Portal Parallel Page Engine (OC4J\_PORTAL インスタンスのサブレット) から OracleAS Web Cache (HTTPS)**

SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の「OC4J の SSL 用構成手順」を実行してください。

## 13.4 中間層の一般的な SSL 構成タスク

この項では、Oracle Application Server の中間層インストール・タイプで一般的に使用される SSL 構成の一部を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

### 13.4.1 OracleAS Web Cache における SSL の有効化

OracleAS Web Cache は、すべての Oracle Application Server の中間層インストールの一部です。SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。

### 13.4.2 Oracle HTTP Server における SSL の有効化

Oracle HTTP Server は、すべての Oracle Application Server の中間層インストールの一部です。SSL 用に Oracle HTTP Server を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「SSL の有効化」の手順を実行してください。

### 13.4.3 OracleAS Portal における SSL の有効化

OracleAS Portal では、Parallel Page Engine、Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache など、HTTP 通信に様々なコンポーネントが使用されます。これらの各コンポーネントは、クライアントまたはサーバーとして機能できます。結果として、HTTP ではなく、HTTPS プロトコルを使用するように中間層の各コンポーネントを個々に構成できます。

これらのコンポーネントは、次の個別のネットワーク・ホップを介して OracleAS Portal と対話します。

- クライアントのブラウザと OracleAS Portal 環境のエントリ・ポイント間。エントリ・ポイントは、OracleAS Web Cache またはネットワーク末端のハードウェア・デバイス（リバース・プロキシや SSL アクセラレータなど）場合があります。
- Oracle Application Server 中間層の Oracle HTTP Server と OracleAS Web Cache 間。
- Oracle Internet Directory（またはインフラストラクチャ）層または OracleAS Single Sign-On の Oracle HTTP Server とクライアントのブラウザ間。
- 中間層の Parallel Page Engine（PPE）と OracleAS Web Cache またはフロントエンドのリバース・プロキシ間のループバック接続。
- Parallel Page Engine（PPE）と、ポートレット・コンテンツを提供するリモート Web プロバイダ間。
- OracleAS Portal インフラストラクチャと Oracle Internet Directory サーバー間。

『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の次のセクションには、OracleAS Portal の最も一般的な SSL 構成の概要と、それらを実装するための手順が示されています。

- OracleAS Single Sign-On との SSL 接続：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Single Sign-On へのセキュアな接続を構成します。
- OracleAS Web Cache との SSL 接続：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Web Cache へのセキュアな接続を構成します。
- OracleAS Portal の全体にわたる SSL：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Portal 全体のセキュアな接続を構成します。
- Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、非 SSL モードで Oracle Application Server を実行して、サイトが SSL URL を介して外部からアクセスできるように OracleAS Portal を構成します。

---

---

**注意：** OracleAS Portal の保護に関する全般的な情報は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の第 6 章「OracleAS Portal の保護」を参照してください。

---

---

#### 13.4.4 Application Server Control の SSL の構成

Application Server Control の SSL を構成するには、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

## バックアップおよびリカバリ

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の構成ファイルおよび OracleAS Metadata Repository をバックアップおよびリカバリする方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 14.1 項「バックアップおよびリカバリ・サービスの比較」
- 14.2 項「Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ」
- 14.3 項「OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ」
- 14.4 項「バックアップの手順」

### 14.1 バックアップおよびリカバリ・サービスの比較

バックアップおよびリカバリを実行するには、Application Server Control コンソールを介する方法と OracleAS Backup and Recovery Tool を使用する方法の 2 つの方法があります。ただし、Application Server Control コンソールでバックアップできるのは、構成ファイルと OracleAS Metadata Repository のみです。環境全体のバックアップを実行するには、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用する必要があります。表 14-1 に、バックアップおよびリカバリの 2 つの方法の違いを示します。

表 14-1 バックアップおよびリカバリ・サービスの比較

ファイル・タイプ/データ型	Application Server Control コンソールによるバックアップ	OracleAS Backup and Recovery Tool によるバックアップ
<b>Oracle ソフトウェア・ファイル</b>  ライブラリ・ファイルおよびバイナリ・ファイルなどの静的ファイル。これらのファイルは、中間層およびインフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、Oracle 製品のパッチを適用するか、ソフトウェアをインストールまたは再インストールした場合にのみ変更されます。	不可	可
<b>Oracle 構成ファイル</b>  OracleAS Portal または J2EE などの様々なコンポーネントの構成ファイル。これらのファイルは、中間層およびインフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、通常、構成を変更した場合や、新しいアプリケーションをデプロイした場合など、頻繁に変更されます。	可	可

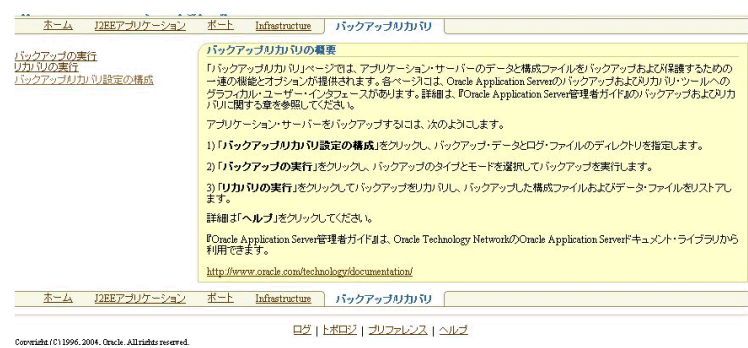
表 14-1 バックアップおよびリカバリ・サービスの比較（続き）

ファイル・タイプ/データ型	Application Server Control コンソールに よるバックアップ	OracleAS Backup and Recovery Tool による バックアップ
OracleAS Metadata Repository ファイル	可	可
Metadata Repository を構成しているデータファイルおよび制御ファイル。これらのファイルは、インフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、Oracle Application Server Standard Edition One の通常の操作において頻繁に変更されます。		

14.2 Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ

Application Server Control コンソールで、図 14-1 に示すように、「バックアップ/リカバリ」をクリックして「バックアップ / リカバリ」ページにアクセスします。

図 14-1 「バックアップ / リカバリ」ページ

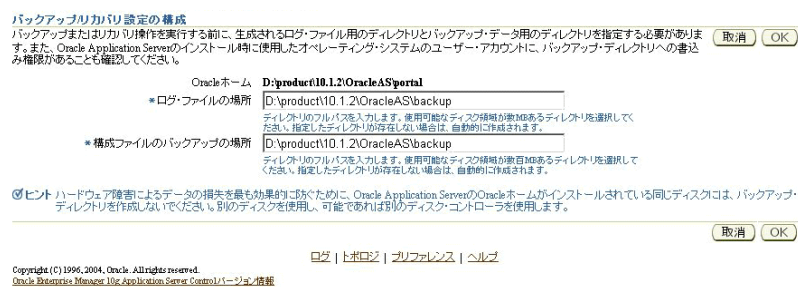


バックアップまたはリカバリを実行する前に、バックアップおよびリカバリの設定を構成する必要があります。この設定を行うのは、最初にこのページにアクセスしたときのみです。この構成設定は、その後のすべてのバックアップおよびリカバリ操作用に保存されます。設定は、いつでもこのページにアクセスして変更できます。

14.2.1 バックアップ / リカバリ設定の構成

「バックアップ / リカバリ」ページで、「バックアップ / リカバリ設定の構成」リンクをクリックして、「バックアップ / リカバリ設定の構成」ページ（図 14-2）を開きます。

図 14-2 バックアップ / リカバリ設定の構成



OracleAS Infrastructure と中間層インスタンスの両方で、次の情報を指定する必要があります。

#### ■ 「ログ・ファイルの場所」

バックアップおよびリカバリの手順では、あらゆる種類のトラブルシューティングに有効なログが生成されます。「ログ・ファイルの場所」フィールドに、ログ・ファイルを保管するディレクトリのフルパスを指定します。指定したディレクトリが存在しない場合、自動的に作成されます。

#### ■ 「構成ファイルのバックアップの場所」

バックアップされたデータを保管するディレクトリのフルパスを入力します。現在の Oracle Application Server Standard Edition One ファイルが存在する場所からは影響を受けない場所を指定するか、バックアップ後にそうした場所にすぐに移動することをお勧めします。指定したディレクトリが存在しない場合、自動的に作成されます。

OracleAS Infrastructure インスタンスをバックアップする場合、次の情報も入力するように求められます。

#### - 「メタデータ・リポジトリ・データベース・バックアップの場所」

Metadata Repository ・データベースの場所のフルパスを入力します。デフォルトでは次の場所に指定されています。

`INFRA_ORACLE_HOME/oradata/seone`

たとえば、次のように指定します。

`/product/10.1.2/OracleAS/infra/oradata/seone`

#### - 「メタデータ・リポジトリ SID」

データベース・サービス ID (SID) を指定します。デフォルトは `seone` です。

バックアップおよびリカバリ設定の指定が完了したら、「OK」をクリックします。

## 14.2.2 バックアップの実行

「バックアップ / リカバリ」 ページで、「バックアップの実行」リンクをクリックして、「バックアップの実行」 ページ (図 14-3) を開きます。

図 14-3 バックアップの実行

バックアップの実行

インストール・タイプ	Midtier	取消	OK
構成ファイルのバックアップの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup		
ログ・ファイルの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup		

この Application Server インストールのバックアップのモードを選択します。

- ☒ 全体オンライン・バックアップ  
インスタンス構成ファイルの完全なバックアップを実行します。インスタンスは停止されません。
- ☐ 増分オンライン・バックアップ  
インスタンス構成ファイルの増分バックアップを実行します。インスタンスは停止されません。最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップされます。
- ☐ 全体コールド・バックアップ  
インスタンス構成ファイルの完全なバックアップを実行します。インスタンスが停止されます。
- ☐ 増分コールド・バックアップ  
インスタンス構成ファイルの増分バックアップを実行します。インスタンスが停止されます。最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップされます。

取消 OK

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.  
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control バージョン情報

ログ | トラブleshooting | リリース | ヘルプ

このページでは、次のいずれかのバックアップ・タイプを選択できます。

#### ■ 「全体オンライン・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの全体バックアップです。このオプションを選択しても、インスタンスが停止されることはありません。

### ■ 「増分オンライン・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの増分バックアップです。増分バックアップでは、最後の全体または増分バックアップ後に変更されたファイルのみがバックアップされます。このオプションを選択しても、インスタンスが停止されることはありません。

### ■ 「全体コールド・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの全体バックアップです。このオプションを選択すると、インスタンスが停止されます。

### ■ 「増分コールド・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの増分バックアップです。このオプションを選択すると、インスタンスが停止されます。

実行するバックアップのタイプを選択したら、「OK」をクリックしてバックアップを開始します。

## 14.2.3 リカバリの実行

「バックアップ / リカバリ」ページで、「リカバリの実行」リンクをクリックして、「リカバリの実行」ページ (図 14-4) を開きます。

図 14-4 リカバリの実行

The screenshot shows the 'Recovery Execution' page. At the top, there's a table with columns: 'インストールタイプ' (Install Type), '構成ファイルのバックアップの場所' (Location of backup files), and 'ログファイルの場所' (Location of log files). The values are: 'Midtier', 'D:\product\10.1.2\OracleAS\Backup', and 'D:\product\10.1.2\OracleAS\Backup'. Below this, there's a text area stating: 'リカバリするバックアップを選択してください。バックアップのリストには、バックアップ・モードにかかわらず、すべての正常なバックアップが含まれます。' (Select the backup to recover. The list of backups includes all normal backups, regardless of the backup mode). Below the text area, there's a dropdown menu for '\*使用可能なバックアップ' (Available backups) showing '2005/08/01 17時22分21秒 JST'. At the bottom, there are links: 'ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ' (Log | Topology | Preferences | Help). The footer contains copyright information: 'Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved. Oracle Database Manager 10g Application Server Control (バージョン 10.1.2.0.4) 情報'.

使用可能なバックアップのリストからいずれかのバックアップを選択し、「OK」をクリックしてリカバリを実行します。

## 14.3 OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ

OracleAS Backup and Recovery Tool は、構成ファイルと Metadata Repository のバックアップおよびリカバリを実行するために使用します。また、独自の構成ファイルと Metadata Repository のバックアップおよびリカバリ・スクリプトを設定するためにも使用できます。

この項では、次の項目について説明します。

- 14.3.1 項「OracleAS Backup and Recovery Tool の取得」
- 14.3.2 項「OracleAS Backup and Recovery Tool の構成」
- 14.3.3 項「構成ファイル用のツールのカスタマイズ」
- 14.3.4 項「OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要」

### 14.3.1 OracleAS Backup and Recovery Tool の取得

OracleAS Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server Standard Edition One インストールまたは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD-ROM から取得できます。



**Oracle Application Server Standard Edition One のインストールからの取得**

Oracle Application Server Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールの一部としてインストールされます。このツールは、`Oracle_Home/backup_restore` ディレクトリにあります。表 14-2 に、この `backup_restore` ディレクトリに格納されている可能性のあるファイルをリストします。

**表 14-2 OracleAS Backup and Recovery Tool のファイル**

ファイル	説明
<code>config/config.inp</code>	現在の環境にあわせてツールをカスタマイズするためのパラメータを持つ主要な構成ファイル。
<code>config/config_component_files.inp</code>	コンポーネント構成ファイル。個々のコンポーネントの構成ファイルのリストが含まれています。これらは、構成ファイルのバックアップの実行時にバックアップするファイルを指定します。
<code>*.tmpl</code>	RMAN を使用してデータベースのバックアップおよびリカバリ操作を実行するためのスクリプトのテンプレート。最初にツールを構成すると、各 <code>.tmpl</code> ファイルから、カスタマイズされた <code>.dat</code> ファイルが作成されます。
<code>*.sql</code>	リポジトリ・データベースをチェックするためにツールで使用される SQL スクリプト。

---

**注意：** パスは OracleAS Backup and Recovery Tool ディレクトリのルートに対する相対パスです。

---

**関連項目：** Oracle Application Server のインストールの詳細は、『Oracle Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

**OracleAS Metadata Repository Creation Assistant CD-ROM からの取得**

既存のデータベースで RepCA を実行している場合、OracleAS Backup and Recovery Tool を手動でインストールする必要があります。OracleAS Backup and Recovery Tool をインストールする前に、次の注意事項を確認してください。

- ツールは、対応するインストールと同じホスト上にインストールする必要があります。ツールは、対応するインストールの Oracle ホーム・ディレクトリ内か、Oracle ホーム外のディレクトリにインストールできます。
- このツールは、Perl 5.6.1 以降のインタプリタを必要とする Perl スクリプトです。Perl のサイト (<http://www.perl.org>) からこのインタプリタを取得するか、Oracle Application Server に付属している次の Perl インタプリタを使用できます。

```
$ORACLE_HOME/perl/bin/perl
```

- このツールを使用するには、Java Runtime Environment (JRE) がインストールされている必要があります。JRE は、次のサイトからダウンロードできます。

<http://java.sun.com/j2se/desktopjava/jre/index.jsp>

OracleAS Backup and Recovery Tool をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。
2. `backup_restore.jar` ファイルの中身を展開します。このファイルは次のディレクトリにあります。

```
CD_ROM/stage/Components/oracle.iappserver.backup_restore/10.1.2.0.0/1/DataFiles/backup_restore.jar
```

たとえば、Oracle ホームにインストールする場合、次のコマンドを実行します。

```
cd $ORACLE_HOME
jar xvf CD_ROM/utilities/backup/backup_restore.jar
```

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant をインストールすると、`backup_restore.jar` ファイルは自動的に展開され、`$ORACLE_HOME/utilities/backup` ディレクトリに配置されます。

`backup_restore.jar` を取得したら、その中身を RepCA インストールの Oracle ホームに展開します。たとえば、次のように指定します。

```
/> cd $ORACLE_HOME
/> $ORACLE_HOME/> jar xvf utilities/backup/backup_restore.jar
```

3. `bkp_restore.pl` ファイルに実行権限があることを確認します。

```
chmod 755 $ORACLE_HOME/backup_restore/bkp_restore.sh
```

OracleAS Backup and Recovery Tool ファイルに関して理解を深める必要があります（詳細は表 14-2 を参照）。構成ファイルを編集する手順は、後続の手順で説明します。

## 14.3.2 OracleAS Backup and Recovery Tool の構成

OracleAS Backup and Recovery Tool を構成するには、次の手順を実行します。

---

**注意：** 現在の環境の各インストールに対してこれらの手順を実行する必要があります。

---

1. このツールではログ・ファイルおよびバックアップ・ファイルが作成されるので、これらのファイルを格納するため、次のディレクトリを作成する必要があります。
  - a. **ログ・ファイル・ディレクトリ**（中間層およびインフラストラクチャ）：このディレクトリは、ツールが作成したログ・ファイルを格納します。このディレクトリは、数 MB の空き領域を必要とします。
  - b. **構成ファイル・バックアップ・ディレクトリ**（中間層およびインフラストラクチャ）：このディレクトリは、構成ファイルのバックアップを格納します。このディレクトリは、数百 MB の空き領域を必要とします。
  - c. **データベース・バックアップ・ディレクトリ**（インフラストラクチャのみ）：このディレクトリは、メタデータ・リポジトリのデータファイルおよび制御ファイルのバックアップ、およびアーカイブ REDO ログを格納します。このディレクトリは、数 GB の領域を必要とします。

これらのディレクトリを作成する際の推奨事項を次に示します。

- バックアップ・ディレクトリは、現在の Oracle Application Server Oracle ホームとは別のディスク上のファイル・システム上に作成し、可能な場合、別のディスク・コントローラ上に作成します。これは、ハードウェアの障害発生時にデータをリカバリするための最適な方法です。
- Oracle Application Server をインストールしたユーザーが、バックアップ・ディレクトリに対して書き込み権限を持つようにします。

たとえば、ログ・ファイル・ディレクトリ、構成ファイル・バックアップ・ディレクトリおよびデータベース・バックアップ・ディレクトリを `/disk1` 上に作成するには、次のように指定します。

```
mkdir -p /disk1/backups/log_files
mkdir -p /disk1/backups/config_files
mkdir -p /disk1/backups/db_files
cd /disk1/backups
chmod 755 log_files config_files db_files
chown OracleAS_user log_files config_files db_files
```

2. config.inp を開き、パラメータを変更します (表 14-3 を参照)。手順の一部は、中間層およびインフラストラクチャのインストールによって異なります。

**表 14-3 config.inp のパラメータ**

パラメータ	値
oracle_home	Oracle ホームのフルパスを指定します。
log_path	ログ・ファイル・ディレクトリのフルパスを指定します。
config_files_list	この値を挿入しないでください。 config_files_list=DO_NOT_SET のままとします。  このパラメータは、bkp_restore.pl -m configure を実行すると、現在のインストールの構成ファイルの適切なリストで更新されます。
config_backup_path	構成ファイル・バックアップ・ディレクトリのフルパスを指定します。
install_type	この値を挿入しないでください。install_type=DO_NOT_SET のままとします。  このパラメータは、次のスクリプトを実行すると、現在のインストールの適切な値で更新されます。  bkp_restore.pl -m configure
dbid	この値を挿入しないでください。dbid=DO_NOT_SET のままとします。  OracleAS Portal のインストールでは、この値は、bkp_restore.pl -m configure を実行すると更新されます。ツールは、デフォルトで、メタデータ・リポジトリから dbid を取得します。または、障害時リカバリなど、あるホストから別のホストへのメタデータ・リポジトリの移行が伴う特殊なケースでは dbid を指定できます。  J2EE and Web Services のインストールでは、この値は変更されません。
pfile	<b>J2EE and Web Services のインストール:</b>  この行は、コメント・アウトしておきます。  <b>OracleAS Portal:</b>  必要に応じて、データベースの起動時に使用するかわりの pfile を指定します。または、この行をコメント・アウトしておき、デフォルトの spfile が使用されるようにします。  \$ORACLE_HOME/dbs/spfileSID.ora  このファイルでは空白値が許容されないため、デフォルト値を使用する場合は、pfile エントリをコメント・アウトしてください。  デフォルトの場所に spfileorcl.ora ファイルがない場合、次のファイルが pfile として使用されます。  \$ORACLE_HOME/dbs/initSID.ora  異なる pfile を使用する場合、データベース起動用のかわりの pfile 名を指定します。
database_backup_path	<b>J2EE and Web Services のインストール:</b>  この値を挿入しないでください。 database_backup_path=VALUE_NOT_SET のままとします。  <b>OracleAS Portal のインストール:</b>  データベース・バックアップ・ディレクトリのフルパスを指定します。

3. 環境変数 ORACLE\_HOME に Oracle Application Server の Oracle ホームを設定します。
4. インフラストラクチャのインストールの場合は次の手順を実行します。
  - a. 環境変数 ORACLE\_SID にメタデータ・リポジトリの SID を設定します。デフォルトは orcl です。
  - b. メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。
5. ツールを -m configure オプションで実行して、構成します。たとえば、次のように指定します。

```
./bkp_restore.sh -m configure
```

RepCA のインストールでは、perl.exe の正しいバージョンを指定した後で次のコマンドを実行します。

```
bkp_restore.pl -m configure
```

このコマンドは、config.inp のパラメータを更新し、インフラストラクチャのインストールの場合は、メタデータ・リポジトリのバックアップ、リストアおよびリカバリに使用されるカスタマイズされた .dat ファイルを作成します。

### 14.3.3 構成ファイル用のツールのカスタマイズ

OracleAS Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server のインストールを再構築するのに必要なすべての Oracle Application Server 構成ファイルをバックアップします。

ツールでは、インストールに存在する構成ファイルが検出されます。このツールは、カスタマイズする必要はありませんが、次のようにカスタマイズできます。

#### ■ バックアップへのファイルの追加

ログ・ファイルなど、定期的にバックアップする必要がある独自のローカルな構成ファイルやその他のファイルを追加できます。

#### ■ バックアップからのファイルの除外

バックアップ対象からファイルを除外できます。

#### バックアップへのファイルの追加

ファイル（Oracle Application Server コンポーネント固有のログ・ファイルなど）をバックアップに追加するには、次のように config\_misc\_files.inp ファイルにエントリを追加します。

- 特定のファイルを指定するには、次のようにします。

```
${OH}/directorypath/file
```

- ディレクトリ全体を指定するには、次のようにします。

```
${OH}/directorypath/
```

- ワイルド・カードを使用するには、次のように指定します。

```
${OH}/directorypath/*.html
```

追加できるエントリの数に制限はありません。config\_misc\_files.inp ファイルは、config.inp の config\_files\_list パラメータに常に含まれます。したがって、config.inp を編集する必要はありません。

config\_misc\_files.inp にキー・ファイルを指定する必要はありません。

#### バックアップからのファイルの除外

次のいずれかの方法で、バックアップからファイルを除外できます。

- config\_component.inp ファイルからファイル・エントリを削除します。

- `config_component.inp` ファイルでディレクトリ全体がバックアップされるように指定されており、そのディレクトリから特定のファイルを除外する場合は、そのファイルのエントリを `config_exclude_files.inp` に追加します。指定したファイルを除くディレクトリ全体が、ツールによってバックアップされます。`config_exclude_files.inp` ではディレクトリを指定したり、ワイルド・カードを使用できません。指定できるのは単一のファイル・エントリのみです。

`config_exclude_files.inp` にキー・ファイルを指定する必要はありません。

## 14.3.4 OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要

この項では、OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法を示します。

この項の内容は次のとおりです。

- [14.3.4.1 項「ツールを実行するための前提条件」](#)
- [14.3.4.2 項「OracleAS Backup and Recovery Tool の構文」](#)
- [14.3.4.3 項「使用例」](#)

### 14.3.4.1 ツールを実行するための前提条件

OracleAS Backup and Recovery Tool を実行する前に、次の手順を実行します。

- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。
- 環境変数 `ORACLE_HOME` が設定されていることを確認します。
- データベース・バックアップを実行している場合、環境変数 `ORACLE_SID` が設定されていることを確認します。デフォルトは `orcl` です。

### 14.3.4.2 OracleAS Backup and Recovery Tool の構文

OracleAS Backup and Recovery Tool の構文は次のとおりです。

```
bkp_restore.sh [-defsv] -m mode [args]
```

この構文では、次の表で説明するオプションを指定できます。

項目	説明
-d	実行せずにトレースを出力します。
-e	環境ファイルを指定します（デフォルトは <code>config.inp</code> ）。
-f	ログ・ファイル、データベース・バックアップおよび構成ファイルのディレクトリを作成します（これらが現在のコマンドで必要だが存在しない場合）。
-n	プロンプトを抑制し、ツールをバッチ・モードで実行できるようにします。
-s	サイレント・モードで実行します。
-v	冗長モードで実行します。

実行するモードを指定するには、`-m` オプションを使用します。引数をとるモードもあります。

[表 14-4](#) に、OracleAS Backup and Recovery Tool のモードおよび引数を示します。すべてのモードおよび引数では、大 / 小文字が区別されます。

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数

モードおよび引数	説明
backup_cold	<p>メタデータ・リポジトリの全体コールド・バックアップを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ config.inp（または、-e オプションで指定したかわりのファイル）を開き、log_path を取得します。</li> <li>■ データベースを停止して、マウント・モードで起動します（データベースはオープンにしない）。</li> <li>■ RMAN を使用してデータファイルおよび制御ファイルのバックアップを実行します。このコマンドは、backup_cold.dat にあります。</li> <li>■ backup_cold.dat に指定されたディレクトリにバックアップを格納します（これは、通常、config.inp の database_backup_path に設定されます）。</li> <li>■ log_path にログ・ファイルを格納します。</li> <li>■ データベースをオープンにします。</li> </ul> <p>DCM ファイルベースのメタデータ・リポジトリの場合：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ dcmctl exportrepository コマンドを実行して、ファイルベースのリポジトリのバックアップを行います。</li> <li>■ config.inp の config_backup_path パラメータに指定されたディレクトリにバックアップを格納します。</li> </ul> <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、backup_cold オプションでは、その両方をまとめてバックアップします。これは、ファイルベースのリポジトリがインフラストラクチャのインストールに含まれるケースで考えられます。</p> <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベースのリポジトリをホストしているのか、データベースをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>\$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl whichfarm</pre> <pre>Repository Type: Database (host) =&gt; Hosts a database repository</pre> <pre>Repository Type: Distributed File Based (host) =&gt; Hosts a file based repository</pre>
backup_cold_incr -l incr_backup_level	<p>メタデータ・リポジトリの増分バックアップを実行します。</p> <p>次の点を除いて、backup_cold と同様に機能します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ -l オプションは、増分レベルを指定します（0 ～ 4）。</li> <li>■ backup_cold_incrlevel.dat ファイルを使用します。</li> </ul> <p>増分バックアップには、累積と差分の 2 種類のバックアップがあります。ツールでは、差分バックアップ（デフォルト）が使用されます。詳細は、Oracle Database 10g Documentation Library の『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。</p>

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数（続き）

モードおよび引数	説明
backup_config	<p>全体構成バックアップを実行します。バックアップには、DCM 管理コンポーネントおよび非 DCM 管理コンポーネントの構成が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ config.inp（または -e オプションで指定したかわりのファイル）を開き、config_files_list、config_backup_path および log_path を取得します。</li> <li>■ DCM 管理コンポーネントの構成のアーカイブを作成します。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. dcmctl createarchive -archive archive_name</li> <li>2. dcmctl exportarchive -archive archive_name -f unique_name in config_backup_path</li> <li>3. dcmctl removearchive -archive archive_name</li> </ol> </li> <li>■ config_files_list の各ファイルを開こうとします。すべてのファイルを開けない場合はエラーで終了します。</li> <li>■ config_files_list の各ファイルに対して、最初のエントリ（キー・ファイル）が存在しているかどうかを確認します。キー・ファイルが存在しない場合、致命的なエラーとして処理されます。存在する場合、リスト内のすべてのファイルがバックアップされます。存在しないファイルがあった場合、エラーがログに記録され、処理が続行されます。</li> <li>■ config_exclude_files.inp にリストされたファイルを除外します。</li> <li>■ 終了すると、config_backup_path/config_bkp_timestamp.jar および config_backup_path/dcm_archive_timestamp.jar（DCM 管理コンポーネント）にバックアップを格納します。</li> <li>■ なんらかのエラーが発生した場合、log_path/config_bkp_timestamp にログ・ファイルを作成します。</li> </ul> <p><b>プロセスの前提条件：</b></p> <p>DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド opmnctl startproc ias-component=OID を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ（IM および MR）または IM のインストールに存在します。OID プロセスを起動する前に、OPMN プロセスを起動する必要があります。</li> <li>■ データベースを起動し、実行する必要があります。</li> <li>■ リスナー・プロセスを起動する必要があります。</li> </ul> <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベース・リポジトリをホストしているのか、データベース・リポジトリをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>\$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl whichfarm</pre> <pre>Repository Type: Database (host) =&gt; Hosts a database repository</pre> <pre>Repository Type: Distributed File Based (host) =&gt; Hosts a file based repository</pre>

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数（続き）

モードおよび引数	説明
backup_config_incr	<p>増分構成ファイル・バックアップを実行します。</p> <p>次の点を除いて、backup_config と同様に機能します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>最後の全体または増分構成ファイル・バックアップ以降に変更されたすべての構成ファイルをバックアップします。</li> </ul> <p>プロセスの前提条件については、backup_config オプションを参照してください。</p>
backup_online	<p>Metadata Repository のオンライン・バックアップを実行します。インフラストラクチャに対してこのコマンドを実行する場合、このコマンドを実行する前に、メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>config.inp（または、-e オプションで指定したかわりのファイル）を開き、log_path を取得します。</li> <li>データベースがオープンであると想定します。</li> <li>RMAN を使用してデータファイルおよび制御ファイルのバックアップを実行します。このコマンドは、backup_online.dat にあります。</li> <li>backup_online.dat に指定されたディレクトリにバックアップを格納します（これは、通常、config.inp の database_backup_path に設定されます）。</li> <li>log_path にログ・ファイルを格納します。</li> <li>データベースをオープンのままにします。</li> </ul> <p>DCM ファイルベースのメタデータ・リポジトリの場合：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>dcmctl exportrepository コマンドを実行して、ファイルベースのリポジトリのバックアップを行います。</li> <li>config.inp ファイルの config_backup_path パラメータに指定されたディレクトリにバックアップを格納します。</li> </ul> <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、backup_cold オプションでは、その両方をまとめてバックアップします。これは、ファイルベースのリポジトリがインフラストラクチャのインストールに存在するケースで考えられます。</p> <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベースのリポジトリをホストしているのか、データベースをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>\$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl whichfarm</pre> <p>Repository Type: Database (host) =&gt; Hosts a database repository</p> <p>Repository Type: Distributed File Based (host) =&gt; Hosts a file based repository</p>
backup_online_incr -l incr_backup_level	<p>メタデータ・リポジトリの増分オンライン・バックアップを実行します。</p> <p>次の点を除いて、backup_online と同様に機能します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>-l オプションは、増分レベルを指定します（0 ～ 4）。</li> <li>backup_online_incrlevel.dat ファイルを使用します。</li> </ul> <p>増分バックアップには、累積と差分の 2 種類のバックアップがあります。ツールでは、差分バックアップ（デフォルト）が使用されます。詳細は、Oracle Database 10g Documentation Library の『Oracle Database バックアップおよびリカバリ 基礎』を参照してください。</p>



表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数（続き）

モードおよび引数	説明
configure [-i dbid]	<p>ツールを構成します。</p> <p>インフラストラクチャに対してこのコマンドを実行する場合、このコマンドを実行する前に、メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 現在のインストールの適切な情報を使用して、config.inp の config_files_list および install_type を更新します。</li> <li>■ インフラストラクチャに対してこのコマンドを使用する場合、データベース ID (dbid) で構成ファイルを更新し、データベース・バックアップ *.tmpl ファイルからカスタマイズされた *.dat ファイルを作成します。デフォルトでは、メタデータ・リポジトリに dbid を問い合わせます。-i オプションを使用する場合、dbid を指定できます（これは、障害時リカバリなどのために、あるノードから別のノードにメタデータ・リポジトリを移行するために使用します）。</li> </ul>
configure_nodb	<p>configure と同じですが、インフラストラクチャの構成は行いません。</p> <p><b>注意：</b>すべての中間層およびインフラストラクチャのインストールに対して configure を使用する必要があります。configure_nodb は、障害時リカバリ計画に適用されます（『Oracle Application Server 高可用性ガイド』を参照）。</p>
help	使用状況メッセージを出力します。
list_changed_config	最後の全体または増分バックアップ以降に変更されたすべての構成ファイルをリストします。このコマンドでは、各ファイルの変更日が確認できますが、ファイルの実際の中身は確認できません。ファイルのリストがログ・ファイルに書き出され、そのログ・ファイルの名前が出力されます。

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数（続き）

モードおよび引数	説明
restore_config [-t config_bkp_timestamp] [-n]	<p>構成ファイルをリストアします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ config.inp（または、-e オプションで指定したかわりのファイル）を開き、config_backup_path および log_path を取得します。</li> <li>■ -t オプションを指定していて、それが全体バックアップからのタイムスタンプである場合、その全体バックアップをリストアします。</li> <li>■ -t オプションを指定していて、それが増分バックアップからのタイムスタンプである場合、全体バックアップおよび指定した増分バックアップまでを含むすべての増分バックアップをリストアします。</li> <li>■ -t オプションを指定しない場合、config_backup_path に構成ファイル・バックアップのリストを表示し、処理を終了します。その後、このコマンドを再実行し、-t オプションでこれらのファイルのいずれかを指定できます。</li> <li>■ 構成ファイル・バックアップからすべてのファイルを Oracle ホームにリストアします。所有者、グループ、権限およびタイムスタンプは保持されます。</li> <li>■ なんらかのエラーが発生した場合、log_path/config_rst_timestamp にログ・ファイルを作成します。</li> <li>■ DCM 管理コンポーネントの構成をリストアします。  <pre>dcmctl importarchive -f &lt;location in config_backup_path that contains dcm archive&gt; dcmctl applyarchiveto -archive &lt;archive name&gt; [-cluster &lt;cluster_name&gt;] dcmctl removearchive -archive &lt;archive name&gt;</pre> </li> </ul> <p>-n オプションはプロンプトを抑制するので、バッチ・モードでツールを使用できます。</p> <p>プロセスの前提条件については、backup_config オプションを参照してください。</p> <p>J2EE クラスタの複数ノードで restore_config をパラレルに実行しないでください。このように実行すると、restore_config でエラーが発生します。</p> <p>restore_config は、一度に 1 つのノードで実行してください。</p>
restore_db	このコマンドは非推奨です。かわりに、restore_repos を使用してください。

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数（続き）

モードおよび引数	説明
restore_repos [-u timestamp] [-c] [-n]	<p>使用可能なコールド・バックアップおよびオンライン・バックアップから、OracleAS Metadata Repository および DCM ファイルベース・リポジトリをリストアおよびリカバリします。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ config.inp（または、-e オプションで指定したかわりのファイル）を開き、log_path を取得します。</li> <li>■ 制御ファイルおよびデータファイルのリストアを行い、RMAN を使用してリカバリを実行します。このコマンドは、restore_repos.dat にあります。</li> <li>■ log_path にログ・ファイルを格納します。</li> <li>■ データベースをオープンのままにします。</li> </ul> <p>このコマンドは、デフォルトで、最も最近の状態にデータベースをリストアおよびリカバリします。-u オプションを使用すると、時間の特定のポイントの状態にデータベースをリストアおよびリカバリできます。タイムスタンプの形式は MM/DD/YYYY_HR24:MIN:SEC です。たとえば、次のように指定します。</p> <p>UNIX 上での指定：</p> <pre>bkp_restore.sh -m restore_repos -u 07/26/2003_13:45:06</pre> <p>このコマンドは、デフォルトでは、制御ファイルのリストアを行いません。制御ファイルをリストアするには、-c オプションを使用します。</p> <p>-u または -c オプションを使用する場合、過去のすべてのバックアップが無効化されるので、全体バックアップをすぐに行ってください。</p> <p>-n オプションはプロンプトを抑制するので、バッチ・モードでツールを使用できます。</p> <p>詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』のメタデータ・リポジトリのリストアとリカバリに関する項を参照してください。</p> <p>このコマンドは次の操作を実行して、ファイルベースのリポジトリをリストアします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ タイムスタンプの入力を確認します。指定されていない場合、ファイルベースのリポジトリに対応する使用可能なバックアップ・タイムスタンプをリストします。</li> <li>■ dcmctl importrepository -file&lt;リポジトリ・バックアップを格納する config_backup_path の場所&gt;を実行します。</li> </ul> <p>UNIX 上での指定：</p> <pre>bkp_restore.sh -m restore_repos -t 2004-05-10_18-33-12</pre> <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、restore_repos オプションは、その両方をまとめてリストアします。これは、DCM が、インフラストラクチャ・インストールのファイルベース・リポジトリを使用するケースで考えられます。</p>

#### 14.3.4.3 使用例

この項では、OracleAS Backup and Recovery Tool の使用例を示します。

- デフォルトの config.inp ファイルを使用してツールを構成するには、次のように指定します。  
bkp\_restore.sh -m configure
- 構成ファイル myconfig.inp を使用してツールを構成するには、次のように指定します。  
bkp\_restore.sh -m configure -e myconfig.inp
- 全体構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。  
bkp\_restore.sh -v -m backup\_config

- 環境ファイル `myconfig.inp` を使用して全体構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -v -m backup_config -e myconfig.inp
```
- 増分構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -v -m backup_config_incr
```
- 構成ファイルをリストアするには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m restore_config -t 2004-09-21_06-12-45
```
- メタデータ・リポジトリの全体コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_cold
```
- メタデータ・リポジトリのレベル 2 の増分コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_cold_incr -l 2
```
- メタデータ・リポジトリの全体オンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_online
```
- メタデータ・リポジトリのレベル 0 の増分オンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_online_incr -l 0
```
- メタデータ・リポジトリを最も最近の状態にリストアするには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m restore_repos
```
- メタデータ・リポジトリを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m restore_repos -u 07/26/2003_13:45:06
```
- メタデータ・リポジトリを特定の時間の状態にフラッシュバックするには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m flashback_repos -u 07/26/2003_13:45:06
```
- ファイルベース・リポジトリを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m restore_repos -t 2004-05-10_18-33-12
```
- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのコールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_cold
```
- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_cold_incr -l <level>
```
- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。  

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_online
```

- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン増分バックアップを実行するには、次のように指定します。

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_online_incr -l <level>
```

- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。

```
bkp_restore.sh -m restore_instance -t 07/26/2003_13:45:06 -c
```

## 14.4 バックアップの手順

この項では、バックアップ手順の詳細を説明します。インフラストラクチャの Oracle Application Server Metadata Repository、Identity Management メタデータ、分散管理リポジトリ、Oracle Application Server 中間層インストールの構成ファイル間には、一定のデータ相互依存性が存在します。構成データの一貫性をメンテナンスするには、使用している Oracle Application Server の各インスタンス（中間層およびインフラストラクチャ）のバックアップを同時に行う必要があります。1つのインスタンスのバックアップ中に、その他のどのインスタンスにおいても構成の変更が行われないようにしてください。

この項の内容は次のとおりです。

- [14.4.1 項「ブロック変更トラッキングの有効化」](#)
- [14.4.2 項「ARCHIVELOG モードの有効化」](#)
- [14.4.3 項「現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成」](#)
- [14.4.4 項「インスタンスのバックアップの実行」](#)
- [14.4.5 項「環境全体のバックアップの実行」](#)
- [14.4.6 項「構成およびメタデータのバックアップ」](#)

### 14.4.1 ブロック変更トラッキングの有効化

増分データベース・バックアップのパフォーマンスを向上させるには、次のコマンドを使用してブロック変更トラッキングを有効化します。

```
alter database enable block change tracking using file file_name;
```

db\_create\_file\_dest パラメータが、データベースの spfile または init.ora ファイルで設定されている場合、次のコマンドを使用できます。

```
alter database enable block change tracking;
```

ブロック変更トラッキングを有効化すると、増分データベース・バックアップでブロック変更トラッキングが使用されます。

**関連項目：** ブロック変更トラッキングの詳細は、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) Documentation Library の『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。

### 14.4.2 ARCHIVELOG モードの有効化

Metadata Repository は、デフォルトでは、ARCHIVELOG モードが有効化されていません。オンライン REDO ログのアーカイブを有効化するには、ARCHIVELOG モードを有効化する必要があります。これによって、このマニュアルで説明しているリカバリ計画を実行できます。

---

**関連項目：** この項のパラメータおよびアーカイブ・ロギングの一般的な設定方法の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

---

ARCHIVELOG モードを有効化するには、次の手順を実行します。

1. 次の SQL 問合せを実行して、flashback\_recovery\_area が設定されているかどうかを確認します。

```
SQL> show parameters db_recovery
```

flashback\_recovery\_area が設定されていれば、問合せの戻り値は次のようになります。

Name	Type	Value
db_recovery_file_dest	string	/private2/AS1012Installs/AS1012Infra/ flash_recovery_area
db_recovery_file_dest_size	big integer	2G

flashback\_recovery\_area が設定されていれば、db\_recovery\_file\_dest パラメータで指定されている宛先がアーカイブ・ログの宛先として使用されるので、次の手順でアーカイブの宛先ディレクトリを指定する必要はありません。

2. アーカイブの宛先ディレクトリを指定します。これには、初期化ファイルに初期化パラメータ LOG\_ARCHIVE\_DEST\_n を指定します。spfile が使用されている場合、次のコマンドを発行できます。

```
alter system set log_archive_dest_n="LOCATION= backup directory" scope=spfile;
```

In the log\_archive\_dest\_n parameter, n equals a number of 1 to 10

pfile が使用されている場合、次の初期化ファイルを編集する必要があります。

```
INFRA_ORACLE_HOME/database/initSID.ora
```

LOG\_ARCHIVE\_DEST\_n パラメータを次のように変更します。

```
LOG_ARCHIVE_DEST_n = '/disk1/oraHome/archive'
```

アーカイブ・ログのデフォルトのファイル名形式は次のとおりです（オプション）。

```
%t_%s.dbf
```

LOG\_ARCHIVE\_FORMAT は変更可能です。異なる形式を使用する場合、次のように、初期化ファイルに初期化パラメータ LOG\_ARCHIVE\_FORMAT を指定します。

```
LOG_ARCHIVE_FORMAT = arch_%t_%s_%r.arc
```

前述の例では、t がスレッド番号、r がリセット・ログ ID、s がログ順序番号を表します。

3. 環境変数 ORACLE\_HOME および ORACLE\_SID（デフォルトは orcl）が適切に設定されていることを確認します。
4. データベースを使用しているユーザーがないことを確認します。
5. データベース・インスタンスの通常の正しい停止を実行します。

```
INFRA_ORACLE_HOME/bin/sqlplus /nolog
SQL> connect sys/password as sysdba
SQL> shutdown
```

6. インスタンスを起動し、データベースをマウントします（オープンにしない）。

```
SQL> startup mount;
```

7. データベースの ARCHIVELOG モードを有効化します。

```
SQL> alter database archivelog;
```

8. データベース・インスタンスを停止および再起動します。

```
SQL> shutdown
SQL> startup
```

9. データベースが現在 ARCHIVELOG モードにあることを確認します。

次のコマンドを実行して、データベースのログ・モード (Database log mode) がアーカイブ・モード (Archive Mode) で、自動アーカイブ (Automatic archival) が有効化 (Enabled) されていることを確認します。

```
SQL> archive log list;
Database log mode           Archive Mode
Automatic archival         Enabled
Archive destination        /disk1/oraHome/archive
Oldest on-line log sequence 997
Next log sequence to archive 999
Current log sequence        999
```

### 14.4.3 現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成

現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境をリストアおよびリカバリする必要がある場合、削除に際して必要なすべての情報を保持することが重要となります。これは、新しいディスクまたはホスト上に現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境のすべてまたは一部を再構築する必要のあるハードウェアの損失などの場合に特に重要です。

この項で示している情報を含む、現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境の最新の記録を維持する必要があります。この情報は、ハードコピーおよび電子的な形式の両方の形で保存する必要があります。電子的な形式のデータは、現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境とは完全に分離されたホストまたは電子メール・システム上に格納する必要があります。

Oracle Application Server Standard Edition One のハードウェアおよびソフトウェアの構成記録には、次のものを含める必要があります。

- 現在の環境の各ホストの次の情報を含めます。
  - ホスト名
  - 仮想ホスト名 (ある場合)
  - ドメイン名
  - IP アドレス
  - ハードウェア・プラットフォーム
  - オペレーティング・システムのリリース・レベルとパッチ情報
- 現在の環境の各 Oracle Application Server インストールに関しては次の情報を含めます。
  - インストール・タイプ (Infrastructure または J2EE and Web Cache など)
  - インストールが存在するホスト
  - ユーザー名、ユーザー ID 番号、グループ名、グループ ID 番号、環境プロファイル、および Oracle ホーム・エントリ (/etc/passwd および /etc/group) を所有するオペレーティング・システム・ユーザーのシェルのタイプ
  - ORACLE\_HOME のディレクトリ構造、マウント・ポイントおよびフルパス
  - インストールで使用されたディスク領域容量
  - インストールで使用されたポート番号

---

**注意:** \$ORACLE\_HOME/install/portlist.ini ファイルには、インストールの際に割り当てられたポート番号が含まれます。ただし、このファイルは、インストール後にポート番号を変更した場合は更新されないため、そうした変更は手動で追跡する必要があります。

---

- メタデータ・リポジトリの次の情報を含めます。
  - データベースのバージョンおよびパッチのレベル
  - ベース言語
  - キャラクタ・セット
  - グローバル・データベース名
  - SID

## 14.4.4 インスタンスのバックアップの実行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの様々なバックアップ方法について説明します。インスタンス・レベルのバックアップでは、インフラストラクチャおよび中間層のリポジトリ（データベースまたはファイルベース）、構成ファイルなど、アプリケーション・サーバー・インスタンスの必要なすべてのコンポーネントがバックアップされます。

Application Server Control コンソールを使用すると、アプリケーション・サーバー・インスタンスのバックアップとリカバリを管理できます。Control コンソールを使用すると、コマンドラインによるコマンドの入力かわりに、次のすべてのコマンドを実行できます。Application Server Control コンソールを使用してアプリケーション・サーバー・インスタンスをバックアップする方法の手順については、オンライン・ヘルプを参照してください。

### Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのコールド・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのコールド・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_cold
```

### Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_cold_incr -l <level>
```

### Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_online
```

### Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分オンライン・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分オンライン・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.sh -m backup_instance_online_incr -l <level>
```



## 14.4.5 環境全体のバックアップの実行

この項では、Oracle Application Server 環境全体のバックアップ方法について説明します。Oracle Application Server 環境全体のバックアップには、次のものが含まれます。

- Identity Management メタデータ
- Oracle Application Server Metadata Repository

この 2 つは、同じデータベースに含まれる場合や異なるデータベースに含まれる場合があります。

データベースのバックアップには、コールド・バックアップとオンライン・バックアップの 2 つのモードがあります。

- オープン・データベースでコールド・バックアップを実行する前に、**Backup and Recovery Tool** は、データベースを正しく停止し、継続中のすべての変更をロールバックします。結果として、コールド・バックアップは、一貫性のある状態でのデータベースのコピーとなります。一貫性のあるバックアップは、リカバリすることなくリストアできます。
- オンライン・バックアップでは、リポジトリ・データベースを停止する必要がありません。高いレベルでの継続可用性を提供しているビジネス・アプリケーションを停止する必要がありません。オンライン・バックアップは、データベースのスナップショットまたは Point-in-Time イメージです。オンライン・バックアップのリストアに **OracleAS Backup and Recovery Tool** を使用する場合、オンライン・バックアップ時に発生しているデータベースに対する継続中のすべての変更は、REDO ログを適用することによってリカバリされます。

詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ・アドバンスト・ユーザーズ・ガイド』の RMAN のバックアップ・タイプに関する項を参照してください。

この項では、次の手順について説明します。

- [タスク 1: Oracle Application Server Standard Edition One 環境の停止](#)
- [タスク 2: 中間層のバックアップ](#)
- [タスク 3: インフラストラクチャのバックアップ](#)
- [タスク 4: Oracle システム・ファイルのバックアップ](#)
- [タスク 5: 現在の Oracle Application Server 環境の起動](#)
- [詳細の参照](#)

### タスク 1: Oracle Application Server Standard Edition One 環境の停止

Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の最初のバックアップの場合、次の手順に従って Oracle Application Server Standard Edition One 環境を停止し、Identity Management メタデータおよび Oracle Application Server Metadata Repository が格納されているデータベースのコールド・バックアップを実行する必要があります。ローリング・ソフトウェア・アップグレードなど、大きな変更後に Oracle Application Server 環境全体のバックアップを実行する場合、データベースのバックアップに、コールド・バックアップまたはオンライン・バックアップのいずれかを実行できます。ビジネス・アプリケーションを起動かつ実行された状態で保つためにオンライン・バックアップを選択する場合、このタスクをスキップして、タスク 2 およびタスク 3 に進むことができます。

1. 中間層インスタンスを停止します。  
手順は、[9.3.2 項](#)を参照してください。
2. インフラストラクチャを停止します。  
手順は、[9.2.2 項](#)を参照してください。

### タスク 2: 中間層のバックアップ

中間層をバックアップするには、次の手順を実行します。

1. 中間層の Oracle ホームをバックアップします。

tar または cpio など、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンドを使用して、中間層の Oracle ホームのすべてのファイルを全体バックアップします。

root としてこのバックアップを実行してください。これは、Oracle ホームの一部のファイルが root によって所有されているためです。ファイルの所有者、グループ、権限およびタイムスタンプが保持されるようにバックアップを実行することが重要です。

たとえば、次のように指定します。

```
cd MID_TIER_ORACLE_HOME
tar cvf full_path_of_backup_file
```

## 2. 中間層の構成ファイルをバックアップします。

DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。

- OPMN プロセスを起動する必要があります。OPMN プロセスを起動するには、コマンド `opmnctl start` を使用します。
- OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド `opmnctl startproc ias-component=OID` を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ (IM および MR) または IM のインストールに存在します。
- データベースを起動し、実行する必要があります。
- リスナー・プロセスを起動する必要があります。

中間層の Oracle ホームのすべての構成ファイルをバックアップします。この手順は、独自の手順または OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

Oracle ホーム全体のバックアップ直後に構成ファイルのバックアップを行う理由は、システムの再構成を開始して、構成ファイルを元の状態にリストアする場合に備えて、初期の構成ファイルのスナップショットを提供するためです。

構成ファイルは、`config.inp` ファイルの `config_backup_path` パラメータで指定したディレクトリにある `jar` ファイルに格納されます。`jar` ファイルは 2 つ作成されます。1 つが DCM 管理コンポーネント用で、もう 1 つがその他すべてのコンポーネント用です。`jar` ファイルは、各 `jar` ファイル名に組み込まれたタイムスタンプによって同期された状態で保持されます。次に例を示します。

```
config_bkp_2005-05-10_18-33-15.jar
dcm_archive_2005-05-10_18-33-15.jar
```

## タスク 3: インフラストラクチャのバックアップ

### 1. メタデータ・リポジトリのコールド・データベース・バックアップを実行します。

この手順は、独自の手順または OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.sh -m backup_cold
or
bkp_restore.sh -m backup_online
```

このツールでは、終了時にデータベースが実行されたままの状態となることに注意してください。残りの手順を続行する前に、データベースを停止してください。

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

## 2. インフラストラクチャの Oracle ホームをバックアップします。

---

**注意：** インフラストラクチャが分割されていて、Identity Management と Metadata Repository が別の Oracle ホームにある場合、両方の Oracle ホームでこの手順を実行してください。Identity Management が分割されていて、Oracle Internet Directory と Single Sign-On、Delegated Administration Service が別々の Oracle ホームにある場合も、それらの各 Oracle ホームでこの手順を実行する必要があります。

---

tar または cpio など、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンドを使用して、インフラストラクチャの Oracle ホームのすべてのファイルを全体バックアップします。

root としてこのバックアップを実行してください。これは、Oracle ホームの一部のファイルが root によって所有されているためです。ファイルの所有者、グループ、権限およびタイムスタンプが保持されるようにバックアップを実行することが重要です。

たとえば、次のように指定します。

```
cd INFRA_ORACLE_HOME
tar cvf full_path_of_backup_file
```

## 3. インフラストラクチャの構成ファイルをバックアップします。

---

**注意：** インフラストラクチャが分割されていて、Identity Management と Metadata Repository が別の Oracle ホームにある場合、両方の Oracle ホームでこの手順を実行してください。Identity Management が分割されていて、Oracle Internet Directory と Single Sign-On、Delegated Administration Service が別々の Oracle ホームにある場合も、それらの各 Oracle ホームでこの手順を実行する必要があります。

---

DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。

- OPMN プロセスを起動する必要があります。OPMN プロセスを起動するには、コマンド `opmnctl start` を使用します。
- OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド `opmnctl startproc ias-component=OID` を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ（IM および MR）または IM のインストールに存在します。
- データベースを起動し、実行する必要があります。
- リスナー・プロセスを起動する必要があります。

インフラストラクチャの Oracle ホームのすべての構成ファイルをバックアップします。この手順は、独自の手順または OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

Oracle ホーム全体のバックアップ直後に構成ファイルのバックアップを行う理由は、初期の構成ファイルのスナップショットを提供するためです。システムの再構成を開始して、構成ファイルを元の状態にリストアする場合は、この手順を使用します。

#### タスク 4: Oracle システム・ファイルのバックアップ

現在の Oracle Application Server 環境の各ホストで、次の手順を実行します。

1. 使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンド (tar または cpio など) を使用して、Oracle システム・ファイルのバックアップを行います。

Oracle システム・ファイルがどのディレクトリに含まれているかについては、使用しているオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。たとえば、これらは、UNIX システム上では /etc ディレクトリにある場合があります。

2. oraInventory ディレクトリが Oracle Application Server の Oracle ホームの外にある場合、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンド (tar または cpio など) を使用して、バックアップを行います。

現在の oraInventory ディレクトリの場所が不明な場合、oraInst.loc ファイルで確認できます。たとえば、UNIX システムでは、/etc/oraInst.loc を確認してください。

#### タスク 5: 現在の Oracle Application Server 環境の起動

1. インフラストラクチャを起動します。  
手順は、[9.2.1 項](#)を参照してください。
2. 中間層インスタンスを起動します。  
手順は、[9.3.1 項](#)を参照してください。

#### 詳細の参照

前述の各タスクの詳細は、次の箇所を参照してください。

- [14.2 項「Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- [14.3 項「OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」

### 14.4.6 構成およびメタデータのバックアップ

Oracle Application Server の環境全体のバックアップを実行した後は、管理上の変更がある度に、構成およびメタデータのバックアップを引き続き実行する必要があります。これが困難な場合、定期的なバックアップを行う必要があります。

**関連項目：** 管理上の変更の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の付録 G「管理上の変更の例」を参照してください。

これらのバックアップは、オンライン (Oracle Application Server が起動および実行している状態でのバックアップ) で実行でき、次のものを含める必要があります。

- 構成ファイル
- Identity Management メタデータ
- OracleAS Metadata Repository

この項では、Oracle Application Server 環境の構成およびメタデータのバックアップ方法について説明します。この項では次の手順を示します。

- [タスク 1: インフラストラクチャのバックアップ](#)
- [タスク 2: 中間層のバックアップ](#)
- [詳細の参照](#)

**タスク 1: インフラストラクチャのバックアップ**

1. 構成ファイルの全体バックアップまたは増分バックアップを実行します。

この手順は、独自の手順または OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。たとえば、ツールを使用してこの手順を実行するには、次のようにします。

- UNIX システム上で、次のように指定します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config
or
bkp_restore.sh -m backup_config_incr
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

2. OracleAS Metadata Repository の全体または増分のデータベース・バックアップを実行します。

この手順は、独自の手順または OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.sh -m backup_online
or
bkp_restore.sh -m backup_online_incr -l 2
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

**タスク 2: 中間層のバックアップ**

中間層の構成ファイルの全体バックアップまたは増分バックアップを実行します。この手順は、独自の手順、Application Server Control コンソールまたは OracleAS Backup and Recovery Tool を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

全体バックアップの場合は次のように指定します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config
```

または次のように指定します。

増分バックアップの場合は次のように指定します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config_incr
```

**関連項目：** 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」を参照してください。

**詳細の参照**

前述のタスクの詳細は、次の箇所を参照してください。

- [14.2 項「Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- [14.3 項「OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」



# 第III部

---

## OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール

第 III 部では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant) のインストールについて説明します。内容は次のとおりです。

- 第 15 章「OracleAS Metadata Repository の概要および要件」
- 第 16 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード」
- 第 17 章「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録」





---

## OracleAS Metadata Repository の概要および要件

---

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用すると、インストーラを使用して OracleAS Metadata Repository の新しいデータベースを作成することなく、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この章では、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の概要を示し、このツールを使用するためのシステム要件について概説します。

---

### 注意：

- このマニュアルでは、既存の OracleAS Metadata Repository のアップグレード方法は説明していません。アップグレード手順については、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください。
  - Oracle E-Business Suite インスタンスを格納しているデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードすることはできません。現在のバージョンではサポートされていません。
- 

この章の内容は次のとおりです。

- 15.1 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant 概要」
- 15.2 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行手順」
- 15.3 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件」
- 15.4 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール」
- 15.5 項「データベースの要件」
- 15.6 項「Oracle Internet Directory の要件」
- 15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」
- 15.8 項「次に読む必要がある項」

### 15.1 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant 概要

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、次の操作を実行できます。

- OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録
- OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域のデータベースからの削除
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory からの登録解除

この項では、次の項目について説明します。

- 15.1.1 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の入手先」
- 15.1.2 項「各種データベース記憶域のサポート」
- 15.1.3 項「ローカルおよびリモート・データベースのサポート」

### 15.1.1 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の入手先

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、製品に付属する別の CD-ROM に収録されています。

OracleAS Metadata Repository 内の既存のデータベースを変換する場合は、この CD-ROM に収録されている Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ツールを使用する必要があります。

### 15.1.2 各種データベース記憶域のサポート

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant では、次の記憶域管理オプションを備えた記憶域上の単一ノード・データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。

- オペレーティング・システム上の通常のファイルとして作成されたデータファイル
- Oracle Managed Files
- RAW デバイス

### 15.1.3 ローカルおよびリモート・データベースのサポート

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する際は、ターゲット・データベースを指定する必要があります。ターゲット・データベースは、操作（OracleAS Metadata Repository のロード、登録、削除、登録解除など）の実行対象となるデータベースです。このデータベースは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant と同じコンピュータで実行されているデータベース（ローカル・データベース）でも、それとは別のコンピュータで実行されているデータベース（リモート・データベース）でもかまいません。

リモート・データベースの場合、そのデータベースを実行しているコンピュータのオペレーティング・システムは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータのオペレーティング・システムと異なってもかまいません。たとえば、Windows コンピュータで OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行し、Linux コンピュータで実行されているデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。

## 15.2 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行手順

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するには、まずインストールする必要があります。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant をインストールします。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant CD-ROM からインストーラを実行します。Oracle Application Server DVD の場合、インストーラは repca ディレクトリに格納されています。

インストールの実行中に、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール先となるディレクトリを指定します。

2. インストール先のディレクトリから、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行します。

## 15.3 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件

表 15-1 に、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件を示します。

**表 15-1 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件**

項目	要件
オペレーティング・システム	HP-UX 11i (11.11) PA-RISC HP-UX 11i (11.23) PA-RISC Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 SUSE Linux Enterprise Server 8 SUSE Linux Enterprise Server 9 サポートされるオペレーティング・システムの最新のリストは、 <a href="http://metalink.oracle.com">OracleMetaLink</a> のサイト ( <a href="http://metalink.oracle.com">http://metalink.oracle.com</a> ) を参照してください。
ディスク領域	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant をインストールするには、600 MB 以上のディスク領域が必要です。  <b>注意:</b> OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行してロード操作を行うたびに、ログ・ファイルの格納用に約 10 MB のディスク領域が必要になります。  データベース用に必要なディスク領域については、 <a href="#">15.5.5 項「SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域」</a> および <a href="#">15.5.6 項「OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域」</a> を参照してください。
メモリー	512 MB
仮想メモリー	1535 MB
ディスプレイ	256 色

## 15.4 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant をインストールするには、[表 15-2](#) に示す手順を実行してください。

**表 15-2 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール**

画面	操作
1 なし	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant CD-ROM または Oracle Application Server DVD を挿入します。  注意: 使用しているコンピュータで CD-ROM または DVD が自動的にマウントされない場合、手動でマウント・ポイントを設定する必要があります。  インストーラを起動します。  CD-ROM の場合: runInstaller を実行してインストーラを起動します。  DVD の場合: repca ディレクトリに移動し、runInstaller を実行してインストーラを起動します。
2 ようこそ	なし。「次へ」をクリックします。
3 ファイルの場所の指定	「名前」フィールドに、この OracleAS Metadata Repository Creation Assistant インストールの名前を入力します。Oracle ホーム・ディレクトリの名前は最大 128 文字、使用できる文字は英数字とアンダースコア記号のみです。たとえば、repca10_1_2 などと指定します。

表 15-2 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール（続き）

画面	操作
4 Repository Creation Assistant の起動	インストール終了後ただちに OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する場合は「はい」を選択します。実行しない場合は「いいえ」を選択します。いずれを選択した場合も、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant はインストール終了後いつでも実行できます。
5 サマリー	画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認したら、「インストール」をクリックしてインストールを開始します。
6 インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。
7 Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合を除きます。
8 インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかと、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行方法に関する情報が表示されます。

## 15.5 データベースの要件

OracleAS Metadata Repository のインストール先となるデータベースは、表 15-3 に示す各分野の要件を満たしている必要があります。

**ヒント：** OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、前提条件チェック・ツール（15.5.1 項「前提条件チェック・ツールの実行」を参照）を実行してください。このツールは、データベース要件の多くをチェックします。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant も要件チェックを行います。前提条件チェック・ツールは要件が満たされているかどうかにかかわらずチェックを行うため、より簡単に使用できます。前提条件チェック・ツールを実行すると、インストール要件を満たすように現在の環境を設定できます。要件に対して設定を繰り返し、要件が満たされないたびに、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再度実行する必要があります。

要件を満たすためにデータベースの再起動が必要な場合もあるため、OracleAS Metadata Repository のインストールが最初の試行で成功するように、前提条件チェック・ツールを実行してから、その後で OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行することをお勧めします。

表 15-3 に、前提条件チェック・ツールによってチェックされる項目を示します。

表 15-3 データベース要件

項目	ツールによるチェックの有無
サポートされるデータベースのバージョン	あり
Standard Edition のデータベースに関する注意	なし
スワップ領域の要件	なし
SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域	これらの表領域が自動拡張に設定されていない場合はあり
OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域	なし
初期化パラメータ	一部なし
データベース・オプション	あり
PL/SQL パッケージ	あり
DBMS_LDAP パッケージ	あり
必須のナレッジ・ベース（Oracle Database 10g のみ）	あり

表 15-3 データベース要件（続き）

項目	ツールによるチェックの有無
パスワード・ファイル認証	なし
スキーマおよび表領域	あり
Oracle Internet Directory への登録	なし

### 15.5.1 前提条件チェック・ツールの実行

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant には、前提条件チェック・ツールが付属しています。このツールは、\$ORACLE\_HOME/repca/prereq ディレクトリに置かれています。ORACLE\_HOME は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール先です。このツールは、データベース要件のほとんどをチェックします。このツールによってチェックされる項目は、表 15-3 に示しています。

このツールは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行前に実行する必要があります。

**ヒント：** このツールは、データベースがすべての要件を満たすまで何度でも実行できます。

使用方法是次のとおりです。

```
DBPrereqChecker.sh -DBHOST dbhost -DBPORT dbport -DBNAME dbname
-SYSPWD syspassword [-LOGDIR logdir] [-HELP]
```

表 15-4 DBPrereqChecker のパラメータ

パラメータ	説明
-DBHOST dbhost	データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。
-DBPORT dbport	データベース・リスナーがリスニングしているポートを指定します。
-DBNAME dbname	データベースのサービス名を指定します。
-SYSPWD syspassword	SYS ユーザーのパスワードを指定します。
-LOGDIR logdir	ログ・ファイルの書き込み先ディレクトリを指定します。書き込み権限のあるディレクトリを指定してください。  ログ・ファイルの名前は RepcaPrerequisiteCheck.log です。ログ・ファイルには、どの要件が満たされ、どの要件が満たされていないかについての情報が書き込まれます。  このパラメータを指定しない場合、ログはコンソールに出力されます。
-HELP	このツールのヘルプ情報を表示します。

次に例を示します。

```
/> DBPrereqChecker.sh -DBHOST mydb.mydomain.com -DBPORT 1521
-DBNAME orcl1.mydomain.com -SYSPWD topsecret -LOGDIR /tmp
```

### 15.5.2 サポートされるデータベースのバージョン

OracleAS Metadata Repository は、<http://metalink.oracle.com> に示すデータベースのバージョンにインストールできます。

使用しているデータベースのリリース番号を調べるには、次のようにして PRODUCT\_COMPONENT\_VERSION ビューを問い合わせます。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select version from product_component_version where product like 'Oracle%9i%'
      or product like 'Oracle%Database%';

```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

### 15.5.3 Standard Edition のデータベースに関する注意

サポートされるデータベースの Standard Edition を使用している場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、データベースのインストール後の手順の一環として `sdopatch.sql` スクリプトを実行する必要があります。

### 15.5.4 スワップ領域の要件

データベースを実行するコンピュータには、使用可能なスワップ領域が 512 MB 以上必要です。

### 15.5.5 SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域

表 15-5 に、SYSTEM および UNDO 表領域に必要な空き領域を示します。

**表 15-5 SYSTEM および UNDO 表領域に必要な空き領域**

表領域	必要な空き領域
SYSTEM	367,001,600 バイト
UNDO	367,001,600 バイト

これらの表領域が自動拡張に設定されている場合、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant で空き領域をチェックすることはできません。これは、表領域がファイル・システム上の使用可能な領域を使い切る可能性があり、また OracleAS Metadata Repository Creation Assistant でファイル・システム上の空き領域をチェックできないためです。この場合、手動でチェックを行う必要があります。

これらの表領域が自動拡張に設定されていない場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant で空き領域をチェックできます。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が、表領域にどれだけの空き領域があるかをデータベースに問い合わせることができるためです。

### 15.5.6 OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域

OracleAS Metadata Repository の表領域用に、1.15 GB 以上のディスク領域があることを確認してください。これは、SYSTEM および UNDO 表領域用のディスク領域（前項を参照）とは別に必要です。

### 15.5.7 初期化パラメータ

インストールにおいて、データベースの初期化パラメータの値は、指定した値に設定されている必要があります。

- 表 15-6 は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によってチェックされないパラメータのリストです。これらのパラメータは、手動でチェックする必要があります。

表 15-6 手動によるチェックが必要なパラメータ

パラメータ	必須の値	パラメータ・クラス	注意
nls_length_semantics	BYTE	動的	<p><b>注意：</b>このパラメータは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ではチェックされません。手動でチェックする必要があります。</p> <p>このパラメータに値 CHAR を指定することはサポートされていません。</p>
compatible	9.2.0.0.0 以上	静的	<p><b>注意：</b>このパラメータは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ではチェックされません。手動でチェックする必要があります。</p> <p>このパラメータの値を 9.2.0.0.0 未満に設定しないでください。</p>

- 表 15-7 は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によってチェックされるパラメータのリストです。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によって、要件を満たしていないパラメータが検出された場合は、警告が表示されます。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の処理を続行するには、これらのパラメータの値を変更する必要があります。

ほとんどのパラメータの値は、インストール終了後、パフォーマンスが最適化されるように必要に応じて変更してかまいません。

**注意：** db\_block\_size パラメータの値は、8192 以上でなければなりません。このパラメータはデータベースの作成時に設定され、後から変更できません。つまり、このパラメータの値がこれよりも小さい場合は、そのデータベースをメタデータ・リポジトリ用に使用することはできません。

表 15-7 初期化パラメータ：必須の値（OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によるチェックあり）

パラメータ	必須の値	パラメータ・クラス	注意
db_block_size	8192 以上	変更不可。「注意」列を参照	データベースの作成後にこのパラメータの値を変更することはできません。
aq_tm_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
open_cursors	300 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
job_queue_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
db_cache_size	144 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
shared_pool_size	175 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。

表 15-7 初期化パラメータ：必須の値（OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によるチェックあり）（続き）

パラメータ	必須の値	パラメータ・クラス	注意
java_pool_size	120 MB より大きい値	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
pga_aggregate_target	96 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
query_rewrite_enabled	TRUE	動的	このパラメータの値はインストール終了後も変更しないでください。Oracle Application Server Wireless でこの値が必要です。
sessions	400 以上	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
undo_management	AUTO	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
_system_trig_enabled	true	動的	これは Oracle の内部パラメータです。システム・トリガーを有効にするために true に設定してください。
db_create_file_dest	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリ	動的	この初期化パラメータは、Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合のみ必要です。

### パラメータ値のチェック

初期化パラメータの値のチェックに SQL\*Plus を使用する場合は、次のように show parameters コマンドを使用します。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters parameter_name
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

または、次のように V\$PARAMETER ビューを問い合わせて値をチェックすることもできます。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name,value from v$parameter;
```

### パラメータ値の変更

パラメータ値の変更方法は、そのパラメータが静的か動的か、データベースで使用しているのがパラメータ・ファイルかサーバー・パラメータ・ファイルかによって異なります。

パラメータ・ファイル、サーバー・パラメータ・ファイルおよびパラメータ値の変更方法の詳細は、使用しているデータベース用の『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

データベースでパラメータ・ファイルを使用している場合は、次の 2 つの方法でパラメータ値を変更できます。



- パラメータ・ファイルを編集し、データベースを再起動します。この方法は、静的パラメータと動的パラメータの両方に有効です。
- 動的パラメータの値を変更する場合は、alter system コマンドを使用できます。ただし、新しい値が有効なのはデータベースをシャットダウンするまでの間のみです。次に例を示します。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9;

```

データベースでサーバー・パラメータ・ファイルを使用している場合は、alter system コマンドを使用してパラメータ値を変更します。静的パラメータの場合は、scope を spfile に設定します。新しい値を有効にするには、データベースを再起動する必要があります。動的パラメータの場合は、scope を spfile、memory または both に設定します。新しい値を永続的に有効にするには、scope を spfile または both に設定します。次に例を示します。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9 scope=both;

```

### 内部パラメータの値の変更

\_system\_trig\_enabled などの Oracle の内部パラメータの値を変更するには、パラメータ名を二重引用符で囲む必要があります。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set "_system_trig_enabled"=true;

```

パラメータ名を二重引用符で囲まないと、次のようにエラーが発生します。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set _system_trig_enabled=true;
*
ERROR at line 1: ORA-00911: invalid character

```

## 15.5.8 データベース・オプション

表 15-8 に、データベース用に有効化する必要のあるオプションを示します。

表 15-8 必須のデータベース・オプション

必須のオプション	オプションがデータベースにインストール済かどうかのチェック方法
Java	<pre> prompt&gt; sqlplus "sys/password as sysdba" SQL&gt; select count(*) from dba_objects       where object_type like 'JAVA%' and       owner = 'SYS' and status = 'VALID'; </pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>
interMedia	<pre> prompt&gt; sqlplus "sys/password as sysdba" SQL&gt; select count(name) from sys.props\$       where name = 'EXPORT_VIEWS_VERSION'; </pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>
Oracle Text	<pre> prompt&gt; sqlplus "sys/password as sysdba" SQL&gt; select count(*) from dba_views       where owner = 'CTXSYS' and       view_name = 'CTX_VERSION'; </pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>

## 15.5.9 PL/SQL パッケージ

データベースには、次の PL/SQL パッケージがインストールされている必要があります。

```
DBMS_DDL
DBMS_LOCK
DBMS_OUTPUT
DBMS_REPUTIL
DBMS_SQL
DBMS_STATS
DBMS_UTILITY
UTL_FILE
UTL_RAW
```

パッケージがデータベースにインストールされているかどうかをチェックするには、ALL\_OBJECTS ビューを問い合わせます。次の例は、DBMS\_DDL パッケージがインストールされているかどうかをチェックします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select count(object_name) from all_objects
      where object_name like 'DBMS_DDL%' and
      status = 'VALID';
```

DBMS\_DDL を対応するパッケージの名前に置き換えて、パッケージごとにこの問合せを実行します。戻り値が 0 より大きい値である必要があります。

## 15.5.10 DBMS\_LDAP パッケージ

データベースに DBMS\_LDAP パッケージがインストールされているかどうか、およびこのパッケージが有効かどうかをチェックします。有効なものではない場合、パッケージを再インストールする必要があります。

1. DBMS\_LDAP パッケージのバージョンが 2 であることを確認します。次の SQL コマンドで 0 が戻されなければなりません。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select dbms_ldap_util.check_interface_version('2') from dual;

DBMS_LDAP_UTIL.CHECK_INTERFACE_VERSION('2')
-----
0
```

このコマンドで、それ以外の値または次のようなエラーが戻される場合もあります。

```
The DBMS_LDAP package supplied with this database doesn't support the
version 2 interface used by 904 components.
```

その場合は、パッケージを再ロードする必要があります。この項末尾の「[DBMS\\_LDAP パッケージの再ロード](#)」を参照してください。

2. DBMS\_LDAP パッケージが有効なものであることを確認します。次の SQL コマンドで 9 が戻されなければなりません。

- a. 次のコマンド行を記述したファイルを作成します。ファイル名は任意の名前でかまいません (test\_ldap.sql など)。

```
select count(*) from dba_objects where
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
  object_type = 'PACKAGE' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
```

```

( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_LIB' and
object_type = 'LIBRARY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
);

```

- b. このファイルを SQL\*Plus で実行します。ファイル名を test\_ldap.sql とした場合、コマンドは次のようになります。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @test_ldap.sql

COUNT(*)
-----
          9

```

このコマンドで 9 以外の値が戻された場合は、パッケージを再ロードする必要があります。

### DBMS\_LDAP パッケージの再ロード

1. 次のファイルが \$ORACLE\_HOME/rdbms/admin ディレクトリにあることを確認します。

- catldap.sql
- dbmsldap.sql
- prvtldap.plb
- prvtldh.plb

2. SQL\*Plus を使用し、catldap.sql を SYS ユーザーとして実行します。

```

prompt> cd $ORACLE_HOME/rdbms/admin
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @catldap.sql

```

## 15.5.11 必須のナレッジ・ベース（Oracle Database 10g のみ）

OracleAS Metadata Repository を Oracle Database 10g にインストールし、OracleAS Portal を使用する場合は、Oracle Text が提供するナレッジ・ベースがデータベースに必要になります。ナレッジ・ベースは、テーマの索引付けおよび ABOUT 問合せの実行に使用される、概念の階層ツリーです。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は、データベースにナレッジ・ベースがあるかどうかをチェックします。データベースにナレッジ・ベースが存在しない場合、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant に次の警告が表示されます。

```
"Knowledge base not found.
OracleAS RepCA was not able to find the Oracle Text Supplied Knowledge Base in the
database specified.
If you are planning to use this repository for installing OracleAS Portal, you have to
install Oracle Text Supplied Knowledge Base. Oracle Text Supplied Knowledge Base can be
installed in the database using Oracle Database 10g Companion CD.
If you are not planning to use this repository for installing OracleAS Portal, you may
continue further.
Do you want to continue?"
```

OracleAS Portal を使用しない場合は、**Y** を入力して続行します。使用する場合は **N** を入力します。

ナレッジ・ベースがデータベースにインストールされているかどうかをチェックする場合は、次の問合せを実行します。

```
create or replace procedure Check_KB (l_return_value OUT varchar) is
ORA20000_TEXT_EXCEPTION exception;
pragma exception_init (ORA20000_TEXT_EXCEPTION, -20000);
l_test_table constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST';
l_test_table_index constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST_INDEX';

procedure drop_test_table ( p_test_table in varchar2 ) is
begin
  for c1 in ( select table_name from user_tables
              where table_name = p_test_table )
  loop
    execute immediate 'drop table '||c1.table_name;
  end loop;
end drop_test_table;

begin
  l_return_value := 'TRUE';
  drop_test_table(l_test_table);
  execute immediate 'create table '||l_test_table||'( id number, content blob,
              query_id number, theme varchar2(2000), weight number,
              CONSTRAINT wwsrc_inso_test_pk PRIMARY KEY(id) )';
  execute immediate 'insert into '||l_test_table||'(id, content)
              values(1, empty_blob())';

  begin
    execute immediate 'create index '||l_test_table_index||' on '||
      l_test_table||'(content) indextype is ctxsys.context
      PARAMETERS(''filter CTXSYS.INSO_FILTER'')';
    ctx_doc.themes( index_name => l_test_table_index, textkey => '1',
      restab => l_test_table );
    exception when ORA20000_TEXT_EXCEPTION then
      if (instr(sqlerrm,'DRG-11446') > 0) then
        l_return_value := 'FALSE';
      else
        l_return_value := 'FALSE';
      end if;
    end;

  drop_test_table(l_test_table);
```

```

exception when others then
    drop_test_table(l_test_table);
    l_return_value := 'FALSE';
end;
/

```

ナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、Oracle Text の「テーマと要旨を使用可能にする」オプションが選択された OracleAS Portal で検索を行う際に、次のエラーが表示されます。

```
Error: The Oracle Text Installation is not complete. Knowledge base file or files
are missing. (WWWS-32026)
```

データベースにナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、Oracle Database 10g の Companion CD-ROM からインストールできます。詳細は、『Oracle Database Companion CD インストール・ガイド』を参照してください。

## 15.5.12 パスワード・ファイル認証

データベースは、パスワード・ファイル認証を使用するように設定する必要があります。パスワード・ファイル認証の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

パスワード・ファイル認証は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行するためにのみ必要となります。メタデータ・リポジトリのインストール後は、使用しなくてもかまいません。

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースが設定されているかどうかは、次のいずれかの方法でチェックできます。

- SQL\*Plus で次のコマンドを実行し、remote\_login\_passwordfile 初期化パラメータの値を調べます。

```

/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters remote_login_passwordfile
NAME                                TYPE                                VALUE
-----
remote_login_passwordfile           string                             EXCLUSIVE

```

remote\_login\_passwordfile 初期化パラメータの値は、EXCLUSIVE または SHARED のいずれかに設定されている必要があります。これ以外の値に設定されていたり、値が定義されていない場合、データベースはパスワード・ファイル認証を使用するように設定されていません。

- SQL\*Net 接続を介して、sysdba としてデータベースへの接続を試みます。

```

/> sqlplus "sys/password@sqlnet_dbname as sysdba"

```

sqlnet\_dbname は、tnsnames.ora ファイルに記述されている、接続先データベースのエントリです。パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースが設定されていない場合、接続はできません。

データベースが、間違いなくパスワード・ファイル認証を使用するように設定されているにもかかわらず、次のエラーが発生したとします。

ORA-01017 エラー「ユーザー名 / パスワードが無効です。ログオンは拒否されました。」

この場合、原因の 1 つとして、パスワード・ファイルの設定時に SYS パスワードを変更してしまっているということが考えられます (password パラメータに指定された値が、SYS ユーザーのパスワードの値に設定されます)。この場合は、覚えておけるようなパスワードに SYS パスワードを変更します。

このエラーが発生する場合でも、sysdba オペレーティング・システム権限がある場合は、SYS としてログインできます。パスワードには任意のものを使用できます。sysdba オペレーティング・システム権限は、パスワードに優先します。

```

/> sqlplus "sys/badPassword as sysdba"

```

```
SQL> alter user sys identified by newPassword;  
SQL> exit
```

ここで `sys/newPassword@sqlnet_dbname as sysdba` でデータベースに接続すると、接続は成功するはずですが、

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. `orapwd` コマンドを使用して、パスワード・ファイルを作成します（すべての項目を1行で記述します）。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/orapwd file=fullpath_to_pwfile password=password  
entries=maxUsers
```

指定する必要がある値は次のとおりです。

`fullpath_to_pwfile`: パスワード情報が書き込まれるファイルへのフルパスを指定します。ファイル名は `.orapwsid` とする必要があります。通常、パスワード・ファイルは `$ORACLE_HOME/dbs` ディレクトリに格納します。

`password`: SYS ユーザーのパスワードを指定します。

---

**注意:** `password` パラメータに指定した値によって、SYS ユーザーのパスワードが設定されます。現在の SYS パスワードとは異なる値を指定した場合、SYS パスワードを変更することになります。

---

`maxUsers`: このファイルに記述する最大ユーザー数を指定します。

次の例では、`mydb` というデータベースのパスワード・ファイルを設定しています。

```
/> cd oracle/ora92/bin  
> oracle/ora92/bin orapwd  
file=/> oracle/ora92/database/PWDmydb.ora  
password=topsecret entries=9
```

2. `remote_login_passwordfile` 初期化パラメータを `EXCLUSIVE` に設定します。複数のデータベースで同じパスワード・ファイルを使用する場合は、`SHARED` に設定します。Real Application Clusters データベースを使用している場合、このパラメータは `EXCLUSIVE` に設定する必要があります。
3. データベースを再起動します。

## 15.5.13 スキーマおよび表領域

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は、表 15-9 のスキーマおよび表領域を既存のデータベースにインストールします。同じ名前スキーマおよび表領域がデータベースに存在しないことを確認してください。

### 15.5.13.1 スキーマおよび表領域のリスト

表 15-9 に、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によってデータベース内に作成される OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域を示します。

表 15-9 スキーマおよび表領域

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルトのデータベース・ファイル
OracleAS Certificate Authority	OCA	OCATS	oca.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discopltml1.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discoplctlc1.dbf

表 15-9 スキーマおよび表領域 (続き)

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルトのデータベース・ファイル
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_RT	b2b_rt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_DT	b2b_dt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_IDX	b2b_idx.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_LOB	b2b_lob.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOC	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcats1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefault1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_SVRMGSTORE	svrmg1_oid.dbf
Oracle Ultra Search	WKSYS	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WKPROXY	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
メタデータ・リポジトリのバージョン	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf

### 15.5.13.2 すでに使用されているスキーマ名

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は、既存のデータベース内に同じ名前のスキーマを 1 つでも見つけると、そのスキーマを削除して新しいデータでスキーマを再作成してもよいかどうか、ユーザーに確認を求めています。

そのスキーマ内のデータを保存する場合は、処理を続行せず、必要なデータをバックアップし、別のスキーマにリストアしてから、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再実行します。ここで、スキーマを削除して再作成するように指定します。

データベース内にすでに存在しているスキーマ名のリストを取得するには、次のように ALL\_USERS ビューを問い合わせます。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select username from all_users;
```

*password* には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行して、OracleAS Metadata Repository によって使用されているスキーマおよび表領域を削除する方法については、[付録 B](#) を参照してください。

### 15.5.13.3 すでに使用されている表領域名

既存のデータベース内に同じ名前の表領域を 1 つでも見つけた場合、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は処理を続行できなくなります。この場合、エラーのダイアログ・ボックスが表示されます。次の手順を実行します。

1. エラーのダイアログ・ボックスを閉じ、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
2. 必要に応じて、その表領域のデータをバックアップします。
3. 表領域を削除します。
4. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再実行します。

データベース内にすでに存在している表領域名のリストを取得するには、次のように V\$TABLESPACE ビューを問い合わせます。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name from v$tablespace;
```

*password* には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

---

**注意：** OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行し、途中で処理を取り消した場合、[表 15-9](#) に示した表領域のいくつかがデータベースに作成されている可能性があります。これらの表領域は、再度 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に削除する必要があります。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行して、OracleAS Metadata Repository によって使用されているスキーマおよび表領域を削除する方法については、[付録 B](#) を参照してください。

---

表領域は、手動で SQL 文を実行して削除できます。また、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行して OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマを削除することもできます。詳細は、[付録 B](#) を参照してください。

手動で SQL 文を実行する場合は、次の手順に従います。必ずこの順序を守ってください。先にデータファイルを削除すると、表領域を削除できなくなります。表領域が存在している場合、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再実行できません。

1. SQL\*Plus を使用し、データベースに SYS ユーザーとしてログインします。

```
/> sqlplus "sys/password as sysdba"
```



2. 表領域内のスキーマを削除します。

```
SQL> drop user schema_name cascade;
```

3. 表領域を削除します。

```
SQL> drop tablespace tablespace_name including contents cascade constraints;
SQL> exit;
```

4. その表領域に関連付けられているデータファイル (.dbf ファイル) を削除します。

#### 15.5.13.4 表領域のサイズ

表領域に RAW デバイスではなくファイルを使用している場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によって作成される各表領域のサイズを選択します。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant では、表領域ごとに 3 つのサイズ・オプションが用意されています (表 15-10 を参照)。各サイズは、コンポーネント使用率の低、中、高に対応しています。アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合、そのコンポーネントの表領域には最大サイズを選択します。そのリポジトリで使用する予定のないコンポーネントには、最小サイズを選択します。

表領域のサイズは初期サイズです。これらの表領域は AUTOEXTEND に設定されるため、そのサイズはコンポーネント使用率が高くなるのに伴って拡張される場合があります。

**表 15-10 表領域の初期サイズ**

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Certificate Authority	OCA	15	35	55
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_META	5	10	15
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_CACHE	5	10	15
OracleAS PartnerConnect	B2B_RT	50	75	90
OracleAS PartnerConnect	B2B_DT	60	75	90
OracleAS PartnerConnect	B2B_IDX	20	40	60
OracleAS PartnerConnect	B2B_LOB	20	40	60
OracleAS Portal	PORTAL	75	100	150
OracleAS Portal	PORTAL_DOC	25	40	50
OracleAS Portal	PORTAL_IDX	30	50	60
OracleAS Portal	PORTAL_LOB	30	50	60
OracleAS Single Sign-On	IAS_META	200	300	500
Oracle Ultra Search				
Oracle Workflow				
INTERNET_APPSERVER_REGISTRY (OracleAS Metadata Repository のバージョンに関する情報を格納するスキーマ)				
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY_TAB	25	35	45
OracleAS UDDI	UDDISYS_TS	35	50	65

表 15-10 表領域の初期サイズ（続き）

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Web Clipping Support	WCERSYS_TS	35	45	55
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	50	100	200
Oracle Internet Directory	OLTS_ATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_BATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_CT_STORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_DEFAULT	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_SVRMGSTORE	10	15	20

既存のデータベースで ASM、Oracle Managed Files または RAW デバイスを使用している場合、表領域のサイズを選択する必要はありません。ただし、そのストレージ・デバイスのサイズがコンポーネントに対して十分なものであることを確認する必要があります（表 15-11 を参照）。特に、コンポーネントの使用率が高いことが予想される場合には、その表領域のストレージ・デバイスに十分な領域を確保するようにしてください。

表 15-11 システムの表領域の最小サイズ

表領域	最小サイズ
DRSYS 表領域	64 MB
SYSTEM 表領域	1024 MB
TEMP 表領域	128 MB
UNDOTBS1 表領域	256 MB
UNDOTBS2 表領域	256 MB

RAW デバイスの使用方法については、データベースのマニュアルを参照してください。

## 15.5.14 Oracle Internet Directory への登録

登録を正常に行うためには、次の項目をチェックします。

- 既存のデータベースが Oracle Internet Directory に登録されていないことを確認します。すでに Oracle Internet Directory に登録されているデータベースを登録することはできません。
- 同じ SID を持つ別のデータベースが Oracle Internet Directory に登録されていないことを確認します。

データベースがすでに Oracle Internet Directory に登録されているかどうかをチェックするには、次のようにして Oracle Internet Directory を調べる必要があります。

1. Oracle Directory Manager を使用して Oracle Internet Directory に接続します。
  - a. Oracle Directory Manager を起動します。  

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```
  - b. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. データベースが Oracle Internet Directory に登録されているかどうかをチェックします。「エントリ管理」→「cn=OracleContext」の順にエントリを開きます。

データベースが Oracle Internet Directory に登録されている場合は、「cn=your\_database\_name」というエントリが表示されます。

登録を解除する方法については、[G.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)の手順 2 を参照してください。

3. Oracle Internet Directory に登録されているメタデータ・リポジトリがデータベースに含まれているかどうかをチェックします。次のエントリを展開します。

「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」

Oracle Internet Directory に登録されているメタデータ・リポジトリがデータベースに含まれている場合は、orclReferenceName=your\_database\_name というエントリが表示されます。

登録を解除する方法については、[G.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)の手順 3 を参照してください。

## 15.6 Oracle Internet Directory の要件

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するには、Oracle Internet Directory のバージョンが 9.0.4 以上でなければなりません。Oracle Internet Directory バージョン 9.2.x はサポートされていません。

Oracle Internet Directory のバージョンをチェックするには、次のコマンドを実行します。

```
/> oidldapd -version
```

oidldapd コマンドは、\$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリに置かれています。  
ORACLE\_HOME は、Oracle Internet Directory のインストール先ディレクトリです。

## 15.7 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がインストール済であることを確認します。詳細は、[15.4 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール」](#)を参照してください。
2. 既存のデータベース用のリスナーおよびそのデータベース自体が起動して実行中であることを確認します。
3. NLS\_LANG 環境変数が英語以外のロケールに設定されている場合は、設定を解除するか、american\_america.us7ascii に設定します。

```
prompt> unsetenv NLS_LANG
- or -
prompt> setenv NLS_LANG american_america.us7ascii
```

NLS\_LANG が英語以外のロケールに設定されていると、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は Workflow スキーマのロードに失敗します。

NLS\_LANG は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行終了後、元の値に戻るかまいません。

4. 次のようにして、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホーム (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール先ディレクトリ) から OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。

```
prompt> cd $ORACLE_HOME_RepCA
prompt> runRepca.sh
```

# 15.8 次に読む必要のある項

この項では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の使用手順について説明します。

## ロード操作

ロード操作については、使用しているデータベース・タイプと記憶域の選択肢に一致する項を表 15-12 から選択します。

表 15-12 次に読む必要のある項

データベース記憶域の種類	読む必要のある項
オペレーティング・システム上の通常のファイルとして作成されたデータファイル	<a href="#">16.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」</a>
RAW デバイス	<a href="#">16.2 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」</a>
Oracle Managed Files	<a href="#">16.3 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」</a>

## 登録操作のみ

OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録のみを行う場合は、[第 17 章「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録」](#)を参照してください。

## 削除操作または登録解除操作

OracleAS Metadata Repository の削除および登録解除については、[付録 B「OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除」](#)を参照してください。

---

## OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード

この章では、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストール（ロード）する方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 16.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
- 16.2 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
- 16.3 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」
- 16.4 項「ログ・ファイル内の無視できるエラー」
- 16.5 項「インストール後の手順」
- 16.6 項「ロードに失敗した場合の対処方法」
- 16.7 項「同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール」

### 16.1 ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール

データファイルの格納にファイル・システムを使用する既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが、[15.5 項「データベースの要件」](#) に示した要件を満たしていることを確認します。
2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#) を参照してください。
3. 各画面の指示に従います。

表 16-1 通常のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b>: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b>: OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。Oracle Internet Directory をまだ使用していない場合にこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p><b>SYS パスワード</b>: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p><b>シングル・ノード・インスタンス</b>: このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「標準のファイル・システムまたは Cluster File System」を選択します。

表 16-1 通常のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール（続）

画面	操作
6. 表領域情報の指定	<p>OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が表領域用のファイルを作成するディレクトリ、および表領域のサイズを指定します。指定するディレクトリは、次の条件を満たしている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ データベースを実行しているコンピュータ上にすでに存在している（このコンピュータは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータと同じであるとはかぎらないことに注意してください）。</li> <li>■ 書込み可能である。</li> <li>■ 十分な空き領域がある。</li> <li>■ ディレクトリへのパスが正しく、データベースを実行しているオペレーティング・システムの規則に従っている。</li> </ul> <p><b>すべての表領域に同じディレクトリを使用：</b>すべての表領域用のすべてのファイルと同じディレクトリに格納する場合は、このオプションを選択します。このオプションの下にあるフィールドにそのディレクトリを指定します。</p> <p><b>表領域ごとに別個のディレクトリを使用：</b>各表領域用のファイルを異なるディレクトリに格納する場合は、このオプションを選択します。</p> <p><b>表領域：</b>ツリーを開き、各コンポーネント用の表領域を表示します。表領域を選択し、関連付けられているデータファイルおよびサイズを表示または編集します。</p> <p><b>サイズ：</b>アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合は、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合は、最小サイズを選択します。</p> <p><b>ファイル名：</b>データベース・ファイルのファイル名を入力します。例：portal.dbf</p> <p><b>ディレクトリ：</b>表領域のデータベース・ファイルを格納するディレクトリを指定します。ディレクトリへのパスが正しく、データベースを実行しているオペレーティング・システムの規則に従っていることを確認してください。</p> <p>例（UNIX）：/opt/oracle/dbfiles/</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 警告：ディスク領域のチェック	<p>この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。</p>
8. リポジトリをロードします	<p>OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックして、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

4. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

## 16.2 RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール

この項では、RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

1. データベースが、15.5 項「データベースの要件」に示した要件を満たしていることを確認します。

2. OracleAS Metadata Repository の RAW デバイスを作成します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域、およびそれらの最小サイズのリストは、表 15-11 を参照してください。

RAW デバイスを作成するコマンドは、使用しているボリューム・マネージャによって異なります。たとえば、VERITAS Volume Manager を使用している場合、コマンドは vxassist です。

3. (オプション) RAW デバイスに表領域をマップするためのファイルを作成し、そのファイルを指すように DBCA\_RAW\_CONFIG 環境変数を設定します。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がこのファイルを読み込み、「表領域情報の指定」画面の各フィールドにデータを自動的に表示します。この場合、画面のデータを確認するのみで済みます。

このファイルを作成しない場合でも、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行して、RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この場合、「表領域情報の指定」画面の各フィールドは空のままになるので、手動でデータを入力する必要があります。

詳細な手順は次のとおりです。

- a. RAW デバイスに表領域をマップするファイルを作成します。

ファイル内の各行は次の書式で記述します。

```
tablespace_name=raw_device_file_path
```

次の内容をサンプルとして使用できます。RAW デバイス・ファイル・パスは実際の値に置き換えてください。ここで示されているように、表領域名の末尾には「1」を付け加えます。

```
PORTAL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PTM5_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PTM5_CACHE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_cache_64m
DCM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_dcm_256m
WCRSYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_clip_64m
OCATS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_battr_64m
OLTS_CT_STORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_svrmgstore_64m
DSGATEWAY_TAB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_synd_64m
b2b_dt1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_dt_256m
b2b_rt1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_rt_256m
b2b_lob1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_lob_256m
b2b_idx1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_idx_256m
```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストは、[15.5.13 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

- b. DBCA\_RAW\_CONFIG 環境変数を、このファイルへのフルパスに設定します。

たとえば、/opt/oracle/repca/tablespace\_map.txt としてファイルを保存する場合、環境変数は次のように設定できます。

```
setenv DBCA_RAW_CONFIG /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt
```

4. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
5. 各画面の指示に従います。



表 16-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b>: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります（適切なスラッシュを使用するなど）。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b>: OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。Oracle Internet Directory をまだ使用していない場合にこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p><b>SYS パスワード</b>: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p><b>シングル・ノード・インスタンス</b>: このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。</li> </ul> <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「RAW デバイス」を選択します。
6. 表領域情報の指定	<p>マッピング・ファイルを作成し、そのファイルを指すように DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を設定した場合は、そのファイルから読み込まれた値がこの画面に表示されます。詳細は、3 ページ 16-4 の手順を参照してください。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。</p> <p>マッピング・ファイルを作成していない場合、または DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を設定していない場合、この画面では手動で情報を入力する必要があります。「次へ」をクリックします。</p>
7. 警告: ディスク領域のチェック	<p>この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に表示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。</p>

表 16-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	操作
8. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Internet Directory にログインします。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単な名前 (jdoe など) または DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p><b>注意:</b> Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) はどのレルムにも属さないなので、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. リポジトリをロードします	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。
10. 成功	「OK」をクリックして、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

## 16.3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール

Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

- データベースが、15.5 項「データベースの要件」に示した要件を満たしていることを確認します。

特に、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリが db\_create\_file\_dest 初期化パラメータに指定されていることを確認してください。これは、次のようにして設定できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set db_create_file_dest = '/u03/oradata';
```

この初期化パラメータが設定されていない場合は、エラーが発生します。
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。
- 各画面の指示に従います。

表 16-3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b>: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b>: OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。Oracle Internet Directory をまだ使用していない場合にこのオプションを選択します。</p> <p>「ロードして登録」を選択して、OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory へ登録します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p><b>SYS パスワード</b>: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p><b>シングル・ノード・インスタンス</b>: このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。</li> </ul> <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「Oracle-Managed Files」を選択します。
6. Oracle Managed Files 用のディレクトリ	<p>この画面には、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリが表示されます。この値は、db_create_file_dest 初期化パラメータから読み取られます。</p> <p>このパラメータが設定されていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p>OracleAS Metadata Repository Creation Assistant がデータファイルを作成する場所を別のディレクトリに変更する場合は、まず (SQL*Plus などのデータベース管理ツールを使用して) そのディレクトリを指すように db_create_file_dest 初期化パラメータを編集します。そして、1 つ前の画面に戻り、「次へ」をクリックして再度この画面を表示します。新たにパラメータに指定した値を確認してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 表領域情報の指定	<p>この画面には、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が作成する必要がある表領域が表示されます。</p> <p>「サイズ」列で、各表領域に適切なサイズを選択します。アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合は、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合は、最小サイズを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

**表 16-3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール（続き）**

画面	操作
8. 警告: ディスク領域のチェック	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に表示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。
9. リポジトリをロードします	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。
10. 成功	「OK」をクリックして、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

## 16.4 ログ・ファイル内の無視できるエラー

ログ・ファイルに次のエラーが記録されていても、特に問題がないため無視できます。

- [SP2-0332 エラー](#)
- [SP2-0606 エラー](#)

### 16.4.1 SP2-0332 エラー

SP2-0332 エラーが次の文脈でログ・ファイルに記録されている場合は、無視してかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0332: Cannot create spool file.
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

### 16.4.2 SP2-0606 エラー

SP2-0606 エラーが次の文脈でログ・ファイルに記録されている場合は、無視してかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0606: Cannot create SPOOL file "LOGS/oidimeta.log"
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

## 16.5 インストール後の手順

OracleAS Metadata Repository をデータベースにインストールした後、次の手順を実行する必要があります。

- [sqlnet.ora ファイルの更新](#)
- [データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー](#)
- [DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定](#)
- [Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成](#)

### 16.5.1 sqlnet.ora ファイルの更新

OracleAS Metadata Repository の ORASSO\_PS スキーマに接続できるように、SQL\*Net 設定を構成します。そのためには、NAMES.DIRECTORY\_PATH エントリに LDAP を追加して \$ORACLE\_HOME/network/admin/sqlnet.ora ファイル（ORACLE\_HOME は OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホーム）を更新します。次に例を示します。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

この構成を行わないと、OracleAS Single Sign-On の管理ポータルを使用する際、OracleAS Portal にエラーが表示されます。このエラーは、外部アプリケーションの機能を利用する場合に OracleAS Portal が ORASSO\_PS スキーマに接続するために使用する DB リンクが原因で発生します。DB リンクは、OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホームで構成されている SQL\*Net 設定を使用して解決されます。

### 16.5.2 データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー

この手順を実行する必要があるのは、OracleAS Metadata Repository をロードして Oracle Internet Directory に登録した場合のみです。OracleAS Metadata Repository をロードしたのみで Oracle Internet Directory に登録していない場合、この手順を実行する必要はありません。

- データベースのバージョンが 9.2.0.6（または 9.2.x シリーズのそれ以降）である場合は、*Repository\_Creation\_Assistant\_OH/network/admin/ldap.ora* ファイルを *Database\_OH/network/admin/ldap.ora* *Database\_OH* にコピーします。  
  
*Repository\_Creation\_Assistant\_OH* は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホームです。  
  
*Database\_OH* は、データベースの Oracle ホームです。
- データベースのバージョンが 10.1.0.4（または 10.1.x シリーズのそれ以降）である場合は、*Repository\_Creation\_Assistant\_OH/network/admin/ldap.ora* ファイルを *Database\_OH/ldap/admin/ldap.ora* にコピーします。  
  
*Repository\_Creation\_Assistant\_OH* は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホームです。  
  
*Database\_OH* は、データベースの Oracle ホームです。

### 16.5.3 DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定

dcm スキーマのロックを解除し、パスワードを設定します。この手順を実行する必要があるのは、(1) J2EE and Web Services 中間層インスタンスをクラスタリングしているデータベース専用としてメタデータ・リポジトリを使用する予定で、なおかつ (2) メタデータ・リポジトリを Oracle Internet Directory に登録していない場合のみです。

1. データベースがインストールされているディレクトリへのフルパスを指すように、ORACLE\_HOME 環境変数を設定します。
2. ORACLE\_SID 環境変数をデータベースの SID に設定します。
3. SQL\*Plus を使用し、dcm スキーマのロックを解除してパスワードを設定します。

次の `alter user` コマンドではパスワードを `welcome1` に設定していますが、パスワードは任意の値に設定できます。

```
%ORACLE_HOME%/bin/sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user dcm identified by welcome1 account unlock;
```

## 16.5.4 Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成

Oracle Application Server は、データベースに付属する Oracle Ultra Search を使用します。バージョン 9.2.0.6 のデータベースに付属する Oracle Ultra Search には、デフォルトのインスタンスは含まれていません。したがって、このバージョンのデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードした場合は、Oracle Ultra Search インスタンスを作成する必要があります。インスタンスの作成方法の詳細は、『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』の「Oracle Ultra Search の管理ツールの理解」、インスタンスの作成に関する項を参照してください。

Oracle Ultra Search インスタンスを作成しない場合、次の操作を行ったときにエラーが発生します。

1. OracleAS Portal へのログイン。
2. Oracle Ultra Search の管理ページへの移動。この場合、次のエラーが発生します。

```
"Error: No Ultra Search instances have been assigned to user
"ORCLADMIN" for administration. Contact the Ultra Search
administrator for your organization."
```

## 16.6 ロードに失敗した場合の対処方法

ロードに失敗した場合は、失敗前にロードされた OracleAS Metadata Repository オブジェクトを削除する必要があります。オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行し、削除オプションを選択します。ウィザードまたはスクリプトを使用して、オブジェクトを削除できます。詳細は、[付録 B](#) を参照してください。
2. この手順は、データベース内の Oracle Internet Directory スキーマが OracleAS Metadata Repository によってロードされた場合にのみ実行します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行時点で、すでに Oracle Internet Directory スキーマがデータベースに格納されていた場合、この手順を実行する必要はありません。

Oracle Internet Directory オブジェクトをデータベースから削除します。この作業は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant での削除操作とは別に実行する必要があります。この削除操作では、Oracle Internet Directory オブジェクトはデータベースから削除されないためです。

Oracle Internet Directory オブジェクトを削除する方法は、[B.7 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」](#) を参照してください。

## 16.7 同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール

この項は、9.2.0.6 のデータベースにのみ適用されます。10g のデータベースには適用されません。

9.2.0.6 のデータベースにインストールされた OracleAS Metadata Repository を削除して再インストールするには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、データベースから OracleAS Metadata Repository を削除します。
2. この手順は、データベース内の Oracle Internet Directory スキーマが OracleAS Metadata Repository によってロードされたものである場合にのみ実行します。OracleAS Metadata

Repository Creation Assistant の実行時点で、すでに Oracle Internet Directory スキーマがデータベースに格納されていた場合、この手順を実行する必要はありません。

Oracle Internet Directory オブジェクトをデータベースから削除します。この作業は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant での削除操作とは別に実行する必要があります。この削除操作では、Oracle Internet Directory オブジェクトはデータベースから削除されないためです。

Oracle Internet Directory オブジェクトの削除の詳細は、[B.7 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」](#)を参照してください。

3. データベースに OracleAS Metadata Repository を再インストールします。

### 再インストールした OracleAS Metadata Repository の使用

再インストールした OracleAS Metadata Repository を使用する前に、次の点に注意してください。

- この OracleAS Metadata Repository に対して、Oracle Internet Directory をインストールすることはできません。インストーラによって、「Oracle Internet Directory はすでにデータベースに構成されています。Oracle Internet Directory をインストールできるのは、データベースごとに 1 回のみです」というメッセージが表示されます。
- この OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory を使用する中間層をインストールできます。





---

## OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

この章では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、一度登録解除した OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 17.1 項「Oracle Internet Directory への登録」
- 17.2 項「登録後の手順」
- 17.3 項「登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法」

### 17.1 Oracle Internet Directory への登録

---

#### 注意：

- OracleAS Metadata Repository を登録できるのは、サポートされているバージョンの Oracle Internet Directory に限られます。詳細は、15.6 項「Oracle Internet Directory の要件」を参照してください。
  - Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、リリース 2 (9.0.2) のメタデータ・リポジトリを 10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録することはできません。
  - Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって、同じサービス名がすでに Oracle Internet Directory に登録されていることが検出された場合、そのサービス名はすでに Oracle Internet Directory に登録されているというエラー・メッセージが表示されます。処理を続行するには、その登録を解除する必要があります。
- 

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。
2. 表 17-1 で説明する画面に従います。

表 17-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b>: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b>: Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「登録」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>データベースの接続情報を入力します。</p> <p>「DBA ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。</p> <p>データベースの種類に応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名およびポート</b>: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。次のように、<i>host:port</i> の形式で入力し、各 <i>host:port</i> はカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</li> </ul> <p>中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 17-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録（続き）

画面	操作
5. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p><b>Internet Directory ホスト名</b> : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</p> <p><b>Internet Directory ポート</b> : Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p><b>登録（または登録解除）を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用</b> : 登録の際、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーは、ias Admins グループに属している必要があります。簡単な名前（jdoe など）または DN（cn=orcladmin など）を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p><b>注意</b> : Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）はどのレルムにも属さないため、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。</p> <p><b>ルート Oracle コンテキスト（cn=OracleContext）</b> : OracleAS Metadata Repository をルート Oracle コンテキストに登録する場合は、このオプションを選択します。</p> <p><b>カスタム Oracle コンテキスト</b> : Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. 成功	<p>「OK」をクリックして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

## 17.2 登録後の手順

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録した後、ldap.ora ファイルを Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ホームからデータベース・ホームにコピーする必要があります。詳細は、[16.5.2 項「データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー」](#)を参照してください。

## 17.3 登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法

登録が完了する前に Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了した場合、または登録に失敗した場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再度実行して登録をやり直す前に、次の手順を手動で実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory からリポジトリのエントリを削除します。[付録 B.3「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」](#)を参照してください。
2. すべてのスキーマ・パスワードをデフォルト値にリセットします。

```
sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name identified by schema_password;
```

3. すべてのスキーマ・パスワードをロックします。

```
sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> alter user schema_name account lock password expire;
```

これらの手順の実行後、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再度起動してデータベースを登録できます。

# 第Ⅳ部

---

## 付録

第Ⅳ部には、次の付録が含まれます。

- [付録 A「削除と再インストール」](#)
- [付録 B「OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除」](#)
- [付録 C「デフォルトのポート番号」](#)
- [付録 D「開放が必要なファイアウォールのポート」](#)
- [付録 E「OracleAS Metadata Repository スキーマ」](#)
- [付録 F「Configuration Assistant」](#)
- [付録 G「トラブルシューティング」](#)



---

## 削除と再インストール

この付録では、Oracle Application Server の削除および再インストールのプロセスについて説明します。

- [A.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One の削除」](#)
- [A.2 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の削除」](#)
- [A.3 項「構成解除ツール」](#)
- [A.4 項「ログ・ファイル内の無視できるエラー」](#)
- [A.5 項「Oracle Application Server プロセスのクリーン・アップ」](#)
- [A.6 項「再インストール」](#)
- [A.7 項「トラブルシューティング」](#)

### A.1 Oracle Application Server Standard Edition One の削除

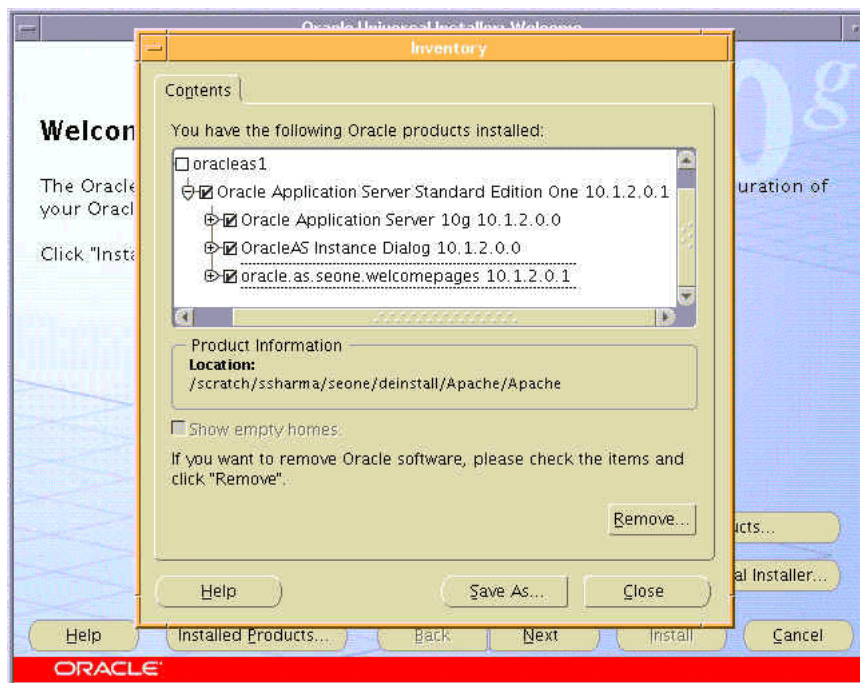
次に示すのは、Oracle Application Server Standard Edition One を削除するための高度な手順です（詳細は後述）。

1. 次のコマンドを使用して Oracle Universal Installer を開始します。

```
$ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller -deinstall
```

[図 A-1](#) に示す画面が表示されます。

図 A-1 選択した Oracle ホームを削除するための「インベントリ」ボックス



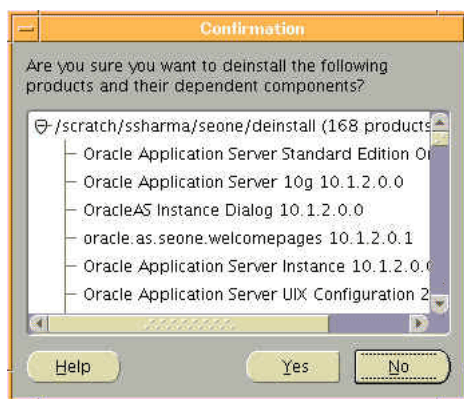
削除する Oracle ホーム・ディレクトリを選択し、「**削除**」をクリックして次に進みます。

J2EE and Web Services のみを削除する場合は、手順 3 に進んでください。

OracleAS Portal を削除する場合は、このまま手順 2 に進んでください。

2. 図 A-2 のような「確認」ボックスが表示されます。このボックスには、削除する Oracle ホームのリストが表示されます。「**はい**」をクリックして、削除の対象を確定します。

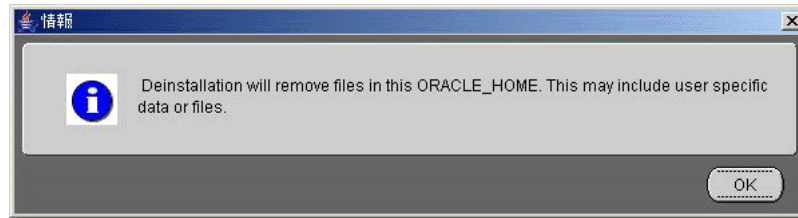
図 A-2 「確認」ボックス



3. 削除処理がしばらく続行された後、図 A-3 の画面が表示されます。この画面には「この Oracle ホーム内のファイルおよびデータが削除される」という内容の警告が表示されます。



図 A-3 Oracle ホーム内のファイル削除に関する削除警告メッセージ



J2EE and Web Services のみを削除する場合は、「OK」をクリックして手順 4 に進んでください。

OracleAS Portal を削除する場合は、この警告メッセージが 2 度表示されます。これは、OracleAS Portal をインストールした際、OracleAS Portal 用と OracleAS Infrastructure 用の 2 つの Oracle ホームが作成されるためです。

詳細は、1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照してください。いずれの場合も「OK」をクリックして、次の手順に進みます。

4. 削除処理が最後まで実行されます。ファイルの削除処理に関するログは、次のファイルの中で指定された場所に作成されます。  
`/etc/oraInst.loc`
5. 中間層インスタンスに対して削除ツールを実行します。詳細は、A.3.2 項「構成解除ツールによる中間層の削除」を参照してください。
6. OracleAS Infrastructure インスタンスを削除します。詳細は、A.3.3 項「構成解除ツールによる OracleAS Infrastructure の削除」を参照してください。
7. 残りのファイルをクリーン・アップします。

---

#### 注意：

- 既存のデータベース上に OracleAS Metadata Repository をインストールするための Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant) を使用して OracleAS Metadata Repository を削除する場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の「削除」オプションを選択します。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant は、Oracle Internet Directory への登録を削除する場合にも使用できます。
  - Infrastructure インスタンスを削除すると、その Infrastructure に依存する中間層インスタンスはすべて使用できなくなります。引き続き必要な中間層インスタンスは、別の Infrastructure のサービスを使用できるように構成することが可能です。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- 

#### 削除またはクリーン・アップの対象

Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) のインスタンスを削除するには、表 A-1 のリストにある項目をクリーン・アップする必要があります。手順はこの付録内で後述します。

表 A-1 削除の対象

クリーン・アップの対象	使用するツール
Oracle ホーム・ディレクトリにあるファイル	インストーラ インストーラで削除されないファイルについては、rm コマンドを使用すれば削除できます。
削除したインスタンスに対応するインベントリ・ディレクトリ内のエントリ	インストーラ
Farm ページに表示されているインスタンス名	インストーラ
削除したインスタンスに対応する /etc ディレクトリ内のエントリ	これらのエントリは手動で削除する必要があります。場合に応じて、次のいずれかの手順を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 中間層を削除する場合は、ページ A-6 の手順 7</li> <li>■ OracleAS Infrastructure を削除する場合は、ページ A-7 の手順 4</li> </ul>
削除したインスタンスに対応する Oracle Internet Directory 内のエントリ	構成解除ツール

このインストーラでは、個々のコンポーネントのカスタム削除を実行することはできません。

# A.2 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の削除

この項では、必要がなくなった OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を削除する手順を説明します。

ただし、OracleAS Metadata Repository の削除または登録取消しを行うには、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が必要です。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant をインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. Oracle Universal Installer を起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

ORACLE\_HOME は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール・ディレクトリです。

3. 次を示すインストーラの手順に従います。
  - a. 「ようこそ」画面：「製品の削除」をクリックします。
  - b. 「インベントリ」画面：削除する OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を選択し、「削除」をクリックします。
  - c. 「確認」画面：削除対象として目的のコンポーネントが正しく選択されていることを確認します。「はい」をクリックして、次の手順に進みます。
  - d. 「削除の進捗状況」画面：削除の進捗状況が表示されます。
  - e. 削除が完了したらインストーラを終了します。
4. Oracle ホーム・ディレクトリにある残りのファイルを削除します。

```
prompt> rm -rf $ORACLE_HOME
```

## A.3 構成解除ツール

構成解除ツールは、削除を開始する際に使用します。このツールを使用すると、削除する Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスに対応するエントリを OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory から削除できます。

### A.3.1 構成解除ツールの実行

構成解除ツールを実行するには、Perl インタプリタで \$ORACLE\_HOME/bin にある deconfig.pl スクリプトを実行します。Perl インタプリタは、Oracle Application Server Standard Edition One に付属しています。

```
prompt> cd $ORACLE_HOME/bin
prompt> $ORACLE_HOME/perl/bin/perl deconfig.pl [-u oid_user]
        [-w password] [-r realm] [-dbp sys_db_password]
```

パラメータを使用せずにスクリプトを実行すると、必要な情報の入力を求めるメッセージが表示されます。

**表 A-2 deconfig.pl に使用できるオプションのパラメータ**

パラメータ	説明
-u oid_user	<p>Oracle Internet Directory ユーザーを指定します。</p> <p>簡単なユーザー名またはユーザーの識別名 (DN) を使用して、Oracle Internet Directory ユーザーを指定することも可能です。たとえば、簡単なユーザー名を jdoe@mycompany.com とすれば、それに対応する DN は cn=jdoe, l=us, dc=mycompany, dc=com となります。</p> <p>Oracle Internet Directory ユーザーには、削除対象の Oracle Application Server インスタンスで構成が行われているコンポーネントを削除する権限が必要です。これらの権限は、コンポーネントのインストールおよび構成を行うための権限と同じものです。</p> <p>たとえば、Oracle Delegated Administration Services および Oracle Application Server Single Sign-On を実行している OracleAS Infrastructure インスタンスを削除する場合は、これらのコンポーネントの構成を行う権限がそのユーザーにあることを確認してください。</p> <p>このツールを Oracle Internet Directory スーパーユーザーとして実行する場合は必ず、orcladmin ではなく cn=orcladmin を使用してください。両者はそれぞれ異なるユーザーを表します。</p>
-w password	Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードを指定します。
-r realm	<p>ユーザー認証の対象となるレルムを指定します。この値が必要となるのは、Oracle Internet Directory に複数のレルムが存在する場合のみです。</p>
-dbp sys_db_password	<p>データベースの SYS ユーザー用のパスワードを指定します。これは、Oracle Internet Directory で使用される OracleAS Metadata Repository データベースです。</p> <p>この値が必要となるのは、Oracle Internet Directory の構成を行う Identity Management 専用のインスタンスを削除する場合のみです。</p> <p>このパラメータを指定した場合でも、必要がなければパスワードの値は使用されません。</p>
-h または -help	構成解除ツールのヘルプ情報を表示します。

構成解除ツールのログは、\$ORACLE\_HOME/cfgtoollogs の DeconfigureWrapper.log ファイルに記録されます。

### A.3.2 構成解除ツールによる中間層の削除

この項では、構成解除ツールを使用して中間層インスタンスを削除する方法について説明します。

1. 削除するインスタンスをインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. 削除するインスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。

プロセス停止の詳細は、[第 9 章](#)または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

3. 中間層の Oracle ホームに移動し、構成解除ツールを実行します。

```
prompt> cd $ORACLE_HOME/bin
prompt> $ORACLE_HOME/perl/bin/perl deconfig.pl [parameters]
```

パラメータの詳細は、[A.3 項](#)を参照してください。

4. インストーラを起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

5. 次に示すインストーラの手順に従います。

- a. 「ようこそ」画面：「**製品の削除**」をクリックします。
- b. 「インベントリ」画面：削除するインスタンスを選択し、「**削除**」をクリックします。
- c. 「確認」画面：削除対象として目的のコンポーネントが正しく選択されていることを確認します。「**はい**」をクリックして、次の手順に進みます。
- d. 「削除の進捗状況」画面：削除の進捗状況が表示されます。
- e. 削除が完了したらインストーラを終了します。

6. 削除したインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにある残りのファイルを削除します。

```
prompt> rm -rf $ORACLE_HOME
```

7. 削除した中間層に対応する行を /etc/oratab ファイルから削除します。

ファイルの末尾付近に、Oracle ホーム・ディレクトリを指定した行があります。削除した Oracle ホームに対応する行を削除します。たとえば、Oracle ホームが /private1/j2ee である場合、それに対応する行は次のようになります。

```
*:/private1/j2ee:N
```

ただし、Oracle Internet Directory の OracleAS Portal エントリは、構成解除ツールやインストーラでは削除できません。

### A.3.3 構成解除ツールによる OracleAS Infrastructure の削除

この項では、OracleAS Infrastructure インスタンスを削除する方法について説明します。

1. 削除するインスタンスをインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. 削除するインスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。
3. 構成解除ツールを実行します。

```
prompt> cd $INFRA_ORACLE_HOME/bin
prompt> $INFRA_ORACLE_HOME/perl/bin/perl deconfig.pl [parameters]
```

---

**注意：** パラメータの詳細は、[A.3 項「構成解除ツール」](#)を参照してください。削除するインスタンスに Oracle Internet Directory コンポーネントまたは Oracle Application Server Single Sign-On コンポーネントが含まれている場合は、Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) として構成解除ツールを実行する必要があります。削除するインスタンスに Oracle Internet Directory や Oracle Application Server Single Sign-On が含まれていない場合でも、適切な権限を持つユーザーとしてツールを実行する必要があります。

---

4. 削除した中間層インスタンスに対応する行を /etc/oratab ファイルから削除します。

ファイルの末尾付近に、Oracle ホーム・ディレクトリを指定した行があります。削除する Infrastructure インスタンスにメタデータ・リポジトリが含まれている場合、ファイルには次の 2 つの行が存在します。

- \* で始まる行
- データベース SID で始まる行

この行を両方とも削除する必要があります。

たとえば、/private1/infra にインストールされた Infrastructure インスタンスに、asdb という SID を持つメタデータ・リポジトリが含まれている場合、対応する行は次のようになります。

```
asdb:/private1/infra:N
*/:/private1/infra:N
```

5. Oracle Universal Installer を起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

6. 次を示すインストーラの手順に従います。

- a. 「ようこそ」画面：「**製品の削除**」をクリックします。
- b. 「インベントリ」画面：削除するインスタンスを選択し、「**削除**」をクリックします。
- c. 「確認」画面：削除対象として目的のコンポーネントが正しく選択されていることを確認します。「**はい**」をクリックして、次の手順に進みます。
- d. 「削除の進捗状況」画面：削除の進捗状況が表示されます。
- e. 削除が完了したらインストーラを終了します。

7. 削除したインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにある残りのファイルを削除します。

```
prompt> rm -rf $ORACLE_HOME
```

## A.4 ログ・ファイル内の無視できるエラー

J2EE and Web Services インスタンスや OracleAS Portal インスタンスの削除後、`oraInstalltimestamp.err` ファイル内に `Unable to delete file` や `Unable to find make file` というエラーが表示されることがありますが、これらは問題のないエラー・メッセージです。

```
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException:
An error occurred during runtime. oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException:
An error occurred during runtime.
...
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException:
Unable to delete file
/home/j2ee/sysman/emd/targets.xml
oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException: Unable to delete file
/home/j2ee/sysman/emd/targets.xml
at instantiateFileEx.deinstallAction(instantiateFileEx.java:935)
...
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException:
Unable to find make file:
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk
oracle.sysman.oii.oii.OiiDeinstallException: Unable to find make file:
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk
at ssmakeux.deinstallAction(ssmakeux.java:246)
...
```

## A.5 Oracle Application Server プロセスのクリーン・アップ

インストールを開始する前に停止しなかった Oracle Application Server プロセスは、そのファイルが削除されてしまうため、終了する必要があります。実行中のプロセスを確認する場合は、`ps` コマンドを実行します。

```
prompt> ps -ef
```

プロセスを終了する場合は、`kill` コマンドを使用します。

```
prompt> kill -9 process_id
```

`process_id` は、`ps` コマンドを実行すれば特定できます。

`dcmctl` シェル・プロセスを停止する必要がある場合は、`exit` と入力してシェルを終了してください。

## A.6 再インストール

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスがすでに存在するディレクトリに、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを再インストールすることはできません。Oracle Application Server Standard Edition One を同じディレクトリに再インストールする場合は、その前に既存の Oracle Application Server Standard Edition One をいったん削除する必要があります。

## A.7 トラブルシューティング

削除に関連してよく発生する問題の解決方法については、[G.4 項「削除に関する問題とその解決策」](#)を参照してください。

---

# OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除したり、Oracle Internet Directory への登録を取り消したりすることができます。

この付録では、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除する方法について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- B.1 項「Oracle Internet Directory データベースの登録取消し」
- B.2 項「中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認」
- B.3 項「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」
- B.4 項「OracleAS Metadata Repository の削除」
- B.5 項「OracleAS Metadata Repository の登録取消し」
- B.6 項「cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除」
- B.7 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」
- B.8 項「登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ」

## ウィザードとスクリプトの違い

OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除には、ウィザードまたは cleanMR スクリプトを使用できます。ただしスクリプトを実行した場合は、削除のみ実行され、OracleAS Metadata Repository の登録取消しは行われません。

## B.1 Oracle Internet Directory データベースの登録取消し

Oracle Internet Directory データベースを使用している場合は、登録を取り消すことはできません。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant にはエラーが表示され、登録取消しは取り消されます。

Oracle Internet Directory データベースとは、Oracle Internet Directory で使用されているデータベースのことです。例をあげます。

- OracleAS Portal を新しい Metadata Repository にインストールした場合、このデータベースが Oracle Internet Directory データベースになります。
- Oracle Internet Directory を（インストーラまたは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用して作成された）Metadata Repository に登録した場合、このデータベースが Oracle Internet Directory データベースになります。

## B.2 中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認

データベースが Oracle Internet Directory データベースでない場合、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant では、削除または登録取消しの対象となる OracleAS Metadata Repository データベースを使用している中間層があるかどうかの確認が行われます。

OracleAS Metadata Repository を使用している中間層が検出された場合は、警告が表示されません。ここで登録取消しまたは削除の処理を続行すると、その中間層の機能は失われます。

## B.3 ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う方法について説明します。

Oracle Internet Directory に対する OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、[B.5 項「OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[B.4 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う手順は次のとおりです。

1. 削除または登録取消しの対象となる OracleAS Metadata Repository を使用中の Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

*password* には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

*schemaname* に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、[表 15-9](#)に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

2. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。



表 B-1 OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b>: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b>: 上書きする OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 削除オプションを選択	<p><b>登録解除して削除</b>: OracleAS Metadata Repository の表領域とスキーマを削除する場合および Oracle Internet Directory への登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p><b>SYS パスワード</b>: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「<b>シングル・ノード・インスタンス</b>」または「<b>Real Application Clusters データベース</b>」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「<b>シングル・ノード・インスタンス</b>」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「<b>Real Application Clusters データベース</b>」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名およびポート</b>: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト:ポートの形式で入力し、各ホスト:ポートはカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</li> </ul> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-1 OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除（続き）

画面	操作
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。</p> <p><b>Internet Directory ホスト名</b> : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p><b>Internet Directory ポート</b> : Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p><b>登録（または登録解除）を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用</b> : 登録取消しの際、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Internet Directory にログインします。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単な名前（jdoe など）またはユーザーの DN（cn=orcladmin）を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p><b>注意</b> : Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）はどのレルムにも属さないで、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の場所を入力します。</p> <p><b>ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext)</b> : ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p><b>カスタム Oracle コンテキスト</b> : Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p><b>注意</b> : この画面の「次へ」をいったんクリックすると、指定した入力内容を<b>取り消すことはできません</b>。入力内容を確定する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。取り消した場合、この先の操作を行うには、いくつかの手順に従って手動でデータベースをクリーン・アップする必要があります。<a href="#">B.8 項「登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ」</a>を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックし、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

## B.4 OracleAS Metadata Repository の削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository を削除する方法について説明します。

Oracle Internet Directory に対する OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、[B.5 項「OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う場合は、[B.3 項「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository を削除する手順は次のとおりです。

1. 削除する OracleAS Metadata Repository を使用している Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

`schemaname` に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、[表 15-9](#) に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

2. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。

**表 B-2 OracleAS Metadata Repository の削除**

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b> : データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b> : 上書きする OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-2 OracleAS Metadata Repository の削除（続き）

画面	操作
4. 削除オプションを選択	<p><b>削除</b> : OracleAS Metadata Repository の表領域とスキーマをデータベースから削除する場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p><b>SYS パスワード</b> : SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「<b>シングル・ノード・インスタンス</b>」または「<b>Real Application Clusters データベース</b>」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「<b>シングル・ノード・インスタンス</b>」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b> : データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b> : データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b> : データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。</li> </ul> <p>例 : asdb.mydomain.com</p> <p>「<b>Real Application Clusters データベース</b>」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名およびポート</b> : Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト : ポートの形式で入力し、各ホスト : ポートはカンマで区切ります。</li> </ul> <p>hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</p> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1（ドメインが同じ場合） : myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2（ドメインが異なる場合） : myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>サービス名</b> : データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスター内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。</li> </ul> <p>例 : asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 成功	<p>「OK」をクリックし、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

## B.5 OracleAS Metadata Repository の登録取消し

この項では、ウィザードを使用して Oracle Internet Directory から OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す方法について説明します。OracleAS Metadata Repository オブジェクトは、データベースから削除されません。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[B.4 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う場合は、[B.3 項「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」](#)を参照してください。

1. 登録を取り消す OracleAS Metadata Repository を使用中の Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

schemaname に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、表 15-9 に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

- 2. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、15.7 項「OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。
- 3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p><b>Oracle ホーム</b> : データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p><b>ログ・ファイル・ディレクトリ</b> : 上書きする OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 削除オプションを選択	<p>「登録解除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し（続き）

画面	操作
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>「DBA ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名</b>: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</li> <li>■ <b>ポート</b>: データベースのポート番号を入力します。</li> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ホスト名およびポート</b>: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト:ポートの形式で入力し、各ホスト:ポートはカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</li> </ul> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>サービス名</b>: データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com</li> </ul> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p><b>Internet Directory ホスト名</b>: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p><b>Internet Directory ポート</b>: Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p><b>登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用</b>: 登録取消しの際、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し（続き）

画面	操作
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Internet Directory にログインします。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単な名前（jdoe など）またはユーザーの DN（cn=orcladmin）を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p><b>注意：</b>Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）はどのレルムにも属さないため、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の場所を入力します。</p> <p><b>ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext):</b> ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p><b>カスタム Oracle コンテキスト :</b> Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p><b>注意：</b>この画面の「次へ」をいったんクリックすると、指定した入力内容を<b>取り消すことはできません</b>。入力内容を確定する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。取り消した場合、この先の操作を行うには、いくつかの手順に従って手動でデータベースをクリーン・アップする必要があります。<a href="#">B.8 項「登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ」</a>を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックし、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

登録取消し後のスキーマのロックとパスワードの無効化

（OracleAS Metadata Repository オブジェクトを削除せず）OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant によりスキーマがロックされ、そのスキーマのパスワードは無効になります。このため、そのスキーマを再度使用するには、次の操作が必要になります。

- スキーマのロックを解除します。これには、「alter user」SQL 文を使用します。次に示すのはその例です。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL account unlock;
```

- スキーマのパスワードを変更します。この場合も、「alter user」SQL 文を使用します。次に示すのはその例です。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL identified by new_password;
```

スキーマのリストは、[表 15-9](#) を参照してください。

## B.6 cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除

---

**注意：** スクリプトを使用する場合は、OracleAS Metadata Repository の削除のみ実行されます。OracleAS Metadata Repository の登録取消しは行われません。OracleAS Metadata Repository の登録を取り消すには、ウィザードを使用する必要があります。

---

cleanMR スクリプトは `$ORACLE_HOME/repca/clean` ディレクトリに格納されています。ただし `ORACLE_HOME` は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール・ディレクトリを表します。

データベースを実行しているコンピュータ上で cleanMR を実行します。

### スクリプトを実行する前に Oracle Application Server インスタンスをすべて停止する

スクリプトを実行する前に、削除する OracleAS Metadata Repository を使用している Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

`schemaname` に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、表 15-9 に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しないと、「現在データベースに接続しているユーザーを削除しようとしています」という内容のエラーが表示されることがあります。

### cleanMR の構文

```
prompt> cleanMR -HOST db_host -PORT db_port -SERVICE_NAME service_name
               [-DBUSER dbuser] -DBPASSWD password [-DBROLE dbrole]
```

表 B-4 cleanMR のパラメータ

パラメータ	オプションまたは必須	説明
-HOST <i>db_host</i>	必須	データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。
-PORT <i>db_port</i>	必須	データベース・リスナーがリスニングしているポート番号を指定します。
-SERVICE_NAME <i>service_name</i>	必須	データベースのサービス名を指定します。
-DBUSER <i>dbuser</i>	オプション	スクリプトでデータベースへ接続する際に必要となるデータベース・ユーザーを指定します。指定しない場合のデフォルト・ユーザーは「SYS」です。
-DBPASSWD <i>password</i>	必須	DBUSER のパスワードを指定します。
-DBROLE <i>dbrole</i>	オプション	データベース・ユーザー・ロールを指定します。指定しない場合のデフォルト・ロールは「SYSDBA」です。



例：

```
cleanMR -HOST myhost -PORT 1521 -SERVICE_NAME asdb -DBPASSWD topsecret
```

#### 注意

- このスクリプトを実行しても、ODS スキーマおよび OLTS\_ATTRSTORE、OLTS\_BATTRSTORE、OLTS\_CT\_STORE、OLTS\_DEFAULT、OLTS\_SVRMGSTORE という 5 つの表領域は削除されません。これらのオブジェクトは Oracle Internet Directory に保持されます。  
これらのオブジェクトを削除する必要がある場合は、[B.7 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」](#)を参照してください。
- スクリプトを使用する場合、データ・ファイルは削除されません。

#### エラー ORA-2000 およびエラー ORU-10027 が表示された場合

cleanMR スクリプトを実行中に次のようなエラーが表示された場合、

```
ORA-20000: ORU-10027: buffer overflow, limit of 2000 bytes
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 35
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 198
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 139
ORA-06512: at line 201
```

スクリプトを再度実行して、まだ削除されていないオブジェクトを削除する必要があります。

## B.7 Oracle Internet Directory オブジェクトの削除

repca\_cleanOID.sql スクリプトを実行する場合は、Oracle Internet Directory オブジェクトを削除する必要があるかどうかを再度確認してください。OracleAS Metadata Repository をロードする以前、データベースに Oracle Internet Directory オブジェクトが含まれていた場合は、必要とする Oracle Internet Directory でこれらのオブジェクトを今後使用しないことを再確認されるようお勧めします。

Oracle Internet Directory オブジェクトは次のとおりです。

- スキーマ : ODS
- 表領域 : OLTS\_ATTRSTORE
- 表領域 : OLTS\_BATTRSTORE
- 表領域 : OLTS\_CT\_STORE
- 表領域 : OLTS\_DEFAULT
- 表領域 : OLTS\_SVRMGSTORE

次のようなスクリプトを実行できます (ORACLE\_HOME は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール・ディレクトリを表します)。

```
prompt> cd ORACLE_HOME/repca/clean
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @repca_cleanOID.sql
```

## B.8 登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ

登録取消しの処理を、完了する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。その場合はまず、次の手順に従ってクリーン・アップを実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory のデータベース登録エントリを手動で削除します。詳細は、[G.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)を参照してください。
2. SQL\*Plus で次の文を実行して、データベース内の登録エントリを編集します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_loading (
      component_id=>'MRC',
      component_name=>'Oracle Application Server Metadata Repository Version',
      schema_name=>'SYS' );
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_valid( component_id=>'MRC' );
```

## デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラによってデフォルトのポート番号が各コンポーネントに割り当てられます。この付録では、これらデフォルトのポート番号をリストにまとめてあります。内容は次のとおりです。

- [C.1 項「デフォルトのポート番号の割当て方」](#)
- [C.2 項「デフォルトのポート番号」](#)

---

**注意：** デフォルト以外のポート番号を使用する場合は、`staticports.ini` というファイルを作成し、使用するポート番号をその中に指定する必要があります。詳細は、[1.4.7.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#)を参照してください。

---

### C.1 デフォルトのポート番号の割当て方

インストーラでは次の要領で、各コンポーネントにデフォルトのポート番号が割り当てられます。

1. インストーラではまず、目的となるデフォルトのポート番号が現在使用されているかどうか確認されます。もし使用されていなければ、そのポート番号が目的のコンポーネントに割り当てられます。
2. 目的となるデフォルトのポート番号がすでに Oracle 製品や実行中のアプリケーションにより使用されている場合は、まずポート番号全体の中で最も小さい番号の割当てを試みます。使用可能なポート番号が見つかるまで、昇順にポート番号の割当てを試みていきます。

### C.2 デフォルトのポート番号

表 C-1 は、各コンポーネントとそれに対応するデフォルトのポート番号をまとめたものです。

右端の「[staticports.ini](#) での表記名」列にあるのは、`staticports.ini` ファイル内で使用されている表記に基づいたコンポーネント名です。デフォルトのポート番号をオーバーライドする際は、このファイルを使用します。詳細は、[1.4.7.4 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」](#)を参照してください。

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	<code>staticports.ini</code> での表記名
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)			
Oracle Notification Server のリクエスト・ポート	6003	6003 ~ 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle Notification Server のローカル・ポート	6100	6100 ~ 6199	Oracle Notification Server Local port

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での表記名
Oracle Notification Server のリモート・ポート	6200	6200 ～ 6299	Oracle Notification Server Remote port
<b>Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)</b>			
OC4J AJP	3301	3301 ～ 3400	staticports.ini では設定不可
OC4J RMI	3201	3201 ～ 3300	staticports.ini では設定不可
JMS	3701	3701 ～ 3800	staticports.ini では設定不可
IIOP	3401	3401 ～ 3500	staticports.ini では設定不可
IIOPS1	3501	3501 ～ 3600	staticports.ini では設定不可
IIOPS2	3601	3601 ～ 3700	staticports.ini では設定不可
<b>Oracle HTTP Server</b>			
Oracle HTTP Server リスナー (OracleAS Web Cache 未構成)	中間層: 80 インフラストラクチャ: 7777	7777 ～ 7877	Oracle HTTP Server Listen port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL)	中間層: 443 インフラストラクチャ: 4443	4443 ～ 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port
Oracle HTTP Server リスナー (非 SSL、OracleAS Web Cache 構成済)	中間層: 80 インフラストラクチャ: 7777	7777 ～ 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL、OracleAS Web Cache 構成済)	中間層: 443 インフラストラクチャ: 4443	4443 ～ 4543	Oracle HTTP Server SSL port
Java Object Cache	7000	7000 ～ 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 ～ 7199	DCM Java Object Cache port
SOAP サーバー	9998	9998 ～ 9999	staticports.ini では設定不可
ポート・トンネリング	7501	7501 ～ 7599	staticports.ini では設定不可
Oracle HTTP Server 診断ポート	7200	7200 ～ 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
<b>OracleAS Portal</b>			
OracleAS Portal	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
<b>OracleAS Single Sign-On</b>			
Oracle Application Server Single Sign-On	--	--	Oracle HTTP Server と同じポートを使用
<b>OracleAS Web Cache</b>			

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での表記名
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー	80	7777 ～ 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー (SSL)	443	4443 ～ 4543	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache の管理ポート	4000	4000 ～ 4300	Web Cache Administration port
OracleAS Web Cache の不正ポート	4001	4000 ～ 4300	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache の統計ポート	4002	4000 ～ 4300	Web Cache Statistics port
<b>Oracle Enterprise Manager Application Server Control</b>			
Application Server Control	1810	1810 ～ 1829	Application Server Control port
Oracle 管理エージェント	1830	1830 ～ 1849	Oracle Management Agent port
Application Server Control - RMI	1850	1850 ～ 1869	Application Server Control RMI port
Application Server Control - SSL	1810	1810 ～ 1829	Application Server Control を SSL に対応するように構成する場合、このポート番号はインストール後に割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
Application Server Control コンソール HTTP ポート (orcl)	5500		staticports.ini では設定不可
Application Server Control エージェント・ポート (orcl)	1831		staticports.ini では設定不可
Log Loader	44000	44000 ～ 44099	Log Loader port
<b>Oracle Internet Directory</b>			
Oracle Internet Directory	3060	3060 ～ 3129	Oracle Internet Directory port
Oracle Internet Directory (SSL)	3130	3130 ～ 3199	Oracle Internet Directory (SSL) port

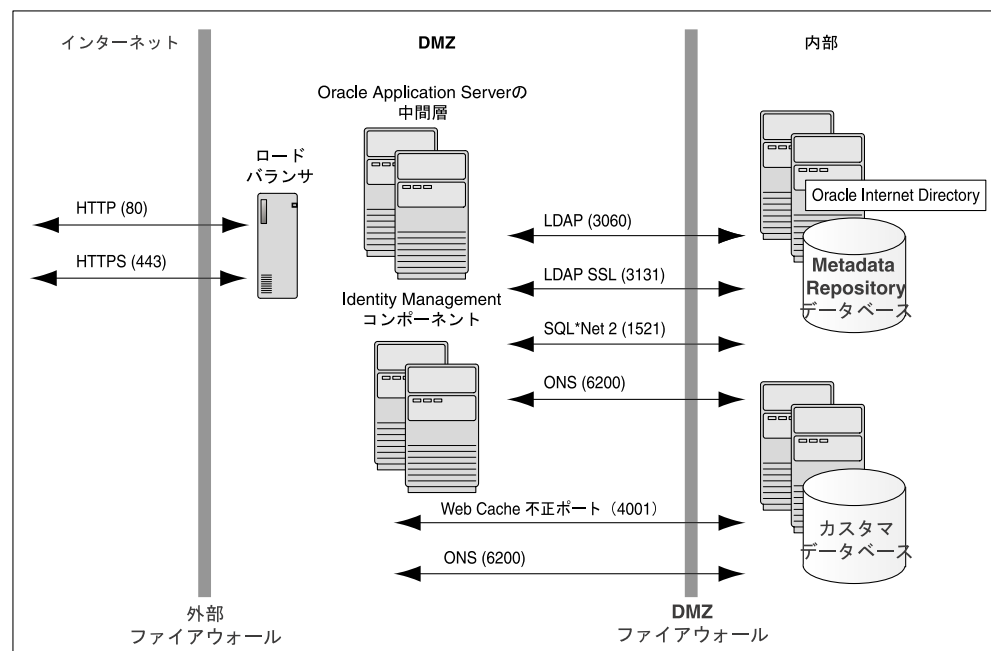


## 開放が必要なファイアウォールのポート

この付録では、ファイアウォールが存在する環境に Oracle Application Server をインストールして実行する場合に、ファイアウォールで開く必要のあるポートを示します。

ファイアウォールの内側にあるマシンに Oracle Application Server をインストールする場合、[図 D-1](#) に示すとおり、インストール作業中および実行中は、ファイアウォールのポートを一部開放する必要があります。

**図 D-1 ファイアウォールの内側にあるマシンに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする際、開放することが必要なポート**



これらのポートを開放する手順は次のとおりです。

1. インストールを開始する前に、次のようにして `staticports.ini` ファイルの各コンポーネントにポートを指定します。
  - LDAP: port 3060
  - LDAP SSL: port 3131
  - SQL\*Net2: port 1521
  - Oracle Notification Server: port 6200
  - Web Cache Invalidation: port 4001

---

---

**注意：** ここに示した各ポート番号は、それぞれのコンポーネントに対するデフォルト・ポートを表します。実際の環境では、これらとは別のポートを使用することも可能です。

---

---

2. 拡張インストールを実行し、ポート構成オプション画面で `staticports.ini` ファイルの絶対パスを指定します。

ポート構成オプション画面の詳細は、[5.6 項](#)を参照してください。

---

---

**注意：** カスタム・ポートを指定するには、拡張インストールを実行する必要があります。基本インストールでは、ポートをカスタマイズすることはできません。

---

---



# OracleAS Metadata Repository スキーマ

OracleAS Metadata Repository は Oracle データベースの 1 つで、Oracle Application Server Standard Edition One をサポートするための追加スキーマがあらかじめ用意されています。この付録では、これらのスキーマについて説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- [E.1 項「OracleAS Metadata Repository スキーマの説明」](#)
- [E.2 項「スキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル」](#)

## E.1 OracleAS Metadata Repository スキーマの説明

この項では、OracleAS Metadata Repository スキーマを列挙し、それらの内容について説明します。

スキーマは、次の 3 つのカテゴリに分類されます。

- [Oracle Identity Management スキーマ](#)  
このカテゴリに属するスキーマは、OracleAS Single Sign-On や Oracle Internet Directory などの Oracle Identity Management コンポーネントで使用されます。
- [製品メタデータ・スキーマ](#)  
このカテゴリに属するスキーマは、OracleAS Portal や OracleAS Wireless などの中間層アプリケーション・コンポーネントで使用されます。
- [管理スキーマ](#)  
このスキーマは Distributed Configuration Management (DCM) で使用される単一のスキーマです。

また、INTERNET\_APPSERVER\_REGISTRY というスキーマも使用されます。これは、前述のどのカテゴリにも属さない付加的なスキーマです。このスキーマには、OracleAS Metadata Repository スキーマのリリース番号が格納されています。

### E.1.1 Oracle Identity Management スキーマ

[表 E-1](#) は、Oracle Identity Management の各コンポーネントで使用されるスキーマを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

**表 E-1 Identity Management スキーマ**

コンポーネント	スキーマ	説明
Oracle Internet Directory	ODS	内部使用
OracleAS Certificate Authority	OCA	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	内部使用

表 E-1 Identity Management スキーマ (続き)

コンポーネント	スキーマ	説明
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	内部使用

## E.1.2 製品メタデータ・スキーマ

表 E-2 は、中間層アプリケーションの各コンポーネントで使用するスキーマを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

表 E-2 製品メタデータ・スキーマ

コンポーネント	スキーマ	説明
Oracle Ultra Search	WK_TEST	Oracle Ultra Search のデフォルトのインスタンス・スキーマ — デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンスのドキュメント情報およびドキュメント索引が格納される
Oracle Ultra Search	WKPROXY	Oracle Ultra Search プロキシ・データベース・ユーザー — データは一切格納されない
Oracle Ultra Search	WKSYS	Oracle Ultra Search メタデータ・リポジトリ — データソース、クローラ構成、クローラのスケジュール、トレース・ログ、属性の割当て、ユーザー権限など、Oracle Ultra Search インスタンスに関するメタ情報が格納される
OracleAS Web Clipping	WCRSYS_TS	Wireless がサポートする Web クリッピング・リポジトリ。クリッピング定義、ユーザー・カスタマイズ・データおよびそれらにアクセスするための PL/SQL パッケージが格納される
OracleAS Wireless	WIRELESS	ユーザー・コンテンツ (フォルダ、サービス、リンク、通知、プリセット)、ユーザー・カスタマイズ・データ、グループ、ロール、一時ユーザー情報、スタイルシート、論理デバイス定義、(シリアルライズ化された) Java 変換プログラム、アダプタ、ロケーション・データ、構成データ、プロセスの実行時状態およびアプリケーション・メトリックが格納される
Oracle Workflow	OWF_MGR	設計時および実行時の各ワークフロー表、キュー、PL/SQL コード、ディレクトリ・サービス・データベースのビューおよびローカル表、ワークフロー・プロセスおよびビジネス・イベントに関するメタデータが格納される
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	Discoverer Portlet Provider のメタデータ、ユーザー・ポートレットのポートレット定義、およびスケジュールされた Discoverer の問合せを実行することにより取得されるキャッシュ・データが格納される。RESOURCE 権限と CONNECT 権限がある
OracleAS Portal	PORTAL	Portal データベースのオブジェクトおよびコードが格納される。またこのスキーマは、プロキシ・ユーザー・アカウントを表します。mod_plsql はこのアカウントを使用して、対応する DAD で指定された資格証明に基づいたデータベースへの接続を行います。
OracleAS Portal	PORTAL_APP	外部 JSP アプリケーションの認証に使用する
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	デモ・コード

表 E-2 製品メタデータ・スキーマ (続き)

コンポーネント	スキーマ	説明
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	利用頻度の低いユーザーはすべて、このスキーマにデフォルトで割り当てられる。Web を介してパブリックにアクセスできるプロシージャについては、その実行権限が PUBLIC に対しても付与されるため、このスキーマからでもアクセスが可能です。
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	ビジネス・エンティティ、ビジネス・サービス、パインディング・テンプレート、tModel、パブリッシャ・アサーションなど様々な UDDI エンティティ、North American Industry Classification System (NAICS)、Universal Standard Products and Services Codes (UNSPSC)、ISO 3166 Geographic Taxonomy (ISO 3166) といった様々な分類構造、UDDI レプリケーション / サブスクリプション関連の内部表、および管理に関するビューや表などが格納される。
N/A	DSGATEWAY	N/A

**注意：**

- Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、IP スキーマにはデータが一切格納されません。このスキーマは、すでに B2B スキーマに置き換えられており、下位互換性の確保以外に用途はありません。
- Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、DSGATEWAY スキーマは使用しません。このスキーマは、下位互換性を確保するためのものです。

**E.1.3 管理スキーマ**

表 E-3 は、Distributed Configuration Management (DCM) で使用されるスキーマをまとめたものです。

表 E-3 管理スキーマ

コンポーネント	スキーマ	説明
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	OC4J および Oracle HTTP Server の各インスタンス、アプリケーション・サーバー・インスタンス、OracleAS クラスタおよびファームに関する構成情報が格納される
Application Server Control	OEM_REPOSITORY	Database Control のリポジトリ

## E.2 スキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル

表 E-4 は、各 OracleAS Metadata Repository スキーマで使用する表領域およびデフォルト・データファイルを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

**表 E-4 Metadata Repository の表領域およびデフォルト・データファイル**

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データファイル
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
Metadata Repository Version	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcats1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefault1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_SVRMGSTORE	svrmg1_oid.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	SYSAUX	sysaux01.dbf
Oracle Ultra Search	WKPROXY	SYSAUX	sysaux01.dbf
Oracle Ultra Search	WKSYS	SYSAUX	sysaux01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discopltml1.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discopltml1.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_RT	b2b_rt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_DT	b2b_dt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_IDX	b2b_idx.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_LOB	b2b_lob.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOC	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf

表 E-4 Metadata Repository の表領域およびデフォルト・データファイル（続き）

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データファイル
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf

**注意：**

- Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、IP スキーマにはデータが一切格納されません。このスキーマは、すでに B2B スキーマに置き換えられており、下位互換性の確保以外に用途はありません。
- Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、DSGATEWAY スキーマは使用しません。このスキーマは、下位互換性を確保するためのものです。



# Configuration Assistant

この付録では、Configuration Assistant およびそれぞれのログ・ファイルの格納場所がリストにまとめられています。この付録の内容は次のとおりです。

- [F.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant」](#)
- [F.2 項「Configuration Assistant に関するトラブルシューティング」](#)

## F.1 Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant

表 F-1 は、Oracle Application Server Configuration Assistant をアルファベット順にまとめたリストです。インストールのタイプおよび選択した構成オプションに応じて、各インストールで使用される Configuration Assistant は異なります。

**表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant**

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
ADF Configuration Assistant	Oracle Application Development Framework ランタイム・ライブラリを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に組み込みます。  この Configuration Assistant には、\$ORACLE_HOME/jlib にある emConfigInstall.jar ファイルが必要です。	\$ORACLE_HOME/oraInventory/logs/installActiontimestamp.log
Application Server Control Configuration Assistant	Oracle Management Agent および Application Server Control を起動し、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を介してアプリケーションをデプロイします。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Database Configuration Assistant	OracleAS Infrastructure にあわせて、OracleAS Metadata Repository の構成を行います。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Database Migration Assistant	9.0.2 のインフラストラクチャ・データベースを 10g リリース 2 (10.1.2) のインフラストラクチャ・データベースに移植します。  この Migration Assistant を実行する場合は、その前に必ずデータベースが起動され、実行されていることを確認してください。	\$ORACLE_HOME/assistants/dbma/logs
Database-managed OracleAS Cluster Assistant	選択したデータベースに対してクラスタ構成を有効にします。	\$ORACLE_HOME/config/infratool_dcm_repository.log  \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_dcm_repository.log

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
DCM Repository Backup Assistant	DCM リポジトリのバック・アップが可能になります。	\$ORACLE_HOME/dcm/logs
Delegated Administration Service Configuration Assistant	Oracle Internet Directory に Oracle Delegated Administration Services の URL を設定し、必要なアクセス制御権限を DAS エンティティに追加します。  この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Infrastructure Instance Configuration Assistant が正しく実行されたことを確認してください。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/dasca.log
Directory Integration Platform Configuration Assistant	Oracle Internet Directory で構成された場合の Directory Integration Server の登録および起動を行います。  この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Oracle Internet Directory の構成が正しく行われていることを確認してください。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/dipca.log
File-Based Farm Repository Configuration Assistant	ファイルベースのリポジトリを Oracle Application Server コンポーネント用に構成します。	\$ORACLE_HOME/config/infratool_filebased_repository.log  \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_filebased_repository.log
HTTP Server Configuration Assistant	Oracle HTTP Server の構成を行ってそれを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に登録し、\$ORACLE_HOME/sysman/emd にある targets.xml ファイルにエントリを追加します。	\$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs  \$ORACLE_HOME/Apache/Apache/httpd.log  \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Infrastructure Database Registration Assistant	OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録します。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_ldaporacfg.log



表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Infrastructure Instance Configuration Assistant	<p>\$ORACLE_HOME/config にある ias.properties ファイルを更新してインスタンスを Oracle Internet Directory に登録し、Oracle Internet Directory の資格証明に基づいて \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリに ldap.ora ファイルを作成します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、事前に次の事柄を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH に \$ORACLE_HOME/lib32 および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH_64 に \$ORACLE_HOME/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 PATH に \$ORACLE_HOME/lib および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> </ul> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリが環境変数 PATH に設定されていることを確認してください。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/config/infratool_instance_jazn.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_instance_jazn.log</p>
Infrastructure mod_osso Configuration Assistant	<p>mod_osso を登録して Oracle HTTP Server に接続し、ユーザーの認証を行えるように Oracle Application Server Single Sign-On と統合します。</p> <p>mod_osso を登録することにより、OracleAS Infrastructure とともにインストールした Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server Single Sign-On のパートナ・アプリケーションとして使用できるようになります。Oracle HTTP Server がインストールされた環境では、そこで実行されるアプリケーションの URL が mod_osso に登録、保護されます。登録された URL が要求されると、mod_osso ではアクセス許可の前に Oracle Application Server Single Sign-On と連携してそのユーザーの認証が行われます。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/config/infratool_mod_osso.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_mod_osso.log</p>

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Infrastructure Schema Configuration Assistant	<p>Infrastructure スキーマを Oracle Internet Directory に登録します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、事前に次の事柄を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH に \$ORACLE_HOME/lib32 および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH_64 に \$ORACLE_HOME/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 PATH に \$ORACLE_HOME/lib および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> <li>■ Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant が正常に実行されたこと</li> <li>■ 環境変数 PATH に \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリが設定されていること</li> <li>■ Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant が正常に実行されたこと</li> </ul>	<p>\$ORACLE_HOME/config/schemaload.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/schemaload.log</p>
Infrastructure Upgrade Instance Configuration Assistant	<p>SSO スキーマの ACL エントリを削除します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、事前に次の事柄を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH に \$ORACLE_HOME/lib32 および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH_64 に \$ORACLE_HOME/lib が設定されていること</li> </ul> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリが環境変数 PATH に設定されていることを確認してください。</p>	\$ORACLE_HOME/config/infratool_infra_upgrade.log
Internet Directory Configuration Assistant	<p>Oracle Internet Directory を起動し、LDAP スキーマをロードして、Identity Management レルムを設定します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前にデータベースが正しく作成されていること、リスナーが起動され実行中であること、および tnsnames.ora ファイルが構成済であることを確認してください。</p>	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/oidca.log
Java Security Configuration Assistant	デフォルトのパスワードのかわりに、JAAS セキュリティ用のパスワードを設定します。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/jaznca.log

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
OC4J Configuration Assistant	<p>OC4J を Application Server Control と統合します。統合は次の手順に従って行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ targets.xml ファイルにエントリを追加します。</li> <li>■ iasadmin.properties ファイルにエントリを追加します。</li> </ul> <p>この Configuration Assistant には、deploy.ini ファイルが必要になります。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p>
OC4J Instance Configuration Assistant	<p>デブロイされた Oracle Application Server アプリケーション用に OC4J インスタンスを構成します。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p>
OPMN Configuration Assistant	<p>OPMN および OPMN が管理するプロセスを起動します。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log</p>
OPMN Configuration Assistant - start DAS instance	<p>OPMN を介して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを起動します。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log</p>
OPMN Configuration Assistant - start OCA	<p>OPMN を介して Oracle Application Server Certificate Authority を起動します。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ipm.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ons.log</p>
OPMN Configuration Assistant - start Oracle HTTP Server	<p>OPMN を介して Oracle HTTP Server を起動します。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/HTTP_Server~1</p>
Oracle Application Server Certificate Authority Configuration Assistant	<p>Oracle Application Server Single Sign-On と連携して認証を行う自己署名型の認証局を構成します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository、Oracle Application Server Single Sign-On および Repository API が構成済であることを確認してください。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/oca_install.log</p>
OracleAS File-Based Farm Repository Configuration Assistant	<p>ファイルベースのファーム・リポジトリの構成を行います。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/config/infratool_filebased_repository.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/infratool_filebased_repository.log</p>

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
OracleAS Instance Configuration Assistant	インスタンスのエントリを \$ORACLE_HOME/config にある target2add.xml ファイルに追加します。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log
OracleAS Randomize Password Configuration Assistant	全スキーマのデフォルトのパスワードを変更します。	なし
Oracle mod_osso Configuration Assistant	mod_osso を、インストール時に登録して Oracle HTTP Server に接続し、ユーザーの認証を行えるように Oracle Application Server Single Sign-On と統合します。mod_osso を登録することにより、Oracle Application Server 中間層とともにインストールした Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server Single Sign-On のパートナー・アプリケーションとして使用できるようになります。  Oracle HTTP Server がインストールされた環境では、そこで実行されるアプリケーションの URL が mod_osso に登録、保護されます。登録された URL が要求されると、mod_osso ではアクセス許可の前に Oracle Application Server Single Sign-On と連携してそのユーザーの認証が行われます。	\$ORACLE_HOME/config/j2ee_mod_osso.log \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/j2ee_mod_osso.log
Oracle Net Configuration Assistant	LDAP ネーミングをデフォルトでできるようにデータベース・リスナーおよび中間層の構成を行います。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/installActionstimestamp.log
Portal Configuration Assistant	OracleAS Portal の構成を行います。  この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず OracleAS Infrastructure が起動され実行中であることを確認してください。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/install.log
Register DCM Plug-Ins With Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	DCM プラグインを Oracle Enterprise Manager に登録します。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtoolstimestamp.log \$ORACLE_HOME/dcm/logs/dcmctl_logs

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Replication Configuration Assistant	<p>アドバンスド・レプリケーションのレプリカをインストールする場合は、新しい Oracle Internet Directory のメタデータをマスターの Oracle Internet Directory に書き込みます。</p> <p>LDAP のレプリカをインストールする場合は、デフォルト構成に基づいて、マスターの Oracle Internet Directory と新しい Oracle Internet Directory の間の LDAP ベースのレプリケーションを構成します。また、Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーの起動も行う他、Oracle Internet Directory レプリケーションの構成にも補助的な役割を果たします。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前にマスターと新しいレプリカそれぞれの Oracle Internet Directory サーバーが起動され実行中であることを確認してください。</p>	\$ORACLE_HOME/ldap/log/remtool.log
Single Sign-On Configuration Assistant	<p>Oracle Application Server Single Sign-On の構成を行います。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository および Repository API が構成済であることを確認してください。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/sso/log/ssoca.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/sso/log/ssoreg.log</p>
Ultra Search Configuration Assistant	<p>次の処理を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Oracle Application Server 中間層における Oracle Ultra Search のデブロイおよび構成</li> <li>■ Oracle Ultra Search バックエンド・アプリケーション・エンティティおよび Oracle Ultra Search 管理権限グループの作成</li> <li>■ Oracle Ultra Search 中間層のアプリケーション・エンティティの作成</li> <li>■ OracleAS Metadata Repository 内の Oracle Ultra Search メタデータの更新およびクリーン・アップ</li> </ul>	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/ultrasearch_config.log
Unlock Metadata Repository Schemas Configuration Assistant	OracleAS Metadata Repository にあるスキーマのロックを解除します。この Configuration Assistant は、Identity Management のインストール時に実行されます。	\$ORACLE_HOME/config/infratool_unlock_schema.log
Use Infrastructure Configuration Assistant	<p>\$ORACLE_HOME/config にある ias.properties ファイルを更新してインスタンスを Oracle Internet Directory に登録し、Oracle Internet Directory の資格証明に基づいて \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリに ldap.ora ファイルを作成します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリおよび ORACLE_HOME ディレクトリが環境変数 PATH に設定されていることを確認してください。</p>	<p>\$ORACLE_HOME/config/j2ee_instance_jazn.log</p> <p>\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/j2ee_instance_jazn.log</p>

表 F-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Use Metadata Repository Configuration Assistant	<p>Oracle Application Server 中間層に対応するように OracleAS Metadata Repository の構成を行います。これによって、より大きなインストール・タイプにあわせて J2EE and Web Services 中間層を拡張することも可能になります。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、事前に次の事柄を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH に \$ORACLE_HOME/lib32 および \$ORACLE_HOME/network/lib が設定されていること</li> <li>■ 環境変数 LD_LIBRARY_PATH_64 に \$ORACLE_HOME/lib が設定されていること</li> </ul> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に \$ORACLE_HOME/lib ディレクトリが環境変数 PATH に設定されていることを確認してください。</p>	\$ORACLE_HOME/config/infratool_midtier_upgrade.log
Web Cache Configuration Assistant	OracleAS Web Cache の構成を行い、Oracle Enterprise Manager Application Server Control に登録します。	\$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/configtooltimestamp.log
Wireless Configuration Assistant	Oracle Application Server Wireless の構成を行います。	\$ORACLE_HOME/wireless/logs/wireless_CA.out \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/wireless_CA.out
Oracle Application Server Wireless SDK Configuration Assistant	Wireless Development Kit の構成を行います。	\$ORACLE_HOME/wireless/logs/wdk_ca.out \$ORACLE_HOME/cfgtoollogs/wdk_ca.out

## F.2 Configuration Assistant に関するトラブルシューティング

Configuration Assistant についてなんらかの問題が発生した場合は、[G.6 項](#)のトラブルシューティング情報を参照してください。

---

# トラブルシューティング

この付録では、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする際に発生する可能性がある一般的な問題とその解決策について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- [G.1 項「ログ・ファイル」](#)
- [G.2 項「トラブルシューティング全般についてのヒント」](#)
- [G.3 項「インストールに関する問題とその解決策」](#)
- [G.4 項「削除に関する問題とその解決策」](#)
- [G.5 項「バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策」](#)
- [G.6 項「Configuration Assistant に関する問題とその解決策」](#)
- [G.7 項「OracleAS Portal に関する問題とその解決策」](#)
- [G.8 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に関する問題とその解決策」](#)
- [G.9 項「データベースに関する問題とその解決策」](#)
- [G.10 項「その他の情報が必要な場合」](#)

## G.1 ログ・ファイル

インストーラにより記録されるログ・ファイルは次のとおりです。

- `oraInventory_location/logs/installActionstimestamp.log`
- `oraInventory_location/logs/oraInstalltimestamp.err`
- `oraInventory_location/logs/oraInstalltimestamp.out`

## G.2 トラブルシューティング全般についてのヒント

次に示すのは、インストール時にエラーが発生した場合の一般的な対処方法です。

- 最新情報を『Oracle Application Server リリース・ノート』で確認します。プラットフォーム別のドキュメントとあわせてリリース・ノートも提供されています。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) から入手できます。
- ご使用のコンピュータが、[第 2 章「システムおよびインストール要件」](#) に示した要件を満たしているかどうかを確認します。
- いずれかのインストール画面で誤った情報を入力した場合は、「戻る」を何度かクリックしてその画面に戻ります。
- Configuration Assistant が失敗した場合は、そのログ・ファイルを確認します。[F.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant」](#) のリストに、

Configuration Assistant およびそれぞれのログ・ファイルの格納場所がまとめてあります。一部の Configuration Assistant について、ログ・ファイルが \$ORACLE\_HOME/cfgtoollogs ディレクトリ内に見当たらない場合は、インストーラを終了してください。インストーラを終了すると、このディレクトリにログ・ファイルがコピーされます。

- ファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、次のように対処してください。
  1. エラーをメモし、インストール・ログ・ファイルを確認します。
  2. 付録 A「削除と再インストール」の手順に従って、不完全なインストール内容を削除します。
  3. エラーの原因となった問題を修正します。
  4. 再度インストールを開始します。

## G.3 インストールに関する問題とその解決策

この項では、インストールに関連してよく発生する問題とその解決策について説明します。

- G.3.1 項「ログ・ファイルの場所」
- G.3.2 項「リンクの失敗と ORA エラー」
- G.3.3 項「インストール開始時の前提条件チェックの失敗」
- G.3.4 項「「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される」
- G.3.5 項「SHMMAX および SEMMSL に関するメッセージ」
- G.3.6 項「インストール前チェック実行後にインストーラが表示されなくなる」
- G.3.7 項「失敗したインストールをクリーン・アップできない」
- G.3.8 項「cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した」
- G.3.9 項「cn=orcladmin アカウントがロックされた」
- G.3.10 項「ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない」
- ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない
- G.3.11 項「ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない」
- G.3.12 項「Configuration Assistant の失敗（全般）」
- G.3.13 項「OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗した」
- G.3.14 項「Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した」
- G.3.15 項「Database Configuration Assistant (DBCA) の無視できるエラー・メッセージ」
- G.3.16 項「OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server が失敗した」
- G.3.17 項「OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance が失敗した」

### G.3.1 ログ・ファイルの場所

ログ・ファイルには、大きく分けて次の 2 つの種類があります。

- インストーラにより記録されるログ・ファイル。
  - oraInventory\_location/logs/installActiontimestamp.log
  - oraInventory\_location/logs/oraInstalltimestamp.err



- oraInventory\_location/logs/oraInstalltimestamp.out
  - \$Oracle\_Home/install/make.log
  - Configuration Assistant により記録される \$ORACLE\_HOME/cfgtoollogs ディレクトリ内のログ・ファイル。
- ただし、Configuration Assistant により作成されたログ・ファイルにアクセスする場合は、その前にインストーラを終了する必要があります。インストーラを使用している間は、これらのログ・ファイルにアクセスすることはできません。

## G.3.2 リンクの失敗と ORA エラー

### 問題

インストールの際、リンクに失敗し ORA エラーが表示された。

### 解決策

インストーラを終了し、ログ・ファイルでエラー・メッセージを確認します。特に、\$ORACLE\_HOME/installにある make.log ファイルを確認します。

失敗したインストールの内容を削除します。Oracle Application Server を再インストールする前に、使用するコンピュータが第2章「システムおよびインストール要件」で説明している要件を満たしていることを確認してください。

特に、次の要件の確認に重点を置いてください。

- カーネル・パラメータに正しい値が設定されていることを確認します。カーネル・パラメータの値を変更した場合は、インストーラをいったん終了しコンピュータを再起動して、新しい値を有効にする必要があります。
- Oracle Application Server のインストール先が有効なディレクトリであることを確認します。たとえばデータベースの Oracle ホームには、Oracle Application Server をインストールできません。完全なリストは、表 2-1 を参照してください。

## G.3.3 インストール開始時の前提条件チェックの失敗

### 問題

インストールを開始する際に実行される前提条件チェックに失敗した。

### 解決策

前提条件チェックにおいて、オペレーティング・システムのパッチまたはパッチ・バンドルが見つからないという内容のメッセージが表示された場合は、そのパッチが実際に存在しないか、すでに新しいパッチに置き換えられている可能性があります。ご使用のコンピュータに新しいパッチがインストールされている場合は、この警告は無視しても構いません。

## G.3.4 「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される

### 問題

空でないディレクトリにインストールしようとしているという内容のメッセージがインストーラに表示される。

### 解決策

インストール開始後「ファイルの場所の指定」画面より先の画面に進むと、インストールが完了しなかった場合でも、指定した Oracle ホーム・ディレクトリは作成されています。同じディレクトリにあらためてインストールしようとすると、そのディレクトリ内にはインストーラによって作成されたファイルが存在するため、ディレクトリが空ではないという内容の警告が表示されます。

#### 対処方法

1. 警告ダイアログ・ボックスで「いいえ」をクリックし、「ファイルの場所の指定」画面に戻ります。
2. 「ファイルの場所の指定」画面で、「インストールされた製品」をクリックします。「インベントリ」画面が表示されます。

「インベントリ」画面のリストに Oracle ホームが含まれていた場合は、その Oracle ホームを削除する必要があります。詳細は、[付録 A「削除と再インストール」](#)を参照してください。

「インベントリ」画面のリストに Oracle ホームが含まれていない場合は、その Oracle ホームにあるファイルを削除すれば、インストールを続行できます。

### G.3.5 SHMMAX および SEMMSL に関するメッセージ

#### 問題

OracleAS Metadata Repository のインストール中、SHMMAX および SEMMSL に関するメッセージが表示される。

#### 解決策

/etc/system ファイルで次の事柄を確認します。

- カーネル・パラメータに対応する /etc/system ファイル内のエントリがコメント・アウトされている場合、そのエントリはインストーラに認識されません。インストーラでは、コメント・アウトされたエントリ自体は読み込まれますが、その行が必須の値の後に続く場合はエラーが発生します。このような場合は、これらの行をファイルから削除する必要があります。
- ファイル内のエントリのうち構文エラーが含まれているものは、インストーラでは無視されます。必須のカーネル・パラメータの行には構文エラーが含まれていないことを確認してください。
- インストーラでは、極端に大きな値（2 GB を超える値）は正しく読み込まれません。こうした値は、実際より小さな値として解釈されます。必須のカーネル・パラメータの値が 2 GB 未満であることを確認してください。

### G.3.6 インストール前チェック実行後にインストーラが表示されなくなる

#### 問題

インストール前チェック実行後にインストーラが表示されなくなる。

#### 解決策

CD-ROM または DVD のマウント・ポイントになっているディレクトリが正しい権限でマウントされていないと、pwd コマンドが正しく実行されません。pwd を実行すると、「cannot determine current directory」というメッセージが返されます。

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. CD-ROM をアンマウントします。
2. マウント・ディレクトリの権限を 755 に変更します。
3. CD-ROM をマウントしなおします。

これで、インストーラは正常に実行されるようになります。

### G.3.7 失敗したインストールをクリーン・アップできない

Oracle Application Server Standard Edition One のインストールが正常に完了しなかった場合、再度インストールするには、失敗したインストールをいったん削除しておく必要があります。手順は、[付録 A 「削除と再インストール」](#) を参照してください。

### G.3.8 cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した

#### 問題

cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した。

#### 解決策

データベースのパスワードは再設定できます。ルート DSE の属性名は orclsupassword です。

ただし接続に何度か失敗すると cn=orcladmin アカウントはロックされます。この場合は、アカウントのロックを解除する必要があります。アカウントのロックを解除する手順については、[G.3.9 項「cn=orcladmin アカウントがロックされた」](#) を参照してください。

### G.3.9 cn=orcladmin アカウントがロックされた

#### 問題

接続に 10 回失敗すると cn=orcladmin アカウントはロックされる。この管理は、パスワード・ポリシーに基づいて行われる。10 回というのはデフォルトの値。

#### 解決策

cn=orcladmin のパスワードを知っている場合は、次のコマンドを実行することによりアカウントのロックを解除できます。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidpasswd connect=dbsid unlock_su_acct=true
```

ただし *dbsid* は、データベースの SID を表します。例を示します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidpasswd connect=asdb unlock_su_acct=true
OID DB user password: enter_ODS_password
OID superuser account unlocked successfully.
```

コマンドを実行すると、ODS スキーマのパスワードを入力するよう求められます。ODS パスワードは、デフォルトでは cn=orcladmin アカウントおよび ias\_admin アカウントのパスワードと同じです。このパスワードはインストール作業時に指定します。

パスワード・ポリシーを変更する場合は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

### G.3.10 ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない

#### 問題

メッセージが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない。

#### 解決策

英語以外の言語を表示する場合は、必要な言語をすべて、インストール時に追加してください。インストール時に言語を追加するには、言語の選択画面で必要な言語を選択します。デフォルトでインストールされる言語については、[5.5 項「言語の選択」](#) または [1.4.6 項「言語およびローケルの設定」](#) を参照してください。

### G.3.11 ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない

#### 問題

ネットワークに接続されたコンピュータにインストールした Oracle Application Server を、ネットワークに接続されていない状態で実行したい。

#### 解決策

ネットワークに接続された状態だけでなく接続されていない状態でも Oracle Application Server を実行するには、ループバック・アダプタをインストールする必要があります。静的 IP アドレスを持つコンピュータでは、ネットワークへの接続を切断すると、イーサネット・アダプタが停止し (ipconfig によりケーブルが未接続であると表示される)、ipconfig による IP アドレスの解決ができなくなります。

### G.3.12 Configuration Assistant の失敗（全般）

この項で説明するのは、Configuration Assistant の失敗に関するトラブルシューティング全般についてのヒントです。Configuration Assistant の失敗に関する個々のヒントは、次項以降を参照してください。

**関連項目：** Configuration Assistant の詳細は、[付録 F「Configuration Assistant」](#) を参照してください。

#### 問題

Configuration Assistant の実行に失敗した。

#### 解決策

Configuration Assistant の実行に失敗する原因は様々です。次のような点を確認します。

- OracleAS Infrastructure に関連付けられているリスナー、データベースおよび Oracle Internet Directory が起動され実行中であることを確認します。そうでない場合はそれらを起動し、「**再試行**」をクリックして、失敗した Configuration Assistant を再度実行します。
- 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを確認し、問題を特定します。ログ・ファイルは \$ORACLE\_HOME/cfgtoollogs ディレクトリにあります。

ログ・ファイルに記録されていた問題を解決し、「**再試行**」をクリックして、失敗した Configuration Assistant を再度実行します。

### G.3.13 OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗した

OracleASRandomize Password Configuration Assistant を実行する場合は、その前に次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Directory Manager を起動します。
2. Oracle Internet Directory のホスト名、ポート、ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「**エントリ管理**」→「**cn=OracleContext**」→「**cn=Products**」→「**cn=IAS**」→「**cn=IAS Infrastructure Databases**」の順に選択します。
4. orclreferencename=your\_globaldb\_name を選択します。
5. your\_globaldb\_name ツリーの中にあるスキーマごとに、orclreferencename エントリが含まれます。orclreferencename エントリに対して、次の操作を行います。
  - orclpassword 属性の値をスキーマ名に変更します。たとえば、スキーマ名が wireless であれば、orclpassword 属性の値を wireless に変更します。
  - orclflexattribute1 の値を **false** に変更します。

「適用」をクリックします。

ODS と OEM\_REPOSITORY を除くすべてのスキーマに対して、これらの操作を行います。

6. SQL\*Plus を使用して、OracleAS Randomize Password Configuration Assistant の失敗があったデータベースにログインし、次のスクリプトを実行します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @ORACLE_HOME/assistants/dbca/admin/unlock.sql
```

*password* には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

7. OracleAS Randomize Password Configuration Assistant を再実行します。

### G.3.14 Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した

#### 問題

DBCA が失敗し、次のようなエラーが発生した。

```
Open wallet failedoracle.net.config.ServiceAliasException
at oracle.net.config.ServiceAlias.<init>(Compiled Code)
at oracle.net.config.Service.<init>(Compiled Code)
at oracle.net.config.DatabaseService.<init>(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.util.NetworkUtils.registerDBWithDirSrv(NetworkUtils.j
ava:1137)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.DirServiceStep.executePreReqImpl(Compiled
Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PrerequisiteStep.executeImpl(Prerequisite
Step.java:149)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PostDBCreationStep.executeImpl(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Host$ModeRunner.run(Compiled Code)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:466)
ERROR :oracle.sysman.assistants.util.NetAPIException
```

#### 解決策

このエラーは、環境変数 TNS\_ADMIN が設定された場合に発生します。環境変数 TNS\_ADMIN は設定しないでください ([TNS\\_ADMIN](#) ページ 2-20 を参照)。設定されている場合は、設定を解除し、「Configuration Assistant」画面の「再試行」をクリックして DBCA を再度実行します。

### G.3.15 Database Configuration Assistant (DBCA) の無視できるエラー・メッセージ

ログ・ファイル内に次の「error copying OC4J configuration files」メッセージが表示されることがありますが、これは特に問題のあるメッセージではないため無視してもかまいません。

```
Nov 25, 2004 9:07:30 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateReposVars
INFO: Updating file
/AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/emdrep/config/repository.variables ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig addPortEntries
INFO: Updating file /AS1012Installs/AS1012Infra/install/portlist.ini ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmdProps
INFO: Updating file /AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/config/emd.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: targets.xml file is updated successfully
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmomsProps
INFO: Updating file
/AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/config/emoms.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: emoms.properties file is updated successfully
```

```
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig copyOC4JDir
WARNING: Error copying OC4J config files from
/AS1012Installs/AS1012Infra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole to
/AS1012Installs/AS1012Infra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole_hostname.domain_portaldb
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig startOMS
INFO: Starting the DBConsole ...
Nov 25, 2004 9:08:26 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig perform
INFO: DBConsole is started successfully
```

### G.3.16 OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server が失敗した

#### 問題

OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server の再実行に失敗した。

#### 解決策

問題は、Oracle HTTP Server がすでに実行されていることにあります。この Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを使用して Oracle HTTP Server を停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

次に OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server を再実行します。

### G.3.17 OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance が失敗した

#### 問題

OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance の再実行に失敗した。

#### 解決策

問題は、Oracle Delegated Administration Services インスタンスがすでに実行されていることにあります。この Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを使用して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを停止します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/opmn/bin/opmnctl stopproc ias-component=OC4J
```

次に OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance を再実行します。

## G.4 削除に関する問題とその解決策

この項では、削除に関連してよく発生する問題について説明します。

- G.4.1 項「現在使用されていないパートナ・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている」
- G.4.2 項「削除したインスタンスの名前を再使用できない」
- G.4.3 項「データベース名を再使用できない」
- G.4.4 項「削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス」

### G.4.1 現在使用されていないパートナ・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている

#### 問題

削除したパートナ・アプリケーションのエントリが Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている。

**解決策**

コマンドを実行して、使用されなくなったパートナ・アプリケーションのエントリの登録を取り消します。このコマンドは、`-update_mode` パラメータが `DELETE` に設定されていることを除けば、登録を行うためのコマンドとまったく同じです。

環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` に `$ORACLE_HOME/lib32` が設定されていること、および環境変数 `LD_LIBRARY_PATH_64` に `$ORACLE_HOME/lib` が設定されていることを確認してください。次のコマンド（全体で1行）を実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/jdk/bin/java
-jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar
-oracle_home_path $ORACLE_HOME
-site_name hostname.domain
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url http://hostname.domain:port
-u userid
-update_mode DELETE
```

`-site_name hostname.domain` には、中間層がインストールされているコンピュータを指定します。ドメイン名も含めて指定してください。

`-mod_osso_url http://hostname.domain:port` には、中間層がインストールされているコンピュータ、および Oracle HTTP Server がリスニングしているポート番号を指定します。

`-u userid` には、中間層のプロセスを起動できるオペレーティング・システム・ユーザーを指定します。

パラメータに関する詳細な説明は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第4章を参照してください。

## G.4.2 削除したインスタンスの名前を再使用できない

**問題**

新しい Oracle Application Server インスタンスに、すでに削除したインスタンスの名前を付けようとするエラーが発生する。

**解決策**

削除したインスタンスの名前は、Oracle Internet Directory から削除しないかぎり、別のインスタンスに使用することはできません。削除したインスタンスのエントリを Oracle Internet Directory から削除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームとは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームを表します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（`cn=orcladmin`）としてログインします。
3. 「エントリ管理」→「`cn=OracleContext`」→「`cn=Products`」→「`cn=IAS`」→「`cn=IAS Instances`」の順に選択します。
4. 「`cn=IAS Instances`」から、削除するインスタンスを選択します。
5. 「編集」メニューから「削除」を選択します。
6. 「エントリ管理」→「`cn=OracleContext`」→「`cn=Groups`」の順に選択します。
7. 「`cn=IASAdmins`」を選択します。
8. 「プロパティ」タブの「`uniquemember`」フィールドから目的のインスタンスを直接削除します。「編集」メニューの「削除」コマンドは使用しないでください。
9. 「適用」をクリックします。

## G.4.3 データベース名を再使用できない

### 問題

すでに削除したデータベースと同じ名前を、グローバル・データベース名または SID として使用しようとするエラーが発生する。

### 解決策

この問題が発生すると考えられるのは、Oracle Internet Directory は削除しないでそのまま使用する一方、OracleAS Metadata Repository のみをいったん削除し、あらためて OracleAS Metadata Repository をインストールしたときに以前と同じデータベース名または SID を付けるというケースです。Oracle Internet Directory に、削除した OracleAS Metadata Repository の名前が残っているためです。この名前を再使用する場合は、その前にいったん削除する必要があります。

---

---

**注意：** 中間層を削除する場合は、次の手順は使用しないでください。

---

---

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームとは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームを表します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=Portal」→「cn=UltraSearch」→「cn=Database Instances」→「orclApplicationCommonName=infrastructure\_database\_name」の順に選択します。
4. orclApplicationCommonName=infrastructure\_database\_name に含まれる子エントリを最下位層にある子エントリから順にすべて削除します。エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。
5. orclApplicationCommonName=infrastructure\_database\_name に含まれる子エントリをすべて削除したら、このエントリを右クリックして同様に削除します。
6. 「エントリ管理」を開きます。

Default Subscriber エントリを開きます。各項目は 1 つずつ開く必要があります。たとえば、Default Subscriber エントリが「dc=us,dc=oracle,dc=com」であれば、「dc=com」、「dc=oracle」、「dc=us」の順に 1 つずつ開きます。

「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=Portal」→「cn=UltraSearch」→「cn=Database Instances」→「cn=infrastructure\_database\_name」の順に項目を開きます。

7. cn=infrastructure\_database\_name に含まれる子エントリを最下位層にある子エントリから順にすべて削除します。エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。確認ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。
8. cn=infrastructure\_database\_name に含まれる子エントリをすべて削除したら、このエントリを右クリックして同様に削除します。
9. 「適用」をクリックします。



## G.4.4 削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス

OracleAS Portal の削除中、次のメッセージを含む警告ダイアログ・ボックスが表示されることがあります。

main クラスが見つかりませんでした。プログラムを終了します。

これは特に問題のあるメッセージではないため無視してもかまいません。「OK」をクリックしてウィンドウを閉じ、削除の処理を続行します。

## G.5 バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策

この項では、バックアップおよびリカバリに関連してよく発生する問題について説明します。

### G.5.1 リストアに一度失敗した後のリストア

#### 問題

「第二段階」（構成ファイルのリストアを実行中）でのリストアに失敗すると、それ以降のリストアもすべて失敗する。

#### 解決策

OracleAS Backup and Recovery Tool で次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/backup_restore/bkp_restore.sh -m restore_config -t timestamp_of_failed_recovery
```

OracleAS Backup and Recovery Tool の詳細は、[第 14 章](#)を参照してください。

## G.6 Configuration Assistant に関する問題とその解決策

この項では、Configuration Assistant に関する問題の対処方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [G.6.1 項「全般についてのヒント」](#)
- [G.6.2 項「Configuration Assistant の結果コード」](#)

### G.6.1 全般についてのヒント

Configuration Assistant が失敗した場合は、次の手順に従って問題点を修正します。

1. [G.1 項「ログ・ファイル」](#) に列挙されているインストール・ログ・ファイルを確認します。
2. 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。Configuration Assistant のログ・ファイルは、[F.1 項「Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant」](#) に列挙してあります。エラーの原因となった問題の修正を試みます。
3. 失敗した Configuration Assistant に依存関係がある場合は、その依存関係を再度実行します。正常に実行された依存関係であっても、再度実行してください。
4. 失敗した Configuration Assistant を再度実行します。それにはインストーラでその Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックします。

「再試行」をクリックしてもなお失敗する場合は、/tmp にある EM\_CONFIG\_INSTALL.1k ファイルを削除した上で、その Configuration Assistant を再度実行します。

「再試行」をクリックしてもなお失敗する場合は、\$ORACLE\_HOME/sysman/emd にある targets.xml ファイルからコンポーネント・エントリを削除します。たとえば次に示すのは、targets.xml ファイルにある OracleAS Web Cache のエントリです。

```
<Target TYPE="oracle_webcache" NAME="instance2.domain.com_Web Cache" DISPLAY_
NAME="Web Cache">
  <Property NAME="HTTPPort" VALUE="7777" />
  <Property NAME="logFileName" VALUE="webcache.log" />
  <Property NAME="authrealm" VALUE="Oracle Web Cache Administrator" />
  <Property NAME="AdminPort" VALUE="4000" />
  <Property NAME="HTTPProtocol" VALUE="http" />
  <Property NAME="logFileDir" VALUE="/sysman/log" />
  <Property NAME="HTTPMachine" VALUE="domain.com" />
  <Property NAME="HTTPQuery" VALUE="" />
  <Property NAME="controlFile" VALUE="/ORACLE_HOME/webcache/bin/webcachectl" />
  <Property NAME="MonitorPort" VALUE="4002" />
  <Property NAME="HTTPPath" VALUE="/" />
  <Property NAME="authpwd" VALUE="administrator" />
  <Property NAME="authuser" VALUE="administrator" />
  <CompositeMembership>
    <MemberOf TYPE="oracle_ias" NAME="domain.com" ASSOCIATION="null" />
  </CompositeMembership>
</Target>
```

5. オプションの Configuration Assistant が失敗した場合、それが依存関係を持たなければ、残りの Configuration Assistant を実行します。取り消されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、その次にある Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックします。
6. コマンド・ラインから Configuration Assistant 実行コマンドを実行してもなお失敗した場合は、その Configuration Assistant 実行コマンドをもう一度実行します。

失敗した Configuration Assistant を再度実行する場合、\$ORACLE\_HOME/bin ディレクトリの中に生成された configtoolcmds.pl という名前のスクリプト・ファイルを使用できます。この configtoolcmds.pl スクリプトは、インストーラ終了後に生成されます。また、サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行した場合は、Configuration Assistant が失敗した直後に生成されます。

7. 「致命的エラー。再インストールしてください」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを解析して問題の原因を特定します。ただし、問題点を修正して操作を続行するだけでは、致命的エラーからリカバリすることはできません。現在のインストール内容を削除し、Oracle Application Server を再インストールする必要があります。次に示すのはリカバリの手順です。
  - a. 付録 A 「削除と再インストール」の手順に従って、失敗したインストールの内容を削除します。
  - b. 致命的エラーの原因となった問題点を修正します。
  - c. Oracle Application Server を再インストールします。
  - d. 致命的エラーが再び発生した場合は、コンピュータ上にインストールされているすべての Oracle 製品を削除する必要があります。

## G.6.2 Configuration Assistant の結果コード

Configuration Assistant が失敗すると、インストール画面の下半部にエラー・メッセージが表示され、次のログ・ファイルにその結果コード（表 G-1）が記録されます。

oraInventory/logs/installActionstimestamp.log

表 G-1 Configuration Assistant の結果コード

結果コード	説明
0	Configuration Assistant は成功
1	Configuration Assistant は失敗

表 G-1 Configuration Assistant の結果コード (続き)

結果コード	説明
-1	Configuration Assistant は取消し

## G.7 OracleAS Portal に関する問題とその解決策

この項では、OracleAS Portal に関連してよく発生する問題について説明します。

- [G.7.1 項「OracleAS Portal のパスワードの取得」](#)
- [G.7.2 項「SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない」](#)

### G.7.1 OracleAS Portal のパスワードの取得

#### 問題

OracleAS Portal のログイン・パスワードを消失または失念した。

#### 解決策

パスワードは、消失または失念しても、次の手順に従って Oracle Directory Manager から取得できます。

1. 次のコマンドを使用して Oracle Directory Manager を起動します。  
`$ORACLE_HOME/bin/oidadmin`
2. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 次のノードに移動します。  
「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Infrastructure Databases」 → 「orclReferenceName=your\_database\_name」 → 「orclResourceName=PORTAL」

### G.7.2 SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない

#### 問題

Internet Explorer バージョン 6 から SSL を有効にして OracleAS Portal にログインしようとすると、エラー・メッセージが表示される。この問題は、インフラストラクチャと中間層が同一のコンピュータ上に存在する場合に発生する。

#### 解決策

ご使用のコンピュータのエイリアスを作成した上で、実際のコンピュータ名のかわりにそのエイリアスを使用できるよう OracleAS Single Sign-On の構成を行います。

1. ご使用のコンピュータの新しいホスト名を追加します。例を示します。  
`123.45.67.89 devhost2-sso.us.oracle.com mgueury-sso`
2. emctl コマンドを使用して、Application Server Control コンソールを起動します。  
`/> emctl start iasconsole`
3. Application Server Control コンソールで「仮想ホスト」ページに移動し（「インフラストラクチャ」 → 「HTTP\_Server」 → 「仮想ホスト」）、仮想ホスト名を目的の名前に変更します（たとえば、devhost1-sso.us.oracle.com から devhost2-sso.us.oracle.com に変更）。
4. この変更が反映されるように SSO サーバーの構成を行います。

```
> cd INFRA_ORACLE_HOME/sso/bin
/INFRA_ORACLE_HOME/sso/bin> ssocfg https devhost2-sso.us.oracle.com 4459
```

5. この変更が SSO で認識されるように OracleAS Portal の構成を行います。

```
> cd MDTIER_ORACLE_HOME/portal/conf
/MDTIER_ORACLE_HOME/portal/conf> ptlconfig -dad portal
```

6. Portal のキャッシュを消去します。

```
> cd MDTIER_ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache
/MDTIER_ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache> rm -rf *
```

## G.8 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に関する問題とその解決策

この項では、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant に関連してよく発生する問題について説明します。

- [G.8.1 項「データベースに接続できない」](#)
- [G.8.2 項「SYS ユーザーとして接続できない」](#)
- [G.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)
- [G.8.4 項「ORA-01403: データが見つかりません」](#)

### G.8.1 データベースに接続できない

#### 問題

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant からデータベースに接続できない。

#### 解決策

次の事柄を確認します。

- 使用しているサービス名 (SID または *SID.domainname*) が正しいか。
- データベースは起動しているか。
- リスナーは起動しているか。
- データベースへのネットワーク接続が可能か。
- \$ORACLE\_HOME/sqlplus/admin ディレクトリにある glogin.sql ファイルまたは login.sql ファイルに、次のようなプロンプト行が含まれているかどうか。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user || ' on ' || name "db_name" from v$database ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

どちらか一方のファイルにプロンプト行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイル名を変更します。
- b. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
- c. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再起動します。
- d. 再度接続を試みます。
- e. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が正常に実行されたら、ファイル名を元に戻します。

## G.8.2 SYS ユーザーとして接続できない

### 問題

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行中に次のようなメッセージが表示される。

```
RepCA unable to connect as sys. Error message:
*** Specify Database Connect ***
ERROR -SQLException on getting SID and SYSTEMNAME
informationjava.sql.SQLException:
@ ORA-01017 : invalid username/password; logon denied
```

### 解決策

次の操作を試みます。

- SYS ユーザーのパスワードが正しく入力されているか確認します。
- SYS ユーザーのパスワードを設定しなおし、再度接続を試みます。パスワードの再設定には、`$ORACLE_HOME/bin/orapwd` コマンドを使用します。詳細は、[15.5.12 項「パスワード・ファイル認証」](#)を参照してください。
- `$ORACLE_HOME/sqlplus/admin` ディレクトリにある `glogin.sql` ファイルまたは `login.sql` ファイルに、次のようなプロンプト行が含まれているかどうかを確認します。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user || ' on ' || name "db_name" from v$database ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

どちらか一方のファイルにこれらの行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイル名を変更します。
- b. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
- c. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を再起動します。
- d. 再度接続を試みます。
- e. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant が正常に実行されたら、ファイル名を元に戻します。

## G.8.3 手動による手順：失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録取消し

この項では、Oracle Internet Directory に登録されているエントリを、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を使用しないでクリーン・アップする方法について説明します。

1. Oracle Directory Manager を使用して Oracle Internet Directory に接続します。
  - a. Oracle Directory Manager を起動します。
 

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```
  - b. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. Oracle Internet Directory 内のデータベースの登録エントリをクリーン・アップします。
  - a. 次のエントリ (図 G-1 にも表示) を開きます。
 

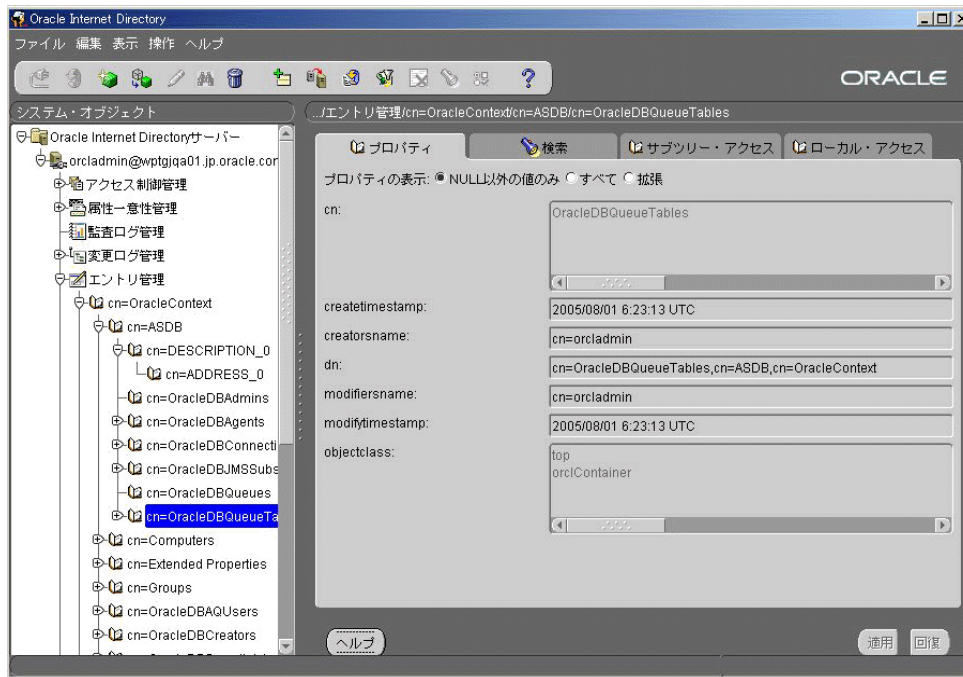
```
「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=your_database_name」
```
  - b. cn=your\_database\_name に含まれる子エントリを最下位層の子エントリから順にすべて削除します。

cn=DESCRIPTION\_0 エントリを削除する前に、エントリの最下位層に到達するまで子エントリをすべて開きます。最下位層から順に各子エントリを削除します。

エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。

- c. 右クリック操作を使用して cn=your\_database\_name を削除します。

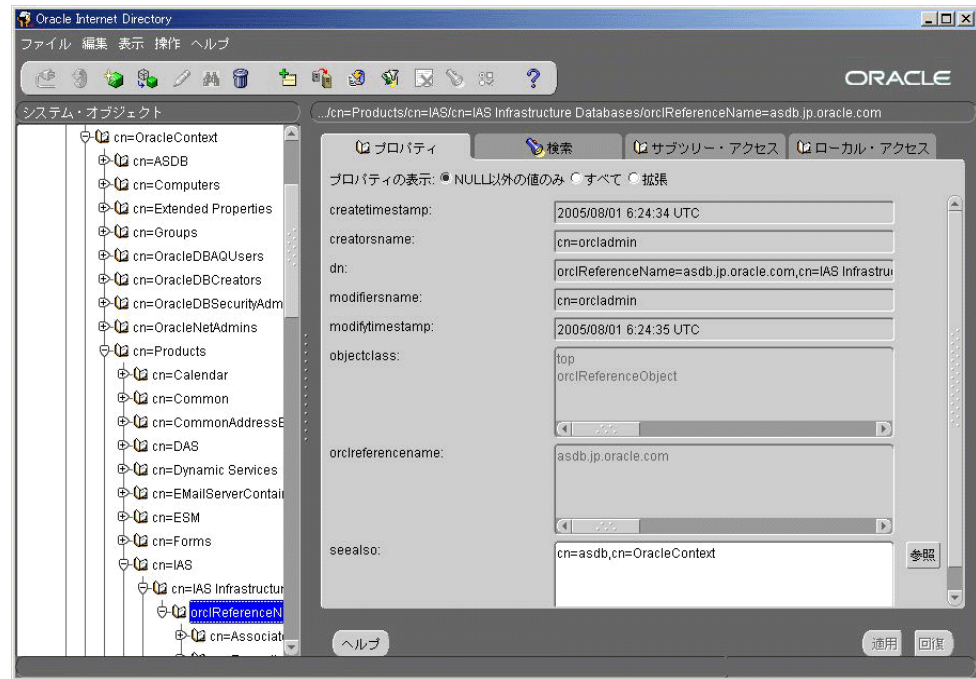
図 G-1 データベース登録エントリのクリーン・アップ



3. Oracle Internet Directory 内のメタデータ・リポジトリの登録エントリをクリーン・アップします。
  - a. 次のエントリ (図 G-2 にも表示) を開きます。  
「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Infrastructure Databases」 → 「orclReferenceName=your\_database\_name」
  - b. orclReferenceName=your\_database\_name に含まれる各子エントリを削除します。
  - c. orclReferenceName=your\_database\_name エントリを削除します。



図 G-2 メタデータ・リポジトリ登録エントリのクリーン・アップ



## G.8.4 ORA-01403: データが見つかりません

### 問題

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant により Workflow スキーマがロードされる際、ORA-01403: 「データが見つかりません」という PL/SQL エラーが発生する。

### 解決策

環境変数 `NLS_LANG` が英語以外のロケールに設定されています。OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、環境変数 `NLS_LANG` が設定されていないか、または `american_america.us7ascii` に設定されていることを確認する必要があります。

```
prompt> unsetenv NLS_LANG
- or -
prompt> setenv NLS_LANG american_america.us7ascii
```

`NLS_LANG` は、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行終了後、元の値に戻りません。

## G.9 データベースに関する問題とその解決策

OracleAS Portal のインストールを実行すると、Database Control Service は停止します。また、マシンが再起動された際サービスが自動的に起動しないようサービスの起動モードが「手動」に変更されます。これは、emagent の余分なインスタンスが起動しないようにすることで、少しでもシステム・リソースの消費を抑えられるようにするためです。

Database Control Service は、「サービス」コントロール・パネルから手動で起動できます。

## G.10 その他の情報が必要な場合

この付録に記載されている情報を基にしても問題が解決しない場合は、次のサイトも参照してください。

- OTN (Oracle Technology Network) のサイト  
(<http://www.oracle.com/technology/documentation>) の Oracle Application Server リリース・ノート
- OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>)

問題の解決策が見つからない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問合せください。



---

# 索引

## A

---

Application Server ホーム・ページ, 8-2, 8-3  
ARCHIVELOG モード, 14-17

## B

---

Bash シェル  
Linux でのシェル制限の設定, 2-16  
bkp\_restore.pl, 14-5  
Bourne シェル  
Linux でのシェル制限の設定, 2-16

## C

---

CD-ROM  
ハード・ドライブへのコピー, 2-23  
CD-ROM/DVD からハード・ドライブへのコピー, 2-23  
Certificate Authority  
「OracleAS Certificate Authority」を参照  
chgiphost コマンド, 12-4  
エラー, 12-9  
ログ・レベルの設定, 12-8  
CLASSPATH 環境変数, 2-19  
cleanMR スクリプト, B-10  
エラー, B-11  
Configuration Assistant, F-1  
依存関係, G-11  
説明, F-1  
致命的エラー, G-12  
トラブルシューティング, F-8, G-11  
Configuration Assistant のエラー  
Database Configuration Assistant, G-7  
OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance,  
G-8  
OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server,  
G-8  
OracleAS Randomize Password Configuration  
Assistant, G-6  
csh.login.local ファイル, 2-16  
csh.login ファイル, 2-16  
C シェル  
Linux でのシェル制限の設定, 2-16

## D

---

DAS の更新, 10-7  
Database Configuration Assistant

エラー, G-7  
無視できるエラー・メッセージ, G-7  
Database Control  
パスワード, 8-9  
db\_create\_file\_dest 初期化パラメータ, 16-6  
DBMS\_LDAP パッケージ, 15-10  
DBPrereqChecker ツール, 15-5  
DCM, 7-4  
「Distributed Configuration Management (DCM)」  
を参照  
dcmctl, 8-8  
DCM スキーマ  
説明, E-3  
DCM スキーマ、インストール後のロック解除, 16-9  
DCM 表領域, E-4  
DHCP アドレス  
移行, 12-10  
ネットワークに接続されていない状態への移行,  
12-10  
変更, 12-11  
Discoverer  
「OracleAS Discoverer」を参照  
DISCOVERER5 スキーマ, E-2  
DISPLAY 環境変数, 2-19  
Distributed Configuration Management (DCM), 8-8  
スキーマ, E-3  
データファイル, E-4  
表領域, E-4  
DSGATEWAY\_TAB 表領域, E-5  
DSGATEWAY スキーマ, E-3  
DVD  
ハード・ドライブへのコピー, 2-23  
Dynamic Monitoring Service (DMS), 8-8

## E

---

Enterprise Manager ホーム・ページ, 8-1  
/etc/csh.login.local ファイル, 2-16  
/etc/csh.login ファイル, 2-16  
/etc/pam.d/login ファイル, 2-16  
/etc/profile.local ファイル, 2-16  
/etc/profile ファイル, 2-16  
/etc/security/limits.so ファイル, 2-16  
/etc/services ファイル, 1-13  
ポート 389 およびポート 636 のブロック, 1-13  
/etc/sysctl.conf ファイル, 2-15  
EXTPROC キー, 1-16

## G

---

groups コマンド, 2-19

## I

---

IAS\_META 表領域, E-4

Identity Management

スキーマ, E-1

Identity Management レルム (デフォルト) の場所,  
2-21

「Internet Directory のネームスペースの指定」画面,  
2-21, 5-9

INTERNET\_APPSERVER\_REGISTRY, E-1

IP

複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインス  
トール, 2-22

IPC プロトコル, 1-16

IP アドレス

静的アドレスへの移行, 12-10

ネットワークに接続されていない状態への移行,  
12-10

変更, 12-1, 12-11

IP アドレスの変更, 12-11

## J

---

J2EE

ドメイン名の変更, 12-3

ホスト名の変更, 12-3

J2EE and Web Cache, 9-4

J2EE and Web Cache の中間層

拡張, 3-1

J2EE アプリケーション, 8-7

## K

---

Korn シェル

Linux でのシェル制限の設定, 2-16

## L

---

LD\_BIND\_NOW 環境変数, 2-21

LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数, 2-19

ldap.ora ファイル、インストール後にコピー, 16-9

limits.so ファイル, 2-16

limit コマンド, 2-16

Linux

カーネル・パラメータの永続的な変更, 2-15

カーネル・パラメータの確認, 2-15

カーネル・パラメータの設定, 2-15

シェル制限の設定, 2-16

login ファイル, 2-16

## M

---

Metadata Repository

「OracleAS Metadata Repository」を参照

mod\_osso の再登録, 10-6

## N

---

Network Appliance ファイラー, 2-25

NFS インストール

Oracle HTTP Server の構成, 6-2

NFS 記憶域, 2-25

NIS および NIS+, 2-25

nofile

Linux でのシェル制限, 2-16

noproc

Linux でのシェル制限, 2-16

## O

---

OC4J, 7-5

OCA

「OracleAS Certificate Authority」を参照

OCA スキーマ

説明, E-1

ODL

「Oracle Diagnostic Logging (ODL)」を参照

ODS スキーマ

説明, E-1

OEM\_REPOSITORY スキーマ

説明, E-3

OID

「Oracle Internet Directory」を参照

OLTS\_ATTRSTORE 表領域, E-4

OLTS\_BATTRSTORE 表領域, E-4

OLTS\_CT\_STORE 表領域, E-4

OLTS\_DEFAULT 表領域, E-4

OLTS\_SVRMGSTORE 表領域, E-4

OPMN, 7-4

OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance、再  
実行, G-8

OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server、再  
実行, G-8

opmnctl コマンド, 8-8, 9-5

ORA\_NLS 環境変数, 2-21

Oracle Application Server Containers for J2EE, 7-5

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

各インストール・タイプでインストールされる OC4J  
インスタンス, 7-5

Oracle Application Server Log Loader, 11-6

Oracle Application Server 環境

起動と停止, 9-6

Oracle Application Server 環境全体のバックアップ,  
14-21

Oracle Application Server グローバリゼーション・ガイ  
ド, 6-3

Oracle Diagnostic Logging (ODL), 11-1

Oracle Enterprise Manager

スキーマ, E-3

Oracle Enterprise Manager Application Server Control

Application Server ホーム・ページ, 8-3

OracleAS Farm ホーム・ページ, 8-3, 8-4

OracleAS コンポーネント・ホーム・ページ, 8-5

URL, 6-1

Oracle Enterprise Manager Application Server ホーム・  
ページ, 8-2

Oracle HTTP Server

NFS インストール, 6-2

Oracle HTTP Server の Listen および Port ディレクティ  
ブの変更, 10-5

Oracle Identity Management, 9-3

Oracle Internet Directory

- OracleAS Metadata Repository の登録, 17-1
- OracleAS Metadata Repository の登録取消し, G-15
- オブジェクトの削除, B-11
- サポートされるバージョン, 15-19
- スキーマ, E-1
- データファイル, E-4
- 登録をチェック, 15-18
- ドメイン名の変更, 12-2
- ネームスペース, 5-9
- 表領域, E-4
- ホスト名の変更, 12-2
- Oracle Internet Directory オブジェクトの削除, B-11
- Oracle Internet Directory のネームスペース, 5-9
- Oracle Internet Directory ポート
  - /etc/services ファイルで予約された, 1-13
- Oracle Managed Files
  - OracleAS Metadata Repository 用に使用, 16-6
- Oracle Management Watchdog Process, 8-8
- Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN), 8-8
- Oracle Ultra Search
  - スキーマ, E-2
  - データファイル, E-4
  - 表領域, E-4
- Oracle Ultra Search、インスタンスの作成, 16-10
- Oracle Universal Installer
  - インストール前チェック実行後に表示されなくなる, G-4
  - 前提条件チェック, 2-26
  - ログ・ファイル, G-1
- Oracle Workflow
  - スキーマ, E-2
  - データファイル, E-4
  - 表領域, E-4
- ORACLE\_HOME 環境変数, 2-19
- ORACLE\_SID 環境変数, 2-19
- OracleAS Backup and Recovery, 14-4
- OracleAS Backup and Recovery Tool
  - カスタマイズ, 14-8
- OracleAS Certificate Authority
  - スキーマ, E-1
- OracleAS Discoverer
  - スキーマ, E-2
- OracleAS Farm ホーム・ページ, 8-2, 8-3, 8-4
- OracleAS Infrastructure, 4-1
  - 削除, A-6
  - 停止, 9-3
- OracleAS Metadata Repository, 9-3
  - Oracle Enterprise Manager の Java ベースのコンソールによる管理, 8-9
  - Oracle Internet Directory への登録, 17-1
  - Oracle Managed Files にインストール, 16-6
  - RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール, 16-3
  - アーカイブ・ロギングの有効化, 14-17
  - 既存のデータベースへのインストール, 4-1
  - 既存のデータベースへのロード, 16-1
  - 再インストール, 16-10
  - 削除, B-1, B-10
  - スキーマ, 15-14, E-1 ~ E-5
  - 登録取消し, B-1, B-6, G-15
  - 表領域, 15-14
  - ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール, 16-1
- ポート 1521, 1-15
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant
  - インストール, 15-3
  - 概要, 15-1
  - 起動, 15-19
  - 実行の要件, 15-3
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール, 15-3
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録, 17-1
  - Oracle Internet Directory に関するチェック, 15-18
  - 完了前に終了, 17-3
  - 失敗した登録のクリーン・アップ, G-15
  - 登録後の手順, 17-3
  - 登録取消し, B-1, G-15
  - 登録の失敗, 17-3
- OracleAS Metadata Repository の削除, B-1
  - cleanMR スクリプトを使用した, B-10
  - ウィザードを使用した, B-4
- OracleAS Metadata Repository の登録取消し, B-1, B-6, G-15
  - ウィザードを使用した, B-2
  - 取消し, B-12
- OracleAS Portal
  - スキーマ, E-2
  - データファイル, E-4
  - 表領域, E-4
- OracleAS Randomize Password Configuration Assistant、再実行, G-6
- OracleAS Single Sign-On
  - 管理画面上に表示された現在使用されていない URL, G-8
  - コマンドラインでのホスト名の指定, 2-22
  - スキーマ, E-1
  - データファイル, E-4
  - 表領域, E-4
- OracleAS UDDI Registry
  - スキーマ, E-3
  - データファイル, E-4
  - 表領域, E-4
- OracleAS Web Cache
  - ドメイン名の変更, 12-3
  - ホスト名の変更, 12-3
- OracleAS Web Clipping
  - スキーマ, E-2
- OracleAS Wireless
  - スキーマ, E-2
- OracleAS クラスター
  - ドメイン名の変更, 12-3
  - ホスト名の変更, 12-3
- OracleAS コンポーネント・ホーム・ページ, 8-5
- Oracle 管理エージェント, 8-8
- Oracle ソフトウェアの所有者ユーザー
  - Linux でのシェル制限の設定, 2-16
- Oracle データベース
  - ポート 1521 の問題, 1-16
- oracle ユーザー, 2-18
  - Linux でのシェル制限の設定, 2-16
- ORASSO\_DS スキーマ
  - 説明, E-1
- ORASSO\_PA スキーマ
  - 説明, E-2

ORASSO\_PS スキーマ  
説明, E-2  
ORASSO\_PUBLIC スキーマ  
説明, E-2  
ORASSO スキーマ  
説明, E-1  
OWF\_MGR スキーマ, E-2

## P

---

passwd コマンド, 2-19  
PATH 環境変数, 2-19  
PL/SQL パッケージ、必須, 15-10  
Portal  
「OracleAS Portal」を参照  
Portal and Wireless, 9-4  
Portal and Wireless の中間層  
インストール, 4-2  
拡張, 3-1  
PORTAL\_APP スキーマ, E-2  
PORTAL\_DEMO スキーマ, E-2  
PORTAL\_DOC 表領域, E-4  
PORTAL\_IDX 表領域, E-4  
PORTAL\_LOG 表領域, E-4  
PORTAL\_PUBLIC スキーマ, E-3  
PORTAL スキーマ, E-2  
PORTAL 表領域, E-4  
portlist.ini, 7-3  
portlist.ini, 7-3  
portlist.ini ファイル, 1-15  
profile.local ファイル, 2-16  
.profile ファイル, 2-21  
profile ファイル, 2-16

## R

---

RAW デバイス  
既存のデータベース用の最小サイズ, 15-18  
非 Real Application Clusters データベースによる使用, 16-3  
runInstaller コマンド  
OUI\_HOSTNAME パラメータ, 2-22  
runRepca コマンド, 15-19

## S

---

SEMMSL エラー, G-4  
SHMMAX エラー, G-4  
Single Sign-On  
「OracleAS Single Sign-On」を参照  
sqlnet.ora ファイル、インストール後の更新, 16-9  
SSL  
インストール後の構成, 6-2  
SSO  
「OracleAS Single Sign-On」を参照  
Standard Edition のデータベース, 15-6  
staticports.ini ファイル  
作成, 1-15  
書式, 1-13  
staticports.ini ファイル, D-1  
su コマンド, 2-21  
SYS\_AUX 表領域, E-4  
sysctl.conf ファイル, 2-15

sysctl コマンド, 2-15  
SYSTEM 表領域、必要なディスク領域, 15-6

## T

---

tcsh シェル  
Linux でのシェル制限の設定, 2-16  
TNS\_ADMIN 環境変数, 2-20  
tnsnames.ora ファイル, 2-20

## U

---

UDDI Registry  
「OracleAS UDDI Registry」を参照  
UDDISYS\_TS 表領域, E-4  
ulimit コマンド, 2-16  
Ultra Search  
「Oracle Ultra Search」を参照  
UNDO 表領域、必要なディスク領域, 15-6  
UNIX コマンド  
limit, 2-16  
passwd, 2-19  
sysctl, 2-15  
ulimit, 2-16  
useradd, 2-19  
UNIX ユーザー  
Linux でのシェル制限の設定, 2-16  
useradd コマンド, 2-19

## W

---

WCERSYS\_TS スキーマ, E-2  
Web Clipping  
「OracleAS Web Clipping」を参照  
Wireless  
「OracleAS Wireless」を参照  
WIRELESS スキーマ, E-2  
WK\_TEST スキーマ, E-2  
WKPROXY スキーマ, E-2  
WKSYS スキーマ, E-2  
Workflow  
「Oracle Workflow」を参照

## あ

---

アーカイブ・ロギング, 14-17

## い

---

インスタンス名  
再使用, G-9  
使用できる文字, 1-8  
どのように使用されるか, 1-8  
インストール後の作業, 7-1  
インストール後の手順, 6-1, 16-9  
ldap.ora ファイルのコピー, 16-9  
sqlnet.ora ファイルの更新, 16-9  
インストール手順、概要, 1-1  
インストール手順の概要, 1-1  
インフラストラクチャ  
「OracleAS Infrastructure」を参照  
インフラストラクチャ・インスタンスの準備, 10-5  
インベントリ・ディレクトリ, 1-19

## え

---

エラー ORA-10027, B-11

エラー ORA-2000, B-11

## お

---

オペレーティング・システム、OracleAS Metadata  
Repository Creation Assistant の実行, 15-3

オペレーティング・システム・グループ, 2-17

groups コマンド, 2-19

オペレーティング・システム・ユーザー, 2-18

groups コマンド, 2-19

oracle ユーザー, 2-18

## か

---

カーネル・パラメータ

Linux で確認, 2-15

Linux で設定, 2-15

Linux での永続的な変更, 2-15

仮想メモリーの要件、OracleAS Metadata Repository  
Creation Assistant の実行, 15-3

空でないディレクトリへのインストール, G-3

環境変数, 2-19, 7-1

CLASSPATH, 2-19

DISPLAY, 2-19

LD\_BIND\_NOW, 2-21

LD\_LIBRARY\_PATH, 2-19

NLS\_LANG, 6-2

ORA\_NLS, 2-21

ORACLE\_HOME, 2-19

ORACLE\_SID, 2-19

PATH, 2-19

.profile ファイルでの設定, 2-21

su コマンド, 2-21

TNS\_ADMIN, 2-20

環境変数 NLS\_LANG, 6-2

環境変数 ORACLE\_HOME, 7-1

環境変数 ORACLE\_SID, 7-1

環境変数 TEMP, 7-1

環境変数 TMP, 7-1

環境変数 TNS\_ADMIN, G-7

監視, 11-1

Application Server Control の使用, 8-5

J2EE アプリケーション, 8-7

アプリケーション・サーバー・コンポーネント, 8-7

管理スキーマ, E-1

管理ツール, 8-1 ~ 8-10

## き

---

記憶域の種類、サポート対象, 15-2

既存のデータベース、OracleAS Metadata Repository の  
ロード, 16-1

起動、OracleAS Metadata Repository Creation  
Assistant, 15-19

起動と停止, 9-1 ~ 9-6

起動ファイル

デフォルト・シェルの起動ファイル, 2-16

## く

---

グループ（オペレーティング・システム）

「オペレーティング・システム・グループ」を参照

## こ

---

構成解除ツール, A-5

中間層インスタンスの削除, A-6

構成解除ツールによる中間層インスタンスの削除, A-6  
コンポーネント

起動と停止, 9-5

コンポーネントで使用するポート, 1-12

ステータスの取得, 9-5

デフォルトのポート番号, C-1

無効化, 9-6

有効化, 9-6

コンポーネント・トポロジ, 8-5

コンポーネントの無効化, 9-6

コンポーネントの有効化, 9-6

## さ

---

再インストール、OracleAS Metadata Repository, 16-10  
削除, A-1

OracleAS Infrastructure, A-6

概要, A-1

構成解除ツール, A-5

トラブルシューティング, G-8

## し

---

シェル

デフォルト・シェルの起動ファイル, 2-16

シェル制限

Linux で設定, 2-16

実行、Oracle Managed Files を使用するデータベースを  
対象, 16-6

失敗した登録、クリーン・アップ, G-15

初期化パラメータ、必須, 15-6

診断, 11-1

## す

---

スーパーユーザー cn=orcladmin

ロック解除, G-5

スキーマ, 15-14

cleanMR を使用した削除, B-10

OracleAS Metadata Repository, 15-14

スワップ領域の要件

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の  
実行, 15-6

## せ

---

静的 IP アドレス

移行, 12-10

ネットワークに接続されていない状態への移行,  
12-10

製品メタデータ・スキーマ, E-1

前提条件チェック, 2-26

失敗, G-3

前提条件チェック・ツール, 15-5

## ち

---

チェック、Oracle Internet Directory への登録, 15-18  
致命的エラー, G-12  
中間層  
    拡張, 3-1  
中間層インスタンス  
    起動, 9-4  
中間層インスタンスの起動, 9-6  
中間層の拡張, 3-1  
中間層インスタンスの準備, 10-4

## て

---

ディスク領域の要件  
    OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の  
        実行, 15-3  
    SYSTEM および UNDO 表領域, 15-6  
    表領域, 15-6  
ディスプレイの要件、OracleAS Metadata Repository  
    Creation Assistant の実行, 15-3  
ディレクトリ、サード・パーティとの統合, 5-9  
データベース  
    Oracle Managed Files, 16-6  
    RAW デバイス・ベースのデータベースを使用, 16-3  
    Standard Edition, 15-6  
    SYS として接続不能, G-15  
    記憶域の種類、サポート対象, 15-2  
    既存のデータベースを使用, 15-4  
    サポートされるバージョン, 15-5  
    接続不能, G-14  
    必須のオプション, 15-9  
    ファイル・システム・ベースのデータベースを使用,  
        16-1  
    要件, 15-4  
    ローカルおよびリモートのサポート, 15-2  
データベース名、再使用, G-10  
データベース名の再使用, G-10  
デフォルトのポート番号, 1-12, C-1

## と

---

登録後の手順, 17-3  
ドメイン名  
    変更, 12-1  
    中間層, 12-2  
トラブルシューティング, G-1  
    Configuration Assistant, F-8, G-11  
    削除, G-8  
    全般についてのヒント, G-1  
    ロードの失敗, 16-10

## な

---

ナレッジ・ベースの要件, 15-12

## ね

---

ネットワーク関連項目, 2-22  
    NFS 記憶域, 2-25  
    ハード・ドライブからのインストール, 2-23  
    マルチホーム・コンピュータへのインストール, 2-22  
    リモート・インストール, 2-24

    リモート・コンピュータの CD-ROM/DVD ドライブ  
        からのインストール, 2-24  
ネットワーク構成, 12-1  
ネットワークに接続されていない状態, 12-9  
    ネットワークに接続されている状態への移行  
        DHCP アドレス, 12-10  
        静的 IP アドレス, 12-10  
ネットワークに接続されていない場合の問題, G-6  
ネットワークに接続されている状態, 12-9  
    ネットワークに接続されていない状態への移行  
        DHCP アドレス, 12-10  
        IP アドレス, 12-10  
ネットワークの構成, 12-1

## は

---

ハード・ドライブからのインストール, 2-23  
パスワード  
    Database Control, 8-9  
パスワード・ファイル認証, 15-13  
バックアップおよびリカバリ  
    インストール後, 6-2  
    環境の記録の作成, 14-19  
    サービスの比較, 14-1  
    使用可能なサービス, 14-1  
    ファイルの追加, 14-8  
    ブロック変更トラッキング, 14-17

## ひ

---

表領域, 15-14  
    AUTOEXTEND, 15-17  
    cleanMR を使用した削除, B-10  
    OracleAS Metadata Repository, 15-14  
    サイズ, 15-17

## ふ

---

ファーム  
    ホーム・ページ, 8-3  
ファイアウォール  
    ポート, D-1  
ファイル  
    /etc/csh.login, 2-16  
    /etc/csh.login.local, 2-16  
    /etc/pam.d/login, 2-16  
    /etc/profile, 2-16  
    /etc/profile.local, 2-16  
    /etc/security/limits.so, 2-16  
    /etc/sysctl.conf, 2-15  
    デフォルト・シェルの起動ファイル, 2-16  
ファイルベースのリポジトリ  
    ドメイン名の変更, 12-3  
    ホスト名の変更, 12-3  
フォントの問題, G-5

## ほ

---

ポート  
    /etc/services ファイル, 1-13  
    コンポーネントに割り当てられた, 1-12  
    デフォルトのポート番号の使用, 1-12  
    デフォルトのポート番号のリスト, C-1

- ファイアウォールで開放が必要な, D-1
- 変更, 10-1 ~ 10-8
- ポート 1521, 1-15, 1-18
- 使用中の場合, 1-16
- ポート 389 とポート 636, 1-13
- ポートの変更, 10-1 ~ 10-8
- ホスト名
  - 変更, 12-1
  - 参照, 12-5
  - 中間層, 12-2

## ま

---

マルチホーム・コンピュータへのインストール, 2-22

## め

---

メタデータ・リポジトリのみのインフラストラクチャの  
起動, 9-6

メモリーの要件、OracleAS Metadata Repository  
Creation Assistant の実行, 15-3

## ゆ

---

ユーザー

- Linux での UNIX ユーザーに対するシェル制限の設定, 2-16

ユーザー・インタフェースの問題, G-5

ユーザー (オペレーティング・システム)  
「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照

## よ

---

要件

- 環境変数, 2-19
- マルチホーム・コンピュータ, 2-22

要件 (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant  
の実行), 15-3

- オペレーティング・システム, 15-3
- 仮想メモリー, 15-3
- ディスク領域, 15-3
- ディスプレイ, 15-3
- メモリー, 15-3

要件 (データベース), 15-4

- DBMS\_LDAP パッケージ, 15-10
- PL/SQL パッケージ, 15-10
- 初期化パラメータ, 15-6
- スキーマ, 15-14
- スワップ領域, 15-6
- 前提条件チェック・ツールの実行, 15-5
- ディスク領域, 15-6
- データベース・オプション, 15-9
- データベースのバージョン, 15-5
- ナレッジ・ベース, 15-12
- パスワード・ファイル認証, 15-13
- 表領域, 15-14

「ようこそ」ページ、URL, 6-1

## り

---

リソース使用状況, 8-6

リモート・インストール, 2-24

リモート・データベースのサポート, 15-2

リンクの失敗, G-3

## ろ

---

ローカル・データベースのサポート, 15-2

ロードの失敗, 16-10

ロギング, 11-1 ~ 11-8

ログ・ファイル, 11-1 ~ 11-5, G-1

- 検索, 11-5
- 場所, G-2
- 表示, 11-5
- リスト, 11-3

ログ・ファイル、無視できるエラー, 16-8

ログ・ファイル内の無視できるエラー, 16-8

ログ・メッセージの形式, 11-1

ログ・リポジトリ, 11-2

ログ・ローダー

- 起動と停止, 11-6
- プロパティの設定, 11-7
- 有効化, 11-6

